

日本近代文学

第58集

論文

- 尾崎紅葉「紅白毒饅頭」論
—ジャーナリズムとしての連載小説— 堀 啓 子 1
- 溢れでる身体、そして言葉—泉鏡花『外科室』試論— 鈴 木 啓 子 15
- 旅をする文学
—明治三〇年代日本文学と東アジアネットワーク— 佐 野 正 人 30
- 作品・作家情報・モデル情報の相関
—『新声』の活動を視座として— 日 比 嘉 高 44
- 蒲原有明とマルメ 佐 藤 伸 宏 58
- 柳田国男／田山花袋と〈樺太〉
—花袋の『アリユウシヤ』『マウカ』をめぐって— 五 井 信 71
- 「インデペンデント」の陥穽
—激石における戦争・文明・帝国主義— 朴 裕 河 85
- 『土』論—〈境界〉を越える者達— 関 谷 由美子 98
- 『街と村』論—罪の変容— 倉 西 聡 113
- 『豊饒の海』における「天皇」
—欲望される〈絶対者〉— 奈良崎 英 穂 126
- 展 望 〈文学〉から文学へ— 柴 市 郎 140
- 西南戦争と文学 林 原 純 生 145
- ヤポネシアン・ブックレビュー 花 田 俊 典 150
- 最近の近代文学研究におけるある種の傾向について
—〈ホモ・アカデミクス〉の〈イデオロギー装置〉— 林 淑 美 157
- 書 評 「人と作品」という枠
—大江健三郎をめぐる近年の研究書から— 島 村 輝 172
- 歴史的把握の試み
—「児童文学」の多様性と総合性— 佐 藤 宗 子 179

日本近代文学会会則

総則

第一条 この会は、日本近代文学会と称する。

第二条 この会は、日本近代文学の研究を推進することを目的とする。

第三条 この会は、本部事務局を、総会で定めた当番校におく。

ただし別則に従って支部を設けることができる。

第四条 この会は、第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

1、研究発表会、講演会、展覧会などの開催。

2、機関誌、会報、パンフレットなどの刊行。

3、海外における日本文学研究者との連絡。

4、その他、評議員会において特に必要と認めた事項。

会員

第五条 この会の会員は、日本近代文学の研究者、およびその関係機関をもって構成する。会員は、付則に定める会費を負担するものとする。

第六条 この会への入会には、原則として会員二名の推薦を受け、理事会の承認を得なければならない。

役員

第七条

1、この会に次の役員をおく。

代表理事 一名 常任理事 若干名

理事 若干名 評議員 若干名

監事 若干名

2、代表理事は、この会を代表し、会務を総括する。理事は、理事会を構成し、総会および評議員会の議決に従って、会務の執行に当る。

常任理事は、それぞれ総務、財務、運営、編集を担当し、代表理事を常時補佐する。代表理事に事故があるとき、または代表理事が欠けたときには、総務担当理事がこれを代理し、その職務を行う。

評議員は、評議員会を構成し、この会の重要事項について審議決定する。

監事は、この会の財務を監査する。

3、評議員は、別に定める内規に従って候補を選出し、総会において承認を得る。

理事は、別に定める内規に従って評議員の互選により選出する。代表理事および常任理事は、理事の互選により選出する。ただし運営担当理事（運営委員長、編集担当理事（編集委員長）は、第八条第2項および別に定める内規に従って選出する。

監事は、別に定める内規に従って候補を選出し、総会において承認を得る。

4、役員の内規は、二年とする。再選を妨げない。

ただし、理事および監事の任期は、継続四年を越えないものとする。

尾崎紅葉「紅白毒饅頭」論

——ジャーナリズムとしての連載小説——

堀 啓 子

I

尾崎紅葉作「紅白毒饅頭」が発表されたのは明治二十四年のことである。『読売新聞』紙上に発表された十月一日から十一月二十日までの連載後、十二月六日から十八日まで「後篇」が後続し、通算三十七回の掲載となった。ストーリーはさる新興の宗教教団を舞台にこれを取り巻く人々に次々と焦点を当て、教団の知られざる内幕に迫る。異色のテーマを支える歯切れの良い構成は、連載直前の紙面予告「鬼怪妖異筆端に陰翳して変化窮らず、紙上に一回一回を重ねるは歩一步を魔窟に進むごとく（中略）鬼物永く世間に留むべからず、好事の士女速に來観るべし」と煽られたサスペンス調をベースに、早いテンポで展開する。既に『読売新聞』の一枚看板であった紅葉の問題作であり、門下泉鏡花の「街の仕々に絵の看板が挙げつて」（紅葉先生）『明星』明36・11）いたという回想を俟つまでもなく、一時の話題を攫ったであろう往時の模様は想像に難くない。

だが奇抜なテーマで人気を博し翌二十五年には単行本『紙きぬた』に収録されたはずの同作に対し、なぜか同時代評は殆ど残されていない。文壇の評が奮わない一つの要因として、話題性の高い作品にありがちな、小新聞などで名を挙げるほど通俗的なものとして捉えられ、専門家の評価の氣勢を削ぐという傾向があったことは考えられる。だがその後も小説作品としての評は振るわないままに、一方で同作は必ずといってよいほど、ある分野の特記項目に引き合いに出されている。即ち宗教文献、新宗教関連項目である。

尾崎紅葉は、読売新聞に蓮門教をモデルにした「紅白毒饅頭」（一九八一・明治二十四年）を連載して、その「内幕」をどぎつくえがき、攻撃にひと役買った。

（村上重良『日本宗教事典』昭53講談社）

先行する他の文献にも多く見られる同様の言及を端的にまとめたこの一節は、宗教研究者達が同作に着目した興味のある所在を明確に指摘する。それは同時代に実在した蓮門教との関わりに於いてであった。

蓮門教とは明治初年九州小倉で興った法華神道系創唱宗教である。女性教祖島村みつのもとに信者が結集して活動を始めたが、十年代初頭、お籠もりや神水による病氣治療がもとで警察の介入を受け、地元での解散を余儀なくされたため、教勢拡大及び宗教教団としての地盤固めのために十五年に東京に進出した。以後は教派神道の一派、大成教の傘下で着実に教勢を伸長し、北海道から鹿児島に至るまで教会を設立、二十年代の前半の最盛期には公称信徒九十万人を誇った。だが明治二十七年、九十回以上に及ぶ『萬朝報』紙の黒岩派香による告発連載記事「淫祠蓮門教会」を機に陰りを見せ、ジャーナリズムの集中攻撃を浴びた後、急速に衰退、昭和三十八年千葉県の大成教蓮門和田講社閉鎖によって完全に消滅した。

一般に同時代の蓮門教のイメージは〈邪教〉である。通常、邪教としてのコードに取り込むために容易な手続きは既存の〈邪教〉の流れに位置付けることである。そのため、みつの師の柳田素入を不受不施派の人物に指定するといった安易な跡付けが後を断たないほか、明らかな歪曲と覚しき記録も少なくない。ジャーナリズムを捉えた派手さから、悪質な教団との意識先行の感も強いが、明治年間を駆け抜けた典型的な一新興宗教と見ていい。先述の宗教事典でも言及されたように、普く広められたその邪教視は同教を確実に衰退に追いやった一因と言われるが、その専門的研究までもが極めて限られたかたちで行なわれてきた背景ともあながち無関係ではあるまい。そのため、蓮門教を彷彿させるテーマの「紅白毒饅頭」に宗教研究者達が注目してきた経緯は不思議ではない。

だがそれは、一方で文学作品としての「紅白毒饅頭」評が皆無に近い事実を際立たせる。即ち題材への興味がこの作品そのものへの興味とすり替えられ、受容されてきた感は否めない。この点を確認するための前提として、まず「紅白毒饅頭」成立前後に於ける蓮門教の位置、及びその邪教視が確立された時点を規定しておく必要がある。

〈邪教〉というセンセーショナルな見出しは、雑報ネタとしては恰好の対象になり得たと考えられる。そのため明治二十二年十一月五日の『読売新聞』紙上の雑報欄に「蓮門教選祠式」との見出しで「芝区愛宕町なる神道大成教育蓮門教会にて昨日遷座式を挙行し高崎東京府知事も参拝せられたり」といとも簡潔になされた報道は、この時点で同教が〈邪教〉と呼ばれる存在ではなかった事実を明示する。次いで二十四年に至り、相次いで掲載されていたことから人氣記事であったと見える同紙の雑報「滑稽金儲の秘訣」における「(6)御水配達 妙法様の御水を配達すること牛の乳の配達に於けるが如くすべし」(八月十六日)という報道は、蓮門教が既に相当の神水を民間に出回らせたことよって知名度を上げ、話題性を持つ存在へと成長していた背景を容易に推測させる。

だがそれ以後、「紅白毒饅頭」発表の二十四年十月までの各ジャーナリズムに特筆すべき蓮門教報道が見当たらない以上、この時期の蓮門教の動静は報道ネタとして活性化するには特徴の薄い対象でしかなかった背景が浮彫りにされる。そして、僅か数年後に「方今淫祠を以て目指せらるゝもの多し、中に就きて関東に於ては

蓮門教、関西に於ては天理教最も勢力を占めて盛栄を極むるに似たり（官本生「天理教」『太陽』明28・11・5）、「天理教蓮門教等の淫祠全然倒れずんば国民の眞の敬虔心を見る可らず」（田岡嶺雲「島國的規模」『嶺雲拙叢』明32）などと報じられ邪教視が定着するまでの過渡期に、「紅白毒饅頭」「淫祠蓮門教会」などの連載期は重なっている。

「紅白毒饅頭」の舞台玉蓮教会のモデルが蓮門教会に求められた、という風評は発表当時から既に読者の熟知するところであった。

「紅白毒饅頭」執筆に当たり紅葉自身も蓮門教会を意識していたのは間違いがなく、紅葉は作中に登場する玉蓮教会の門前市を、鏡花に取材させた蓮門教会門前の様子に照らして執筆した（森銃三『明治東京逸聞史』昭44平凡社）と言われており、現存する僅かな資料に於いても、両教会の類似は所在位置、教義、礼拝仕様などに明らかである。折しも、蓮門教会の話題は、噂として広まらかけてはいても紙面化という形では充分目新しい時期である。となれば、紅葉自身の「紅白毒饅頭」執筆意図に、風刺による実在教会の告発という極めて斬新な形で示された明確な恣意性を認めるよりは、隣街で近頃の信者数急増が評判である実在教会を読者に彷彿とさせるといふ、単なる素材の興味が先行していたと見るほうが近いと考えられよう。

蓮門教に邪教という独特のイメージを付与したきっかけとして大々的に注目を浴びてきたのは『萬朝報』紙であるが、事実、スキャンダラスな切り口で話題を煽りかなりの反響も得た「淫祠蓮門

教会」は、告発報道としての路線を当初から明確に打ち出していた。この報道は、蓮門教会糾弾の意図を明らかにした報道の嚆矢であると同時に、その後各紙が次々と始めた新宗教告発報道の口火となったと言われている。だが翻って「紅白毒饅頭」に鑑みると、「報道の嚆矢」たる「淫祠蓮門教会」の三年前に発表されていた同作の、連載小説としての位置づけは極めて興味深い。

蓮門教と告発報道について言及した『淫祠拾遺教会』（伊藤洋二郎、明31）は、この種のものとしては極初期に当たり、一般的な認識にも近い記述であったと思われる。

夫れ然り蓮門教会は金箔附の淫売屋なり嘗て読売新聞は「毒饅頭」と題する小説を掲げて明かに蓮門教会の淫猥を爆き次て萬朝報は「高等地獄蓮門教会」「淫祠蓮門教会」等數十篇を連載し二六新聞は断乎として表面より攻撃して細かに蓮門教会の汚褻を穿ちしは世人の能く知り居る処なると共に其三新聞が明細描写周到なりしは世人の感嘆したる処なりき

ここにおいて、「紅白毒饅頭」は、詳細な暴露描写によって世人を感動せしめたものの一つとされている。だがフィクションであった「紅白毒饅頭」を「明かに蓮門教会の淫猥を爆」くことに直結させた明治三十一年の時点でのこの認識はやはり注目に値する。

『萬朝報』紙の「淫祠蓮門教会」の構成は所謂（続き物）の様相を呈し、「扱又」（七）、「前記華族の事は（中略）姑く之を後号に譲り」（二十一）という毎回の冒頭は提供される情報が前回分に蓄積される形式を極自然に進める。それは「報道」でありながらもその即

時性や正確性よりは、次号への読者誘引に重点をおく点で連載小説に近しい。連載小説的なスタイルを借りて、新宗教教団という当時としては極めて異色なテーマに取り組んだ「淫祠蓮門教会」が発表され注目された以上、同じ話題の「紅白毒饅頭」が同一延長線上に振り返られたのも無理はない。もとより報道とは言え相当に客観性を欠いた脚色性の濃い「雑報」に馴れている当時の小新聞読者にとって、雑報の並びにレイアウトされた連載小説が同じ視座から捉えられがちという素地は存在した。これと呼応するかたちで興味深いのは「紅白毒饅頭」連載開始第二回末尾において、〈正誤〉記事が載ったことであろう。「白蓮教会と云ふ名は現に番町辺にある由に付き爾後玉蓮教会と改む」という正誤は、フィクションであるはずの固有名詞が、実在するという理由で排除されていくことを示す。それはこうした形での実在モデルの、読者に対するアピールの大きさを示すと同時に、連載小説とルポルタージュとの明快な境界が存在しなかったことを示唆する。

だがその受容において〈連載小説〉との線引きが如何に不鮮明であらうとも、〈報道〉に課せられた制約は看過できない。新聞紙条例に基づき、蓮門教会から日々寄せられた取り消し要求記事の併載を常に余儀なくされた「淫祠蓮門教会」が、例えばその記事を逆手にとり教会のあくどさを一層読者に印象づける報道をしたとしても、常に括弧付きの監視対象であった事実是否定できない。ここに両者の根本的な差異が顕在化する。

そうした意味で〈連載小説〉としての「紅白毒饅頭」は〈小説〉

という名目上、取り消し要求の対象には決してなりえず、しかも実名掲載が読者の意識に現実の存在との混乱を誘発する程に強い影響力を有する極めて特異な立場を獲得していたものと考えられる。

即ち、素材の目新しさによって読者の興味を喚起することを目指した「紅白毒饅頭」は、だがその素材たる実在の蓮門教にまつわる神話に取り込まれ、小新聞というジャーナリズムに向けられる読者の視線の中でその位置をずらされていった。そして「紅白毒饅頭」に対する読みは一人歩きし、〈攻撃〉という読みが繰り返し喚起される結果を招いたのである。文学と、報道としての受容との狭間を囚らざるも揺れ動いた結果、作中の玉蓮教会は実在した蓮門教会の「デフォルメ」であり「全盛期の蓮門教の様子を知る材料にはなろう」(奥武則『蓮門教衰亡史』平元現代企画室)といった全面的なぞり読みは現代まで延引されている。だが報道との同一視から解放された文学作品として改めて読み直すとき、繰り返し〈攻撃〉書として位置付けられた「紅白毒饅頭」には、単なるレポート的なフィクションの域を越えた、テキスト内部に存在するある種の意図は看過し得ない。その意味を再規定しておきたい。

II

「紅白毒饅頭」のテキストに於いて、まず興味深いのは語りの姿勢であろう。玉蓮教会を取り巻く人々はその身分、立場、思考によつて様々な分類し位置づけられるが、その各々に対応する語りも少しずつ様相を異にしていく。教会が戦略の一環としたこの分類は、

「石や瓦は多けれども玉は寡き世間に、錢持てるは錢無しの手が一人も当らず」という、マジョリティーとしての大衆とマイノリティーとしての上流階級という極めて大きな枠組みとしての二項対立に突き詰められ、その基準の究極は資産の有無とされる。

その少数派信者、「誰が見ても聞いても殊勝極まる敬神の御祠」たる玉蓮教会に通い「衆目の見ゆべき所」たる「特別席」に着座する彼らの典型が「信楽屋の隠居勅右衛門」である。彼は数少ない特別信者の一人として、多額の「布施」で美貌の神子や神官との淫楽を購うという、色と金との交換を仕切る教会の特殊システムの恩恵に浴するが、表向きは神信心を装う。有産階級の彼らが玉蓮教会の裏の顔を「屈境の魔所」に数えあげるのは、「遊びの面白さ」たる特異な趣向以上に、大手を振って通うことを可能とする「神様といふ歴とした後盾」がカムフラージュとして何よりも貴重であったからに他ならない。一方、「信者の種類は、人数の多きを好めば、蛆の如く世に生ふ無智愚昧の中等動物を導入を専とす」と最終的な狙いを大衆に定める教会側も、少数派である有産階級の価値を、裏取引の布施高よりはむしろ宣伝要素に見いだしていた。

事実、「現実の経済的社会的な秩序はたえず道徳的人格的な秩序と意識されてゆき、その結果、経済的社会的な階層性は実は道徳的人格的な階層性に根拠をもっているかのような転倒した幻想が普遍化してゆく」（安丸光夫『日本近代文学の思想』昭49青木書店）という共通理解があった以上、「通常席」信者達から「いつに変わらぬ見事さ、大丸白木越後屋が見本」と眼差される、一見して裕福な「特別席」

講中が教会にもたらす保証は絶対であったに相違ない。こうした大衆心理を知悉し策を弄した教会が彼らに「特別席」への着席を義務付けたことは、しかし世間からの隠匿を求めていた「特別席」の講中に教会の看板を張らせることを意味する。ここに、色と金との交換と同時遂行された、偽装と看板という二重取り引きがより重要な意味を帯びてくると同時に、隠れ蓑を求めた者が晒し者にされるといふ皮肉な構図が展開されていく。社会階層の意識を利用した、この独自のプロバガンダ「人寄の招牌」工作は一応功を奏したと見ていい。まやかしかであったことは後に語られるが、看板信者の一人、滝沢について、ある盲信者の老女はこう語る。

あの方は山手に名たゝる滝沢様といふ華族の御次男様。四年ばかりも外国にて学問御修行なされ、一時は耶蘇教の信者にておはしけれど、先頃より玉蓮様を御信仰なされてより、西洋諸国にも種々難有き神はあれど、かく御利益の顕著なる神は遂に無しとて、近頃は講中にても屈指の信者なる上、富饒なる御身分なれば御寄進も思ふまゝになさるれば、玉蓮様にてても大事のくお方なり。家にては父親様も和助も、何かの端には玉蓮様の悪口なれど、あれほど学問なされた方さへ、万国に類無き神様とて御信仰なさるゝは、玉蓮様の尊きことの争はれぬ証拠なり。

尤もこの偽造経歴のうち、「耶蘇教の信者」という過去の持つ意味は微妙である。後に天理教を邪教として報道した『中央新聞』が、教祖中山みきを「キリシタンの末」と書き立てた裏には、みきを邪

宗の末と捉えることで、みきの創唱する天理教そのものを邪宗と看做す企てがあった。それは、既に事実上布教が容認されてはいたものの、長い歴史に確立されていた、キリスト教イコール邪宗というコードが未だ完全には消えていなかった事実を浮彫りにする。同じコンテキストをここに重ねるならば、元、耶穌教徒の滝沢は教会に申し分ない保証を与えるきらびやかな触れ込みの看板でありながら、どこか一点曇りを感じさせる異質な存在と看做し得ないこともない。

他方、「特別席」から「通常席」に向けられる興味は、教会の秘密を知る選民的優越感が階層差の生む余裕を伴い、完全に別次元のものとして立ち表れる。玉蓮尊師に殺到し「芋を洗ふごとく前後に狂ふ群集」を勸右衛門は、「何が難有くてか」と俯瞰している。だが例え神としての意識が不在であれ、表裏を完全に分離し職業としての神を演じ続ける教会は言わば「舞台」の横相を呈する。「ざわざわと鳴る静まらざるに、早奥の方に警蹕けいぱつの声聞こえて、通口なる錦の帳の捲上る時、叱々の声一際高く、練出したる玉蓮尊師」や、その後を「仙鳥の雲を凌ぎて碧落を渡る風情」で従う六人の神子は舞台上の役者として機能し、一種の非日常的空間を構築する。事実こうした神子の多くは花柳界出身であった。その舞台に殺到する「通常席」の「騷動さわごう」をよそに、「銘々の前に藍繪蓮花の茶碗を高脚の茶台に載せ、書院煙草盆を一人隔に出し」「左手に青竹の欄を結びて毛氈敷」いた勸右衛門らの着座は棧敷席と位置付けられる。欲望を買うために現れた彼らは、大勢の芝居見物客の余祿的な楽しみである側面舞台としての棧敷席構成要員として、「義理に辛抱して

耳を飯あひし」「欠を面上に撫潰なぐ」すなど「神妙な顔色」で説教に参加することを強いられ、結果的に劇場を構成する者としての演技に縛られていく。

剩え、「特別席」講中が世評を恐れ隠匿を求めて教会に足を踏み入れた段階で、世間体は既に足枷として機能している。自らの実態と、世間が彼らに要求するイメージとの落差とを自覚していたからこそ生まれる桎梏であり、「特別席」信者としての崇拜も「放蕩隠居」としての侮蔑も、共に「思ふまゝの事を種として万の言葉」とする「通常席」信者の階層によって付与される外枠である以上、勸右衛門達はこの循環に則るべく、その行動原理も常にこの階層の人々によって榨取られていくものでなくてはならない。だからこそ相反する二つのイメージは、有産階級への大衆の信頼と羨望であり、高貴な者が背負う義務を放棄する者への制裁という裏面なのである。「衆の眼をぬす」み、教会に入り込んだはずであった「特別席」信者達は、だが結局のところ依然として「衆」と同じ階層の「有難き連中」の前で演じ続けねばならず、看板としての役割を全うするより他はない。それは囚らずも玉蓮教会という華々しい劇場に非日常的な舞台を見物しにきた「有難き連中」のストーリーの中に組み込まれてゆくものであり、明らかに「棧敷客」という役割を演ずることによって観客としての「通常席」信者らの欲望を充たしていくのである。

だがたとえ棧敷席の上流信者が「さくら」であろうとも、彼らと同じ時間を共有できる舞台は、「通常席」の人々にとって文字通り、

各々の事情に照らし内蔵するストーリーを自由に投影し、夢を見ることを許される場であつたに相違ない。そこに見物料が課せられるのは何の不思議でもなく、役者の正体である（舞台裏）などは何の意味も持ち得ない。舞台上の虚構こそが彼らにとつての（現実）となる。それ故、たとえ「娯楽を此教の深秘」としようとも、それを知らない「信者万人の九千九百人」に対しては教会は「一々知れた言」、換言すれば正論を説き、靈験は「疑ひなしといへども、信心深からざるに於ては験も亦多からず」という教義を納得した信者のみに「神水」を与えるという、可視的なものではないにしろ契約關係に何ら反さない、言わば双方完全にイーヴンな取り引きを遂行しているものであり、そうした意味で実はその何の「偽り」も介在しない。

こうした舞台裏を「虚言にも之を識らず」信心する「通常席」信者は、しかし語り手の視点からは「愚なる人心」の持ち主であり、その代表が「渡世は煮染屋、住所は神田松枝町に、安くて風味好き総菜屋」の妻、玉蓮「大信仰の老女」であろう。家族の反対を退け熱心に信仰していたがある時、奉公先の公家春日家で娘の勝が創傷性肋膜炎を患うとその治療をめぐり、平穩無事の日常では水面下に沈められていた問題が家庭内で一挙に表面化する。それは「神様と医者様との優劣論」であつた。

医療と宗教との問題は我が邦俗では長い間、明確な区分は為されていなかったとみていい。民間療法はしばしば土着の民族信仰と結

びついて行われていた。医療と宗教とのこうした極めて大きな関わりはむしろ精神医学が発達してきた今日、それを支える方向で、必ずしも分離できないとの見解が有力であろう。精神医学及び臨床心理研究者のピエール・ジャネが『心理学的医学史』（昭56みすず書房）の中でも述べたように、宗教的な病氣治療は必ずしも文明に逆行するものではない。だが宗教と医療とは、病の治療に関わる問題として今日に至るまでどこか対立概念的に捉えられてきた。

その対立を最初に意識化したのは明治七年の政府通達であろう。折しも近代国家の創建を目指し西洋医術導入に取り組んでいた明治政府に対し、所謂新興宗教の多くは民心を早急に掴むため禁厭や神水による治病といった現世利益を掲げていた。素より「貧・病・争」が最大の入信動機と言われる新興宗教は、とりわけ政府の推進する西洋医術の治病率が未だ低く、コレラ等死亡率の高い伝染病が猛威をふるっていた折から、効果を認められていた。当然、ここに医療との対立が生まれる。事実、「西洋医学を選ぶか、漢方・鍼灸を選ぶか、民間の祈祷・信仰を選ぶかはほとんど相対的な選択にすぎなかつた」（松田博交「天理教と中山みき」『異端の教団』平7洋泉社）と言われたように、民間レベルに於いてはこれらは全くの同次元である。確かにテクスト中の多田医学士も「神が疾病を治すものならば、我等も神と同商売でござる」と、それを顕在化させていた。

そうした中、明治七年六月に明文化されたのが、神道諸管長に通達された教部省達書乙第33号、所謂、禁厭祈祷令である。「禁厭祈祷ハ執行差支エナキモ、医療ヲ妨クベカラザル件」と掲げると同時

に、政府は各府県に対し「禁厭祈禱ヲ以テ医療等ヲ妨グル者取締ノ件」を発令し間接的な取り締まり体制を敷いている。直接的な処断は巧みに避け、単独での禁厭祈禱は一応許可しつつも、政府はそれらを着実に「政治の障礙」の予備軍として規定していく。『幻視する近代空間』（平2青弓社）の中で川村邦光が「根も葉もない『迷信』を盲信し、行動する『愚民』は、開化―啓蒙されねばならない。当然それは従来の慣習の改変、心身の新たな訓練―教育によらなければならぬ。主として、法令の公布・施行や出版、学校教育、軍隊教育を通じて行われた」と挙げた通り、近代医療に対峙する宗教面での治病法は迷信に包含され、教科書レベルで就学児童の潜在意識に植え付けられ、次第に無智無教養と結び付けて位置づけられたのである。置き土産となつたのは「医」に拠る賢明な有産階級と「宗教」に拠る愚昧な無産階級という図式である。

ここに、「病」というパラダイグムに於いて、テキストはこの図式を一層顕在化させて展開していくが、この二項対立の前段階として一旦、語り手の意識が無産階級のみを集約してみると、そこにはある種の傾斜が初めから備わっていた事実が明白になる。

父兄の深切も無にはしがたしと取繕うて服薬養生を懈らざりける験見えて、一月余にてやうく快方に趣きぬ。これ偏に神水の御利益、と母は無上に憚立てば、医者組は多田先生と信仰を増して、父親の時は是非此国手と今から定めて置くもをかし。

治病という局面において本来、「愚」なのは「万病に禱りて効験ある神は医者様なり」と「心の着かざる」玉蓮信者だけのはずであつ

た。だがここでの語り手の捉え方には玉蓮信者と「医者組」との差異は見出せない。露呈するのは、実は無産階級には「医」も「神」もなく、忽ちに「信仰」という全く等価の擲擲ベクトルが双方に発せられるという仕組みである。

即ち、語り手の態度はむしろ先述の（上からの）教育を遵守した有産階級に寄り添った視点にあり、実は玉蓮の不信以前のレベルとして語り手自身が、無産階級そのものを愚昧とする傾斜を内包していたことが現前する。そしてそうした自らのうちに抱え込む権力構造を隠蔽するために、語り手は次第にテキスト全体にまつわらせる形で教会への批判色を濃厚にしていく。「かゝる貪婪邪淫の狼婆を、知らざる事とはいへど、尊師など崇むる士女の精神は土足に懸けられて蹂らるゝも同じ事」、「此鶴貌鼻心の奴に思ひを運ぶお勝の身は、いとしや珠を取て蔽に投付けむとするに似たり」などと危機に陥る彼らを躍起になって全面的被害者として位置付ける語り手は、玉蓮教会という完全な悪者を得ることによって、相対的に揺れ動く自らの規準軸を安定させていくことになる。

翻つてテキストを見ると、医者者の「薬」と神の「水」を併用したお勝は幸いにも回復する。娘の本復を偏に玉蓮の御利益に還元させる母親の陰で、息子の和助はこう評する。

蔭なる医薬の功を奏して、かゝる仕合なりければこそよけれ。

さもなくして屏風逆なる回向の悲しき目を見たらむには、恐らく神の為損じには小言をいはで、よしなき医者所の業が玉蓮様

の御意に忤りたるお罰とや喚きたるべき。かうまで信心受けて御利益なき神は、天下にお一方も御座あるまじ。

結果論で左右される彼女の二見、日和見的なこの思考形態は、病氣完治の望ましい結果のみ玉蓮の利益とし、望まぬ結果は人為的な邪魔立てに帰属させるといふ徹底した思考上、玉蓮教に百パーセントの治病率というひとつの法則を付与する。それは、一方で、前近代的な位置付けをなされながらも、近代的且つ推進的であつたはずの西洋医学による病人の救命率を遙かに凌駕し、「医者様とても過食ぎれば腹下す凡夫の身なり。人間の上に立つものは神ぞかし」といふ彼女の主張とパラレルをなす。

注目すべきは、一見神に全てを委ねる他力本願も、実は信者自身の信心によつて結果が大きく左右されることであろう。「かねがね見聞せる玉蓮様の御利益を忘れ」て信仰に反対する「罰当りの」夫と息子に憤慨した勝の老母は「夫にも子にもこのやうなる不信心者のあればこそ、此私は衆一倍信心せずは、尚以て商売繁盛家内息災は覚束なけれ」と語る。換言すれば「罰当り」の家族の仕打ちには彼女自身のより一層の信心によつて贖われ、娘の病の回復如何さえも老母自身の信心に正比例するものであり、その救命は信仰者としての彼女自身の双肩にかかっているという矜持を露にする。玉蓮信仰を選んだ選択能力も含め、家内の安全に力を發揮するのは老母自身であり、「玉蓮様」はあくまでもその媒介に過ぎない。それはある意味で、玉蓮教を隠れ蓑に利用し自らの欲望を遂げていく「特別席」講中と同じ行為の反復であるとも言えるのだ。そうした意味に

おいて、神体を明らかにせず「一々知れた言ばかり」を説教する、オリジナリティーの欠如した玉蓮教会は、信者自身の力を集中的に投影し、力を顕現し易い媒体として望ましい対象となる。教会側から「教会繁盛の源」とのみ規定されていたはずの彼らも、教会を自己過信の媒体として逞しく逆利用していき、相互補充の関係を築いていたとも言える。

だが先述のように語り手にとつて、玉蓮信者はあくまで愚昧で「不便」な立場であり、教会は「悪」の存在でなくてはならない。信者を危惧と憐憫の二面から処理し、依然として弱者保護の姿勢を固持するために語り手が、必然的に引き出すのが対照的な有産階級である。そこには愚昧な無産信者との二項対立を鮮明にする意図が介在しよう。

玉蓮信仰による治病を言下に「愚しき事」としたのが公家の春日夫人である。お勝の母が神水を手に見舞いに駆け付ける姿を「笑止がり」、「日夜怠らず信心」した靈験あらたかなはずの神水を病人にあてがう様子に「苦き顔」せずにはいられない夫人の対応は、神水投与後に来診した多田医学士の「忽ならざる症」という診断を「聞くに、いよく神水の恐るべきを想ひぬ」という、懸念と失笑の入りに交じった語り手の視座と符合する。夫人の疑惑は、病人の苦痛を却つて増したため老母でさえ「そこく」に仕舞う羽目になった神水治療によつて、一旦正当化される。だが盲信者特有の割り切りによつて老母も、明らかな裏目を、話題の転換という意識からの排除

によつて鮮やかに無化していく。現実を目の当たりにしながらも信仰の論理の絶対性を崩さない彼女の姿は、無論、玉蓮信仰の全面的な不信に傾く語りの誇張によつて滑稽さが浮彫りにされていく。玉蓮の靈驗譚を「持扱ひて遁身を構ふれど、捉まりて散々に聴かされ」た春日夫人の辟易ぶりも、老母の頑迷さを強調する形で春日夫人を支える語り手のスタンスを明快にするが、ほどなくこの春日夫人の鉄壁の威信は覆され、その立場は老母の位置と逆転を見ることになる。

小兒急癩に罹つた我が子の治病に、春日夫人は言うまでもなくお勝の母と対照的な方法を追及した。だが「よしなき神信心」には微塵も期待をかけず、「頼むは医師よ、服薬は懈らせず。看護も此上なしといふ所までして少許の効驗はあるべき理なるに、夜啼はなほ劇しく」なるばかりで病児は一向に回復の兆しを見せない。遂には「薬も利かぬ時は利かぬものかな」と嘆く夫人だが、偶然お勝の母が持参した神水を病児に「義理に飲ませし夕は夜啼暴かならず」その後も「水の有る程試みけるに、三日目よりはたと夜啼止りて不思議を驚くばかり」とまもなく治まってしまう。夫人自身の価値基準が転覆したこの時点で、彼女には玉蓮教を信じる道が新たに浮上し得たはずであった。だが最終的に夫人が帰着したのは相変わらずの医療であり、「腑に落ちかねて、此次第を礎に夫に話しければ、大いに笑はれて、薬の効能の見はれたるが折好く打当りたるまで」という夫の言で、「実に」とあつさり納得する。だが、目の当たりにしたはずの「不思議」を「さる愚かしき事」へと還元してしまう

行為は、まさに話題の転換によつて神水の無効性を忘れ去つていった、お勝の母の行為の踏襲であつた。

そうした夫人の頑なな態度は夫人自身に内在するある種の固定概念を露にした結果であり、神水治病に凝る患者と医薬に依存する賢者という絶対的な対立がそこに見え隠れする。玉蓮の教義も黒い噂も共に聞き及んではいなかったはずの夫人には、実は処断の基準は無く、ただ賢者の枠組みからの逸脱を恐れていただけでも考えられる。説明し得ぬ目前の不思議を偶然へと回帰させ、無化することさえ敢えて辞さないこうした揺るぎない理念は、お勝の母の玉蓮への盲信的な思い入れを彷彿させる。春日夫人がお勝の母を評した「この人いうてもきくまじ」という判断はそのままお勝の母から春日夫人へと押し戻されるものであり、相対的な基盤が揺らいだ折の人間の行動として自らの固定概念を決して去らない固執を露呈する意味で、お勝の母親の言動の裏返しなのである。

根拠を持つ分析がない以上、玉蓮を否定する側にも一貫した論理の統制は認められない。主張の裏面には保証された近代性に依拠した優越感だけが残り、共に自らの主義に固執し続ける意味に於いてむしろ玉蓮信者とは言わば同族なのだ。結果、盲信者達の論理の陥穽を衝いた語り手の冷笑は春日夫人に、延いては語り手自身にも跳ね返ってくる。そこには、実は語り手自身も玉蓮教の悪を直視するのではなく、教会の悪を暴露することによつて自らの権力的視点を隠蔽しようとした工作の剥落が現れるのである。

最終的に、教会の崩壊が暗示されるまで、裏を知らぬ「通常席」信者達への危惧は語りに断続的に示され続ける。だがその懸念は危機が差し迫り深刻さに拍車がかかる状況下でさえ、一方では「御母様御用心」などどこか揶揄調を払拭し切れない悠長さを残す。それはともすれば語り手の示そうとする姿勢とは逆に危機感の希薄ささえも露にするが、そこにはあながち語り手の真剣さが虚構であるためとばかりも言い切れない、時代性と切り離し得ない宗教観も作用している。

新興宗教に対し、現世利益、呪術性、迷信的、貧弱な教理、生き神祀りを筆頭に佐木秋夫が二十四点にまとめた現代イメージは、「直接の経験や見聞からくる一般の常識のようなもの」(『新興宗教の系譜』昭56白石書店)という新興宗教に向けてのマイナスイメージをよく表象するが、その多くがマス・メディアを通じて現代人の意識下に深く植え付けられたものである以上、テクストの根底を流れる新宗教へのこだわりない対応は、良くも悪くも情報の乏しい社会の異質さを際立たせる。看過し得ないのは、明治六年のキリスト教の事実上容認に伴い、各派宗教の信仰も柔軟に許され始めた往時の国家政策との意識の関わりであろう。詳細は後述にまわすが、邪教とはすべからなく上から禁止されるものだという民衆の引きずる従来の感覚では、許可されたものは必然的に邪教では有り得ない。神道国家主義の名残りと相俟って、新宗教とは言え玉蓮教のような神道系の一派が他派の追隨を許さない絶対的信頼を寄せられたのも当然の成り行きであろう。

神を飾る外面の保証が絶対であるこうした状況下において、内部情報を封鎖したテクスト中の玉蓮教会の経営維持は完璧であったと言わざるを得ない。情報浸透が孕む問題を危惧した教会はもとより神子達を「籠(かご)の鳥」に囲い、「特別席」講中とも秘密裡の共犯関係を築いていた。それ故、教会にとつても同じ立場の偽装信者達にとつても唯一の危険は、秘密という大前提を「懐胎」という形で突き崩す女達である。だがタブーを犯した彼女たちはこの交換関係からはじき出されていき、そこで彼女たちを待ち構えるのはまた、「淫行」者として世俗の禁をも破った者としての外部社会からの排斥に他ならず、彼女らがもたらす情報は彼女ら自身の「浮名」という焦点へとずらされていく。しかもこうした淫事は、「臭き処」に「薄々感付」きつつも「却て此身に取りて都合好きを喜び、神は口実にして旨い事仕放題」を望んだ女達自身に起因している。結果、責任の一端は、彼女らの夫或は親自身の監督不行届という「不心得」にあり、彼ら自身の恥辱を世間に普く広めずして大々的に教会を糾弾することはできない。世間体という共通の桎梏により教会と一蓮托生の立場にある彼らは「闇中の恥辱を其まゝに何事も勘辯し」「胸一つに事無く納」める他はない。結局のところ黒い噂が真実であればあるほど、教会の「委曲(くわじく)様子」を語れるはずの情報提供者自身が外部社会で受け入れられないというパラドックスが、情報を微小且つ不信用なものへと替えていく。教会が情報に対して巡らした何重もの呪縛は、教会の「深秘」を完全に世間の目から阻むことに成功したのである。

それ故、この均衡関係の維持は教会の安泰を完全に保証するはずであった。だが問題の発端は玉蓮教の「座頭ざとう」と契約し神官や神子を演じていた裏方が「色を捨つれば欲となる心」を追求し始めた危うい管理体制に生じる。結果、無産階級のお勝も巻き込まれ「淫行者」の裕福な女たちをブレ・コードとして辿り始めるが、その感濁に歯止めを掛けたのは彼女を教会まで送り届けた車夫であった。不特定多数の客に接し、教会の「内幕」を道行く人々が「聞尤きこゆめ」るような「駈かながらの大声」で暴露しつつ各街を走り抜けるその車夫は、明らかに情報発信源として効果的な位置づけを為しうる職掌と言える。他方、教会のいずれの呪縛領域にも属さない（客演）者、福雀は神子下枝出奔の呼び水として機能し、最終的に情報結果の亀裂を招く。情報の流出を命取りと熟知し、神子達に「一切外出を禁じ」てまで「事の泄れむを氣遣」っていた教会にとつて、「神宝」（肉体・情報）であつた下枝の外部流出がもたらす意味は深刻である。結局、情報封鎖という一見堅固な基盤に立つ教会の倒壊は、情報の流出と拡散という内外双方からの働きかけに暗示される。そうした意味で一般社会に隣り合わせる、〈報道〉者として代替される車夫や「木戸二三銭なる小劇場どんちやう」に楽屋という〈サロン〉を有す「俳優べいしや」の役回りは重要であつた。

III

玉蓮教会が様々な関係者と均衡を保ち得た背後には、各々が分明に分けられ帰属するグループ間ごとの情報の封じ込めがあつたが、

元来が精神的結果である宗教領域は治外法権であり外部からの視線の遮断には最適であつた。現代、常に多くの情報の循環に依る、宗教に対する人々の敏感な反応は、国家の介在は無くとも民間レベルで宗教教団に決定的なダメージを与えうる力が秘められ、ともすれば〈邪教〉蔓延の歯止めとして機能していることは明らかである。翻つて宗教に対し、あまりにも無防備な当時の感覚をよく表したのが、以下のように評する、玉蓮教会の創建時の近所衆である。

玉蓮教会とは嘗て聞きも及ばざる宗旨なり。さりとして講中信徒の優れて夥おほだしく、繁昌なる神にあらざりしては、かく大構造なる社の建つべきやうなれば、東京には知られぬ神ながら、諸国には長く弘まりたるを、此度東京に御遷宮あらせられたるならむか

ここにはまず、何よりも全国ネットを網羅する情報体系の未確立であつた背景が窺えるが、同時に「神」という言説への絶対的な信頼、無警戒とも言える傾倒が根付いている。「嘗て聞きも及ばざる宗旨」と語られる比較的近年に興つた宗教は現代、新宗教或は新興宗教と総称される。一般に新宗教というと弾圧のイメージが強いが、宗教の取り扱いに関して文字通り朝令暮改が繰り返されていた明治前期、僅か数年のずれで各教団宗派の立場が微妙に変動していた事実はあまり知られてはいない。新宗教史の大枠では幕末前後から二十世紀初頭までの成立教団は第一期に分類されるが、「紅白毒饅頭」発表が明治二十四年であり、テクスト中、おツペけ人形が登場するために同年以降と考えられる玉蓮教会遷宮も、まさにその過渡

期にあたる。まずその背景を再考する必要がある。

明治政府が維新直後に着手した近代国家創建に不可欠であったのが、臣民の名のもと国民の意識を天皇に結集し、天皇制国家に結実していくための神道国家主義である。ここに、まず「神」という言葉の有す絶対性の、徹底した民衆へのすりこみが実施される。だが民衆の意識統一化は宗教の、延いては思想の自由を剝奪する簾で逆に欧米諸国からの反発を招く。戸惑った政府は明治六年「切支丹禁制」の高札撤廃によってキリスト教の黙認に踏み切り、それに伴って既存宗教の仏教、神道の信仰も認められるようになった。苦肉の策が、神仏基の三教の上に立つ絶対的存在たる「超宗教」としての国家神道の規定である。ここに至り、他の宗教は全て国家神道の統治下にあるものとして、政府の打ち出す路線からの逸脱を避けるべく「監視されるもの」という対象に変容したのである。結果として新宗教の多くは「神道」の分派として枠取られるようになった。⁵⁾

だが明治十五年、これら数派の独立認可後、新宗教の多くは便宜上各教派の傘を借りて合法的な布教が可能となり、事実上こうした借傘型宗教の管理は各教派管長に一任される。政府間との摩擦を吸収するこうした教派の存在によって各新宗教は、「行政上の統制を受けるのみであって、教義や儀礼の核心部分に深い刻印を受けることは希」(『新宗教事典』平2私文堂)な比較的自由な活動を許され、民間レベルでの受容にも混乱を来さず順調に教勢を拡大し得た。そのため明治十年代後半から二十年代前半にかけて一応の落ち着きを見せてた政府の宗教対策は、同時期、社寺の建立が急速に増加した

事実を示す「内務省功程報告」⁶⁾にも裏付けられる。最終的に規制に到ったほど夥しく望まれた社寺設立を裏返せば、同時期の社寺への布教規制に相当の緩みがあったと考えられる。それは二十二年の憲法で「宗教の自由」が認可されたことによって一層の安定を得たと見ている。即ち「紅白毒饅頭」発表時の宗教界は、一部、真宗での内部闘争を別にすれば明らかに規制の緩和された穏やかな隙隙であったのだ。明治二十四年七月十七日の『読売新聞』一面の社説「日本の宗教」には以下の一節がある。

夫れ然り政府が宗教に干渉すべからざる理由は既に明かなり、然れども又一方より之を言へば、政府たるもの決して国民の宗教的生活を度外視すべきものにあらず、宜しく其の良智に問ひ明法に訴へて之を監督し、能く一國社会の安寧秩序を維持せざる可からず

ここに、従来邪教と呼ばれた或は監視の対象であった各宗の解放が、信教の自由をもたらす一方で、国家の宗教管理意識を事実上衰退させていた背景が浮上する。財政上の問題及び人員動員力を重視し国家統制に組み込むことを最優先した政府は、新興の宗派管理を各宗に一任していた。だが一方、民衆は「邪宗門」とは教義云々以前に国家に指定されていたものことであり、それらの信心のみが禁圧されるという意識を引きずっている。禁圧の裏面は、入信者自身の危機管理能力の低下、自警意識の欠如である。それが、先の「神」の絶対性と相俟って新宗教のパワーに取り込まれる傾向を創り上げたのである。

こうした背景において、「神を表面に飾れる私窩ちごくやど子宿」に下世話なはずの庶民階級が無警戒に招き寄せられ、それを外側から眼差しでいく語りの意識にもどこか緊迫感が薄かったのは不思議ではない。だが、たとえ邪教として扱がるものであっても、本来極めて個人的精神的な結果である宗教の、秘められた領域に踏み込むことは容易ではない。宗教に対する無警戒ともいえる安易な認識のもと、内部情報の外部浸透によって内外に動搖を拡げることが教団排斥に機能しうる唯一の手段であった。

このテクストが後々に影響を与え、〈攻撃〉書として捉えられたのは、かつて露にされることのなかった新宗教教団の内幕が、語り意図によって毒々しく焦点化され、邪教教団に対する読者の攻撃誘発性を喚起したためである。それはモデルとした実在教団を逆に取り込んで受容され、閉鎖的で外部者には触れ得ないはずの宗教の教団に外部者が切り込む手段、即ち漏洩された内部情報を報道が拡め糾弾する、というテクストの戦略が後に実現される結果を招いた。流通する情報によって崩壊が暗示される宗教教団を描く作品世界が、情報を流通させる媒体（新聞連載小説）で繰り広げられたことが、後のマス・コミの宗教糾弾へとつながり、結果的に実在の一教団が崩壊したと無関係ではないと見る以上、「紅白毒饅頭」は二重の意味で、マス・コミの新宗教教団非難の〈青写真〉であったとは言えまいか。

注(1) 「日本近代における新宗教教団の展開過程」武田道生『大正大学大学院研究論集8』昭59・2／『古神道とエコロジ』菅正昭(平

9・たちばな出版)

(2) 『日本コレラ史』掲載の統計に基づくと、明治十五年から二十四年の十年間におけるコレラの死亡率は七割を超える。但し届け出に遺漏も多いと考えられる。

(3) 禁厭折禱ノ儀ハ神道諸宗共人民ノ請求ニ応シ從來ノ伝法執行候ハ元ヨリ不苦候処間ニハ之レカ為メ医療ヲ妨ケ湯薬ヲ止メ候向モ有之哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候仰教導職タルモノ右等貴重ノ人命ニ関シ衆庶ノ方向ヲモ誤ラセ候様ノ所業有之候テハ朝旨ニ乖戻シ政治障ト相成甚以不都合ノ次第二候条向後心得違ノ者無之様屹度取締可致此旨相違候事

(4) だがこの分類は未だ確立されておらず、主に発生時期によって分類する歴史的规定及びそれに社会学的視点を加味した内容重視の規定に大別される。『日本の宗教』(堀一郎 昭60大明堂)によると、より単純な前者において、極大雑把捉えてもその創始期を①幕末前後、②二十世紀初頭、③二次大戦後、④江戸中後期(特に国学運動や民衆宗教運動に源流を探す)に各々定めることで四分類される。

(5) 後に教派神道十三派とよばれる多くは前後して興ったものだが、教派独立の認可までに辿った経路は一律ではない。それが最終的には政府路線と如何に密接な関わりを持つかに依拠していた背景は、教祖中山みきの提唱した教理を相当に修正して四十四年にかろうじて独立を認可された天理教と、地方から禁厭折禱による医療妨害の訴えまで出されながらも中教院への資金援助という形で貢献が認められ、明治九年に早々と一派独立を認可された黒住教との対照が、示している。

(6) 明治十九年「内務省報告」に於ける「社寺事務」項には「社寺設立等ノ願殊ニ多ク」とあり、其の結果二十一年「此ノ如ク減少ヲ来セシハ他ナシ明治十九年六月訓第三百九十七号ヲ以テ社寺等ノ創立再興復旧ノ制限ヲ各府県ヘ訓令シタルノ結果ナリトス」とある。

溢れでる身体、そして言葉

—— 泉鏡花『外科室』試論 ——

鈴木啓子

はじめに

『外科室』(「文芸倶楽部 第六編」明28・6)が、当時の文壇に注目されたのは、結構の不自然や思想の偏狭にもかかわらず、少なくともある「観念」(＝概念・理想)を社会に示した思想的作品と解されたためである。しかし、やがてその「観念」すなわち「思想を現す體度」も、読者の好奇心に訴える「極端なる材料」に着けた「新衣裳」にすぎないという相対化のもと、その対社会的意義は否定されるにいたっている。そのなかで鏡花研究は、むしろ『外科室』の眞価を、倫理や思想を超えた「絶対的な美神に対する信仰」(三田英彬「泉鏡花の位相―観念小説その他をめぐって」『泉鏡花の文学』桜楓社昭51)や「なまぐさい現世的葛藤を消去し、ただひたすらに根源的な愛のかたちを照射」(笠原伸夫「愛のラディカリズム」『泉鏡花―美とエロスの構造』至文堂 昭51)する鏡花固有のロマンに見いだすことで、その再評価を図ってきた。

しかし、この評価軸の転換によっても、『外科室』が「観念的」であるという評価は、実はほとんど揺るぎをみていない。たとえば成瀬正勝(「解題」『明治文学全集21・泉鏡花集』筑摩書房 昭41)は、「いわば現象論的のみ観念小説の名を与えた過去の評者」を批判しつつも、鏡花は「観念を論理的には発展させることはできなかった。しかし感覚的に、感情的に観念の膨張をはかった」(元来に、本質的に、彼の文学は、観念的なのであった)と述べ、塚越和夫(『外科室』「解釈と鑑賞」昭48・6)も、『外科室』の「問題提起のしかたは、きわめて『観念的』である」「鏡花は、『観念』の『現実』に対する優位を信じていたはずなのだ。『外科室』の『情死』は、その勝利の象徴なのである」とする。笠原伸夫(前掲論文)もまた、『外科室』が二人の不倫の愛を具体的に描いたなら、「近松の世話悲劇と同じものになってしまう」、『外科室』の「愛は徹底して、心的な、観念的なものでなくてはならない」と、その「観念」的傾向を肯定的に論じている。

たしかに、九年前に眼と眼を見交わしただけの男女が再会したその日のうちに情死にいたる『外科室』は、現実的なりアリティを全くもたない筋立てといつてよく、「観念」を「現実」に対する概念として位置づける時、「観念的」という評価は一見妥当なようにも思われよう。弦巻克二³が論じてのごとく、「観念小説」命名論議の背景には、「観念」という翻訳語を用いる論者の認識の差異が伏在している。鷗外がハルトマン美学を踏まえ、無意識的実在としての「イデエ」の厳密な訳語として用いたのに対して、抱月の用法は「形而上性を喪失した抽象理想としての主観的概念」となっていたというのが弦巻の整理だが、今日我々が「観念論」「観念主義」という語を用いる時、その「観念」とは「主観的概念」の意に近く、そこに現実や具体的事項を重んじない抽象論への批判的意味合いがあることはいままでもない。「観念的」という評言は、たとえ肯定的文脈で語ったとしても、マイナス評価へと転じる可能性を孕んでいるわけで、少なくとも、過去の鷗外の、「作者の意識ありておのが世界観を其中に寓する」「所謂観念小説」は「傾向小説」と称するべきで、「観念」を「血あり肉あるに至⁴」らせた「真の詩」ではないという批判を、本質的に覆すものとはなり得ていない。はたして『外科室』は、血肉を欠いた具象性に乏しい作品なのであるうか。結論的にのべれば、本稿は『外科室』を、身体的なるものが横溢する作品として捉え直すことを目的としている。しかし、執筆当初のモチーフとして、当時「舶来の観念」であった「精神的恋愛」の概念が存在したことは認めておかざるをえない。したがって、論の

趣旨からは迂回することになるが、一、二節では、まず主人公高峰の〈見る〉ことに始まる恋愛の観念性を浮上させていく。三節では、これを明治二、三十年代の恋愛をめぐる言説の中に位置づけ、四節以降、高峰の恋愛の主観的独善性を伯爵夫人の身体的な言葉が相対化していく様相を読み解いてゆきたい。

一 見る男

さて、『外科室』は、「実は好奇心の故に」と語り手の「予」が〈見る〉ことへの欲望を吐露することから語りだされる。作品冒頭の一文で示されるのは、主な登場人物三名の身分とともに、通常なら決して人目に触れることのない伯爵夫人の禁断の素肌が、あられもなく開かれる外科手術の場を、執刀医の親友という縁故と「画師たる」職権を濫用して、「見せしむることを余儀なくした」語り手の後ろめたさの表明であった。むろんこんな不謹慎な観察者は彼一人であって、外科室への入室を許されたのは、立ち会いの親族と医療関係者のみという設定ではあろう。しかし、「塵をも数ふべく、明るくし」た外科室の手術台に、ただ一人横たえられた伯爵夫人は、「予」と執刀医の高峰以外にも、医博士一名、助手三名、看護婦五名、公・侯・伯爵の男性親族というように、多くの無嫌な眼に晒されている。冒頭における「実は好奇心の故に」「兎も角も口実を設けつゝ」という語り手の本音の告白は、ここに居合わせ全ての人々の地位や職掌をばき取り、これら複数の眼にひそむ〈見る〉ことへの欲望と、伯爵夫人の被る視線の暴力性を浮上させる結果となつて

いる。

さらに、この一方的なまなざしの構図は、「小石川なる植物園」に設定される高峰と伯爵夫人の邂逅の場面にも、繰り返し仕組まれたものだった。すでに先学が報告するように、幕府直管の菜園として出発した小石川植物園は、維新後、東京大学の管轄となり、明治十年からは常時一般客に開放されて、皇族から庶民まで、あらゆる階層の人々が相集う、帝都東京の新しい行楽スポットとなっていた。九年前の「未だ医科大学に学生なりし砌」、高峰は「予」とともにこの園に訪れ、世が世なら決してまみえるはずのない「婦人」を間近に見る。「貴族の御者」たる「蕃髯の漢」二人に前後を護衛され、園内の池辺を「裾捌の音最やかに」歩む「三人の婦人等」、

する／＼と練来れる、ト行き違ひざま高峰は、思はず後を見返りたり。／「見たか。／ 高峰は頷きぬ。「むゝ。」

この場面で、語り手の放つ「見たか」の台詞は、高貴の美女を視線に捕らえた欣喜と優越にみちている。「商人体の壮者」の会話に「高島田と来る処を、銀杏と出たなあ何ういふ気だらう」とあるように、本来なら文金高島田に装うべき上流の貴女は下町で好まれたという銀杏返しに身をやつし、「影武者」まで仕立てながら、その場に居合わせた多くの人々の視線という暴力に曝されていた。

それにしてもこの銀杏返しの女は何者だったのか。坂東玉三郎監督の映画『外科室』（松竹 平3）では、吉永小百合演じるヒロインが、植物園の場面で、既婚を象徴する「丸髻」を結び、すでに嫁いだ設定となっていた。商人風の二人連れに「あの姫様」と呼ばれて

はいるものの、九年後に「七、八歳の娘」の母である夫人が、この時点で既婚か否かの確かな決め手は作中にはないのであるから、邂逅場面の女に「人妻」という足枷を嵌めてみるのも悪くはない趣向だろう。『怪語』（明30・8）で、主人公が「噫、『他人之妻』と、甘美な苦悶の呻きをもらすように、「他人之妻」は鏡花にとつて、その言葉すらが禁断のエロスをかきたてる装置だったと目される。

もつとも、たとえ貴船伯爵家に嫁さなくても、夫人はおそらく伯爵家の娘として華族制度という堅牢な檻の中にいたはずだ。麻酔を拒否する夫人に、「余り、無理をお謂やつたら、姫を連れて来て見せるが可いの。疾く快くならんで何うするものか」と「傍より口を挟」む「侯爵」は、手術の始まりの場面で「なにがし公と、なにがし侯と、なにがし伯と、皆立会の親族なり」とあることから、夫人の父親、あるいは祖父・伯父・叔父等の親しい親族と想像される。明治十七年の「華族令」で公・侯・伯・子・男の五爵が設けられるが、公・侯爵は公家や旧大名で占められ、維新の功績で新しく華族になった者には伯・子・男爵が与えられた。「团团珍聞」（明20・6・18）の風刺画「華の宴」が、その差異をあげすけに揶揄するよう、公・侯と伯・子・男の境界は、当時一般民衆の言わずもがなの了解事項であったと覚しい。鏡花がその点を描きわけて少しも不思議はなく、貴船夫人は、公家もしくは旧大名の侯爵家から新興華族の貴船伯爵のもとに、多額の結納金と引き替えに降嫁した女性だと読むことも十分可能だろう。そういうえば侯爵には「無理をお謂やつたら」と京訛りがあるし、そもそも、夫人が「良人たる者」の目

前で私には秘密があると言ひ放ち、「温平として」その秘密を尋ねる伯爵に、「決然」とあるいは「投棄るがごとく」、拒否の言葉返すのは、その秘めたる愛の激しさとともに、夫婦間の出自における身分違いをも匂わせている。商人風の若者が「一人は丸鬚ぢやあないか」と既婚未婚の別を問題にするのに対し、もう一人が「何の道はや御相談になるんぢやなし、丸鬚でも、束髪でも、」云々とその詮索の無益を語るごとく、夫人は決して手の届くはずのない相手として設定されているのである。そしてそれは、帝国大学の「医科大學⁽⁸⁾」に通ひ「医学士」というエリート⁽⁹⁾への切符を握っていた高峰をもつてしても、同様に手の届かない、永遠に到達不可能な存在に違ひなかつたはずである。

彼女の美に感動し遊廓通いを止めると宣言する若者の会話を耳にした高峰は、「さも感じたる面色にて」、「あゝ、真の美の人を動かすことあの通りさ、君はお手のものだ、勉強し給へ」と、じつに取り澄ました見解を述べている。彼は伯爵夫人の美しさを万人に通用する「真の美」へと普遍化してみせ、夫人との出逢いを彼自身の個人的体験としては扱わない。この高峰の言葉に続き、「予は画師たるが故に動かされぬ」とあるいささか唐突な一文には、たとえば「一方、高峰は医師たるが故に、美には動かされざりし如く予の目には映れり」というような内容の一文が伏在していると推測できよう。ただし、この書かれざる一文とは裏腹に、高峰こそがこの女によって人生を激しく動かされたことは、「青山の墓地と、谷中の墓地と所こそは変りたれ、同一日に前後して相逝けり」と、高峰の自

死を語る一文が明かすところである。「以来女はふツつりだ」と言いながら、おそらく十日もすれば遊廓通いを再開したのであろう源吉とは異なり、小石川植物園で見た婦人の姿は高峰の脳裏に刻みつけられ、彼のその後の人生を呪縛しつづけた。それは高峰における眼の体験の優位、先取りして言うなら、彼の恋愛における観念の優位を如実に物語っている。

二 一瞥の恋

ところで、(見る)ことに始まる高峰の恋の様式は、明治の恋愛の一つの形と言つてもよく、たとえば、田岡嶺雲が自伝に語る、次のような初恋談を想起させる。「青年文」誌上で『外科室』を賞賛し、鏡花の文壇的地位を高めた嶺雲は、『数奇伝』(明45)で、姓名住所も身分も年齢も知らずに終わつた「彼の女」を回想し、

恋愛は一種のインスピレーションである、電の如き直感と夢の如き恍惚を有する、故に恋愛は咄嗟の瞥見に起り得る、必ずしも熟思熟考を持つて而る後起る者では無い、純粹なる恋愛は利害の打算を超越すべき筈である。／或るは瞥見に成るは皮相であるといふ、併し恋愛の透覚は神秘である、其面容の偶然の一瞥を通して其人の凡てを解する、眼を以て視るとき、即ち靈を以て靈を視るのである。識別ではない感応である、識別は知の努力を要する、感応は情の閃きである、時、ところを超越する⁽¹⁰⁾と述べている。「瞥見に成る」恋愛を神秘的感応の閃きとして説明するその言葉は、まるで寡黙な高峰の心中を代弁するもののように

あろう。嶺雲は「彼の女」への恋の始まりを、紅葉館で催された慈善演劇会で、「庭の彼方を、付添らしい二人の女を従へて静かに歩み運ぶ」姿を見た時だと語っており、『外科室』の植物園の場面とあまりに似通ったシチュエーションといえはいるのである。

嶺雲は続けて次のようにも述べる。

彼の女は予には人間で無い、女神であつた、天女であつた、結晶した純潔であつた、蒸留せられた貞淑であつた。彼の女は寧ろ予が心に理想化せられた美の成肉イデア・キーン・シヤであつた。

と。先に「恋愛の透覚は神秘である」「其面容の偶然の一瞥を通して其人の凡てを解する」といいながら、彼が見ているのは、必ずしも「其人の凡て」ではない。姓名も身分も年齢も知らず、言葉をお互に交わすことすらない恋愛は、自分が捉えた「其人の凡て」が真に「其人の凡て」であつたかを確かめることなく終わる。「彼の女」は、まさしく嶺雲の「予が心に理想化せられた美の成肉イデア・キーン・シヤ」、生身の女性としての他者性を完全に剝奪された観念的産物なのであって、もし彼が感応の閃きによつて感じとつたものがあるとしたなら、それは彼の内なる「美の観念」にはかならない。

かつて柳父章は『翻訳語成立事情』（岩波新書 昭57）で、「恋愛ラブ」という「舶来の観念」が、より純化・観念化していく過程を、翻訳語の運命として論じてみせた。そこで柳父が、西洋の「恋愛」が日本古来の恋や愛と本質的に異なる点は、対象が「たとえ身近にあつても、あえてそれを遠い彼方に置こうとする」特質であり、その根底には「魂と肉体とを区別して理解しようとする考え方」があつた

と論じたように、「恋愛」の観念の成立の背景には、西洋的心身二元論の受容が前提となつている。『数奇伝』中で、「肉体があまりに健康なる時、肉体は精神を支配して、精神の独立を蹂躪する、(中略)之に反し肉体の弱まる時、精神に対する逼迫の力を減じ、精神は自由に其活動を發揮することが出来る。」と、自己の病弱な青年時代を回想する嶺雲が、自己を精神と肉体とに二分し、かつ精神を優位におく発想を生きたことは疑いない。「偶然の一瞥」に始まり、対象を遠い彼方において、相交わることなく終わる「彼の女」へのプラトニックな恋愛は、そういう青年期の嶺雲の精神のかたちを象徴するものといつてよいのである。

ここで作品に戻り、そもそも、なぜ『外科室』の主人公は「医学士」なのかと考へてみる時、華族の手術を担当するのだから名医である設定は当然だとしても、「医学士」という限定はそれなりの意味を持つように思われる。当時「医学士」は、他の公・私立の「医学学校」とは一線を画し、八年制の近代医学教育を試みた「帝国大学医科大学」の修了者のみに与えられた称号で、そこでは医療技術のみならず、ドイツ語から解剖学まで、西洋的なものの方そのものがたき込まれたと目される⁽¹⁾。一瞥に始まる恋愛を、精神を優位におく西洋的心身二元論の産物と理解するならば、じつは高峰ほど、一見非合理的な一目惚れの体験に相応しい人物はないのである。

そして、それゆえにこそ、『外科室』「上」の設定は、高峰への実に可酷な試練だといつておかねばならない。なぜなら高峰は、九年間、彼の脳裏に育んできた「真の美」の偶像に、執刀医として直に

触れ、「肉を殺いで、身を削」る手術を施し、彼女もまた他の老若男女と解剖学的には少しも変わらない生身の人間であることを認知しなければならなくなったのであるから。しかし、この試練に平然と立ち向かう高峰の方策は明らかである。すなわち彼は、眼前の伯爵夫人を見ないのだ。すでに越野格が、手術に臨む高峰の「視線の先は記されていない。恐らく、高峰は夫人を見ていないのだ」と鋭く指摘するように、「両手を組みて良あをむけに」、「露ほどの感情をも動かし居らざるものの如く、虚心に平然たる状態露れて、椅子に座りたる」高峰の視線は虚空に向けられている。けれど高峰は何も見ていないのではない。おそらく彼は、九年前の植物園を歩み来たり、そして通り過ぎていった、あの日の夫人を見ているのだ。かつて瞥見の折、嶺雲いうごとく「眼を以て視るとき、即ち靈を以て靈を視」たと信じる高峰にとって、いま眼前に横たわる夫人の肉体は、靈の容器としての物理的身体にすぎない。こうした徹底した靈と肉の二元論を固守することによってのみ、彼の内なる「真の美」の偶像は守られるのである。

三 精神的恋愛をめぐる動向

ところで、こうした精神優位の「恋愛」が宿した主観的独善性については、近年上野千鶴子が『恋愛』の誕生と挫折（『文学』平6・4）で、北村透谷を祖上にフェミニズム批判を試みたところである。上野がそこで「近代ロマンチック・ラブ・イデオロギー」と呼んだ恋愛至上の観念が、明治二十五年前後の「女学雑誌」と「文

学界」を中心に、透谷ら文学界の浪漫主義運動のなかで成立したことは、言をまたない文学史の常識であって、これに二、三年遅れる形で死による恋愛の完遂を描いた『外科室』は、すでに再三にわたる、この文学界との関連を指摘されてきた。たとえば、古くに『明治文学史下巻』（東京堂 昭12）で「精神的恋愛の誕生」を論じた本間久雄は、同書で『外科室』の恋愛至上の思想の如きは、前述浪漫主義運動と一味相通するものである」とし、近年でも笠原伸夫は『評伝泉鏡花』（白地社 平3）で、愛の優位性を説く『外科室』『愛と婚姻』の発想は、「鏡花の独創的な考えとはいえない」「観念小説と呼ばれる出発期の思想的根拠としてそれ（透谷の『厭世詩家と女性』『女学雑誌』明25・2）はあった」と述べている。

これに対し、文学界と鏡花との間に一線を設ける見解も早くからある。たとえば三田英彬（前掲論文）は、鏡花の婚姻制度への反発は鏡花の「固有な女性観、母コムプレックス」に基づくもので「個人の解放と、封建制及び絶対権力の排除」を課題とした透谷等の浪漫主義とは質的に異なるとする。村松定孝（『泉鏡花』文泉堂書店 昭41）も、『外科室』を「不倫の恋を謳歌し世の形式道徳に挑戦している」とみ解釈することはいささか早計なのではあるまいか。むしろ二十三歳の鏡花のうら若き情熱がくるめくところ（中略）自ら恋愛謳歌主義の俘虜となったのであろう」と述べており、同様の立場に立つ者と理解できよう。

鏡花と文学界の交流が実際にどの程度だったかを問題にしておくなら、この点に関する伝記的考証は必ずしも明らかでない。師紅葉

への遠慮から文学界への接近を遠慮していたとみる見解もあるが、紅葉自身が『夏瘦』の一部を「女学雑誌」（明23・12）に掲載している例もあり、また鏡花の『愛と婚姻』（太陽 明28・5）が「女学雑誌」の婚姻論の動向と重なるものと目されること等を鑑みれば、鏡花が文学界系の雑誌を見ていなかったとは言いがたい。結局のところ、『外科室』の恋愛至上主義的な発想が、透谷等の影響下にあるものか、鏡花固有の内発的なものであるかに結論はついていないわけで、本稿はこの点を、文学界を超えたもう少し広い同時代の中で捉え直してみたいと思うのである。

まず、一つは、先の田岡嶺雲の初恋談に見いだせるごとく、帝大文科の学生が宿していたであろう恋愛観からの影響である。もちろん彼らは文学界グループほどは表立って恋愛論を展開していない。ただし、たとえば姉崎嘲風は、後に『久遠の女性』（太陽 明37・4）で、ドイツ浪漫詩にみる「久遠の女性」は、仏教にいう「法」、キリスト教にいう「ロゴス」、西洋哲学にいう「プラトンの所謂観念」の千差万別の具現であるとし、東西女性像の相違を東西思想の相違として論じており注目される。この嘲風が『外科室』と同月発表の『「ファウスト」曲中少女マガレットの運命』（国民之友 明28・6・13）では、人生悲慘の真実を「心霊と肉体の争闘」に見いだし、「純愛」ゆえの情事から「罪悪の淵」に沈んだ狂女マールレットの魂は、「天上にや生れけん、パラダイソスにや遊びけん。苦楽生死の相對境より救はれて、常楽不死の平等界に入りにし、彼女の楽園は我眼前に彷彿たるを覚ゆ」とその救済を確信的に論じて

おり、「天にいくことを得ざるべきか」と高峰と伯爵夫人の「天」での救済を問う『外科室』との影響関係が予想される。ちなみに鏡花と、嘲風や笹川臨風との交際が始まるのは、明治二十八年、新進作家として文名を馳せはじめた鏡花が、吉田賢龍を帝大寄宿舎に訪ねてからのこととされ、帝大寄宿舎のサロンの空気は「湯島詣」の「紅茶会」の場面が伝えるところである。ここでの会話の中で、鏡花が新しい恋愛観を学び、『外科室』を構想した可能性は小さくない。

二つ目に、そもそも師の紅葉が、「精神的の愛」の熱心な喧伝者だったという事実注目しておきたい。⁽¹⁶⁾『外科室』より時期は三年下るものの、紅葉は「新著月刊」（明31・1）主催の対談に、鏡花と紅葉を連れて出席し、次のような恋愛観を得々と披露した。

紅葉氏曰。過般米坡と此所（明進軒）に来て恋愛論をしたんだが彼の説は全て正太夫と同じことだ、詰り恋愛は肉交に外ならず、と云ふんだね、私は爾ぢやない、精神的の愛がなくツちや、恋愛は成立しないと云つたんだが、彼れは恋愛は閨房の外に出ないと云つている。彼には学問もないし、趣味も低いから優美な、微妙な、精神的の愛などを解し得ないんだね。詰り頭が悪い、且つその境遇の然らしむる所なんだ。私などの議論は経験に乏しい、書生論で、からもう若くツて相手にならんと云ふんだ。其れア男の数に触れた事や何かは、我々は及ばないは勿論だが、彼れは到底高尚な恋愛の味は知らんのだね。

冒頭に「米坡」とあるは、当時花柳界で艶名をはせた女優千歳米

坡(幕末の侠客千歳与五郎の娘)であり、紅葉は彼女に「経験に乏しい、書生論」だと揶揄された対談を叩き台にして、「肉交」を超えた「精神的愛」の貴さを力説し、はては「男女同権論」にまで及んでいく。ここで槍玉にあがっている「正太夫」すなわち斉藤緑雨は、その約半年前の同誌「新著月刊」(明30・5)で、旧作「かくれんぼ」(明24)の執筆の動機について語った際、「其の頃はヤツた恋は神聖だという説が癪にさわった」から書いたと述べ、「恋愛と云つたつて何だ、所謂恋愛論者はひどく女を有難がる、一体恋愛なんでものは奇麗なこと云つて穢醜夢見てゐるものに過ぎない」と性愛肯定論を繰り広げた。この緑雨のいう「所謂恋愛論者」は、おそらく、「女学雑誌」誌上で、徳富蘇峰の批判に応えつつ旺盛な恋愛神聖論を展開した巖本善治や、恋愛を英雄の事業にまで祭りあげた山路愛山¹⁹を指すのであろうし、「恋だなんて騒いでゐないで、手取早く端から口説いて見た方が、新体詩にうき身を簞すより余程いいだらうと思ふ」ともあることから、その批判は、この年『若菜集』をまとめた藤村あたりにまで及ぶものと目されよう。

巖本善治を主導者として「女学雑誌」を舞台に始まる恋愛神聖論は、透谷へと継承され、『歌念仏を読みて』(『女学雑誌』明25・6・18)等、近松再評価の動向を取り込みながら、『桂川(吊歌)を評して情死に及ぶ』(『文学界』明26・7)等の情死論へと展開し、そこで恋愛論は単なる聖愛賛美にはおわらぬ霊と肉の相克の問題へと深まりを見せていた。『外科室』直前の「文学界」(明28・3)には「聖愛とやらし、かつ、めらしく仰せらるゝ方様へ」と題して「聖愛」

「純愛」を揶揄する無署名の批判歌が載せられるなど、精神的恋愛批判の動向がみてとれ、これはやがて官能を肯定していく藤村の活動に繋がるものと目されるし、また先のゲーテの『ファウスト』を論じた姉崎嘲風の関心とも方向を同じくしている。

こうした文学界や帝大文科の動向と比較する時、先の紅葉の恋愛論はいかにも楽観的で時代後れの感が拭えない。ただしおそらく、この紅葉の認識の方が、むしろ文壇の一般的傾向を示すものだったと推測されることは留意しておきたい。『外科室』発表当初、宮崎湖処子が「是の如き深刻なる恋愛は泰西的にして東洋的ならず。恐らくは翻案乎」(八面樓「泉鏡花作『外科室』」『国民之友』明28・7・23)と誤解したように、精神的恋愛の発想は、柳父章のいうまさに「舶来の観念」であつた。さらに同時代評を繙くなら、島村抱月の「観念小説を読む眼の範囲は到底広きを得ず、其の道の知識あり好尚の素養する人士間に限らるべし」(『小説を読む眼』「読売新聞」明28・8・26)という見解をはじめとして、雑誌「文庫」への一般投稿者から高山樗牛まで、鏡花作品の理解には「審美観念とやら、批評眼とやら」²⁰を必要とし、「一般の嗜好には適する能はざ」²¹るものだという意見が散見される。このことは精神的恋愛のテーマが、新奇かつ難解な哲学的概念として受けとられたという時代背景を示すものであり、逆にいえば、『外科室』はこれをいち早く小説の題材とした点をこそ、嶺雲をはじめとする批評家に喜ばれたと言えるのである。さて、こうした時代状況の中で、当の鏡花はいったい「精神的恋愛」をどのように理解していたのだろうか。先の紅葉に付き添つた

「新著月刊」の対談では、「媒酌があつて夫婦になつた者も、^{ほんとう}真実の恋愛を解することが出来ませうか」から、「親に対する恋愛十肉交が、恋愛となるのですかね」「西洋^{あちら}ちや懐癪病^{ハクツツ}といふものがあるさうですが、真実に恋煩ひになど、なられるでござんすかね」まで、嘲風や嶺雲が聞けばさぞ幻滅したにちがいない、実に他愛ない質問を差し出している。これを師紅葉の引立て役に徹した鏡花の演技と解することもできるが、また一方で、そもそも鏡花に、西洋的な精神的恋愛の概念など、切実に実感されたはずはないと言つてみたい氣もしてくるのである。

鏡花は、明治二十六年頃の草稿『他人之妻』の一部に手を入れた『怪語』(明30・8)で、今度は「文科大学の学生上杉新次」を主人公に、恋か義務か、生か死かという二者択一の命題に苦悶する青年像を描こうとするが、主人公の思想的煩悶が物語の展開に結びつかず、まさに観念的な未完の失敗作に終わっている。この統編と目される『去りながら』(台湾日日新報、明34・1・1)でも、再度、「靈魂の恋」と「肉体の反逆」に苦しむ主人公新次の葛藤を、

はた我塵徳の人とならざるを得べきか、否々恐らくは之を得ず。然も靈魂の恋を汚さしむ。蓋し靈魂とは庄制なる君主の名にして、肉体とは嗜好を押へて屈從せる奴隸の名、偶ま外物の襲ふを待ちて、勝ちて靈魂を支配せんとす。もしそれ天下幾多の美女、肉屏風して我を暖めむか、我は依然として鉄の如く氷の如けむ。然れども意中之人に対しては、動もすれば肉体の反逆に逢はむとす。

と細叙すべく試みてはいるが、やはりドラマ的な展開には至らず、「然りながら」という逆接の接続詞で作品を閉じている。さらに、『山中哲学』(明30・12)では、題名に反して、主人公のトンネル技師の哲学的煩悶はまったく描かれぬ。技師が人妻らしき女と、雪崩が予想されるトンネルへ赴くさまを、情死の道行きよろしく耽美的に描いて作品は未完の印象に終わっている。以上のような、恋愛を哲学的に煩悶する主人公への再三の試みは、鏡花の精神的恋愛への並々ならぬ関心と意欲を語るものでありながら、同時にその挫折は、このテーマが鏡花にとつて、内発的なものではなく、外から与えられた観念にすぎないことを示唆しているように思われる。

しかし、ここで翻つて、ではなぜ『外科室』は成功したのか。短いながらも、なぜ緊迫感のあるドラマ性をもち得ているのかと問うて見る時、それは『外科室』のはらむドラマが、恋愛を観念的に苦悶する男の内的葛藤のドラマではなく、そういう男の観念を、女すなわち伯爵夫人が破壊していく男と女の相克のドラマだからだと言えるのではなからうか。

「医学士と貴船伯爵夫人とが、命を精神的純愛の前に捧げたる、その純愛を影写法によりて描き出せるものといふべし」(ほしつくよ『文芸倶楽部』第六編「早稲田文学」明28・7・25)と読まれた発表當時から、『外科室』の手術の場面は、伯爵夫人と高峰が命をかけて世俗の制度や道德と対峙する作品と解されてきたように思われる。しかしたとえば、十川信介(『不健全』な文学Ⅱ「文学」昭58・2)の『外科室』の愛は本来お互いの心の中で完成している愛であつ

て、現世での結合を望んでいるわけでもなく、したがって婚姻制度によって妨げられているわけでもない。むしろ愛情を現世に生かそうとせず、実社会との葛藤をほとんどもたないところに、この境界の特質があると言つてよい」との見解を生むごとく、彼等二人と手術に立ち会ふ夫や親族との間にドラマティックな葛藤は、ほとんど繰り広げられていない。あえて劇的緊張が走るとすれば、侯爵や伯爵が「姫を連れてこい」と母親の情に訴える場面くらいなものであろう。しかし、『外科室』の葛藤を、高峰と伯爵夫人と「実社会との葛藤」と読むこと自体がそもそも誤っているのではないか。『外科室』のドラマは、恋愛の当事者たる男女二人の間にこそ成立しているのであって、第三者（夫や親族によって代表される社会）はまさに脇役にすぎない。すなわち、伯爵夫人が命をかけて対峙しようとしている相手は、彼女が恋焦がれる高峰その人なのであり、その撃つべき真の標的は、高峰の「心の中で完成している愛」、その観念的な恋愛のかたちにはかならないのである。

四 「心」の身体性

さて、伯爵夫人の高峰への逆襲は、「私はね、心に一つ秘密がある。麻酔剤は謔言を謂ふと申すから、それが恐くつてなりません」という、きわめて象徴的な言葉によって始まっていく。ここで彼女は「私には、一つ秘密がある」と言つてもよいはずだが、「心に一つ」と「秘密」の所在を限定する。外見の崇高な美によって偶像化された女は、外側からは見えない「心」の存在をアピールすること

から始めるのである。

この「心」とは、いったいどんな場所なのか。湯浅泰雄は『身体論——東洋的身心論と現代』（講談社学術文庫 平2）において、西洋の心身二元論に対し、大脳皮質系の表層的構造と自律神経系の基底的構造という新たな二分法を試みた。前者は、大脳皮質に中枢をもつ四肢などの身体部分と、これと機能的に連動する「外界感覚・運動感覚・思考作用」からなり、これは日常的経験の場において「世界内存在」としての存在様式を形成する「明るい判別的意識」（＝「ロゴスの意識」）であるとす。これに対し、後者の内蔵諸器官は「パトスの（もしくはエロスの）身体」と称され、これと連動した「情動・内臓感覚」は、夢・催眠・神経症・精神病といった非日常的状况においてあらわれる、無意識的な「暗い原始的意識」だと述べている。これを私なりに整理すると左表のようになる。

		心的作用	物理的身体
(大脳皮質系) 表層的構造	③外界知覚・運動感覚・思考作用 「明るい判別的意識」 「ロゴスの意識」		⑤大脳皮質系に中枢をもつ四肢などの身体部分
(自律神経系) 基底的構造	④情動・内臓感覚 「無意識的意識」 「暗い原始的意識」		⑥自律神経系に支配される内臓諸器官 「パトス(エロス)的身体」

すなわち西洋の心身論が心的作用と物理的身体に上下二分する横割りの発想であるなら、湯浅の身体論は基底的構造を重視した縦割りの発想であって、ここでは情動や内臓感覚などの心的作用が、身体と強く連動したものと位置づけられている。本稿は、この湯浅の身体論を踏まえ、「身体」という概念を、西洋の二元論にいう心の対概念としての身体^{ボディ}(^{ガイ}⑥⑦)のみならず、情動や内臓感覚などの心的作用(⑧)も含む概念としてとらえ、それを、ロゴスの意識や思考との対比において、身体的なるものと称したいのである。

さて、ここに伯爵夫人の「心」を当てはめてみる時、麻醉による催眠時に、その「秘密」が洩かれるに違いないと確信されている彼女の「心」とは、湯浅のいう「暗い原始的な意識」の領域にほかならず、それは当然彼女の身体と深く結びついたものと想像される。ちなみに、渡辺秀夫『詩歌の森——日本語のイメージ』(大修館書店平7)は、「心」の身体性」と題する一節で、「こころ」は腹・胸に宿るものというより、腹・胸などの内臓器が「こころ」そのものであるという認識があったと述べており興味深い。この日本語「心」の身体性は、伯爵夫人がもちいる「心」の語感にもそのまま当てはまるのではなからうか。高峰への思いを自ら吐露した伯爵夫人が、高峰のメスに我が手を添えて「乳の下深く搔切る」ごとく、おそらく伯爵夫人は、高峰への秘めた思いを心臓のどくどくと脈打つような身体感覚として感じとっている。「麻醉剤は謔言を謂ふと申すから、それが恐くつてなりません」というように、それは彼女自身にも未体験の予感にすぎない。しかし、「否、このくらあ思つ

て居れば、屹と謂ひますに違ひありません」と確信的に語られるごとく、その思いはいまにも溢れだしそうな実在感を伴っている。したがって、麻醉を拒否する彼女の説明が、いきおい説得力をもたない不条理な言葉におわるのは当然といわねばならない。伯爵夫人の言葉は、彼女自身にとつてすら捉えがたい、しかし抑えがたい確かな情動を、その声、その息づかいに、言葉にならないすべてを込めてなお伝えようとする、いわば身体的な言葉なのである。

一方、これに比べれば、冷静に手術に臨む高峰の伯爵夫人の恋愛は、湯浅のいう大脳皮質系の「ロゴスの意識」によって、完璧に統御されたものといつて過言でない。むしろ、彼が伯爵夫人に魅かれた一瞬の感応は、エロスのな「情動」に始まったはずである。二人の出会いが設定された初夏の植物園には、いまを盛りと咲き乱れる「躑躅」や「藤」の芳香が充滿しており、エロスの体験の場としていかにも似つかわしい。しかし、伯爵夫人と高峰の邂逅はあくまでも視覚的に描かれた。しかも、その眼の体験は、高峰の中で「真の美」として観念化され、観念化されることによって、彼の大脳の強固な管理下におかれることになる。伯爵夫人の不条理かつ身体的な言葉は、こうした高峰のスタティックな観念世界とこそ拮抗するものとして読みうるのである。

五 言葉による身体の転換

それにしても、伯爵夫人はなぜこれほどまで頑なに、麻醉を拒否するのであろうか。夫人は夫や世間に対し命を賭けて高峰との恋の

秘密を守ろうとしているのだというような説明は、この際まったく成立しない。なぜなら彼女は、詰まるところ、自ら高峰への思いを吐露してしまうのであり、もし彼女が死んでも秘密を守りたいのであれば、彼女はそもそも手術自体を拒否すべきなのである。

この点の解釈において、自作の映画を語った坂東玉三郎（対談鏡花劇をめぐって）「国文学」平3・8の「麻醉なしで切るということが男と女の関係を表している」「痛くて痛くてたまらない手術を麻醉なしで打つということ、これだけでもうその行為はセクシャルです」という指摘は注目に値する。すなわち、麻醉なしであることによって、高峰の夫人への医療行為は、性的な意味合いをもつということであり、それは「刀を取る先生は、高峰様だろうね！」と念を押す夫人の言葉によって、特定の相手のみに許された、愛の証としての性的行為へと転換される。つまり、麻醉を拒否する伯爵夫人の真の目的は、秘密の固守ではなく、高峰の前に晒された自らの身体を性愛の対象へと転換し、冷静に医療に臨む高峰を、性的な男女の関係へと引き込むことにほかならないのである。

九年間、女神とも天女とも崇めてきた女から、男と女として結ばれることを請われた高峰は、「時に高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり」と語られる如く、自らも一個の男神と化して、夫人に向かい合う。高峰の「痛みますか」との問いに、彼の右腕に両手でしっかりと取りすがり、「否、貴下だから、貴下だから」と繰り返す夫人の言葉は、高峰との対一の関係を確かめようとする声であろう。かつて植物園での瞥見の折、複

数の眼のなかで偶像化された女は、麻醉なしを固守することで男との唯一無二の対関係を結ぼうとしているのである。

さて、かくて高峰と伯爵夫人が至りつくのが、愛と死の交錯するエロティシズムの境地であることは、すでに幾多の文献が言葉をかえて論じるところである。しかし、伯爵夫人の最期の言葉が、なぜ「でも、貴下は、貴下は、私を知りませうまい！」という激しい抗議の言葉なのか、という点はまだ説明されていない。この点もまた、『外科室』を伯爵夫人と高峰の対立のドラマととらえ、その頂点において、伯爵夫人は自らの他者性を高峰に突きつける象徴的な言葉を発するのだと解することで説明がつくのではなからうか。

湯浅博雄が『他者と共同体』（未來社 平4）で、「（エロス）的な関係の基底をなすのは、つねに他者と面と向かい合う対一面的関係なのだということを忘れるわけにはいかない」、「私たちは、〈愛〉の関係においてほど他者との切実な対一面的関係に入ることはないのだ」と述べるごとく、我々は、エロスの愛の関係においてほど、他者の他者性と切実に向かい合うことはない。相手との融合を欲すれば欲するほど、相手は捕らえがたい他者性を帯びて逃れ去っていくし、逆に、エロスの愛の緊張を保ち続けることは、互いの他者に挑み続けていくことにほかならない。植物園での邂逅以来、高峰の観念の内なる他者にすぎなかった伯爵夫人は、「凄冷極りなき最期の眼に、国手ちつと瞻」る最期の言葉によってこそ、「久遠の女性」という偶像の座をかなぐり捨て、高峰の強固な観念性を打ち破る真の他者として高峰の前に立ち塞がる。相手が九年前の自分を

覚えていないことを確信的に弾じるその言葉は、「忘れません」という返答によって成就をみる愛の告白の言葉であると同時に、相手に伝えることのない愛を、平然と保持し続ける高峰の自己完結的な愛の独善性を裁くものとなっている。

こうした激しい緊張をはらんだ「対面の関係」において、伯爵夫人と高峰は、二人の動向を見守る第三者の視線を完全に排除し、「其時の二人が状、恰も二人の身辺には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきが如くなりし」と語られるエロスの世界へと至りつく。それは、また、鏡花が『愛と婚姻』(明28・5)の一節で、

但愛のためには必ずしも我といふ一種勝手次第なる観念の起るものにあらず、完全なる愛は「無我」のまたの名なり。(中略) 元来不幸といひ、窮苦といひ、艱難辛苦といふもの、皆我を我としたる我を以て、他に——社会に——対するより起る処の怨言のみ。愛によりて我なかりせば、いづくんぞそれ苦楽あらんや。

と語ったごとく、社会への怨言のみならず、主観的自我の「観念」すら融解する「完全なる愛」の境地だった。

結 び

以上のごとく、作品を読み解いてきた時、はたして『外科室』は「観念的」な作品といえるだろうか。生前の鏡花に接見した村松定孝の貴重な報告(前掲書)によると、小石川植物園で美女を目撃し、その夜一息に「ほとんど徹夜」で書き上げたのが『外科室』

だという。「ええ、ただ心の赴くままを書いたのだと思います」「その日の午後、小石川の植物園で見た美女の相が目にあつたので、きつと筆が早く運んだんでしょう」と鏡花は語っている。一瞥に始まる恋をモチーフとし、主人公を「医学士」とした時、鏡花の中に、大学生などの知的青年層に流行しつつあつた精神的恋愛至上の観念を主題にしようとする意図がなかつたとはいえない。「あゝ、真の美の人を動かすことあの通りさ」という高峰の観念的な科白や、作品末尾の「語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか」という露骨なまでの問題提起は、むしろそうした主題意識を語るものといつてよい。けれど、鏡花が、二人の再会の場面を外科室に設定し、伯爵夫人に「私はね、心にひとつ秘密がある」という科白を与えた時、作品は、作者が予め意図したテーマの枠組みを超えて、鏡花自身もまだ臆げにしか認識しえていない「心の赴くまま」のドラマを紡ぎはじめたのではなかつたか。

そのドラマとは、単に一組の男女がプラトニックな恋に殉じて死に至るドラマではない。高峰が九年間抱き続けてきた観念的な恋愛のかたち、伯爵夫人がその言葉でひびを入れ、他者として立ち塞がり、一对の男女として「完全な愛」の境地に至るまでの男の観念と女の情念の相克のドラマである。それは、伯爵夫人の物理的な身体が手術の対象として晒される場所において、逆に夫人の「心」が、その身体的な言葉によって表現されていくプロセスだった。

鏡花は後年『むこうまかせ』(明41)で、自らの小説作法を、たとえば女を口説く男を書く場合でも、先に物語の運びをきめてかか

るのではなく、屋外には雨が降っているというような場面状況を初めに設定をし、いよいよ書き始めてからは「一切向こうまかせ」にするのだと述べている。知る人も多い有名な談話であるが、この方法は、人々が固唾を呑んで見守る緊迫した外科手術の場において、執刀医と患者の愛のドラマが進行する『外科室』に、すでに顕現しているのではなからうか。

むろん『外科室』は「上」のみで終わるわけではない。語り手が過去の時間に遡って、二人の出遇いとプラトニクな九年間の愛を物語り、その罪悪の是非を問う「下」は、「上」を統括的に意味づけるものといつてよい。けれど、「上」「下」二部の構成とはいいなから、「下」の分量は作品の三割にもみならず、商人風の若者の会話によって冗長に引き伸ばされている感がなきにしもあらずであろう。全二十六節からなり、見事な「序・破・急」の展開をもつ『高野聖』（明33）の本領が、山中の孤家の美女の怪しの姿が描かれる「破」の場面にあつて、「急」にあたる親老の十三年前の物語（二十六節）が、いわば物語構成上の枠組みにすぎないように、『外科室』の中心はあくまでも「上」の後半部におかれている。山田有策（「解説」『高野聖』集英社文庫 平4）のいうごとく、『外科室』のドラマは圧倒的に（上）で展開されつくしているのである。「最後の一語を据えた運びには序破急の妙味があり」という村松定孝（「解説」『高野聖』角川文庫 昭46）の指摘もあるが、「上」の最後でドラマの頂点を迎えながら、「下」を冗長に費やす『外科室』は、『高野聖』ほど「序破急の妙味」が作品全体の構成として仕上がるには

いたっていない。それはもちろん初期作品『外科室』の拙さだと評さなければなるまいが、しかし、それにもまして『外科室』の「上」が、小説時空のなかでドラマを立ちあげる言葉のダイナミズムを持ちえていることは認めておかねばならない。

観念化された思考が時間をこえて永続可能なものならば、身体的な感覚や情動は、それがどんなに激しくとも時間の壁をこえられぬ瞬間の命の揺らぎにすぎない。激しく燃焼したはずの愛が、物語られたとたん、ありふれた通俗と墮すのはそれゆえであろう。『外科室』は、外科室というきわめて演劇的な空間を設定することにより、身体的な愛のドラマの瞬間の定着を可能とした。鏡花の描く愛がたとえ観念的であつたとしても、それを小説時空のなかで言葉自体のダイナミズムによって表現しえた時、『外科室』はけつして理屈の先行する観念的な作品には終わっていない。それは、妖怪たちの跳梁する荒唐無稽な設定においてすら、妖女たちの赤裸々な情念のドラマを、生々しい息づかいとともに謳いあげていく鏡花文学のいち早い顕現だと評してよいはずである。

注(1) 「観念小説」の名称を始めて用いた島村抱月は「観念といへるは数年前の観念論者の成語を振り用ひたるにて、概念とも理想とも趣意ともいふべし」（抱月子「小説を読む眼」『読売新聞』明28・8・26）と述べ、坪内逍遙は「観念派小説とは何ぞ曰はく或概念或理想を捉らへ来たりてこれを具現するもの」（「観念派の小説」『早稲田文学』明28・9・25）と定義した。逍遙（同前）および高山樗牛「明治廿八年の文学界」（『太陽』明29・1・25）は、この「観念」が「狹隘なる主

観」に留まるといふ不満を漏らしつつも、その「想」ある点を評価している。これに対し、「観念小説」という命名自体に異を唱えたのが鴨外(注4)であった。

- (2) 「明治名作解題・夜行巡查と外科室」(「文章世界」明40・4)。
- (3) 弦巻克二「観念小説の時代——『外科室』を中心に——」(「女子大国文」平5・12)。
- (4) 堀休庵「鷗園播・無想小説、観念小説、没想小説」(「めざまし草」明29・2)。
- (5) 小沢信男「小石川植物園界限」(「公評」平4・4)、塚谷裕一「文学に登場した小石川植物園」(「UP」平4・5)。
- (6) 大原理恵子『黒髪文化史』(築地書館 昭63)によれば、文金高島田は、品格ある清楚な形が上流階級に好まれ、公家の娘や女中、豪商の腰元などに結われた。また、銀杏返しは結い方が簡単なことから幕末から明治にかけて下町では圧倒的な人気があった。
- (7) 湯本豪一『図説明治事物起源事典』「華族」(柏書房 平4)は「華の宴」を掲載し、華族の描かれ方を解説している。
- (8) 高峰の通う「医科大学」は、当時唯一の医学士授与機関であった「帝国大学医科大学」(明治十九年よりの名称)を指すと目される。
- (9) 当時「医学士」権威は絶大で、地方では卒業と同時に病院長の座が約束されていた。明治二十年の学位令により、外国の大学や昌平坂学問所などで医学を修め、学問上の功績を認められた者に「医博士」の称号が授けられるようになるが、「医学士」の称号の権威には及ばなかつたという。川上武『現代日本医療史』(勁草書房 昭40)、酒井シズ『日本医療史』(東京書籍 昭57) 参照。
- (10) 引用は、『田岡嶺雲全集第五巻』(法政大学出版局 昭44)「初恋」。
- (11) 注9の参考文献に同じ。
- (12) 越野格「視線の開示するもの(1)——泉鏡花私論——」(「青磁」昭61・2)。
- (13) 村松定孝「生涯と芸術」『泉鏡花』(文泉堂書店 昭41)は、鏡花が

川上眉山に私淑していない理由を、硯友社よりも文学界同人と親しんだ眉山の姿を、師おもしろい鏡花が不可解なものと感じたためと推察している。

- (14) 市川祥子「泉鏡花『愛と婚姻』論——『外科室』の解釈に向けて」(「群馬県立女子大学紀要」平8・2)の検証がある。
- (15) 村松定孝『泉鏡花』(同前)等参照。
- (16) 弦巻克二(前掲注3)は、紅葉が『外科室』の直後(明28・8・13)から、トルストイの「クロイツェル・ソナタ」を小西増太郎との共訳で「国民之友」に連載することに注目し、鏡花が「性的欲望を否定した絶対の純潔」の恋愛のモチーフを紅葉から得た可能性を指摘している。
- (17) 引用は、『紅葉全集第十巻』(岩波書店 平6)「文家雑談」。
- (18) 撫象子「悲恋愛を非とす」(「女学雑誌」明24・8・1)。
- (19) 在遠江愛山生「恋愛の哲学」(「女学雑誌」明23・11・22)。
- (20) 無文字庵主人「『外科室』と『なにがし』を讀みて」(「文庫」明28・10)。著者は投稿読者。
- (21) 高山樗牛「明治廿八年の文学界」(「太陽」明29・1・25)。
- (22) 岡崎一「泉鏡花と地方新聞——『作品年表』再補訂と新資料紹介」(「佐賀大國文」平2・11)が紹介。なお、吉田昌志『「黒猫」——「恋愛」のかたち』(泉鏡花研究会第19回例会 平7・8・24)は、この資料に着目し、「恋愛」における蠶肉二元論の問題への鏡花の問題意識に言及した。

付記

鏡花作品の引用は、岩波版『鏡花全集』に拠る。字体は新字に改め、ルビは原則として省略した。

旅をする文学

——明治三〇年代日本文学と東アジアネットワーク——

佐野正人

1

明治二七、八年（一八九四、五）の日清戦争を大きな契機として東アジア世界は大規模な移動の時代を迎える。一つには日本がこの国際戦争によって台湾を植民地として得たことや朝鮮の「独立」を認めさせたことによる勢力範囲の拡大がもたらした移民の急速な増加が挙げられる。例えば朝鮮について見ると、日清戦争前（九三年）の日本人人口八八七一名から戦後の九五年には一万二三〇三名に達しており、その後一九〇〇年末には一万五八二九名、日露戦争後の一九〇五年には四万二四六〇名にまで増加しているのが見られる。また新たに領有した台湾にも数万名単位の移民が渡り、手元にある資料では台北での日本人人口は一八九八年には九六二六名、一九一〇年には二万五九二二名に及んだとなっている。

このことには日清戦争後の明治三〇年代、東アジアにおける鉄道・汽船といった交通、運輸のネットワークが急速に整備されてい

くことが大きく関係しているものと思われる。³⁾ これもまた朝鮮の例を見ると一八九九年の仁川・鷺梁津間の朝鮮最初の鉄道開通を始めとして、一九〇四年にはソウル（当時漢城）・釜山間を結ぶ京釜線の開通を見ている。因みに一九一一年には鴨緑江の橋梁が完成し、朝鮮満州直通急行列車が走るようになる。『満韓どころどころ』の夏目漱石も『朝鮮』の高浜虚子もこの釜山・京城間の京釜線に乗車しているが（ただし漱石は満州からの帰路）、両者ともその鉄道によって日本人とその文明が北進してゆくことに感銘を受けている。『朝鮮』の場合を挙げれば次のようである。⁴⁾

余は内地でまだ見ることの出来ぬ広軌式の大きな汽車が——これも植民地的とでもいふのであらうか、全く実用一方な、殆ど裝飾の無い、例へば前立も鏝も無い、唯長大な鉄の甲でも見るやうな感じのする汽車が——大きな動揺を為しつゝ、北へくと進みつゝ、ある事を面白く思つた。さうして迅速に大胆に此鉄路を拓い

た戦争前後の日本人の力を思つた。(四)

最新の広軌式の鉄道に乗って「北へ北へ」と進みつつあるのはいうまでもなく汽車のみではなくそれに乗った日本人移民者たちの群れである。虚子が感銘を受けているのは文明の北上についてなのだと言へる。同じ『朝鮮』の三では主人公の妻の叔父が日本人移民の群れに押されて北上せざるをえない事情が描かれてもいる。

……けれども内地での失敗者が植民地に渡つて来て成功するのはまだ内地人の多く渡つて来ない間の事である。一旦内地の有力者が踵を接して来やうになると彼等は往々にして又劣敗者となるのである。言は彼等は植民地開拓の先駆に使うゝに過ぎぬのである。察する所叔父の一家も此例に洩れぬらしい。彼は遂に生活程度の方外に向上する釜山に住ひ兼ねて、其店は他のものに譲つて近く此大邱に移住したのであつた。けれども内地人大移住の流れは今此の大邱にも推し寄せて来てゐる。釜山を見棄て、大邱に移つた一家はやがて又遠からず北の方へ移つて行くべき運命を持てゐるかの如く考へられた。(三)

ここには「内地人大移住の流れ」という大きな力が捉えられ、それによつて北上する、いや北上せざるをえない移民たちの姿がよく描かれていたように思われる。『朝鮮』という小説はそのような「内地人大移住」の表象化という側面を持つていると考えられる。

この叔父夫婦の他にも壮士役者の鶴見慶之助、大陸浪人の石橋剛三、その妻のお筆などといった放浪者たちの群れが描かれ、旅人である「余」の夫婦と合わせ大陸に向かう日本人たちの姿がかなり意欲的に描きこまれていた。

このような鉄道・汽船といった交通ネットワークの整備は言うまでもなく明治三〇年代、新興の帝国主義国として大陸進出を開始した日本の国家利益に添う形で行われていったのだが、しかしそのネットワークは別の作用をももたらすことになった。アジアから日本へという逆の形で人流をもそのネットワークは産み出すことになるのである。むしろ東アジアの文学史という視点からすればこの明治三〇年代におけるアジアから日本への人の流れが決定的な重要性をもたらすことになる。そのことを見てゆこう。

2

日清戦争の敗戦は清国にとつてそれまで進めてきた近代化路線（洋務運動）の破産を意味するものだった。「中体西用」という技術面、軍事面に限つての近代化を進めてきた清朝に対して若き知識人たちは日本に習つた政治改革の必要性を説き始めるようになる。早くも下関での講和条約後半月も経たない一八九五年五月二日には北京に科挙の試験のため結集していた全国の華人たち千三百名が講和拒否、変法を要求した「公車上書」を光緒帝に上奏している。いわゆる変法維新運動のスタートである。

このことは中国の日本観に革命的とも言える変化を引き起こした。

日本がわずかの間に近代化に成功し、清国を打ち破るまでになったことを彼らは明治維新による政治改革のためであると見なし、中国にも明治維新に習った上からの政治改革を断行するべきだとの主張をするとともに、それを『時務報』などの新聞メディアを通じて全国知識人読者層に訴え始める。言うまでもなくその中には日本の明治維新や維新の志士たちに対する記事が多く含まれていた（康有為『日本変政記』、梁啓超『記東侠』、唐才常『日本安政以来大事略述』など）。一方以前の技術中心、軍事中心の近代化路線に対する反省から近代化を担う人材育成の必要性と留学生の派遣を彼らは主張するが、事実一八九六年から日本への中国人留学生が派遣され始めることになる。

始めは当時東京高等師範の校長だった嘉納治五郎の下に十三名の留学生が派遣され私塾の形で教育を行ったが、後に中国人留学生の増加を見るに当たって一九〇二年には改組され弘文学院となる。留学生数は一八九九年には三〇〇名、一九〇二年には五〇〇名を数え、翌一九〇三年には一〇〇〇名を越し一九〇五年（この年に科挙制度が廃止される）には八〇〇〇名に達し、日露戦争の終わった一九〇六年には一万人を越えて二万人にも達する勢いだったと言う⁵⁾。この驚くべき急速な留学生の増加、そして戊戌政変（一八九八）後の亡命者や革命派たちの日本を拠点とした活動は東アジアの文化的な構図を革命的に変化させるに十分なものだったと言える。やや誇張した言い方をすれば明治三〇年代の日本の東京・横浜間に突如として中国の政治・文化状況のもっとも先鋭で中核をなす部分が大移動し

て来たのである。あるいは中国の若き知識人の改革的・革命的コミュニティーが突如として出現したとも言えようか。二十世紀前半の中国の文化史において、あるいは政治史においてこの東京・横浜間の中国人コミュニティーの存在は特異な輝きを放っている。

この若き中国人の大移動の中には日本人にもよく知られた孫文や魯迅、章炳麟、周作人、郭沫若、郁達夫などといった面々がいて、東アジアの文化接触ということでは興味が尽きないが、ここで取り上げたいのは変法維新派の中心として活躍し一八九八年の西太后のクーデター（戊戌政変）によって日本に亡命した梁啓超のことである。

梁啓超は二十三才の若さで上海共同租界で『時務報』（旬刊）の主筆となり毎号毎号旺盛な変法派の論陣を張ったが、その平易で形式に囚われず熱情の溢れた文体は若き知識人たちに絶大な影響力を持ち、後の魯迅や毛沢東にも影響を与えたと言われている⁶⁾。光緒帝の信任を得た彼は一八九八年戊戌の新政に参加するが三方月後の保守派のクーデターによりあえなく新政は崩壊し、一転して追われる立場になるものの辛うじて日本公使館に助けを求め、当時訪中し北京滞在中だった伊藤博文の助けを受けて日本に亡命することになる。天津経由で日本軍艦「大島号」に乗って日本に向かう途中、彼は艦長から一冊の本を贈られるが、それが政治小説『佳人之奇遇』一巻であった。この出会いは彼に「文学」というメディアへの目を開かせ、中国の近代文学史を拓く大きなきっかけとなるのである。

もともと彼は新聞・雑誌メディアをフルに活用して変法派の宣伝を行っていたジャーナリスト的な才能の持ち主であったが、この『佳人の奇遇』との出会いによって彼は新聞・雑誌メディアの限界を超える「小説」メディアの可能性に大きな期待を寄せるようになる。日本到着後間もない一八九八年十二月には既に横浜に拠点を据えて雑誌『清議報』（旬刊）を刊行し始めるが、そこに彼は「戊戌政変記」を載せると共に『佳人の奇遇』の翻訳を掲載するのである。その翻訳を掲載するに当たって彼は「訳印政治小説序」という文章を載せていてこれが彼の小説メディアについての考えをよく表している。少し引いてみよう。

…昔ヨーロッパの各国で変革の初めにはその最高の文人碩学、仁人志士たちがしばしば彼の経歴してきたことや胸中の所懐、政治の議論などを小説に寄せて著した。それにより学問をする者は勉学の暇にこれを手にし口にするので、下は兵丁や商人や農民や工匠や車夫や馬卒や婦女や子供まで做つてこれを手にし口にしないう者はいない。しばしば一書が現れるごとに全国の議論はそのために一変した。かのアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オーストリア、イタリア、日本各国の政界の毎日の進歩は政治小説の功績が最高である。イギリスの名士某氏が言うには「小説は国民の魂である」。その通りではないか。

厳安生氏は『日本留学精神史』の中で二〇世紀初頭における「国

民」の語が当時の日本留学から得た「文明新語」であり、留学生たちの注意を引いた言葉であることを述べている。すなわち「国民」とは「義務教育を受け国の盛衰に関係を有する者の謂」、つまり「国家」と共に存在する「民衆」の意であったと言う。梁啓超の上の文章にそのような補助線を引いてやれば彼が「小説」メディアにかけた期待のありかはよく了解されよう。すなわち「国民」教育、「国民」形成が事実上すぐには不可能な状況下で「国民」形成を図るのには「小説」メディアの浸透力——農民や商人や婦女や子供にまで感化を及ぼしうると考えられた——やその教育力に「国民」形成の代行力を求めたというのが真実だろう。無論そこには中国本土を離れ日本亡命中であるという彼の事情も関係してはいたろうが、これにより「小説」メディアへの回路は開かれ、二〇世紀初頭の中国での爆発的な「小説」の流行が開始されることになったのである。

一九〇二年十一月には梁啓超は横浜で『新小説』という雑誌を創刊し自ら「小説界革命」の実践に乗り出す。中国最初の文学雑誌である。彼は自ら筆を執り政治小説「新中国未来記」を発表すると共に評論「小説と群治との関係」を載せ、小説による「国民」形成の路線をさらに鮮明にする。

一國の民衆を新しくしようと思えばまず一國の小説を新しくしなければならぬ。それ故道徳を新しくするには小説を新しくしなければならぬ。宗教を新しくするには小説を新しくしなければならぬ。政治を新しくするには小説を新しくしなければならぬ。

い。風俗を新しくするには小説を新しくしなければならぬ。学芸を新しくするには小説を新しくしなければならぬ。また人心を新しくし、人格を新しくするには小説を新しくしなければならぬ。どうしてか？ 小説には不可思議な力があつて人道を支配するからである。(中略)

それ故今日政治(原文「群治」)を改良しようと思えば、まず小説界の革命から始めなければならぬ。国民を新しくしようと思えば、まず小説を新しくすることから始めなければならぬ。⁽⁹⁾

これは原文の初めと最後の部分だけを抄訳したものが、それにしてもこの繰り返しが多い、アジテーションめいた文章は奇妙な印象を与える。小説の革新が何をおいても最優先の、万能の魔法の杖でもあるかのような言い方。この言い方にはおそらく現代の大部分の人々は違和感や苦笑を禁じえないかもしれない。しかし『想像の共同体』のB・アンダーソンを持ち出すまでもなく、「国民」形成の初期に新聞や小説という想像的なメディアがもつともラディカルでもつともリアリティを持った課題であつた時期が存在したのである。国家という半ば世俗的で半ば想像的な共同体の下で無数の同胞が互いに国民として関係し合つていふという表象——特に中国のように現実の国家形成よりも「国民」形成の方が先立って担われなければならぬ状況下でそのような表象の生産が現実的に差し迫つた課題だつたことは理解しうる。二〇世紀初頭の中国で「想像の共同体」の形成は何よりも重要な課題だつたのである。

そのような梁啓超の「小説界革命」の声に導かれて、翌一九〇三年には『續像小説』(半月刊、上海)、一九〇六年には『月月小説』(月刊、上海)、一九〇七年には『小説林』(月刊、上海)といった文学雑誌が続々と刊行されることになる。『小説林』の「発刊詞」には「わが国の今日の文明は小説の文明と言つてもよい」と言われている程の盛況であつた。その中で清末四大小説と呼ばれる李伯元の『官場現形記』、吳趸人の『二十年目睹之怪現狀』、劉鉄雲の『老殘遊記』、曾孟樸の『孽海花』を初めとした小説が量産されて行くことになる。いわゆる魯迅の命名した「誹責小説」の流れであり、概ね梁啓超の路線を継承し、社会悪の暴露や為政者への誹責を主としたものだつた。⁽¹⁰⁾

このような二〇世紀初頭の中国での「小説界革命」が日本の東京、横浜間の中国人コミュニティと上海とを結ぶ線上で展開され、むしろ震源として日本があつたことに興味を惹かれざるをえない。例えば少し後のことになるが、ベトナムのファン・ポイ・チャウ(潘佩珠)は反フランス運動の支援を求めため一九〇五年に日本に渡るが、彼は横浜に着くとすぐに梁啓超に面会しに行つてゐる。そしてファンは梁啓超の助言を受けて日本に留学生を送る「東遊運動」を始めることになる。更に梁啓超の紹介によつて犬養毅・大隈重信・根津一らと接触を持ったと言ふ⁽¹¹⁾。また朝鮮でも梁啓超の名は高く一九〇六年から一〇年までの間に翻訳された彼の著書は十五種を数え、申采浩(シン・チェホ)らの開化期小説にはその影響が顕著に認められると言われる。⁽¹²⁾ いわば汎アジア的な震源として明治三〇年代の

東京・横浜、そしてそこでの中国人コミュニティがあり、ベトナムを含めた東アジアがそれに共震していたことは確かなのである。

そこには三国干渉後の日本政府が一定程度積極的にアジア連帯の路線を取り留学生や亡命者の受け入れをしたり、日露戦争での勝利がアジア各国に幻想を与えたことも要因であるが、実は明治三〇年代の日本にそのような内在的な可能性があったのではないか。例えば「文学」をアジアに発信していった内在的な可能性として明治三〇年代文学を捉えることはできないか、というのがここで検討したい問題なのである。

3

梁啓超が『佳人之奇遇』によって小説メディアへの開眼をするこ
とになった一八九八年（明治三十一年）は、日本の小説史において
は社会小説・政治小説の提唱と『不如帰』の新聞連載ということ
で特徴づけられる年であった。社会小説については二年前の明治二十
九年、『国民之友』での「社会小説出版予告」以来様々な議論が続
けられて来たものだがこの年には金子筑水の「所謂社会小説」（『早
稲田文学』明三二・二）が出て議論の整理がなされるとともに、年の
後半に入って今度は「政治小説」をめぐっての論がにぎやかになっ
ている。「政治小説の機運」（『帝國文学』八月）、内田魯庵「政治小説
を作れよ」（『大日本』九月）、島村抱月「政治小説」（『読売新聞』十一
月）、後藤宙外「政治小説を論ず」（『新小説』十一・十二月）などのも
のである。この年の後半になって急に「政治小説」をめぐる議論が

起こったのには六月に伊藤博文内閣が地租増徴問題によって総辞職
した後を受けて大隈重信、板垣退助による初の政党内閣が憲政党内閣
によって組織されたことが関係していた。そこにはかつての自由民権
運動を主導した自由党、改進黨系の人々が結集しており、かつての
政治小説の理想をそこに見て取るのはあながち無稽な話ではなかつ
たのである。

伊藤博文は辞職後、朝鮮・中国を歴訪し時あたかも戊戌の変法維
新の真つ最中だった中国では革新派・保守派ともに伊藤訪中に緊張
を高め、維新派は伊藤に日本政府の指示を取り付けようと、また日
本の維新の経験を教えてもらおうと活発に動き、それに刺激を受け
た保守派は維新派打倒のクーデターを予定を早めて伊藤が光緒帝に
謁見したその翌日に起こすようになり、そのことが康有為・梁啓超
の日本亡命という結果を生みだしてゆく。またかつての『経国美
談』の著者でもある矢野龍溪こと矢野文雄が当時清国駐劄特命全權
公使として北京に駐在しており梁啓超の北京脱出と日本亡命にも関
わっていたこと、そして日本亡命の船上で『佳人之奇遇』を梁啓超
が読み政治小説に開眼したこと、などの一連の事態を見てゆくと東
アジアを貫流したまさに「政治小説的」な季節とでも呼ぼうか、
「政治小説」に収斂してゆく大きなネットワークの出現という事態
がかいま見えてくるように思う。

だから梁啓超が一八九八年に政治小説に触れたのは時節遅れのよ
うに見えて必ずしもそうではなかったと言いうる。ある意味で日
本・中国を縦断した東アジアの自由民権運動以来の大きな脈絡の中

での結節点として彼の政治小説への開眼があったと言っても過言ではない。日本での社会小説・政治小説の提唱と梁啓超の政治小説への開眼はだから一八九八年という東アジアの同時性の中での出来事であったと考えられるのである。日本で魯庵や抱月が夢想して果たせなかった政治小説はかえって二〇世紀初頭の中国で開花していったこと、そこには東アジアの同時性と共に、一瞬にしてすれ違った東アジアの「政治小説的」時代の残影を見る思いがする。

梁啓超・康有為の日本亡命とその亡命途上での「政治小説」との出会いには東アジアの〈移動〉の時代の幕開けを告げる事件であったと同時に、東アジアでの国際的ネットワークの出現を意味するものでもあった。その後中国から日本へと向かう留学生・革命家らの人流は明治三〇年代を通じて拡大し続け大きな政治的、文化的なパワーを持っていくのは先に見た通りである。孫文の「中国革命同盟会」の東京での結成（一九〇五）はそのことを象徴している事件であった。ほぼそれと同時に魯迅による「文学」との出会いも行われていて、東アジアの文学史・政治史は東京・横浜を中心としたアジア的ネットワークの中で目まぐるしく展開し始めることになる。日本、また日本文学がこの汎アジア的な〈移動〉の時代の開始の中で決して受動的であったわけではない。むしろ日本が明治三〇年代の東アジアの状況の中で焦点的な位置にあったこと、憲政党の大量重信や犬養毅などは積極的に中国の革命派に接触を持ったし、東亜同文会などのアジア主義者たちも積極的に中国革命に支援を続け

た。一九一一年の辛亥革命がそのような東アジアのネットワーク内での出来事であったことは論を待たない。

ただ日本文学がそのような〈移動〉の時代に十分対応できていたかとなると少しためらわざるをえない所がある。少なくとも表面的には明治三〇年代の日本文学が形成過程にある東アジアのネットワークをその文学的視野の中に入れていたとは見えない。ただ文学的な主流にはならない所でそのような〈移動〉の時代にコミットしていった者たちがいたのもまた事実なのである。例えば岡倉天心がインドやアメリカを往復しながら『東洋の理想』『日本の目覚め』をそれぞれイギリス、アメリカの出版社から出版する活動の中で汎アジア的な視野を養っていくことや、南方熊楠、夏目漱石がロンドンに渡り脱領域的な文化を構想して行くことなどは明治三〇年代の〈移動〉の時代の中でこそのことであつたらう。二葉亭四迷、夏目漱石、高浜虚子などは実際その身体で東アジアを体験してきている。彼らの体験の文学的な意味については次章で論じてみたい。

ここで見通しだけ述べておきたいのは、明治三〇年代の日本（日本文学）が一方では〈移動〉の時代の幕開けとともに様々な脱領域的な試みがなされ始める時期であるとともに、他方では日本国家の完成期に当たっており条約改正の達成による国内法規の整備（民法の整備など）、国籍法の制定、北海道旧土人保護法の制定などにより「国家」「国民」の領域化も進められてゆく時期であったという事実である。むしろ日清戦争から日露戦争という歴史的なパースペクティブで見る時、「臥薪嘗胆」やまた「日本主義」などの「国

民」統合の進展・深化という線が中心であったかのように見られるが、しかし実状に即して見る限り明治国家による「国民」統合路線はかなり危うい状態にあったことが飛鳥井雅道氏によって論じられている。¹³⁾

それによれば日清戦争後の不況や大増税という状況下でかなり広範な反政府的気分があり、例えば『読売新聞』『日本』などのナショナリスティックな傾向を示した新聞が不振を続けたことやその一方で反政府的な言動で知られる『万朝報』が日清戦争後の二年間で部数を倍増する勢いだったことが挙げられている。また文学界においてもナショナリスティックな『太陽』に対して『新小説』『新著月刊』などの社会的な傾向を示した雑誌が大幅に部数を伸ばしてゆく現象があったことが指摘されている。

つまり一般的な像とは違つて、日清戦争後の社会はかなり深い動揺と不安定の中にあり、明治国家による「国民」統合路線はむしろ大衆的な反発を買っていたこと、そして社会主義的な傾向の発生をも含めた様々な脱領域的脱国民的な企てがなされる下地となっていたことがそこから読みとれる。明治三〇年代に生まれた様々な文学的な企て——例えば「深刻小説」や「観念小説」、「社会小説」、「政治小説」等——はそのような脱領域的脱国民的な指向の中でのものであったように思われる。

そのような脱領域的脱国民的な風潮の中から梁啓超・孫文らの東アジアの改革派・革命派との一定の連帯という路線も生まれてきたものと見られるし、東アジアのネットワークを支援し形成してゆ

く動きも生まれてきたように思われる。さらに言えば梁啓超に政治小説との出会いをもたらした、東アジアに「文学」の〈移動〉をもたらしたのもそのような日清戦後の脱領域的脱国民的な風土のためだったと言えなくもないだろう。つまりごく短い期間であったとは言うものの日清戦後の日本に東アジアの国々、そしてベトナム・ネパール・フィリピンなどを含めた汎アジア的な（反ロシア・反植民地・反体制的な）連帯の可能性を産み出しうる土壌が存在していたと考えられる。そこにはロシアの南下政策やヨーロッパ列強の中国・アジア分割という外的な要因も大きく働いていたが、その中心には明治三〇年代の日本の反政府的な風土や脱国家的脱領域的な動きがあったのではないだろうか。それが東京・横浜の中国人コミュニティを介して全アジア的なネットワークを持ち得たおそれく近代史上希有な時期として明治三〇年代はあったのではないかというのがここで提出したい見通しなのである。

もちろんこのような言い方は誤解を招くおそれがあることは承知しているし、日露戦争後の日本がアジア的な連帯を裏切って行ったことも踏まえた上で、しかし明治三〇年代の日本が可能性としてではあれ汎アジア的な連帯を産み出しうる求心力を束の間ではあっても持ち得たこと、そしてそのことが明治三〇年代の東アジアへの「文学」の〈移動〉をもたらしたのではないかということがここで述べたいことなのである。東アジアでいわゆる「近代文学」を産み出した中国の魯迅、朝鮮の李光洙とともに明治三〇年代の日本の風土の中で「文学」に接し、例えば医学志望（魯迅）から文学への転

向を行っている。そのような「文学」への転向を彼らにもたらしたものの、そして東アジアへの「文学」の（移動）を結果したもの、そのことが明治三〇年代の日本文学の可能性の中に存在したのではなかったかということをごここで問いたいのである。

そのことを問うためやや迂遠であると思われるだろうが、ここで小説『不如帰』と二葉亭四迷、夏目漱石という文学者たちのことを考えてみたい。いずれも明治三〇年代的な風土とその可能性を色濃く背負っている文学（者）たちであると考えられるからである。

4

小説『不如帰』が明治三〇年代を象徴し代表する小説であることは間違いないだろう。背景は日清戦争前後に設定されているが、小説内に表された人物の構図や扱われた題材の幅広さはまさに日清戦後の「社会」的な問題意識を象徴しているように思われる。例えば金銭と自己の利害しか念頭がない山木兵造、彼はまた陸軍の官僚と癒着し贈賄を平然と行う「紳商」として描かれている。山木の相棒の千々岩安彦も不幸な生い立ちはあるものの自己の出世と金銭の利害のために振る舞う利己的な、その意味で戦後のな人物として表象されている。そのようないわば経済中心主義的―資本主義的人物群の対極には武雄と浪子という「新家庭」が印象深く配されている。この「新家庭」は姑のお慶の同居という条件にもかかわらず近代的な、核家族的な雰囲気を漂わせている。冒頭の新婚旅行を思わせる伊香保での場面、また遠洋航海中の二人の恋文のやり取り

などはその印象を抜きがたいものになっているものだろう。

この「新家庭」、いわば愛の論理だけによって成り立っている家庭もまた明治三〇年代的な新風俗だったと言えるように思われる。

今ここでそれを詳しく検証することはできないが、当時の女子の教育率の向上、自由恋愛、自由結婚観の広まりなどから十分想像できるものである。因みに明治三〇年代は「少女」や「少女小説」が形成され、生産されてゆく時期でもあった。

この『不如帰』での「新家庭」像はのちに「家庭小説」として類別してゆくのだが、明治三一年の時点でこの「新家庭」像は資本主義的な「社会」像とともに新しく発見され定着されたもののように思われる。というよりもむしろ日清戦後の「社会」像への関心の高まり―「社会」という問題の発見が必然的に「家庭」の領域を問題化し前面化していったのだと考えられる。明治三一年、この『不如帰』と同時期に書かれた小説が『くれの廿八日』にせよ『己が罪』にせよいずれも「家庭」の問題を前面化しているのはそのことを示していると思われる。

『不如帰』では様々な問題が、例えば結核という病の問題や戦争の問題、金銭の問題、嫁姑の問題などが小説的に表象されているが、それらが大きなリズムとして「家庭」と「社会」の二極に分光されてゆくのを見ることが出来る。物語の大きな流れとしては武雄と浪子の「新家庭」が千々岩の出現に始まり、山木の娘の横恋慕、結核の発病、お慶の家の論理をふりかざす脅迫などによって徐々に触まれ破局に至る過程として読めるものであり、いわば「社会」が

「家庭」を浸食してゆく物語と言いうる。このような「社会」と「家庭」という様々な問題を展開し包含しうる（場）を形象しえたこと——さらにそれを「小説」という枠組みの中で提出しえたことにまさに明治三〇年代小説としての『不如帰』の持っている可能性があったのではなかったかと思われるのである。

この可能性は『不如帰』の持っている通俗性という弱点によって「家庭小説」の流行などに類落してゆくのは先に述べたが、別の所でその可能性は引き継がれ花開いていったのではないかという思いがする。例えば『不如帰』が世界的に翻訳され流布していったこと（英語版一九〇四年、フランス語版一九〇九年、ドイツ語版一九一〇年、中国語版一九一一年、朝鮮語版一九一二年など）や特に中国・朝鮮では翻案作も生み、劇団による公演もなされ大きな人気を博したことを思うとこの小説が可能性としての「世界性」を備えていたのではないかという気がしてならない。少なくとも東アジアの文学的ネットワークの形成に大きな役割を果たしたことは疑えない。¹⁶

またその「小説」という問題——様々な問題を扱いえて、表象しうる（場）としての小説——は長編小説というジャンルを可能性に向けて開いていったのではないだろうか。無論『不如帰』の他にも明治三〇年代前期には『金色夜叉』や『己が罪』などの長編小説が存在したが、それらを含めて「小説」という問題がこの明治三〇年代大きな知的誘因力として働いていったのではないかという気がしてならない。その「小説」という問題の誘因力がなくては例えば漱

石や藤村、また魯迅や李光洙のいわば「小説」への転向は考えられないからである。無論梁啓超の「小説」への開眼もその文脈上で捉えられるものだろう。言うまでもないがこの『不如帰』自体が徳富蘆花の書いた初めての「小説」であり、「小説」への転向の時代を象徴するものであった。奇しくも一八九八年という同じ年に同時的に「小説」への転向を果たした二人の文学者、梁啓超と徳富蘆花によって東アジアの文学史は大きく「小説」の時代に向けて展開していったのである。東アジアの文学的ネットワークの始発点においてこの明治三〇年代の「小説」という誘因力は決定的な契機となったと言つていいように思われる。

このように『不如帰』の出現が日本の「小説」を可能性と世界性に向けて開放してゆくものだったとしたら、同じ明治三〇年代にやはり身を以て東アジアネットワークの中で行動し表現した文学者に二葉亭四迷と夏目漱石とがいた。

『浮雲』中絶以後の二葉亭四迷こと長谷川辰之助がいわゆる文学からはかなり遠い所で過ごしていたこと、特に実業や大陸雄図の夢を抱いて試行することはよく知られているが、そのような彼の生活の中にきわめて明治三〇年代的な風土が見られるように思われるのである。もともと彼が実業に志すのは明治三十年に長く勤めた内閣官報局を辞職してからのことだが、それが日清戦争後の実業熱に呼应し触発されたものであることは疑えないように思われる。しかもその「実業」というのがロシアに日本の売春婦を送って日本の風習を広めそれがひいては日本商品や日本勢力の拡張に繋がるといふも

のだったのだから、話はまさに明治三〇年代である。当時朝鮮や台湾、満洲に渡っていった日本人の中には落魄した小商人や一旗組の他に多くの酌婦・芸妓がいたことは周知のことである（日本人の進出した所にはまず娼婦街が成立したと言われる）が、彼らが先に虚子の『朝鮮』で見たように日本の勢力の北上してゆく尖兵の役割を務めたことも歴史の事実であった。二葉亭はそのような朝鮮、台湾などでの日本人移住者の増加と日本勢力の拡張という趨勢を見て、それをロシアに応用しようとしたのだったと考えられる。その意味で日本人売春婦の送り込みというのは的を射た路線だったと考えられ、それが日本人勢力の拡張に繋がるといいうのもあながち荒唐無稽な話ではなかった。

彼のその夢は結局実現はせず、そのかわり長谷川辰之助は明治三十五年（一九〇二）にウラジオストック、ヘルピンを経て北京に向かうことになる。そこで彼は北京警務学堂の提調代理といういわば副校長格の役職に就くのだが、その彼の北京行きも明治三〇年代の例えば梁啓超を日本に亡命させ政治小説に出会わせたとような（移動）の時代という風土上でのものだったことは言いうる。なによりその北京警務学堂が近代的な警察官の養成を主旨とし、一九〇〇年の義和団事件（北清事変）後に作られたものだが、それが戊戌変法維新以後の教育近代化の総路線の上になったものであることは明らかである。しかもそれが清国の慶親王が川島浪速に依頼して設けられたというのだから、維新派の日中提携路線の象徴のような学堂であった。そこに反ロシアの長谷川辰之助が提調代理として入ったの

だから実に明治三〇年代の反ロシアアジア提携的な風土を面白いまでに表していると言える。しかもその警務学堂が日本大陸浪人たちの拠点となったのだから梁啓超らの東京・横浜での中国人コミュニティの陰画ともいえるべき日本人ネットワークの要をなしている興味深い。二葉亭こと長谷川辰之助の北京行きということもだから「文学的」ではないまでも明治三〇年代の風土と東アジアネットワークの一結節点をなしているといつて過言ではないだろう。

最後に夏目漱石のことに触れておけば、彼が二葉亭四迷こと長谷川辰之助に劣らず満洲・朝鮮方面での人的ネットワークを持っていたことは『満韓ところどころ』の記述を見れば明らかである。満鉄総裁の中村是公を初めとして満洲・朝鮮などの各地に東大同門の面々が枢要な位置についており、『満韓ところどころ』の旅がほとんど半ば以上そのような人的ネットワークの間を巡り歩いたものであったことは、その回想部分の多さなどからも窺われる。だから漱石が考えられる以上に東アジアの情勢に親近感を持っていたことは意外ではないのである。彼が長谷川辰之助のように単身中国に渡ったりはしなかったとはいえ、『満韓ところどころ』の旅を初め様々なしかたで東アジアにコミットし、その作品中にもかなりの頻度で東アジアの情勢やそこに渡ってゆく人々の姿が現れているのは決して偶然ではない。

『濛虚集』の短編や『草枕』を初めとして東アジア、特に満洲はその作品世界に重要な位置を占めているのだが、ここで『それから』や『門』を見ておけばそれらの東京での中流社会を扱った作品

の中にもあるいは世間話の形であるいは作品世界に訪れる不意の一撃の形で東アジアは出現しているのが見られるのである。『それから』で書生の門野との雑談の中で「支那人の留学生」が演芸館で芝居をやっているという話が出てきたり（八）、朝鮮の統監府に居る友人」に手紙を書いたりする（五）のを初めとして、平岡は「僕も一人なら満洲へでも亜米利加へでも行くんだが」と述べたりする（十一）のが見られる。『門』での安井や『明暗』での小林の行く末を想起する時、『それから』の平岡もまた劣敗者として大陸への放浪を運命づけられている人物と読めないことはないだろう。『門』でもまた御米との雑談の形で満洲での伊藤博文暗殺の事件が語られ「兎に角満洲だの、哈爾濱だのつて物騒な所ですわね」と後半の伏線が張られている（三三）。小六もまた「もし駄目なら、僕は学校を已めて、一層今のうち、満洲か朝鮮へでも行こうかと思ってるんです」と述べる（三三）。それらが後半での不意の安井の出現への伏線になっていることは明らかだろう。安井は御米を宗助に奪われたことなどから学校を中途で退学し、満洲に放浪していたのであるが、その安井が不意に隣家の坂井の家に訪れることになるのである。宗助と御米の平穏な生活はその中に潜む「結核性の恐ろしいもの」を自覚させられるように作品は急展開して行く（十六〜十七）。

漱石の作品内にはそのようにさりげなく東アジアのネットワークが書き込まれていたと言つてよいだろう。また一方で『門』の安井を初めとして例えば『彼岸過迄』の森本、『明暗』の小林、『草枕』の那美の前夫などの満洲・朝鮮に〈旅〉∥放浪する人物たちの系譜

が漱石の作品の全期に渡って描かれ続けたのも見逃せない。彼らの存在は日露戦後の（一等国）と化した日本の中流階級の生活を暗部で脅かすものとして機能している。『草枕』末尾での鉄道と二十世紀の文明への激越な批判を想起する時、彼ら〈旅〉∥放浪する人物たちの群像もあるいは二十世紀の文明の必然として、文明∥市民生活を危機に陥れるものとして認識されていたかもしれない。ともあれ漱石によって明治三〇年代の〈移動〉の普遍化と東アジアのネットワークという現象は敏感に感受され表象化されていたと言いうる。虚子の『朝鮮』によってその〈旅〉∥放浪する人物たちが正面から主題化されてゆくのは先に見た通りである。

このように明治三〇年代の〈移動〉と東アジアのネットワーク化は様々な効果をもたらしたと考えられる。特に梁啓超の「政治小説」の提唱に始まる中国・朝鮮での近代文学の形成ということはすぐれてネットワークの中での出来事であった。一九一〇年代、中国の魯迅、朝鮮の李光洙らによって東アジア文学史は大きく近代文学への道を展開してゆくことになるが、彼らがいずれも明治三〇年代の日本（東京、仙台）で「小説」に触れ、「小説」への転向をなしたのはおそらく偶然ではないだろう。一方日本文学でも徳富蘆花や夏目漱石の「小説」への転向によって明治三〇年代文学は新たな局面を迎えることになる。梁啓超、魯迅、李光洙らの東アジア文学と明治三〇年代の蘆花や漱石らとはだからある意味で同時的、同時代的な存在だと見なせるように思える。蘆花の『不如帰』や漱石の小説

が東アジアで大きな歓迎を受けるのもその「問題」の同時代性のためだったように思えるのである。彼らによって形成されてゆく東アジアの文学的ネットワークはその後も機能し続け、日本の敗戦に至るまで東京、上海、京城は同時代的な共振をしてくく。一九二〇年代のプロレタリア文学の流行、一九三〇年代の新感覚派などのモダニズム文学の流行¹⁸⁾、一九四〇年代の大東亜文学者会議など、東アジア文学のネットワークは（日本の国家的政策に反して）機能し続け、大きな文学的推進力となつてゆく。しかしその実像はまたの機会に触れたいと考えている。

注(1) 高崎宗司「在朝日本人と日清戦争」(『岩波講座 近代日本と植民地

5 膨張する帝国の人脈』一九九三)

(2) 越沢明「台湾・満州・中国の都市計画」(『岩波講座 近代日本と植民地 3 植民地化と産業化』一九九三)の付表による。因みにその間日本人の台北の全人口に占める割合は15・7% (一八九八年)から25・6% (一九一〇年)に上昇している。

(3) 「世界的には、一八九〇年代になると、八〇年代にくらべて鉄道建設のテンポが落ちはじめ、ロシアとインドにおいてだけ鉄道建設の規模が増大した」(石井寛治『日本の産業革命』朝日選書、一九九七)と言われるが、日本国内での鉄道建設を始め東アジアでの鉄道は一八九〇年代に入って建設ブームを迎えている。朝鮮の他に台湾でも縦貫鉄道の建設がこの時期始められている。

(4) ここでは虚子の『朝鮮』のみに触れたが、漱石にも『満韓の文明』という文章があり、『満韓とどこどころ』の旅で体験した満州での「ハイカラ」で泰西式の開化と朝鮮での純日本式の開化とを比較して文明の北上を論じているのが見られる。

(5) 松村正義『国際交流史 近現代の日本』(地人館、一九九六)による。

(6) 増田渉「清末小説について」(『梁啓超について』(『中国文学史研究』「文学革命」と前夜の人々——、岩波書店、昭42、所収) 参照。

(7) 『飲水室合集』1 (北京、中華書局、一九八九)

(8) 嚴安生『日本留学精神史』(岩波書店、一九九二)第二章 神山・梁山泊・「文明商販」 嚴安生氏のこの書は明治三〇年代の日本に渡った中国人留學生の生態や文化摩擦についての興味深いエピソードを豊富に描いており、明治三〇年代の文化史を考える上で大いに参考になる。

(9) 『飲水室合集』2 (中華書局)

(10) 魯迅『中国小説史略』「第二十八篇 清末の譴責小説」(東洋文庫、平凡社、一九九七)

(11) 白石昌也「東遊運動期のファン・ボイ・チャウ——渡日から日・中革命家との交流まで——」(永積昭編『東南アジアの留學生と民族主義運動』、嚴南堂書店、昭56) 参照。

(12) 牛林杰「韓国開化期小説에 미친 梁啓超의 影響」(第一回東アジア比較文学国際学術大会、一九九七、ソウル、での口頭発表)による。

(13) 飛鳥井雅道「国民的文化の形成(一)」(『岩波講座 日本歴史 18 現代1』所収) 飛鳥井氏のこの論文では明治三〇年代に成立した「新派」演劇がその改革性と限界性において社会小説と共通し、明治四〇年代以降主流から外れてゆくが明治三〇年代文化の可能性を示しているという興味深い見解が述べられている。

(14) 久米依子「少女小説——差異と規範の言説装置」(小森陽一、紅野謙介、高橋修編『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』、小沢書店、一九九七、所収) 参照。

(15) 中村忠行「『不如帰』の中国に於ける評価」(『明治大正文学研究』第二十三号所収)、慎根粹「『不如帰』의 翻案模相」(『韓日近代文学の比較研究』、一潮閣、ソウル、一九九五) など参照。

- (16) 周作人の回想によれば、日本留学時代の魯迅も『不如帰』を読み直
接翻訳しようとしたことがあるということである（周作人「日本文学
を語る」、『改造』一九三四年九月）。
- (17) 拙稿「一九三〇年・東京・上海・京城」、『比較文学』第三十六号、
一九九四・三）参照。
- (18) 拙稿「韓国モダニズムの位相——李箱詩と安西冬衛をめぐって
——」、『昭和文学研究』第二五集、一九九二・九）に朝鮮のモダニス
ム詩人・小説家李箱（イサン）の文学と日韓の文学的同時代性につい
て論じている。

作品・作家情報・モデル情報の相関

——『新声』の活動を視座として——

日 比 嘉 高

明治二九年創刊の青年向け投書雑誌『新声』には、「文壇風聞記」（三二年創設）という人気欄があった。この欄は、新声社の社主である佐藤儀助が妖堂の筆名で連載していた作家・文壇情報欄であり、その人気のさまは、「妖堂さんの風聞記、中々面白い、これを止められたら大に困る」といった投書が、数多く寄せられている。ここからも確認できる。

新声社には、この欄と同名の単行本が存在する（内容には異同がある）。その広告の文章を読んでもみると、この本（そして欄）が、どのような意図のもとで読者に向けて発信されていたのかがわかる。

文学は其作物を験して、敢へて作者を知るの要なきか如しと雖も、其文を読んで其人を想ひ、其人を想うて其風采を知り、逸話を知らんとするは人の常情、此書は実に読書社会の喝望を満たさんか為めに出版たる也

『文壇風聞記』広告（三版）『新声』M33・4

ある作品を読むとき、その作者のことを必ずしも知っている必要はないとはいえず、文章を読んで作者の人物、風采、逸話を知ろうとするのは、「人の常情」だ、と広告は訴える。そしてそのような「読書社会の喝望を満た」そうとして出すのが、『文壇風聞記』であるという。つまり、この本（欄）の狙うところは、小説なり詩なり評論なりの文章そのものを狙上に乗せるのではなく、その背後に潜む作者たちについての情報ばかりを集めて提示する、というところにあるようだ。紹介した「文壇風聞記」についての読者の声に立ち返ってみれば、新声社のねらいは、読者の要望にかなり沿ったものであったらしい。

ある文章を読んで、書き手はどんな人なのかと考えることは、現在のわれわれにもよくあることだろう。そしてまた、日本の文学の枠組みのなかでは、作品を読んでその作者について思いをめぐらし、そこからその作家の像を構成していく、という受容のありようが、

ある一定の力を持って存在していることも確かだろう。では、いま触れてきたような明治三〇年代の読者たちの間には、このような習慣は存在していたのだろうか。彼らのなかには、作品はさておいてその作家たちに特別の興味をもっていた者たちもいたようである。彼らは、彼らの知る作家についての情報と作品とを、関連させて思考していたのだろうか。いたのだとすれば、それはどのようなありようでなのか、現在のわれわれが知るような「私小説」的なそれなのか、それともっと別の形でなのか。そもそも、冒頭から触れてきたような作家情報は、いつから登場するようになっていたのか。本稿はこのような問いから出発する。

一、『新声』と新声社の活動

まず、作家情報や文壇の消息を伝える雑誌記事などが、いつからどのように作家を取り上げていたかを見てゆき、その後、作品内に描かれた事件や登場人物の由来を穿鑿し伝達する題材／モデル情報についてはどうであったのかという点を検討する。その際、人物評論に重きをおいた編集方針に特徴のある第一期の『新声』と新声社の活動を視座とし、周囲のメディアにも目を配りながら考えてゆくことにする。

雑誌『新声』は明治二九年七月、すでに先年秋田から上京し校正係職工として働いていた青年佐藤儀助（義亮）が、弱冠一九才で独力創刊した青年向け投書雑誌である。『新声』創刊号は、一行も広告を出さなかったにもかかわらず、その全て（八百部）を売り切る

という好調な滑り出しを見せ、以後大きく発展し、自他ともに認める青年向けの中堅誌としての位置を確立した。その発行部数は明治三五年頃には一万部にまで達していたというから、⁽³⁾同時期に出ていた『文庫』『明星』などと並んで、明治三〇年代の文学青年たちの標準的な購読雑誌のひとつとなっていたと考えてよい。⁽⁴⁾ではその『新声』という投書メディアの特徴は、どのようなものだったのだろうか。

『新声』の編集の特徴は、たとえば次のような言葉がよく表している。「先進新進の如何を問はず、風気の革新と、趣味の涵養とに、貢献するに足る可きものを公にせんのみ」⁽⁵⁾『新声』第二編第四号、M32・10。もちろん時期によって傾向の変動はあるが、おおむね佐藤儀香、金子薫園、田口掬汀らが担う〈風気革新〉と、同じく佐藤儀香、高須梅溪などを中心とする〈文芸振興〉とが『新声』の売りであったと言つてよいだろう。そしてこの傾向は雑誌『新声』のみにとどまらず、出版社としての新声社の姿勢でもあった。前者としてアカツキ叢書などの文芸書の刊行があり、後者の任を帯びた『三十棒』や正岡芸陽『新聞社の裏面』なども出版していた。

本稿が焦点を当てようとしているもののひとつ、作家情報の編制は、この新声社の編集姿勢と密接に関係している。この二種の編集傾向の基調理念として存在し、積極的に鼓吹されていったのが、この社の〈人物主義〉とでも言つていいイデオロギーであった。新声社は〈風気革新〉と〈趣味の涵養〉を掲げ、文士の品性問題などに積極的に関わつてゆきながら、それと重ねるように作家の人物評や

人物像を盛んに伝えてゆく。

具体的に跡をたどろう。創刊から三号目の第一巻第三号(M29・9)に「小観」という欄ができる。これは後に佐藤橋香の名で書き継がれてゆく「文界小観」の前名であるが、いわゆる時文であり時評・作品評と共に人物評も積極的にこなしている。たとえばこの号では次のようなことが述べられる。「彼等〔稿者注 硯友社〕は世の所謂才子連なり、其多くは金満家なり、交際家なり。「中略」茲に於てか其作、陽春三月百花爛漫の趣あれども、寒風怒号の裡猛虎嘯くの概なく〔後略〕。もうひとつ、この第三号では「少しく思ふ所あれば、次号より従来の「けふ此ころ」を一変して、重に文壇の消息を伝ふべし」(予しめ告ぐ)と編集の改革が告げられ、これまでは社会の雑報を載せていた「けふ此ころ」欄が、文壇の消息をも伝える旨が連絡されている。実際第四号からこの欄には記者の雑感や学界の消息と共に、「◎紅葉」「◎二葉亭」などの見出しのもとに文士たちの消息が紹介されてゆき、第二巻第一号からは、その名も「文壇の消息」と改められることになる。しかし、実はこのような文壇の消息を伝える作業は、すでに「小観」がその任に当たっており、例えば第三号では江見水蔭が「俗塵を避けて、片瀬村の仙境に居を構へ」たという情報などを伝えていた。つまり、「けふ此ころ」の変革は異なったジャンルを担当する欄の新規創設という訳ではなく、同じ様な情報を漏らす欄の並存という状況を作り出している。当時経営に余裕があったとはいえない『新声』にこのような無駄があったとは考えにくいいため、この重複は、作家・文壇情報が読者の間で

好評であったためと考えた方がよいだろう。

この状況が作り出された背後には、次のような文芸メディア界の趨勢があった。「近頃文学趣味を帯べる雑誌に、時文の一欄を見ざるはなく、新聞にては『万朝報』の『よろづ文学』の外に、『時事』は秋野生の『文壇所見』を掲げ出し、『読売』は『時文評論』の一欄を設けて盛んに批評を試んとし、赤門の俊児某之に当らんとすと伝ふ」(「けふ此ころ」『新声』第一巻第六号、M29・12)。「時文」というものの、たとえば「よろづ文学」は、文芸批評から新刊紹介、出版・読書界の動向までを含んだ守備範囲の広いものであり、文壇消息的なものもそこには含んでいた。新聞メディアだけではなく、『文芸倶楽部』の「浪花文壇の消息」「文士消息」「文壇大向」、『小説』の「文界の片影」、『太陽』の「文界雜俎」など雑誌メディアにも、その傾向は及んでいた。

ただし趨勢の中心を担っていたのは、なんとといっても青年向けの投書雑誌であった。『文芸倶楽部』にせよ『新小説』『太陽』にせよ、作家消息欄は定期的なまとまった分量のものではない。それに対し、たとえば新詩社の『明星』では、その創刊(M33・4)から文壇・作家情報載せる欄を設けており、「◎八月の中頃に晚翠氏が一週間ほど上京してゐた。氏の新作が十月の『帝國文学』に出るげな」(『文芸雑駁』『明星』第六号、M33・9・12)というような作家・詩人の消息や逸話が、同人たちの楽屋話とともに多数掲載されている。この号の『明星』では、全誌面六八頁中の、実に一割強をしめる七頁がこの欄に割かれており、その力の入れようがわかる。『文

庫』も、『新声』『明星』ほどではないにせよ、「文界雜報」「三寸舌」などの欄により、文芸界の動向を伝えようとする姿勢をみせている。

そしてさらに二つほど、これと交差していたらしい動きを付け加えることができる。『新声』第一巻第二号(M30・2)の「文壇の消息」が述べるのがそれである。

◎評伝の流行 世は漸く浮華輕薄の風に倦みて、偉人を追想するの論、現れ来るや、『偉人史叢』機に投して大に流行し、毎号再版以上を重ねざるなき様なり、機運已に斯くの如くなれば、例の民友社如何でか黙し居る可き、渡辺修二郎氏を備うて「人物評伝」を發行し、其他百頁内外の小冊子出ること頻々たり。尚ほ他に同文館よりも同種のもの出づ。

◎新小説 新作家批評家等の肖像を掲げんとす。

日清戦争後には人物評論や回想録の類が流行を見せていたことが指摘されている。樹下石上人「横山源之助」「人物評家の変遷」⁽⁵⁾は「現代人物に対して、精細なる筆を見たのは、日清戦役後であらう、最もその前にも〔中略〕現代人物評を遣つたが猫も杓子も初めて来たのは、日清戦役後と仕方が穩当だらうか」とし、岡保生「解説」(『日本近代文学大系60 近代文学回想集』角川書店、一九七三年二月)も、回想集、回顧録の類について「明治以降、わが近代文学の進展

にともない、その隆盛期を現出したのちの時点において、はじめてこの種のころろみ、ジャーナリズムに企画されることとなった、と判断される。これを年代的にいうと、明治三〇年前後がちょうどその時期に当たっていた」としている。投書雑誌が中心となった作家像の伝達は、明治二〇年代の伝記ブームに端を発し、この時期まで引きつづく、(人物)への関心の増大と、深く関連していたと考えるべきだろう。たとえばこのような傾向を文芸雑誌が受けたものとして、『新著月刊』の「作家苦心談」、『文芸倶楽部』の類似的欄「名家談海」などをあげることができる。『新声』(第三巻第一号)の「小観」はこの『新著月刊』の企画が世に喜ばれていることを紹介している。

それにおとらず、短いながら後者の引用記事の述べるころろも、メディア史的にみて非常に重要である。紅野謙介『書物の近代』(筑摩書房、一九九二年一〇月、142頁)も指摘するように、この明治二九年、三〇年という時期は、文芸雑誌が写真をその誌面に取り込みはじめた時期に当たる。『文芸倶楽部』が十二編(M28・12)に「閨秀小説」特集として若松賤子、樋口一葉などの写真を載せ、『新小説』も第二年第一巻(M30・1)に「作家画伯肖像三十三写真版」を載せている。『新声』もこれに素早く反応し、第二巻第三号(M30・3)では両誌に掲載された写真に対するコメントを「小観」に載せ、続く四号には、明治二八年冬に富士山越冬を試みた野中至・千代子夫妻の肖像写真を巻頭にあげている。

この『新声』の肖像写真については後にくわしく触れることとし

て、『新声』の人物像・人物評の分析にひとまず戻る。「文壇の消息」は、その上位欄である「花片々」という雑報欄が消滅するのに伴っていったん姿を消し、しばらく（人物主義）は鳴りをひそめるかのようにみえる。だが、第四巻第六号（M31・6）において再び「花片々」欄とともに復活し、翌月には「けふ此ころ（其一 文壇瑣聞）」として定着する。そしてさらにこの復活に加えて、同一一月（第五巻第五号）には妖堂の筆名で佐藤が「文壇風聞記」を連載しはじめ。これが読者の好評を呼ぶのは冒頭で確認したとおりである。そこではたとえば、泉鏡花は夜中に飛び起きて暗中を凝視する、神社仏閣には必ず跪拝する、という情報などが提示されたりする。そしてここで注意せねばならないのは、「是を以て彼が陰鬱深刻の作に連想し来れば、大に解し得るものもある也」というように、そこでは単に作家の個人的な情報を読者へ伝えるだけでなく、彼の性向と、その作品とを照応させて、読むような読書法まで、伝達されている点である。後に詳しく分析するが、メディアによる作家像の伝達はこのような形の読書慣習を形成してゆく。

この後、『新声』の人物主義はさらにエスカレートの様相を見せ、第三編第二号（M33・2）のあたりでは、時評を担当する「文界時評」「文芸小観」、作家の消息を伝える「文壇風聞記」「甘言苦語」、さらには人物評論「文士月旦」と計五つの欄が並立し、作家像や文壇情報を強力に編制伝達する体制が取られていく。むしろこの傾向は新声社の意識的な戦略であり、第三編第二号には目次に「人物」欄という領域を設置し、同七号（M33・6）の表紙では「人物に関

する評論記伝の多きは本誌の特色なり」と標榜する。

このような傾向をもつ『新声』が、ようやく印刷物の上にその姿を現し威力を発揮しつつあった新メディアⅡ写真の力を利用しないはずはない。⁽⁶⁾『新声』が本格的に写真を導入したのは第四編第四号（M33・9）の臨時増刊「秋風琴」号である。巻頭に紅葉、子規、一葉の筆跡を掲げるのを始め、魯庵、鏡花、藤村、桂月、蘆花、風葉、嶺雲、大野洒竹などの肖像写真を掲載しており、平素活字の向こうにいて見えない、文士たちの身体がのぞき見られるようになっていく。⁽⁷⁾この増刊号は、「宗教界の文士」「少壯論客」「広津柳浪」「文壇風聞記」「文士雅号譚」など人物に関する記事が多いのも特色となっている。この文士の写真を挿入する企画は反響が大きく、翌月翌々月の読者通信欄にもその反応が取り上げられている。おそらくはこの増刊号の試みの成功により、翌三四年一月号（第五編第一号）から、一条成美や平福百穂の挿絵や風景写真、絵画・彫刻の写真版などが誌面の各所を占めるようになってゆき、文士たちの肖像写真も折にふれて掲載されてゆくことになる。

その多くが巻頭近くに掲載された作家の肖像写真は、その脇に「誰々」という個人名を伴いながら、一人の人間の身体イメージを浮かび上がらせる。彼／彼女の作品とは本来なんの関係もないはずであるその身体イメージは、脇に添えられた個人名の力によって、彼／彼女の「作品」とされる文字テキストと恣意的に関連づけられる。この恣意性にメディアの操作や読者の読みの欲望が介入する。文字テキストによってなされる作家像の伝播と踵を接するように現

れたこの工程が象徴するのは、ひとりの人間＝作家が、ある作品群の「作者」として身体イメージをまといつつ特権的に関連づけられてゆくとともに、その関連づけをずらしつつけるよう促される状況の出現に他ならない。作家は、「作者」として常に作品と相互に参照しあう存在であると同時に、その対応関係に亀裂を入れる新たな情報源として、メディア上に誕生させられる。それはまた、読者の側からみれば次のようにも言えるだろう。作家情報の享受は作家を可視的なものにしたと同時に、逆に見えない部分を作り出した。新しい情報は、さらに新たな情報への欲望をかき立て、未だ伝達されない人々や部分への注目を高めてゆくのである。⁽⁸⁾

新声社の〈人物主義〉もやはりこの機構のなかにあった。そこで発信されてゆく作家の情報は、既存のテキストと相互に参照関係を結び、その対応を補強するために働く。と同時に、「売り物」として販売されるそれは、必然的に、これまでの情報とはズレを有し、齟齬をきたす新情報をもつことが期待される。このような二重の位置に作家を巻き込みながら、新声社は、『新声』だけではなく、その出版活動でも同様の戦略を用いていた。めばしいものを列挙すれば妖堂居士『文壇風聞記』（M32）、「新声」同人編『明治文学者評論』（M34）、佐藤橘香編『文壇衆屋観』（M34）、新声社編『創作苦心談』（M34）、新声社編『現代百人豪』（M35）などが挙げられる。これらの出版物の狙うところは、冒頭紹介した『文壇風聞記』の広告がよく語っているし、次の『創作苦心談』の広告からもうかがうことができる。「当代知名の文士に就いて親しく其苦心談を聞き、

以て一書を成せるもの也。苦心談あり、或は批評家に対する気焔あり、文壇に対する抱負あり、作物中の人物に関する談話は、興味最も深く、作者の経歴談亦深く味ふべし。『創作苦心談』広告『新声』M34・1、傍点稿者。『新声』と新声社の出版物の読者たちにとって、作品はもはやそれ単独であるものではなかった。作品は、出版物から得た情報が形成した作家のイメージとともに読まれるよう、促されていたのである。そして次にくわしく見るように、新声社は、作家情報だけではなく、作家の創作の秘密を明かす情報——「作物中の人物に関する談話」——もまた取り上げ発信していた。

二、作家情報とモデル情報

とりいそぎ作家像の伝達に関する状況を概観してきたが、その際稿者は、作家像あるいは作家情報として名指しているものの内容特に検討することもなく使用してきた。ここでは、どのような作家像が、どのように伝播されていたのか、を検討してゆくことにしたい。

作品の批評のためなり、その評判を語るためなり、作家をその俎上に載せるテキストは、かなり早い時期から見られるようである。比較的早い時期のまとまったものとしては、吉田香雨『当世作者評判記』（太華堂、明治二四年）などがあげられようか。ただし、ここでは山田美妙、尾崎紅葉、森鷗外などがそれぞれ章をあてて論じられていくが、その書名の通り彼らの「評判」やその文章の特色などが述べられてゆくにすぎず、ここで注目されるべき意味での作家情

報を伝達する意図は感じられない。

焦点を定めねばならないのは、作家についての情報それ自体が価値を持つとみなされ、楽屋話的な情報の開示自体が記事と化するような種類のテクストである。この種の情報はそれ以前からも散発的にはあったろうが、顕著に増加しはじめ情報としてまとまった量をもつのは、前述の通り、ほぼ日清戦争後とみてよい。そこでは作家は彼自身についての情報がそれ自体で価値を持ち、また彼の創作の秘密などが積極的に明かされるような位置に立たされている。

それでは、そのような状況下で伝達される情報の質とは、いったいいかなるものであったのか。まずは次の記事から見ていこう。

◎高浜虚子が俳句に巧妙にして、造詣する所、淵深なるは世皆知らざるものなし、而して未だ氏に面晤せざるものは其の風采を想見して歳齒四十、五十の宗匠なりとなすもの多しと聞く、焉ぞ知らん、氏は漸く妙齡二十三才の若宗匠（後略）

香川怪庵『文士政客風聞録』（大学館、明治三二年、5頁）

◎渠れを目して文壇の策士なりと云ふ、是れ蓋し渠れを誤れるの見にあらざるなき乎。渠れは風丰颯爽、而して沈重温籍の風あり、人に対して敵手を買はず、絶えて気焰を吐かず、桂月會て彼れを評して曰く、『樽牛は文章程悪き人物に非ず』と。

「新声」同人編『明治文学家評論』（新声社、明治三四年一〇月、167頁）

右にみられるような作家の個人情報、そこで伝えられる記事の代表的なものである。作家の書いた作品とは直接関係のない彼の年齢や風貌、人柄などが紹介されていく。むしろその情報は既知のものであつては価値がなく、それゆえに、よく「実は、彼は……」式の裏話の文法がひとつの話型ともなる。作家の個人情報その他、転居や、旅行などの文壇消息的な情報もさかんに伝達された。また、作家たちの人柄をほのめかす逸話やゴシップなども、好まれる題材であつた。

○森鷗外（林太郎）少年十四才の時、すでに読売新聞の投書家たるを託されしことありと、鷗外が文の洗練巧緻なる知るべき也彼毎日鶏卵二十個を喰ひ、鉄棒一百を揮ると。

香川怪庵『文士政客風聞録』（前掲）83頁

◎『露伴』明治二十二年の冬『露伴々』の一篇を金港堂に売るや、原稿を金に代へしは始めての事なれば、喜び抑ふる能はず。今日を限りぞと人々の足を空なる大晦日に、友を携へて野州に遊び、更に信州に赴き、「中略」羽あらば飛び揚がらん程の大得意となりて京に帰れば、囊中一錢をとどめず。自ら曰く、經濟の妙を得たるに感ぜりと。『文壇風聞記』（前掲）4―5頁

失敗談や、それらしき、意外な一面、その他さまざまな作家の人柄を窺わせる逸話やゴシップが、面白おかしく、あるいは秘密めか

して語られてゆく。作家や文壇の消息それ自体に価値をおくこれらの情報群は、既述のように作品とは独立した形で伝達されてゆくのだが、その一方で、これらの情報により形成された作家像が、彼の作品とある種の照応関係を形成していることにも、注意を向けねばならない。先にすこし触れたように、たとえば泉鏡花の奇癖を紹介しながら、「是を以て彼が陰鬱深刻の作に連想し来れば、大に解し得るものある也」とコメントが付されたり、江見水蔭を評して「吾人渠の小説を見るに失恋のもの多くして、円満なる恋を描きしもの無し、これ恐らくは渠自らその境に在るに因りて涌起せし思想に非ざるなき乎」(前掲『明治文学評論』210頁)としていたりする。

このような思考は、おそらく次のような認識にその祖型を求められよう。「今の作家往々評家の人身攻撃に渉るを咎む、吾人敢へて甚しく之を否とする者にあらず、蓋し作物は作家の影なり、作家大なれば、従て大に、作家濁れば亦従て濁る。作について望まんとせば、必ずや批判を作家の身に及ぼさざる可からず」(『小観』『新声』第二巻第二号、M30・2。「作物は作家の影なり」という箇所からもわかるように、作家の性向・人格が彼の作品に反映する、という発想が認められる。

『新声』などが積極的に行つた作家像の伝達は、この種の発想に訴えることによつて読者を獲得していったと考えるべきだろう。そして「大」、「濁る」といった漠然とした感想から、作家の生活や人物像に密着した、より具体的かつリアルタイムな情報にもとづく想像へと、読者たちを導いていったと考えられる。鏡花の奇癖と作品

とを結びつけるような読書は、ここにおいて可能となる。

念のため確認しておけば、この種の読書は、作品と作家との交差というところで想起されることの多い、「私小説」的な読書ではない。ここで言うのは、あくまで作家の人格や生活態度などが作品に現れる(そして作品から読みとれる)というレベルの交差である。「私小説」的な読書が可能になるためには、作品中に作者その人が登場するタイプの小説が生まれていなければならない。そしてその種の作品は、この時代、皆無に近い。

このような作品と作家情報との交差が生ずることによつて、文士の品格問題が喧しく論議される状況が生まれ始める。明治三年後半から三四年にかけて、文芸と道徳の関係を論じようとする試みが相呼応して現れているが、この問題系のうちのひとつの主要な課題が、作品と作家との関係性をめぐるものであつた。たとえばそのうち無署名「作者と作物」(注10参照)は、作家の素行と作品の価値が別であることを認めつつも、「その詩に於て、高潔を説き、人道を論じ乍ら、實際その作者は、これと反対の性行を有して、居る云ふことを、知つた場合には、果してよく不快の観念を生ぜしめずして、止むことが出来るであらうか」(傍点稿者)と言う。記者はこの問題を一種の感情論として提出しているが、重要なのは傍点部である。すなわち、読者が作者の「性行」を知りうると仮定して議論がなされている点であり、その作家についての情報と作品の内容とが、切り離しえないものとして考えられている点である。

〈文壇照魔鏡事件〉(明治三年)¹¹を(事件)として成り立たせた

のは、実はこのような読書のあり方である。「強姦」「銃殺」「喰
 逃」「剽窃」、ありとあらゆる罪悪を列挙し、与謝野鉄幹の「背徳醜
 行」を暴く『文壇照魔鏡』は、そこに訴えた。「詩人を評価品隋す
 るの標準は、単に其作物のみに依るべきもので、其性行動作の如き
 は論ずるの限りでないとは、多くの評家の一致するところであるが、
 予輩は性行動作を度外視して、単に其作品のみで詩人の価値を定む
 る事の頻る危険なるものである事を断言する」(第二 詩人と品性
 同書16頁、原文は全文傍点。歌人としての声望はいまだ高かった与謝
 野鉄幹に対する誹謗が、あれほどまでに——〈文壇照魔鏡事件〉後、
 『明星』の発行部数は激減する——効果を持ちえたのは、このよう
 な作家情報と作品との関連づけを、読者たちが広く共有し得たこと
 を示している。

また作品と作家像との関連づけに関して言えば、三〇年代の半ば
 に注目を集めた「有主張小説」と呼ばれたりもする、一群の小説の
 問題を付け加えることもできるだろう。明治三五年前後から「或主
 義を以て描かれたる作物が、少数ながらも文壇に呈せらるゝに到」
 るようになったと考えられており、菊池幽芳「己が罪」、中村春雨
 「無花果」などが「信仰の目を以て社会を描きたる」とされ、小栗
 風葉「梢の花」が「現時の想界の逆流する本能主義の思想を捉えた
 るもの」と捉えられていた¹³⁾。問題は、このような小説においては、
 「此篇〔梢の花〕の主人公斯波稜造と云ふのが、即ち作者の反影で
 ある」(『新刊短評』『新声』第七編第二号、M35・3)というように、作
 者のもつとされる理想がその小説において主張されている、と見な

されることである。このような認識からは例えば次のような、極端
 とも思える見解も生まれてくる。「純客観の描写を以て立つ者と雖
 も全然自己の影を脱し得ることは出来ぬ者であるから、如何に社会
 を直写した者としても、其奥には必ず作者の理想の影が仄めいて居
 る可き筈だ」(黒眼「文壇の戯画」『新声』第八編第四号、M35・10)。こ
 のような形での作品と作家像との交差関係もあつたことは、無視す
 ることができないだろう。

ここで、作品の附加情報のもう一つの形である、題材／モデル情
 報に目を転じておくことにしたい。前掲の新声社刊『創作苦心談』
 の広告は、その中で「作物中の人物に関する談話は興味最も深く」
 と、作品中の登場人物に関する種明かしを指して、最も興味深いも
 のと訴えていた。これはのちの言い方でいえば、モデル明かしとい
 うことになる。作品と作家情報とが関連づけられていることは確
 認できた。では作品と、その材料となつた事件・人物についての情
 報とは、どのように結びつけられていたのだろうか。

この問題を考えるときにまず検討せねばならないのが、雑誌『新
 著月刊』がその明治三〇年四月の創刊と同時に掲載した企画「作家
 苦心談」である。これは『新声』がリアルタイムに伝え、先行の論
 者も認めるように、非常な人気を呼んだ企画であった。『文芸倶楽
 部』の「名家談海」という欄や『創作苦心談』(新声社、M34・7)
 は、実はこれをまねたものである。『新著月刊』創刊号で取り上げ
 られたのは広津柳浪で、内容は自作の題材を明かすものであつた。

彼は、「今戸心中」「河内屋」「信濃屋」の「由来」となった「材料の出所」を次々と明かし、自らの「作品」に向けられた模倣の疑惑(5)に反駁してゆく。一方、『新著月刊』側の意図は、欄の冒頭で記者（後藤宙外）が述べるように、作家の「刻苦經營」を紹介し「世の輕薄なる読者、評者に三省を望」むこと、作家の創作の方法を紹介し「他日明治文学史を編まんとするものゝ参考」とすること、「美学の制作論を研究」する人間への参考とすること、の三点であった。だがしかし、この企画が喜ばれたのは、おそらくはこの両者の意図とは少々離れたレベルでのことだった。活字の向こうに隠されていた作家の創造の秘密を覗きこむ喜び、自らも作家を志す青年読者たちの技術習得のためのまなざし。宙外の真摯な言葉が語ることは裏腹に、当時（模倣疑惑）渦中の人物であった柳浪にその談話を求めるという事自体にも、すぐれてジャーナリスティックな戦略がほの見える。柳浪の意図とは関係なく、メディアに載ったとたん、その題材／モデルの情報自体がゴシップ的な価値を持つてゆく。たとえこの情報は、後に『新声』の「文壇風聞記」により次のように引き継がれる。

柳浪の作中の人物、多くはモデルあり。往年評壇を動かしたる『今戸心中』の材悉く掘る所ありしは人の知る所なるが、『紫披布』又然り、調布村(マユ)に、貌艶にして、あばずれ女あり、所謂可憐の少年銀ちゃんあり、其他の人物、大抵實際なりといふ。

『新声』第四編第六号、M33・11

モデルをめぐるこのようなメディアの文法は、柳浪に限って用いられたわけではない。「子（花袋）令閨と共に此に住んで、琴瑟好和、春風部屋に満、令閨とは太田玉若子の妹、容貌醜ならずと雖、亦可憐の人、或人戯れて曰く、是宛然花袋小説中の題材に非ずや」（『文壇風聞記』『新声』第二編第三号、M32・9）、あるいは「春陽堂頻りに小説の意匠に凝る（中略）而して画中の少女は実は三崎座の花形愛子なりと云ふ、『檜舞台』の口絵中の自転車を後にせしハイカラは、〇〇〇〇（前田曙山）の写真、驚く可き也」（同欄、第六編第四号、M34・10）。挿絵についても同様の文法が働いているところは興味深い。

作品の題材となった人物・事件に興味を抱くということは、特にこの時期に新しいことではない。新聞の三面記事のつづき物は、その種の興味に訴えることにより読者を獲得してきたのだし、小説についても、逍遙『当世書生氣質』が発表当時から、誰が誰、という噂に取りまかれていたことは知られている。ただし、注意されねばならないのは、つづき物はさておき、『当世書生氣質』の時代には、「書生の多くはモデルがあつたので、一層内部の喝采の声を高うした」（『田山花袋』『明治名作解題』『文章世界』第二巻第四号、M40・4、傍点稿者）という点である。つまり、このとき題材／モデルの情報は、限られた人々の間でしか広がることなく、だれもが参照できる形に開かれてはいなかった。三〇年代に入ってから徐々に変化しただすのは、この点である。題材／モデルについての情報が、作家の周囲にいない一般の文学趣味をもった読者たちにまで、入手可能なもの

になったのである。これはおそらく作家情報の増大と無関係ではない。作家情報に価値が見いだされるという状況は、文学関係のメディア空間において、作品だけではなく、それに附随する情報にまで伝達価値が見いだされてきたことを意味している。題材やモデルの情報は、この需要によく応えたはずである。また、作家はどのような物に、いかにして目を向けるのか、という専門化した興味からままたざしが向けられただろう。

もうひとつ、この題材／モデルを取りあげる言説の登場は、写実意識の高まりと密接な関わりを持っていたことも指摘しておこう。

このことは、先の柳浪の弁明のなかに明確にうかがえる。「自分の考では、作家の影がいつれの作にも付いて廻るやうでは、種々雑多の人物を活現する事は到底出来まいか、とおもつたのです。〔中略〕其所で、人物と言語と拳動のみをかく主義を取りました」。柳浪が主張するのは「我を脱して、人物を種々に描くこと」である。柳浪が並べ上げる「材料の出所」は、このような「我を脱して」いることの根拠として提出されていた。そもそも文芸用語として、「モデル」という語の出自自体、写実とは切っても切れない関係にあった。たとえば、おそらくは日本で初めて書かれたモデル論である田口掬汀「もでる養成論」〔『新声』第八巻第三号、M35・9〕は、

描写論の文脈で書かれている。注目に値するのは、この掬汀論にヒントを与えたのが、日本画の写実革新運動の担い手、无声会の活動だということである。〈自然主義〉を綱領として掲げ、円山四条派の写実の流れを近代化（＝西欧化）しようとした无声会の主要メン

バーであった平福百穂（新声社社友で掬汀の親友）が、その知識をもたらしたと推定される。文芸用語としての「モデル」は、写実の意識を媒介として、絵画ジャンルから文学ジャンルへと移植された（この点に関しては別稿を留意している）¹⁶⁾。

このように、作品に描かれた事件や登場人物などの取材源（つまり題材／モデル）を穿鑿するような言説は、作家情報と比べれば量的に劣るものの、三〇年代のメディアが開発していたものであった。モデルへの注目と言えば、明治四〇年の「モデル問題」が想起され易いが、「モデル問題」には、確認してきたような三〇年代の状況があつてはじめて成り立ったという面もある。問題はそれほど単純ではない。

さて作品と作家情報の間の交渉はすでに検討した。作品とそのモデル情報についても、いま見たとおりである。では作家情報とモデル情報との関係は、三〇年代のメディアにどのように扱われていたのだろうか。

作家情報とモデル情報が交差する地点というのは、すなわち、作家自身がモデルの問題に関わってゆく地点を指している。つまり、モデルをめぐるスキヤンダルに作家が巻き込まれるということである。そこには二つの場合が考えられるだろう。モデルが作家である場合と、そうでない場合である。前者においては、作家はそのテキストのモデルとして扱われ、直接的にそこに巻き込まれる。そこにおいて作家と作品とは、登場人物という項を介して、相互にそのイメージを貸与・参照しあうようになる。後者においては、作家が描

いた作品が、何らかのモデル争議を巻き起こし、そこでその争議に對する作家の関与の仕方が問われることになる。ここでは作家は、その作品と内容のレベルで交渉することはなく、その「作者」として、責任や道義性が問われてゆくことになる。どちらの場合もともに作家像とモデル情報の交渉であつても、その関わり方はかなり異なる。

結論的に言えば、三〇年代半ばを越えて、さらにその後を見渡してゆこうとするとき、どうやらこの作家情報とモデル情報の間の関係の変動こそが、真に注目されるべき変化であるようだ。というのも、三〇年代の半ばまでには、この問題系に関わつてくるような記事・事件は非常に少ない。作家情報がある程度の規模で伝達され、題材／モデルも問題となつてきている時期においては、容易にその交渉が想像されてしまふべき近さに位置しているように見えるのだが、実際はそうではないようである。この組の後者、つまりモデル問題に間接的に作家が関与する場合に言えば、たとえば「文士の徳義」「日本」(M32・6・6)が、内田魯庵(不知庵)の「人物材料」の扱ひ方の道義性について問題提起をしている例——「不知庵の落紅なる一小説は作家知己の人物を其まゝに取りつゝ而も其人物に侮辱を加ふべき事件を附着せりとの評あり」——などが挙げられる。しかし、これも三〇年代を通じての件数は多くない。

そして前者、つまり作家がモデルとなる場合に関しては、紅葉「青葡萄」の例が思い当たる程度で、ほとんど見あたらない。明治四〇年前後には、作家が彼自身なり周囲の作家たちなりをモデルと

して、作品の登場人物を造形するような状況が顕著なることを考えれば、そこになにかが起こつたとせねばならない。明治三〇年代後半から四〇年代にかけての、作品の創作／受容関係の大きな屈曲点は、どうやらこの問題系の変移に存しているようである。詳述する余裕はすでないが、見通しだけ簡単に述べよう。数的に必ずしも多くなかつたモデル情報は、明治四〇年前後の新聞メディアの文芸欄興隆にあわせて数を増すとともに、その享受層を一般の読者にまで広げる。さらに文学ジャンルで進行していた作品の取材源の作者身辺への狭隘化と連動し、情報価値が相対的に高まつてゆく。「モデル問題」や「蒲団」の話題性は、このあたりの変化と密接に連関している(拙稿参照)。

投書雑誌を中心として見た、作品と作家情報、モデル情報をめぐる明治三〇年代半ばまでの状況は、おおむね描けたと思う。次はこれを踏まえた上で、四〇年前後の状況への変移のありさまを見とどけることが課題となる。本稿で確認したことを視野に入れてゆくと、明治四〇年前後に隆盛を見せる新聞メディア上の文壇消息報道や、「モデル問題」の論議などに関して、新たな面が見えてくると考えている。¹⁹⁾

注(1) 引用は「落葉館」(『新声』M32・6)の(杉の村)の投書。同様のものに、同二月の、(湖州)(吉田生)の投書、「記者と読者」(『新声』M33・9)などがある。

(2) 明治二九年七月から明治三六年八月まで。区分は岡野他家夫「雑誌

- 〔新声〕(復刻版『新声』ゆまに書房、一九八三年、解説)に従った。
- (3) 佐藤義亮、『新声』についてのデータは以下のもを参照した。前掲、岡野他家夫「雑誌『新声』」。佐藤義亮「出版おもひ出話(新潮社出版部編『新潮社四十年』新潮社、一九三六年一月、所収)。天野雅司編『佐藤義亮伝』(新潮社、一九四三年八月)。「二万部」の言及は佐藤義亮「出版おもひ出話」(52頁)による。
- (4) 永嶺重敏「雑誌と読者の近代」(日本エディタースクール出版部、一九九七年七月)。特に第三章の『太陽』の読者層の分析が、『新声』『文庫』などの読者層も明らかにしている。
- (5) 『文章世界』第二卷第十三号(M40・11)。木村毅「解題」『明治文学全集92 明治人物論集』(筑摩書房、一九六〇年五月)も同様の指摘をしている。
- (6) 日本における写真版印刷は、小川一真が明治二三年に実用化する。この技術革新が『日清戦争実記』などの写真雑誌に大成功をもたらしたことはよく知られている。川田久長「活版印刷史」(印刷学会出版部、一九八一年一〇月)などを参照。
- (7) 第四編第六号、七号の「記者と読者」欄参照。たとえば、『秋風琴』非常に面白し。乞ふ記者閣下の肖像其他文士各位のも掲載有之ては如何。余程売口よきかと思ふ。(無名子、第六号)。
- (8) 『新声』が第六編に入ってから頻出する、一橋斎という筆号の寄稿者の名前を明かせという要望もこのような意味で興味深い。(作者探し)については、紅野謙介「戦争報道と(作者探し)の物語——『大阪朝日新聞』懸賞小説をめぐる——」(岩波『季刊文学』一九九四年夏)の論考がある。
- (9) たとえば◎赤門出身の文士は、年毎に減してゆくやうだ。蝶二や是因や、これ等がまつ近頃新たに出た人の中で錚々たるものかと思へば惜げなくなる。(壺中放語『新声』第四編第五卷、M33・10)、あるいは◎青柳有美 昨年の夏より秋迄秋田に遊び、『魁新報』の編輯を助く、傍ら例の芸者研究をなして、盛に之を発表す。同新聞為めに一時恋愛新聞と称せられき。(文壇風聞記『新声』第五編第一卷、M34・1)。
- (10) 後藤宙外「詩人を評価するの標準」(『新声』第四編第四号、M33・9、臨時増刊「秋風琴」号、後藤には同名の論文が同月の『新小説』にある)、高山樗牛「文明批評家としての文学者」(『太陽』M34・1)、無署名「作者と作物」(『新声』第五編第五号、M34・5)、島村抱月「文芸と道徳」(『新声』第五編第六号、M34・6)など。
- (11) 小島吉雄「文壇照魔鏡」秘聞(『山房雜記』桜楓社、一九七七年四月、192-199頁)は、『文壇照魔鏡』が実は一条成美の材料提供により、佐藤橋香と田口掬江が書いたものであることを明かしている。谷沢永一「探照燈55 照魔鏡前後余波」(『解釈と鑑賞』一九九一年二月)の示唆による。『文壇照魔鏡』の引用は、湖北社一九九〇年一月発行の復刻版によった。
- (12) 登阪北嶺「愛!恋!情!」を読む(『新声』第九編第五卷、M36・5)。文字どおり何かの主眼のもとで書かれた小説、ほどの意味。
- (13) 「覚醒の機来たらんか」(『新声』第七編第二号、M35・2)。これらのテクストのいくつかは、現在では「家庭小説」と分類されることが多いが、当時にはこのような視点も存在していたことを指摘しておきたい。
- (14) 『新著月刊』にして、同誌の社会に歎ばるゝ所は、おもに「作家苦心談」に在りと云へば、吾人安んぞ嘆せざるを得んや。(『小観』『新声』第三卷第一号)。あるいは『新著月刊』の作家苦心談に対して、『文芸倶楽部』に作家気焔録とでも云ふべきも出でななどと呼びありしが、そは此名家談海のことにや。(『小観』同誌第三卷第二号)。また、不二出版発行(一九八九年四月)の『新著月刊』復刻版所収の山本昌一氏の解説も参照。「作家苦心談」は、明治三十九年九月に春陽堂から『唾玉集』として再編・刊行されている。
- (15) 実はこの柳浪の談話には、彼が当時巻き込まれていた(模倣疑惑)に反駁するという意図があった。岩波文庫『河内屋・黒蜥蜴他一

- 篇』の本間久雄氏解説が要を得ている。
- (16) 日比「文芸用語としての「モデル」・小考——新声社と无声会——」『文学研究論集』15、一九九八年三月。
- (17) 登場人物の職業が、小説家として設定されているという意味ではない。また、独歩や風葉のある種の作品が、彼ら自身を登場人物としていることは知られている。しかし、それらの作品も、発表当時にモデル情報という形で読者に知らされたわけではない。
- (18) 「蒲団」については日比「蒲団」の読まれ方、あるいは自己表象テキスト誕生期のメディア史」『文学研究論集』14、一九九七年三月。
- (19) この点については、日比「モデル問題」とメディア空間の変動——作家・モデル・（身辺描き小説）——」『日本文学』536、一九九八年二月で論じた。また明治四〇年代における作品と作家情報・モデル情報の具体的な交渉のありようは、永井荷風を例にとつて検討してあるので、以下を参照いただければ幸いである。日比「掃国直後の永井荷風——「芸術家」像の形成——」『日本語と日本文学』26、一九九八年二月。

蒲原有明とマラルメ

佐藤伸宏

蒲原有明の象徴詩の達成を示す第四詩集『有明集』（明治四一・一、易風社）の詩的世界は、先に考察を加えたように、矛盾、葛藤を重ねる内面の状況の自立的な形象化の試みを通して生成する。「言語が自からに歌ふ新天地」として成立していたと言うことが出来る。有明の詩論「現代的詩歌（中）」（『東京二六新聞』明治四一・一一・一九の一節を引用してみよう。

詩の中に常に生命を保つて顛動する言語は単に思想や感情の符徴——媒介物であつてはならぬ。そんな重荷を背負はされた言語ほどみじめなものはない。（中略）

死語の顛列、唾の文字の緩慢な配合——かゝる言語の使ひざまを卑んで、吾人は早く言語の自然に帰らねばならぬ。世間的言語の輪郭が滅え失せて、言語が自からに歌ふ新天地の光明を仰がねばならぬ。

ここに判然と示されているように、象徴詩の創出に向けられた有明の詩的営為の中心に存していたのは「詩の言語」に関する固有の

認識であり、「世間的言語」から「言語の自然」を奪回した詩的言語によって構築される自立的な別乾坤を志向するところに有明の極めて自覚的な詩作の方法があつたのである。ところでこうした有明の言語観は、次のような発言と殆ど同一の内容を備えていると言つてよいだろう。

詩的言語 (la parole poétique) は最早ある個人の言葉ではない。即ち詩的言語に於いては、誰も語っていない、語っているのは誰もでない。ただ言語だけが自らを語っているように見えるのである。その時、言語はその全ての重要性を取り戻す。言語は本質的なもの (l'essence) となり、本質的なものとして語る。それ故詩人に委ねられた言語は、本質的な言語と呼ばれうる。それはまず第一に、語は主権 (l'initiative) を握っており、何物かを示したり、何者かに語らせたりするのに使われるべきではなく、それ自体の裡にその目的を持っていることを意味する。以後、語っているのはマラルメではなく、言語が自

ら語る。作品としての言語、言語の作品が自らを語るのである。

右の一文は、フランス象徴主義の中心的存在、ステファヌ・マラルメに於ける詩的言語の様態をめぐるモーリス・ブランシヨの指摘である。ブランシヨの論じるマラルメの言語観が如上の有明のそれと鮮やかな相似性を見せていることが確認されよう。両者の詩的理念の枢要をなす詩的言語の認識に於けるこうした類縁性は、有明の象徴詩の問題を考える上で看過しえぬ意味を担っているはずである。本稿では、ブランシヨの指摘を踏まえ、両者の詩的理念の裡に認められる類縁関係を視野に入れながら、マラルメとの対比に於いて蒲原有明の詩的営為の担う意義について検討を加えてみることにしたい。

一

第三詩集『春鳥集』（明治三八・七、本郷書院）以来、一貫して象徴詩の創出に専心していた有明は、フランス象徴主義の巨匠であるマラルメ、上田敏によっていち早く象徴派の「父」として紹介されていたマラルメをどのように捉えていたのか。岩野泡鳴の訳書『表象主義の文学運動』（大正二・一〇、新潮社）の書評として執筆された『表象主義の文学運動』に就て『新潮』大正三・二にはマラルメへの言及が見出されるが、それによれば、有明のマラルメ観は肯定と否定の両面に相渉るものであった。即ちマラルメを「象徴の玄旨を会得した第一人」として極めて高く評価しつつも、その一方で

「象徴の大用上に於て自縄自縛に陥り、「象徴を自覚して象徴を失つた」点を強く批判しているのである。こうしたマラルメに対する両義的評価はどのように理解されるべきであろうか。

有明がマラルメ、そしてフランス象徴主義についての理解を深めてゆく上で決定的な役割を果たしたのは、周知の如くアーサー・シモンズの『象徴主義の文学運動』(*The Symbolist movement in literature*, W. Heinemann, 1899)であった。有明がこのフランス象徴主義の詩人に関する評論集を入手した時期は定かではないが、既述の『表象主義の文学運動』に就て「仏国象徴派の顕露的理論の最上乘」の書としての本書の耽読を通して有明の象徴主義観が形成された証跡が判然と認められる。

さてこの『象徴主義の文学運動』ではジェラール・ド・ネルヴァル以下、八名のサンボリスムに関わる作家たちに分析が加えられているが、シモンズはその序に於いてまずサンボリスムを「眼に見える世界がもはや唯一の実在ではなく、眼に見えない世界がもはや幻影でもないような文学」と規定した上で、その核心を「コレスポンダンス (correspondences)」の裡に見出す。「万物が生き、万物が運動し、万物が互いに照応している (all things correspond)」と、「この世に造られたあらゆるものの無限の連鎖 (the infinite chain of created things)」を確信していたネルヴァル、「宇宙の一切の照応関係 (all the correspondences of the universe)」を包含する至高の〈音楽〉」を希求したマラルメ、そして「全世界を一つに結ぶ環を確立し、宇宙の随所にゆきわたる、永遠で、精緻で、煩雑で、ほとん

ど眼には見えない生命を確認する」ことに象徴主義の実現を求めたユイスマンスなど、シモンズは、個々の詩人、作家の象徴主義的管為を辿りつつ、その帰趨を、可見、不可見を問わず宇宙の万物が互いに照応関係を結んでいるという（万物照応）、「コレスポندان」の認識の裡に見出しているのである。このような「コレスポندان」の理論を中核に据えた象徴主義の定義は、例えば「詩人の覚悟（下）」（『東京二六新聞』明治四一・六・八）に表明されている有明の見解と明瞭な対応を見せていると言ってよいだろう。

内界と外界とは相互に交渉関聯を持続しつつあるものだ。執れを主とも客とも判別しかめるところに複雑な微妙な調子や色合ひが現れる。この交渉関聯（ポオドレエルが、Correspondances」といふネットワークを書いてゐる。）は本来円融無礙なるもの、ここが真の自由の境界、ここが即ち象徴主義の胎を受くるところだ。（中略）

近代の文学は人間中心の思想を脱し来つたところに深い味ひがある。「自我」と、外界の現象と、現象の裡に潜んである広大な自然の力との相互の関聯を尋ねる時に、幾多の起伏があり、幾多の光彩錯落たる生趣に実参し得るものである。是れ以上何物もなく、また本来別天地のありやう筈もない。

ここには、「内界と外界」の「交渉関聯」、「Correspondances」を象徴主義の母胎と見なす有明の見解が明快に語り出されている。こうした理解が、シモンズの提示した象徴主義の定義に強く方向付けられていたであろうことは疑いを入れない。『象徴主義の文学運

動』は、有明の象徴主義観の形成に確実に関与していたと考えられるのである。

ところで同書の全体を通してサンボリスムの文学運動の中心をなす詩人たちの系譜が周到に辿られていることは注目に値する。即ちそれは、ネルヴァル、ヴェルレーヌ、マラルメの三者を結ぶ系譜であり、そこで最も強調されているのは、既述の「コレスポندان」の理論とともに、詩に於ける言葉の問題に外ならない。（喚起の機能をはたす言葉（words are used as the ingredients of an evocation）（ネルヴァル）、（理性の言葉（speech of the reason）ではなく魂の言葉、眼の言葉（speech of the soul, speech of the eyes）（ヴェルレーヌ）、（生きたもの（living thing）、現実ではなく寧ろヴィジョン（vision rather than the reality）としての言葉）（マラルメ）という、これらの詩人によって個々に進められた詩的言語の追求が、この系譜を性格付ける重要な論点として提示されているのである。そしてその上で、無自覚の裡に象徴主義的「ヴィジョン」を追求したネルヴァルと「直観（divination）」によって象徴詩の実現を果したヴェルレーヌに対して、マラルメがその理論化を行った存在として位置付けられる。換言すれば、サンボリスムの「発端（origin）」をなしたネルヴァル、象徴主義を「予見」したヴェルレーヌ、そして「理論家（theorist）」としてのマラルメという展開が、シモンズの論じる象徴主義文学運動の骨格をなすこととなるのである。

以上のような概観を通して、本書に於いてマラルメが占める位置

の重要性を確認することが出来よう。フランス象徴主義は、マラルメを俟って初めてその理念の確立を見たと思えられているのであり、こうした論旨に即して、「ステファヌ・マラルメ」と題された書中の一章には、マラルメの詩論の断片的な翻訳が列挙されることになる。

私が花と言う。すると私の声がその全ての輪郭を忘却に委ねる、その忘却の中から、既知の花とは別の何かとして、いかなる花束にも不在の花、香しい、観念の花が音楽的に立ちのぼってくる (musically arises, idea, and exquisite, the one flower absent from all bouquets)。

純粹の著作は語り手としての詩人が消えることを意味する。詩人は言葉に席を譲るのである (The pure work implies the elocutionary disappearance of the poet, who yields place to the words)。言葉は互いの不等性の衝突によって固定し動かなくなる。寶石の上を走る燃えるような現実の光の連なりのように、言葉同士が反射し合って光を発する。それが旧来の叙情詩の息遣いとかロマン派の情熱的な文章傾向に取って代わる。

マラルメの「詩論の主軸」を示す意図をもって列挙された一連の詩論の翻訳の中で、右は、何れも「詩の危機 (Crise de vers)」からの引用である。この一文には、詩的言語に関するマラルメの認識が端的に告げられており、詩人は消滅して言語に主導権を譲渡するという言語の自立性の追求を通して、現実には不在の、観念そのもの

としての「花」の喚起を企てるマラルメ詩学の枢要が語り出されている。このようなフランス象徴主義の「理論家」マラルメの詩論の紹介に続く、「かくして文学がいかなる意味に於いてでも前進すべきものであるならば、今それが進むべき道は、言葉に魂を吹き込み (spiritualising of the word)、形式を完璧に整えて隠喩や暗示に堪えるようにし、眼に見える世界と見えない世界との間に永遠の対応がある (the eternal correspondences between the visible and the invisible universe) ことを確信する方向に向かうべきであって、これこそマラルメが説き、少しずつ実践したところであった」という一文でマラルメ論は閉じられる。既述のサンボリスムの定義を踏まえたこの一節によって、本書の中でマラルメがまさに「象徴主義の文学」の意義を集約的に体現する存在として位置付けられていることが理解されよう。

『象徴主義の文学運動』の論旨を以上のように整理してみる時、シモンズの提示するサンボリスム、その中心的存在であるマラルメの詩的理念が、「現代的詩歌」および「詩人の覚悟」に披瀝されていた有明の象徴主義観と深い対応を孕んでいることが十分に確認できるはずである。「コレスボンダンス」の理論を象徴主義の文学の中核に据える観点のみならず、詩的言語の問題、とりわけ「語り手としての詩人は消え」、「言葉に席を譲る」とするマラルメの見解は、有明の所謂「言語が自からに歌ふ新天地」への志向と明らかな照応を示していると言えよう。有明は、『象徴主義の文学運動』を熟読することを通して自らの象徴主義理解を深め、とくにシモンズの論

じたマラルメの當為に近似した方向に自己の詩的理念を形成していったと考えられるのである。

しかしそれならば、有明がマラルメに対して否定的評価を下したのは何故であったのか。『表象主義の文学運動』に就てには次のような批判的言辭が見出される。

マラルメの体得したところは実相世界の極致ではあるが、まだ法爾自然なる絶対的本有の事相の相互の間に行はるる交徹無碍の大有に順応して、いつも同時である無盡の印現と開展を自己の肉身に盡すといふところがなかつた。この一無碍法界の妙が、私の今日確信する象徴の全義である。これを彼の無相象徴に対して、便宜上、事相象徴（絶対的——本有的）として、私は區別して置きたいのである。そしてマラルメの押迫つて行つたところは、絶対的現実の境界であつたのである。象徴を自覚して象徴を失つた点である。私が無相象徴といふのはこのところである言ふのである。

ここには、「マラルメをして遂に詩の上で沈黙に終らしめ」た要因をめぐって、「法爾自然なる絶対的本有の事相の相互の間に行はるる交徹無碍の大有」を体得しえなかつた詩人の「無相象徴」への批判的な言及が行われているが、これらの発言の中に仏教語が鏤められていることは注目ししよう。前引の「詩人の覚悟」に於いても「内界と外界」との「交渉関聯」、即ち「コレスポダンス」が「円融無礙なるもの」と捉えられていたように、有明に於ける象徴主義と仏教思想との交差の様相がここに判然と認められる。従つて

マラルメへの批判の背景には、このように「一無碍法界の妙が、私の今日確信する象徴の全義である」とする有明の、仏教を基盤とした固有の象徴主義観が存在していたと推測することが許されよう。

実際、「象徴詩の方の理論と、仏教の世界観とは、余程似寄つたものであることは争はれない。（中略）象徴詩と云ふものは、僕に取つては芸術であると同時に宗教であつた」（『芸術に行かんか、宗教に行かんか』、『新潮』大正二・六）という証言に示されているように、有明に於いて「象徴詩の方の理論」と「仏教の世界観」は深い近似性によつて結ばれていたのである。以下、有明固有の象徴主義観の形成について、仏教との交渉を視点として考察を加えてみることにする。

二

有明と仏教との接触は「十八九の時分」、父親の蔵書中の『大乘起信論』を繙き、その「深奥な哲理を、及ぶ限り頭の中に叩き込まうとした」（『芸術に行かんか、宗教に行かんか』）ことに始まる。以後、有明の仏教への親炙は晩年に至るまで変わることがなく、そのエッセイ等には数多くの仏教書への言及が見出されるが、そうした中で、仏教への傾斜の機縁をなし、終生に亘つて「不即不離」の關係（『夢は呼び交す』）を保ち続けた『大乘起信論』は、有明の詩的理念の形成に深い関わりを持つていたと考えられる。例えば、島崎藤村の『食後』（明治四五・四、博文館）に寄せた序文『食後』の作者に「には次のように記されている。

矢張僕の神経や肉の纖維には仏教の虫が食ひこんで居ると見える。古本の紙魚を日光にさらして払ひ落すやうに、この仏教の虫が払ひ落せるものか、どうか。この虫がそもそもも転変窮りなき夢を見せるのである。刹那の生滅を如幻の鏡に映し出すのである。(中略)僕は涅槃に到達するよりも涅槃に迷ひたい方である。幻の清浄を体得するよりも、寧ろ如幻の境に暫く倦怠と懶惰の「我」を寄せたいのである。睡つて居る中に不可思議な夢を感じるやうに、倦怠と懶惰の生を神秘と歓喜の生に変へたいのである。無常の宗教から蠱惑の芸術に行きたいのである。

仏教への親炙を背景としつつ『蠱惑の芸術』への志向を語る右の一節に於いて、「刹那の生滅を如幻の鏡に映し出す」という一文には、恐らく『大乘起信論』受容の事実を認めることが可能である。同書中に於いて、「生滅因縁」をあらしめ、「不覚相」を現出する「意」の一つ「現識」について、「三者名爲現識、所謂能現一切境界猶如明鏡現於色像、現識亦爾」と記されているが、この「明鏡」に映し出された「色像」とは「隨染業幻所作」、即ち「不覚」によつて生じた、実体を持たぬ「幻」に他ならない。

当知、世間一切境界皆依衆生無明妄心而得住持。是故、一切法如鏡中像無体可得、唯心虚妄

と述べられるように、『大乘起信論』に於いて、現実の一切の事象の比喩として呈示される「鏡中像」とは、「心」が生み出した「虚妄」の影像なのである(「三界虚偽唯心所作、離心則無六塵境界。此義云何。以一切法皆従心起、妄念而生」。従つて、こうした「不

覚」「無明」の相に於いて「妄念」「妄心」「分別」の所産として現出する「幻」に対して、有明は「転変窮りなき夢」を見出し、その「如幻の境」に「我」を託すことを通して「蠱惑の芸術」の生成を希求していることになる。仏教書としての『大乘起信論』はそうした「無明」の状態を脱し、「不生不滅」の「心真如」の境位を獲得するための実践的な修行について論じてゆくことになるのであるが、有明は仏教に傾倒しつつも「涅槃」に到達することを求めるのではなく、有明が志向するのは、「如幻の境」の裡に成立する「蠱惑の芸術」に外ならないのである。

後年執筆の自伝的散文『夢は呼び交す』(昭和三二・一一、東京出版株式会社)に於いて有明は、主人公鶴見に仮託して『大乘起信論』との関係についてこう記している。

鶴見は部屋に引き籠もつてゐて、その時分はよく起信論を抜いて読んでゐた。そして論の中のむづかしい課題である、あの忽然念起をいつまでも考へつづける。(中略)鶴見は鶴見で、起信論とは不即不離の態度を取つて、むしろ妄心起動を自然法爾の力と観て、その業力に、思想の経過から言へば最後の南無をささげようとしてゐるのである。魔を以て魔の浄相を仰ぎ見ようとするのである。鶴見はさういふところに信念の糸を掛けて、自然に随順する生を管んで行かうとしてゐる。

ここに語られている「忽然念起」「妄心起動」とは、「忽然」として「心」が動くこと、その「妄心」によつて「妄境界」(真実には存在しない対象、即ち現実の一切の事象)を仮構してそれを実在と

見なす「無明」の状態の謂である。有明はまさにそうした「無明」の境位に於ける「忽然念起」を「自然法爾の力」「業力」と捉え、そこに現出する「如幻の相」に身を委ねようとする。このように徹底して「不覚」「無明」の境界の裡に芸術の存立を託し、「魔を以て魔の淨相を仰ぎ見ようとする」有明の背後にあるのは、「人間は劫初以来迷妄に徹してゐる」「檀の木」「新古文林」明治三九・一一」と見る人間認識であつただろう。「特に錯綜した妄念によつて繋がれてゐるのが人間である。人間はそこに罪深くも思想として迷妄世界を建立する」(『夢は呼び交す』)と記す有明に於いて、人間が遂に「迷妄」「妄念」を脱することの出来ない存在であるが故に、寧ろ「忽然念起」を「自然法爾の力」と捉えることによつて、その「業力」に人間の創造する芸術の存立が賭けられることとなつたに相違ない。このように『大乘起信論』に依拠しつつも、有明は「不覚」「無明」のうちに生成する「如幻の境」「妄境界」にこそ自己の文学の成立の場を見出してゐたのである。そして恐らくこうした言わば現実の事象の一切を肯定的に受容する姿勢こそが、既述の「円融無礙」という世界観への有明の接近を促したと考えられる。

「円融無礙」とは、華嚴思想に於て、現実の個々の事物がそれぞれ独立自存しつつ互いに完全に融和し、一切の妨げなく深く調和している状態を示す。この「円融無礙」に関しては、前引の「詩人の覚悟」の外、『表象主義の文学運動』に就て「に於いても、『法爾性然の』『法界の交徹無碍なる大用』、或いは『常恆徧礙に行はれてゐる』融攝無碍なる法界の大用」として言及がなされているが、

それは、先に触れたマラルメに対する批判的評言中の「法爾自然なる絶対的本有の事相の相互の間に行はるる交徹無碍の大用」と同義であろう。これら一連の発言は、華嚴思想に於ける「円融無礙」という世界観への有明の傾斜の事実を告げている。その語るところは必ずしも明快とは言いかねるが、現実の全ての事象、あらゆる対象は、「常恆徧満」する「法界の大用」の現れとして、相互に「交徹」し「融攝」しつつ存在していると捉える現実観がそこに提示されて見ると見ることが可能であろう。華嚴思想が究極的には現象の背後の本体、或いは形而上の実体を置かない現象絶対論を展開していることからすれば、「法界の大用」を強調する論点には有明の理解の歪曲が窺われると言わなければならないが、『大乘起信論』や華嚴經等の仏教思想の個性的な受容を通して有明は、「迷妄に徹してゐる」人間の前に立ち現れる一切の事象が「法界」の顕現として限りなく交渉、融和、調和しつつ絶対の眞実の世界を開示しているという現実認識を手にするに至つたと考えられるのである。そしてそうした中で、有明に於いて仏教的な世界観とサンボリズムとを結ぶ通路が確実に開かれることとなつたと言えよう。如上の「円融無礙」と、既述のシモンズの論じる「宇宙の一切の照応関係」としての「コレスポンダンス」、「万物が生き、万物が運動し、万物が照応している」とする〈万物照応〉の理論は、確実な対応関係のもとに同定化されることになるのである。「現代的詩歌(上)」(『東京二六新聞』明治四一・一一・一八)には、「感能と幻想の迷妄の世界を掩ふ空気の中に傳はる幽微なる波動——(中略)この一種の波動があつ

てこそ迷妄の世界が忽然と、新しい真実の世界を展開する。この波動を染々と感じて所謂サンボリストは生れて来たのだ」と記されているが、この指摘は、前引の「一無碍法界の妙が、私の今日確信する象徴の全義である」との発言とともに、有明に於ける「象徴詩の方の理論」と「仏教の世界観」との緊密な結合の様相を端的に告知しているはずである。仏教的世界観を基盤として形成された詩的理念が、シモンズを媒介として、サンボリスムの理論に接合される形で有明の象徴主義観は成立したのであり、先に述べたマラルメに対する批判とは、そうした有明固有の象徴主義の理念を前提としてなされていたと言いうことが出来る。

ただし有明の批判がそもそもシモンズの描き出したマラルメ像に對するものであったことも看過しえぬ事実である。既述の如くシモンズはフランス象徴主義に於ける最も重要な存在としてマラルメを位置付けているのであるが、その評価には微妙なニュアンスが込められている。即ちマラルメは「絶対という到達不可能なものに達しようとする絶対的な意図(an absolute aim at the absolute, that is, the unattainable)」に貫かれていたとシモンズは言う。マラルメの嘗為を「あまりにもかけはなれた夢(too remote dreams)」の追及と見なすこうした指摘は、取りも直さずマラルメの理念の実現の困難を、寧ろその不可能性への言及であると言つてよいだろう。有明が、マラルメが「遂に詩の上で沈黙に終」わったことについて、「マラルメの押迫つて行つたところは、絶対的現実の境界であつた」と述べ、その「絶対的現実観」を批判した時、その念頭にあつたのは恐

らくこうしたシモンズの指摘であつたに相違ない。そしてそうしたマラルメの不可能性に対して有明は「無相象徴」という在り方にその要因を見出し、それと「区別」される「独朗天真なる現実観」に立つ「事相象徴」を自らの立場として提示していたのである。「無相」に對置された「事相」という仏教語が具体的、現実的な事物の相を示すことから理解されるように、「事相象徴」とは、「法界」の顕現体としての具体的な事物に即した、「一無碍法界」、「円融無礙」の世界観に基づくものに外ならないだろう。有明のマラルメに對する批判的評言とは、このようにシモンズの指摘を踏まえつつ、それを仏教的世界観を基盤とした自身の象徴主義の理念によつて解釈したところに成立していたのである。換言すれば、それはシモンズのマラルメ論を前提とした評価に外ならない。そして本論の冒頭に引用したモリス・ブランシヨの発言は、シモンズの評論の埒内で提示された有明のマラルメ観とは別途に認められる両者の類縁關係を示唆するものと言えよう。有明とマラルメとの關係は、「象徴主義の文学運動』の論旨を離れたところで更に検討が加えられなければならない。

三

不幸にも、詩句をここまで深く掘り下げてきて、私は二つの深渊に遭遇し、それらが私を絶望させた。その一つが(無(No Meaning)で、私は(仏教)も知らずに、そこに到達した。(中略)私を押し潰さんばかりのこの想念が、私に仕事を放棄させ

てしまった。そうだと、私には、わかつて、いる、我々が物質のむなし形態 (de vaines formes de la matière) でしかない、⁽⁸⁾ ということは。しかし (神) と我々の魂を創り出した程に、卓越した形態なのだ。友よ、これは実に卓越しているから、物質の演ずるこの劇を、私は私自身に上演してみせたいと思つてゐる。即ち自分が物質であることを意識しつつも、夢中になつて、存在しないことを自ら承知しているはずの (夢) の中に飛び込んで、(魂) と、太古の昔から我々の内部に蓄積されてきた同じく神々しい様々の印象とを歌う、つまり、これこそが真である (虚無 (le Rien)) の前で、これらの栄光にみちた虚妄を声高らかに宣言するのだ。これが私の抒情的著作の計画である。

そしてその表題は恐らくこんな風になるだろう、『虚妄の栄光 (La Gloire du mensonge)』、または『栄光にみちた虚妄 (Le Glorieux Mensonge)』。私は必死になつて歌うだろう。

一八六六年四月二八日 (推定) 付、アンリ・カザリス宛のマラルメ書簡の一節である。⁽⁹⁾ 『エロディヤード (Hérodiade)』の創作に甚だしく難渋する中で遭遇した深甚な体験を語るこの書簡は、マラルメの転回点を告知する極めて重要な証言に外ならない。マラルメは、「仏教」も知らずに「(無) に「到達」したと云う。換言すれば、ここでマラルメが達着したのは仏教的な (無) に相同する想念であり、それは、人間の存在が「物質のむなし形態でしか」なく、また「(神) と我々の魂」もその (無) から創り出されたものに過ぎないことを認識させる。即ちマラルメが到達したのは、一切の存在

の本質形態を、実体としての価値を持たない (無) と見なす認識であり、「これこそが真である (虚無)」という言葉はそうした思考の端的な表白と言えよう。マラルメはここで仏教的な無或いは空観と殆ど同一の認識に立っている。そして以後のマラルメの詩的営為はこの (無) との対峙の中で進捗されてゆくことになるのである。その方向は既に本書簡に於いて、自らが「物質のむなし形態」であることを認識しつつ、「存在しないことを承知しているはずの (夢) の中に飛び込んで」「栄光にみちた虚妄を声高らかに宣言する」営みとして示唆されている。一切が (虚無) に外ならない世界に於いて (夢) もまた「虚妄」に過ぎないが、しかしマラルメは寧ろその (夢) を高らかに歌い上げることに賭けようとする。(虚無) の前で、(虚妄) そのものとしての (夢) を「必死になつて歌う」こと、そこに詩人の自由と「栄光」が見出されているのである。ここには、「歌う」こと、即ち詩作の行為を通して、言語の世界に自己を救済する方途を見出そうとしているマラルメの姿勢が判然と窺われる。こうしてマラルメは、「(無 (le Neant)) を見出した後、私は (美なるもの (le Beau)) を見出した」と語り出すことになる (一八六六年七月一三日付 (推定) アンリ・カザリス宛書簡) が、その (美なるもの) の内実が説き明かされるのは、先の書簡から一年ほどを経てからのことである。一八六七年五月一四日付の私信 (カザリス宛) の中で、マラルメは、「恐ろしい一カ年を過ごした」こと、「しかし幸いなことに、私は完全に死んでしまった (je suis parvenu à la mort)」ことを告げた上で、「今や私は非個人的

(impersonnel)である、従って、もはや君の知っていたステファヌではない、——そうではなくて、かつて私であったものを通して、自己を見、自己を展開させてゆく、〈精神の宇宙 (Univers spirituel)〉が所有する一つの能力なのである。(中略)私は〈無〉への長い下降を行ったから、十分に確信を持って語ることができる。存在するのは〈美 (la Beauté)〉だけなのだ。——そして〈美〉は唯一つの完璧な表現しか持っていない。それが〈詩 (la Poésie)〉というものだ。」と書き綴っている。

〈虚無〉との遭遇の体験の中から掴み取られた確信が表明されたこの著名な書簡には、唯一〈詩〉によってのみ表現される〈美なるもの〉が〈精神の宇宙〉としての〈美〉であることが提示されている。同時にその〈美〉は、〈私の死〉、「非個人 (非人称) 化を通して実現されるものなのである。〈神〉の死そして個人としての〈私〉の死という徹底した〈虚無〉の認識の中から、〈精神の宇宙〉としての〈美〉の詩的生成を志向するこうしたマラルメの理念には、所謂言語行為の主体としての人間という西欧的知の伝統をなす主体概念と対峙をなす見解が示されている。即ち語る主体たる人間が道具としての言語を用いて対象である事物を指示し、表象すると捉える合理主義的言語観に対して、マラルメは、詩人が言語行為の主体としての位置を退いて非個人化、非人称化することを通じて、「語自体に内在する蜃気楼 (un mirage interne des mots mêmes)」(一八六八年七月二八日付、カザリス宛書簡)によって喚起される〈美〉を希求するのである。マラルメの最も重要な詩論「詩の危機」には、如

上の思考の過程を経て形成された詩的理念が集約的に提示されると見ることが出来る。

マラルメ詩学の枢要を告げる四十四の断章からなる「詩の危機」に於いては、「言葉には、一方には未加工のままの、換言すれば直接的な状態と、他方に本質的な (essentiel) 状態とがある」として、「言葉の示す二重の状態」が指摘される。前者は「物語ったり、指示したり、更に描写する」という「人間が考える思考を交換するための」の日常言語であり、それと対置される「本質的な状態」にあるのが文学言語なのである。そしてそのような言語を通して生成する、「報道 (reportage) ならぬ「純粹」の文学作品に関して、「純粹の著作は、詩人の語り手としての消滅を必然の結果としてもたらす。詩人は主導権を語に、相互の不等性の衝突によって動員される語に譲るのである (L'œuvre pure implique la disparition élocutoire du poète, qui cède l'initiative aux mots, par le heurt de leur négativité molleses)」。そして語は、あたかも連ねた寶石の上の光の虚像の連なりのように、相互間の反映 (de reflets réciproques) によって点火される。」と述べられるが、この一文が、既述のシモンズ「象徴主義の文学運動」中に引用されていたことは改めて指摘するまでもなからう。マラルメ詩論の「主軸」としてシモンズが紹介したこの一文に示されている、語る主体としての詩人の消滅と言語への主導権の譲渡を前提として、「本質的な状態」にある自立的な言語「相互間の反映」によって成立する詩的世界を志向するこうした詩的理念は、実は上述の如く、仏教的な〈無〉に達着した〈虚無〉の体験

以後のマラルメの思考の展開の末に獲得されたものに外ならなかったのである。

以上のようなマラルメの歷程は、既述の有明のそれと明らかな相似形を描いていることが理解されよう。両者ともに、仏教との交差の体験がその詩的理念の形成の起点となっており、「三界虚偽唯心所作」或いは「これこそが真である（虚無）」という現実認識が基盤をなしているのである。ただし彼らは、そこから「涅槃」への解脱を希求するのでは決してない。一切の存在の本質を（無）と見る認識の中で、寧ろ実体を持たぬ「虚妄」の世界に詩の存立の場を見出してゆく。「忽然念起」に「最後の南無をささげよう」とする有明、「栄光にみちた虚妄を声高らかに宣言する」マラルメ、これら志向には、仏教的認識を支盤としつつ、しかし悟達を回避して「妄念」の詩、「虚構(visions)」としての「夢」⁽¹⁾に向けられた詩を追求する両詩人の姿勢が明瞭に認められる。そしてそうした中で、詩的言語に関する認識が形成される。詩的言語は、「人間の考える思考を交換する」、或いは「思想や感情の符徴——媒介物」としての日常言語、「世間的言語」と明瞭に区別される。「言語の自然」を奪回し「本質的な状態」にある詩的言語によって詩の固有の世界が開示される。語る主体としての詩人が消失して言語に主導権が委ねられ、それによって「言語が自からに歌ふ新天地」としての詩的世界が生成することになるのである。本論冒頭に引用したブランシヨの指摘は、この詩的言語に関わる両者の理念の近似性を示唆していたと言えよう。

先に触れたように有明はシモンズに依拠する中でマラルメに否定的評価を下していたのであるが、如上の考察を通して、それを越えたところで有明とマラルメは深い類縁関係で結ばれていたことが確認されるはずである。そしてその類縁性の背後にあったのは、両者に於ける仏教との交差であったと言つてよい。あらゆる存在の本質を（無）と見なす、仏教との交差の中で形成された存在論的認識が両者の思考の基盤をなしたのであり、そうした認識に基づく「イデアリスム」の世界観⁽²⁾が有明とマラルメの結節点となっている。「コレスボンダンス」の理論もそうした認識に胚胎しており、また言語行為の主体をめぐる発言もそこから生じているのである。このような詩的理念は、人間の自我の実体化、特権化を基底に据えた近代的な主体概念を廃棄する方向を確実に示している。換言すればそれは近代の合理主義的世界観に対する反措定的な志向に外ならない。有明の言う「人間中心の思想」の脱却への意志こそが、まさしく両者の契合する立脚点であったと考えられるのである。無論、「純粹観念 (notion pure)」の喚起を徹底して追求したマラルメと現実の一切を「法界」の顕現として緩やかに肯定、受容する有明との相違も明らかに認められる。また詩的理念の類縁性が詩的世界自体の等質性、相同性を保証する訳ではない。しかしこれまでの検討によって、蒲原有明がマラルメを中心とするフランス象徴主義の理念を正統的に理解し実践した詩人であると見なすことに最早多言を要しないだろう。そしてその正統性が、有明という詩人に日本に於ける固有の位置をもたらしめているのである。

日本に於いてフランスの象徴詩は、主として上田敏による紹介と翻訳を通して移植された。とりわけ訳詩集『海潮音』(明治三八・一〇、本郷書院)は、象徴詩に釈義を加えた序文を含めて、日本の近代象徴詩の成立を促す極めて大きな機縁をなしたと言いうことが出来る。『海潮音』によつて敏が提示した象徴詩とは、既に考察を加えたように、外界の映像の裡に象られる内面の「心状」の暗示的な表現に集約される作品として、言わば「暗示」という技巧に強い傾斜を示しており、かつ「鬱憂」「憂愁」の情感を漂わせ、「晩秋」⁽¹⁾、「落日」等の凋落の光景が背景をなす世紀末的モチーフに彩られた詩的世界に外ならなかった。上田敏の『海潮音』が範例として提出したこのような詩の世界が、明治四〇年代から大正初頭に至る日本の近代象徴詩の様式を確実に規定したのである。そうした中であつて、既述の詩的理念に支えられた『有明集』はその特異な位相を浮かび上がらせている。マラルメと深い類縁性を結びつつ進捗された詩的営為の成果である『有明集』の正統性が取りも直さず独自性として現れるところに、日本近代象徴詩史に於いて有明象徴詩の「渦巻」⁽²⁾の世界の占める位置が示されていると言いうことが出来るのである。

注(一) 拙稿「蒲原有明『有明集』論」(七・中)『文芸研究』第一三五集(平成六・一)・第一三七集(平成六・九)参照。なお本論はその続編として、『有明集』を支える詩的理念の問題を中心に考察を加えるものである。

(二) Maurice Blanchot, *L'espace littéraire*, (collection *Idees*), Gallimard, 1968, p.38.

- (3) 上田敏「仏蘭西詩壇の新声(補遺)」(『文芸論集』明治三四・一、春陽堂)
- (4) 本書に関わる引用は、Arthur Symons, *The Symbolist movement in literature*, AMS, 1980. Reprint of the 1899ed. published by W.Heinemann. に拠る。
- (5) このマラルメ詩論の翻訳には誤訳が認められる。シモンズは「the words, immobilised by the shock of their inequality」といふが、原文には「mots, par le heurt de leur inégalité mobilisés」とあり、語は「固定し動かなくなる」のではなく、「動員状態」に置かれているのである。またシモンズ訳の「an actual trail of fire over precious stones」という一文は、原文「une virtuelle traînée de feux sur des pierres (連ねた寶石の上の光の虚像の連なり)」の誤った訳出である。
- (6) 引用は、宇井伯寿・高崎直道訳注『大乘起信論』(岩波文庫、平成六・一)に拠る。
- (7) 『大乘起信論』は、その所謂如来藏思想に基づき、「二岐分離」的な「双面的思惟形態」を備えており(井筒俊彦『意識の形而上学——『大乘起信論』の哲学』(中央公論社、平成七・三)参照)。「覚」と「不覚」が独特の相関関係で結ばれる。即ち「不覚」に於いて現出する現実の一切の事象は、「妄念」の所産でありつつ、同時に「真如」の顕現体として捉えられる。従つて有明の「法界の大用」の強調には、「法界」を『大乘起信論』の「真如」に引きつけて理解する立場が示されていると言いうことが出来る。
- (8) マラルメの書簡の引用は全て、Stéphane Mallarmé, *Correspondance* (1862-1871), recueillie, classée et annotée par Henri Mondor, Gallimard, 1959, に拠る。
- (9) マラルメは「仏教も知らずに」と記しているが、この書簡が送られたアンリ・カザリス(ジャン・ラオール)は、インド思想、東洋哲学の専門家として *Le Livre du Néant* (1872) その他の著書を刊行することになる人物であり、この当時、既に仏教についての知見を持つ

ていたことは疑いない。従ってマラルメはカザリスを介して仏教思想に接触していたであろうし、右のマラルメの発言に関しては、そうしたカザリスに対する一種の謙遜の言葉と見なされるべきであろう。

(10) 「詩の危機」の最終形は、散文集 *Divagations* (Charpentier, 1897)

に収録された。本論に於ける引用は 'S. Mallarmé, *Œuvres, Divagations, Un coup de dés*. (collection Poésie), Gallimard, 1976. に拠る。

(11) 「詩の危機」には次のように記されている。——「詩人」に於いて、言葉は何よりも夢であり歌なのであって、虚構 (fictions) に捧げられた芸術を構成するために必然的に、その潜在的な力 (virtuelle) を取り戻すのである。」

(12) 『大乘起信論』に於いて言語は「仮名」として否定される。即ち「一切言説仮名無実、但随妄念」あらゆる言語表現は便宜的な仮名の表現にすぎず、それに対応する実体は存在しないとす。有明はこうした仏教的言語認識を前提としつつ、シモンズによって指摘された象徴主義的な詩的言語の探求に向かったと見てよいだろう。

(13) マラルメは「詩の危機」の中で、自身を含む「諸〈流派〉」の「交点」は「イデアリスム」の立場 (le point d'un Idéalisme) であると指摘している。

(14) 拙稿「上田敏『海潮音』に於ける「象徴詩」」(『東北大学日本文化研究所研究報告』第三二集、平成八・三) を参照されたい。

(15) 有明象徴詩の「渦巻」的世界の構造および特質については、注(一)に掲出の拙稿「蒲原有明『有明集』論」(中)に於いて検討を試みたので参照されたい。

柳田国男／田山花袋と〈樺太〉

— 花袋の『アリユウシヤ』『マウカ』をめぐって —

五 井 信

田山花袋には、あまり読まれることのない『アリユウシヤ』『マウカ』という二つの小説がある。それぞれ「太陽」(M39・12)、「趣味」(M40・5)に発表されたこれら二つのテクストは、明治四一年

三月に刊行された単行本『花袋集』(易風社)に『蒲団』『少女病』などとともに収録されている。二つのテクストを等しく扱うことには注意が必要だが、「▲田山花袋の『アリユウシヤ』『太陽』に出た小説である。一寸題目だけ見ると翻訳のやうに思はるるが翻訳ではない。(中略)作の出来栄如何といふに、吾輩不幸にして大なる讚辞を呈する能はざるを遺憾とする」(M39・12・9『読売新聞』)であるとか、「◎マウカ(花袋、趣味)話の聴書と云つた風な書き方で、面白くは読まれるが少しも胸にこたへるものがない。芝居の筋書でも読むやうな気がする」(M40・6『早稲田文学』)、「▲田山花袋氏の『マウカ』柳田国男氏の実譚をそのままに書継げるものなるべ

し、境も人も共に面白けれど読みて深き感興を得得ぬが残惜し」(M40・5『新潮』)というように、両者ともに、その題材に関していくらかの肯定はあつても、同時代評の評価はおおむね芳しいものではないようだ。

同時代評にもみえたように、『アリユウシヤ』『マウカ』はともに柳田国男の明治三十九年九月二日から一〇月二日までの樺太視察旅行をもとに花袋が書いたものである。そしてそのためだろうか、二つのテクストに言及している数少ない先行研究である小林一郎の論⁽¹⁾や岩本由輝の論⁽²⁾は、柳田の「樺太紀行」⁽³⁾と『アリユウシヤ』『マウカ』の比較対照をその中心においている。しかし、われわれが二つの論から感ずるのは、漸近線をたどりながらも、それらがけつして「事実」に達することのないもどかしさであろう。「樺太紀行」と『アリユウシヤ』『マウカ』の齟齬を花袋の「創作」「イメージ」(小林)、「虚構」「想像」「脚色」(岩本)などとすればこれらの論は、「樺太紀行」には記されていない『アリユウシヤ』『マウカ』の記述に

ついで小林自身が「話の時には、柳田ももう少し精しく述べたのかもしれない」といつているように、聞き書きというテキストの生成を考慮すると、そのような比較対照の限界ともいえる面が残されてしまう。柳田の「事実」と花袋の「創作」「虚構」……を識別する手段を、われわれは持ちようがないのである。

では、『アリユウシヤ』『マウカ』という二つのテキストを小稿で取り上げる理由は何か。それは両者が舞台として選択している〈樺太〉という問題につきる。二つのテキストが発表されたとき、樺太はある特異な状況にあったのだ。われわれは可能な限り、同時代の言説を通して二つのテキストと樺太を読んでいくことになるだろう。そしてその作業は、少なからず、日露戦争後の「日本」が有していた問題系とも通底するはずである。

二

余は東京の場末に生れたものであるが、妙な関係から久しい以前に籍を北海道に移したがり、今に至つて依然として後志國の平民になつてゐる。原籍のある所を知らないのも変だと思つて機会があつたら一度海を超えて北の方へ渡つて見たい積であるが、つい積許で実行の決心は容易に出来ず、来る年来る年を荏苒と暮らして仕舞つた。(中略)

戸籍面からいふと故郷ともいふべき北海道ですら斯の通りだから、其先の樺太へ旅行などは固より思ひも寄らぬ事で、樺太といへば嘸寒いだらうと想像する位がせきの山であつた。所が

去年の夏我社の講演会があつたとき蟹堂君と同じ組になつて堺と大阪と二ヶ所で君の樺太談を二度聞いてから樺太が大いに面白くなつた。「極北日本」には此二席で述べ足りない所が悉く布衍してあるのだから、余から云へば、其面白さが又遺憾なく布衍された訳になる。

夏目漱石は大正元年に出版された高原操(引用中の蟹堂君)の『極北日本』に、右のような「序」を寄せている。よく知られているように、漱石は明治二五年四月五日付で北海道岩内郡吹上町一七番地浅岡仁三郎方に本籍を移していた。従来、徴兵忌避や嫂登世への思慕をめぐる漱石の「送籍」問題と関連して知られるこの引用は、しかし、〈樺太〉というファクターを導入することで、それらとは異なる相貌をわれわれにみせてくれるだろう。というのも、漱石が「其先の樺太へ旅行」を「思ひも寄らぬ事」といったのはある意味で当然であつて、そもそもそれが容易になつたのはその直前、わずか数年前からだつたからだ。日露戦争が終結した明治三八年九月のポーツマス講和条約以前の約三〇年間は、南樺太はおろか、樺太全土がロシア領だつた。だから、「本書は明治四十四年八月下旬より十月月上旬に亘り朝日新聞に連載したる『樺太踏査記』を改訂し、増補したもの」と記されている『極北日本』で高原によつて描かれる樺太に漱石が「面白さ」を感じるのは、この時期だからこそ、といえるのである。

間宮林蔵、松浦武四郎らの名前とセットにして記憶されるであろう樺太の歴史をたどることは意外と難しい。当然、そこは歴史資料

が残される以前から人々が生活する土地であったのだが、樺太が北海道とほぼ等しい面積をもつ領土として意識され歴史上に名が大きく記されたはじめは、一八五五年の日露通好条約である。そこで樺太は、「日本国と露西亜国との間におゐて界を分たす、是迄仕来之通たるへし」というように、雑居の地となった。現在のわれわれの想像を超える、雑居の地であったという樺太が、正式にロシア領となったのは明治八（一八七五）年五月に締結した樺太千島交換条約によつてであった。「それまで両国が雑居地と定めていた樺太はロシアが領有し、久留里諸島即ちウルップ以東シムシム島に至る一八島を日本領とする事を定め、永い間の両国の紛争に終止符をうった⁽⁸⁾」わけである。また、「その結果これまで永い間樺太に居住していた樺太アイヌの帰属が問題となり、日本はその一部一〇八戸、八四一人を北海道宗谷地方に強制移住させ、翌九年さらに石狩の対雁に移した⁽⁹⁾」のも、このときの出来事だ。そして、前にあげたようにポーツマス講和条約により北緯50度以南が日本領となったのが明治三八年九月のことであった。

柳田国男に限らずその時期、多くの文学者が樺太を旅行していることは、当時樺太が大きな注目を浴びていたことの証左となるだろう。樺太に関係した文学者として、すぐに思い出されるのは岩野泡鳴である。川村湊による「北方文学年表⁽¹⁰⁾」でその最初におかれる『放浪』『断橋』の作者が樺太に滞在したのは、明治四二年六月二八日から八月一四日まで。そのほかにも、志賀重昂、野口雨情、長与義郎、金田一京助らがその時期、樺太に足を運んでいる⁽¹¹⁾。

このような一種の樺太ブームともいえる状況からは森鷗外も自由ではない。鷗外は明治四五年一月号の「文芸倶楽部」に、「コロレニコ作 鷗外訳」として『樺太脱獄記』を発表している。後に単行本『諸国物語』に収められるこのテクストは、「己はこのシベリア地方で一般に用ゐられてゐる、毛織の天幕の中に住んでいる」とはじまる。この「己」のもとを訪れた流浪人のワシリが「わたくしが樺太の牢を脱けた時のお話でもしませうか」といって、一二人でツエエの第七号舎からシベリアへと逃げだした話を「己」にするという構成になっている。そのワシリの回想において主語が「ワシリ」や「わたくし」と場面によつて混合するという、「語り」の面からも興味深いテクストであるが、忘れてならないのは、鷗外が『樺太脱獄記』を翻訳したのはこの時期だったからだ、と思われることだ。おそらく日露戦争以前には、鷗外はこのようなテクストを翻訳することも、発表することも考えなかつたはずなのだ。

樺太において、もつとも大きな役割を果たした文学者は志賀重昂である。雑誌「日本人」の創刊（M21年）や『日本風景論』（M27年）で知られる志賀は札幌農学校の出身。明治三七年八月から勅任官待遇の観戦員として乃木軍に従軍し、遼東半島に滞在した志賀はまた、三八・三九年の二度、それも長期にわたつて樺太を訪れており、そのときの様子を大著『大役小志⁽¹²⁾』に記している。三八年の旅行で志賀がはじめて樺太の土地を踏んだのは、七月に日本軍が全樺太を占領した翌八月二三日。その日はちやうど、歴^{ヒストリカル}山^{ヤマ}市^シに「樺太民政署」が設置された日であった。そのときの様子を志賀は、

『大役小志』に次のように記している。

聽て露国小学校の跡なる此の建物の玄関に、半紙に墨黒々と大書されたる『樺太民政署』の掲示は貼り出されぬ、予は一兵士が此の半紙を貼りかゝるを見、これぞ実に帝国が樺太を回復し、初めて民政を布かんとする真の端緒なるを思ひ詫び、後世復たと見るべからざる風景なりと、写真器（カメラ）を行李より取り出したるが、己は写真術を知らざれば、川崎民政署技師に依頼して二葉を撮影した。（『歴山市の初日』）

現在のわれわれからすれば少々大げさとも感じられる記述であるが、この時期新聞紙上で毎日「樺太」の文字を目にする状況を考えてその感慨も認めざるを得ないし、なにより志賀の姿勢はいたって生真面目である。このようにして示される写真には熊谷民政長官らと一緒に民政署の前に立つ志賀が写っており、丁寧なことに、その横には半紙を貼ろうとする兵士までもが配置されているという具合なのだ。ただし、回教寺院もあるという歴山市に民政署が置かれたのは約二〇日間のわずかの期間にすぎない。「九月二日 日露講和条約締結、樺太南北折半の報を聞き、慨然北天を睨睥する」とあるように、北緯50度以北に位置する歴山市から民政署は離れることになる。「九月二日 樺太民政署、歴山市を引揚げ去り、大泊に移転したからである。

志賀の二回目の樺太訪問は三九年の六月からで、この旅も途中に小樽、札幌などをはさんだ長期にわたるものだった。そのときの旅行は、同じく『大役小志』の「樺太境界画定日記」に「日露両国樺

太境界画定の事あるや、境界地方にある殆んど半年、徳川幕府以来『開黒水域』たりしポロナイ川を下り、次で日露兩國委員会議に列席して帰京」と記しているように、北緯50度の境界画定事業のためである。ロシアの委員長ワスケレンスキー中佐、日本の委員長大島健一砲兵大佐以下、数百人へのぼる境界画定は、一月、小樽の日本郵船会社支店での委員会議まで続いた。会議後の記念写真にもその顔が見える志賀は、後に東京地学協会での講演で次のようにいっている。

樺太境界画定は、近世史の大運動たる日露戦役の最終舞台なり、開国以来版図膨張を歴史とし、陸帝国が初めて領土を縮小せし顛末なり、建國三千年海水を以て限られたる島帝国が陸地を以て外国と境界し、嚆矢なり、即ち大局より見るも歴史地理上より察するも、其の真相は世に伝へ置かざるべからず。（『樺太境界画定の顛末』）

境界画定を「近世史の大運動たる日露戦役の最終舞台なり」とし、「其の真相は世に伝へ置かざるべからず」という志賀の発言は、これもまたけつして誇大な表現ではなかったはずだ。たとえば「東京朝日新聞」では、明治三九年の十一月二八・二九の両日、破格ともいえる分量が「樺太」に割り当てられている。理科大学教授の談話として「神保教授 樺太地質談」の連載第六回目と、画定事業委員長の「大島大佐の談（上）」という記事のほかに「樺太境界石標」の三枚の写真が載ったり（二八日、前日の二つの談話に加え「樺太林中の画定作業」「樺太境界画定測量標」と記された二枚の写真が

配されている（二九日）。また「読売新聞」でも、「法制局参事官

柳田国男氏談」として「樺太の漁業」が一月一三日から二〇日まで、五回の連載がなされていた。帰京後に志賀が天皇から「謁見を賜」ったのは、明治三十九年二月一〇日のことだ。

ところで、柳田国男が視察旅行で樺太にわたったのが同年の九月のことだった。そして田山花袋がそれをもとに『アリユウシヤ』を発表したのが、画定事業から志賀が帰京したあたりの同年二月号である。『アリユウシヤ』『マウカ』という二つのテキストを読むためには、このようなコンテキストを押さえることが必要なのだ。

「その地域が近代国家『日本』にとつて、いまだ他国と帰属権が争われ、また、交換可能なものとして捉えられてい」た樺太が、ロシア領を経て日本に帰属することになつても、相沢熙が「樺太島の地理人情風俗に関する著書或は記録なるものは、甚だ稀れ⁽¹⁵⁾」といい、榎本武揚が「従来同島に関する図書の出版せられたるもの甚だ少く、世人の同島に対する知識亦乏しと謂ふべし⁽¹⁶⁾」というように、樺太自体に関する情報が充分とはいえない時期。そして読者の側からすれば、明治三八年七月・八月に戦果という形で毎日のように「樺太」が新聞紙上で目にされ、またポーツマス条約や「日比谷焼き打ち事件」との関連で「樺太」が記憶された時期から一段落おきながらも、「境界画定」によって再びその語がメディアを多く賑わせ注目を浴びている時期。二つのテキストが提出されたのは、そのような時期である⁽¹⁸⁾。

三

おそらく『アリユウシヤ』は、日露戦争後の樺太を舞台とした、もっとも早い小説テキストである。志賀重昂たちの国境確定からわずか一ヶ月後に発表された『アリユウシヤ』は、だが、前述した川村濠の「北方文学年表」や木原直彦の「樺太文学年表⁽¹⁷⁾」にその名を見ることは出来ない。テキストの評価や、『蒲団』発表前の小説家としての田山花袋の位置が、現在に至るまでのそのような結果を生んだのであろうが、『アリユウシヤ』は、その冒頭から花袋らしい「語り」が用いられている⁽¹⁹⁾。

総て内地と違つて、鳥渡話した位では想像が出来んかも知れんよ。氣候の変化も無論烈しいが、それよりも荒涼たる光景が実に何とも謂へんさ。僕はウラジミロフカから一望際限なき密林平原を落日に望んだが、其時には、自分ながら始めて大自然の力の身に迫るやうなのを覺えた。

一見してわかるように、『アリユウシヤ』は（一人称）の話し口調の「語り」が用いられている。また「これに深い意味が無いだらうか、君」「君、これは何の臭だと思ふ」というような引用に続く箇所からは、——花袋が柳田から聞いたように——、読者は語り手から直接話を聞くような効果もたらされる。そのため、読者には『アリユウシヤ』で描かれる樺太に対してより真実性が感じられるようになり、語り手Ⅱ「僕」によりそいながら物語を読み進めることになるだろう。「中央政府からの視察員」であるという「僕」の

立場は、テキストで語られることの真実性・客観性をより強いものにするはずだ。しかし『アリウシヤ』には物語の筋らしい筋はない。小稿の冒頭で紹介した「読売新聞」の同時代評にもあるように、「筋は此小説に重きを置いたものでないらしく、一篇の味は寧ろ其背景にある」といつてもよいかもしれない。右の引用に続く箇所では、あらためて樺太の自然描写が語られることになる。そして自然は、ここでもまた「内地」とは異なつたものとして説明されているのである。

樺太では総て自然の儘、太古の儘、人工の加はつて居るものとは殆ど無いと謂つても好いので、コルサコフの市街を一步外れると、もう大自然は露骨に、遠慮なしに、其の太古のまゝの姿と力とを示して居る。内地などでは自然の姿と謂つても、雲とか空とか暴風雨とか極く些細な憐むべきものだが、彼地では、一樹一草いかなるものでも自然の発展を完全に為て居らぬものはないので、膚を刺すやうな新しい鋭い空気、胸を穿つやうな寒い凄い風、夜毎に降る雨は真に他界からある神秘的な消息を伝へるやうで、何となく今まで開けなかつた自分の胸の自然をそとるやうな気がする。海には怒濤、千万年を経てしかも依然たる大きな岩石が到る処にころ／＼と転つて居て、暗碧なる波には怪しい海鳥の叫喚がをり／＼に聞こえるばかり、一帆の白い影の漂ふのをも見ない。陸の道路を辿るとすると——道路と謂つてもそれはほんの自然の林や野の一端を切り開いたばかり、頑石が到る処に転つて居て、それで深い沢のやうな泥掉の

中に幾度となく陥るといふ始末、無論車などは通じやうがなく、樺太の旅行は総て馬だ。僕のやうな手綱も碌に執れぬものが、一廉の馬乗手になつたのを見ても知り給へ。

続いてテキストは、「コルサコフの民政署から国境近い某府までの」「百七八十里」の行程が語られる。やはりここでも、その途中の「内地の駅などと想像すると大に違ふ」馬の乗り継ぎ駅や「内地で見る丈の高い幹の太い立派なものではない」寒帯林、「内地の林や叢にあるものとは全く違ふ」木の実や草の実、あるいは「内地では（中略）見たくも見られぬ」数え切れない鱒の死骸などが語られるわけである。いうならば『アリウシヤ』は、物語の筋ではなく「僕」が体験する「内地」と異なる樺太を強調することで、当時の読者の期待をつなげているのだ。そうであるならば、引用やその道中の描写から、『アリウシヤ』の「紀行文」的性格を読みとることはけつして不自然なことではないだろう。いやむしろ、当時の花袋のおかれた状況を考えても、「紀行文」として読まれる可能性は十分にあった。²⁰自然描写のほかにも、「今回の戦争の結果、露人はこの土地の半分を日本に譲与することになつた」というように明確に物語内の時期を確定させる箇所や、「此地の露西亜人は悉く本国を追放された罪囚である」というような説明的な箇所から、当時の読者はまだ見ることにない、そして「内地」とは異なるい、まの樺太の情報を手に入れることになるのだ。

『アリウシヤ』の性格で忘れてはならないもう一つは、それが徹底して日露戦争後の勝者／敗者の視線で覆われていることである。

たとえば物語言説のレベルでは、「我々は聖代の恩沢に浴して、かうして平和に生活をも送り、戦勝国の民たるの名譽を得ることも出来たに引かへ、かれ等は寒い北の国に生れて、騷擾に騷擾を重ね、混乱に混乱を重ね、生命財産をも安全にすることが出来ずに、かうして放浪の生活を送つて居る」というように勝者〓日本／敗者〓ロシアが露骨に示されているし、また「忘れても敗戦国の民とはなるものではない」「君、忘れても敗戦国の民とはなるまい」などとも語り手は読者に呼びかける。そして作中の「僕」は、あるロシア村の一軒で次のような行動もとる。「不潔は不潔だが、兎に角敷物が敷いてあるので」、「僕」はその一室で休憩をとるのだが、さて、居間らしき部屋にいるのは、先ほど「恭しく」牛乳と麵麩を自分の前に差し出した「白い前垂の汚れたのを着けた」「何方かと謂へば醜い方」の、十七八の少女である。

其処には最前の娘が何か読んで居る。

好奇心から、づか／＼と其室に入つて行くと、娘は慌て、書籍を傍に置いて、何ぞ御用ですか！と謂つたやうな風をして自分を見る。自分は頓着なく其室に入つた。室の中央には炕が一段高くなつて、支那と西洋との折衷と謂ふべき室の構造、些細な家具が其処等一面に散ばつて居る。

少女が読んでいたのは『渡米案内』であつた。生活していた村を離れアメリカに渡ろうとする彼らを、「僕」は「悲しむべく憐むべきはかれ等の境遇ではないか」と同情するが、しかし、「僕」は決して「好奇心からづか／＼と」「頓着なく」部屋に入つていった自

らを省みることはない。物語内容においても、勝者／敗者の関係は維持されるのだ。物語の構造からするとこの「何方かと謂へば醜い方」の少女は、後にテクストに登場する「樺太第一の名高い美人」〓アリユウシヤの美しさを強調する機能を果たしているのかもしれない。アリユウシヤ本人は次のように描かれている。

時雨の蠅ツと降頻る中を、其のアリユウシヤは、傘をもささず、頭から灰色のじみな外套のやうなものを被つたまゝ、手で短い服の裾を腿のあたりまでまくつて、白い美しい素足で、ピシヤ／＼と水溜りをわたりながら、静かに此方に歩いて来た。あまり深く外套を被つて居るので、其顔の輪郭はよく見えぬが、鼻の高い具合、頬の肉置のふつくりと豊かな色、すらりとした姿、自分はふと西洋の古名画を思ひ出したので、其背景に庇の低い露西亜風の家屋、さつと降頻る秋の時雨、薄く黄葉した落葉松、緩い勾配の石の道路。――もし自分にすぐれた画才があつたなら、確かに一幅のすぐれた絵画を描き得ると思つた。

それに続いて「僕」は、アリユウシヤの「美しい丸い眼」や「其の葡萄のやうな美しい丸い眼」を強調する。しかしアリユウシヤの「美しさ」を、われわれは文字通りに受け取つてはならないだろう。「排除される側は有徴として、排除する側は無徴として排除が行なわれるのが普通である」と指摘する酒井直樹に習えば、アリユウシヤの美しさもまた、勝者／敗者という関係を強調することになるはずだからである。酒井はまた、「自己の同一性を表象する者と再現―表象される主語の間の無徴―有徴関係」と、「差別する者と差別

される者の間の無微—有微の対立」は、「まったく別の審級に属している」のにも関わらず、「まさに無微であるために、差別する者としての無微と、表象する者としての無微を混同させることが可能になる」ともいつている。『アリユウシヤ』の場合でいうなら、表象する側の無微については前に記したとおりである。つまり、「紀行文」的な装いをまとい、柳田からの聞き書きという形式を明確に残すことで、「あるがままに描く」という当時の花袋の主張を守っているかにみえる『アリユウシヤ』は、酒井のいう「中性的で客観的なもの」ということを前提とすることで、有微のアリユウシヤ²³ロシヤ人を排除している。換言するなら、〈他者〉を作り出して「排除する側は、自らを『常識』化され透明な日常性となった普遍性として提示し、排除される側を正常に対する異常、あるいは『顕在化』された特殊性として提示しようとする」わけである。

さらにこのような関係は、アリユウシヤの一家がその村を離れるにいたって、勝者／敗者のそれを超え、排除される側（他者）としてのアイヌにまで拡がっているともいえるだろう。アリユウシヤは「土着のアイノと殊に親密」になつており、「隣近所のアイノとは毎日抱き合つては泣き、泣き合つては抱きつつある」という様子で、別れの際には、「僕」が聞いた話としてではあるが、「アイノも泣く、露西亞人も泣く、幾度か接吻して、幾度か別れて、そして又抱き合ふという始末、終には滑稽に感じる位」と語られている。『アリユウシヤ』において、アイヌが語られるのがつねにアリユウシヤたちと一緒に場面だけであることは注意されてもよいだろう。テクスト

発表後間もなくの、「北海道アイヌは、その大部分が、日本語ばかりを話して、本来の言葉を忘れんとしつゝあるに反し、樺太アイヌは日常は本来の言葉を用ゆれども、日本人に接しては日本語を操り、露人に接すれば露語を語るものが極めて多い」という柳田の談話を知るわれわれからすれば、そこで交わされていたおそらくは「ピジン語」²³ともいえる言語の存在に興味に向くのだが、「僕」はそのような言語はもちろん、アイヌについて語ることはない。彼らはつねにアリユウシヤたちと共に、いいかえるならロシヤ人とアイヌはその差異が無化されることで同様に、排除される側（他者）として作り出されているのである。²⁴

四

『アリユウシヤ』がその「紀行文」的性質をもとに、当時の読者のまだ知らない、「内地」とは異なる樺太の自然の特異性を語り、またそれによりロシヤ人・アイヌの排除を表象するのに対し、『マウカ』が一貫して主題としているのは「日本」との〈同一性〉である。『マウカ』は、そもそも物語言説の占める約半分が船の中というように場所を特定できない場面が多く、テクストに記されるマウカ、コルサコフ、クシユンナイなどといった地名がなければ、その舞台が樺太であると読まれる必然性のまったくないテクストともいえるし、また「僕」が出会う人物が『アリユウシヤ』とはちがつて「日本人」ばかりであることも忘れてはならない。たとえば物語の冒頭間もなく、「僕」がマウカに向かうために乗った船はもともと

は「瀬戸通ひの汽船」であり、その船長は「商船学校の第一期卒業生で、瀬戸内海の航海には実に厭々するほど長い年月を過した」人物なのだ。「僕」は船室に入り、函館で出会った「女の児」のことを思い出している。しばらくして目を海に向けても、そこで語られるのは『アリユウシヤ』にあつた自然の驚きなどではない。「どうせ樺太の海岸であるから、(中略)これと謂つて見るものも無い」というだけで、アイヌの家屋が見えることぐらいいにとどめている、という具合なのだ。

このことは、『マウカ』に登場する「マウカ屈指の美人」小豊という芸妓と、『アリユウシヤ』における「樺太第一の名高い美人」アリユウシヤとを比較しても理解できるだろう。それはなにも、小豊が「日本人」であることだけをいうのではない。物語で「僕」が小豊を目にするのは二度であるが、最初の出合いは「其の色のくつきりと薄暮に白いのをちらりと見た」だけであつたし、二度目も「瘦削の疲れ果てた姿と蒼白い沢のない顔とは少なからずロマンチックな思を僕の胸に漲らしめた」と語るだけである。むしろ注意すべきなのは、彼女と橋本との関係と別れの場面を「僕」に語った「土地の官吏」が、「世間普通のこと」「芝居によくある幕ですなア」というように、物語の底流をなす二人の恋愛譚がどこにでもある話であることなのだ。さらにいえば、テキスト冒頭に「樺太の東海岸を汽船で巡回した時に、面白い物語を一つ得たよ」と記された二人の恋愛の舞台となつたマウカが、実は樺太の西海岸に位置することなど、テキスト自体が、その舞台が樺太である必然性のないこ

とを語つてもいるのである。

さて、テキストのタイトルにもなつてマウカに「僕」は到着し、さっそく「十五畳敷の、床に文晁の偽物山水の三幅対の懸つて居る一室に伴はれ、長官歓迎の御馳走の御相伴」になつた。翌朝目を覚ましたのは、これもまたどこにもあるような「一面の樺の床、花瓶には山茶花が活けてあつて、額には三条公の題字が掲げてある。蒲団は大縞の黄の絹布、枕元には青磁の水入にコツプが盆に載せられてあつて、火が来ている」という八畳の部屋だ。「僕」は窓を開け、マウカの様子を見る。その目に映つたのは、船上で聞いたような「海岸の新開地」の風景であつた。ここでもまた、記されているのは「同一性」といえるだろう。

上陸した時は、相応な町と思つたが、今見ると丸で違つて居た。かうも違ふかと思はれる位だ。新建ての家の疎らな一筋町で、だからだと海岸の方に下り気味になつて居るが、開けたのは、僅かに丘に凭つて居るところばかり、向ふにはアイノの民家が汚く一部落を為して、其汚い人種が彼方此方を歩いて居るのが見える。一筋町——多くは運送店、料理店で、其間に理髪店の古風な赤い樺が立つて居るのが認められる。荒物屋の屋根にはまだ半分瓦が載せたまゝになつて居て、旅店の外部はまだ荒壁だ。大工の鉦の音は町の到るところから聞えて来る。

「汚い人種」という忌むべき表現が与えられているアイヌに関しては不十分ながらすで述べた。この引用で注目したいのは、マウカがどこにでもありそうな新開地で現在発展中の町であるという情

報だ。明治三十九年に発行された『樺太案内』に、マウカは「西海岸に於ける漁場の中心として最も繁栄の街衢たり」と記されている。⁽²⁵⁾ 同書には、ちょうど柳田が訪れた頃の三十九年八月調べによるマウカ支署内の営業別軒数が記されており、それによるとおもなところは「宿屋一二 料理店二一 物品小売一三八」となっている。ところがわずか後の四〇年一二月の調査では「宿屋四四 料理店四三 物品販売二八四」という凄まじい勢いの増加を知ることができる。このような樺太への移住者の増加については、実は『マウカ』の他の箇所でも語られていた。引用に続いて、再び窓の外を眺めていた「僕」の目に入った、函館で出会った「女の児」との再会がそれを語ってくれるだろう。函館での「僕」とのやりとりの様子は次のようであった。

僕ともすぐ御馴染になつて、僕の名を覚えて、井村さん井村さんと呼んで居たが、僕が樺太に行くといふことを聞くと、女中は急に、『オヤ、貴方、樺太にいらつしやるの？ 愛子さん（其の児の名）も今月の末には行くわね』と女の児を顧みて言った。段々聞くと、此家では、樺太のマウカに料理店を開いて居て、創業の際、主人も細君も其方に行つて居る。この娘の子ども母親に逢ひに行くのだといふことが解つた。

ささやかな記述ではあるが、この件は前にあげた営業軒数の増加と関連して読まれるべきである。マウカは、これから冬を迎えるこの時期であっても「八歳位の」「女の児」が充分に行くことの可能な場所なのだ。そしてこのようなことから、樺太における植民地政

策を想像するのは飛躍ではない。たとえば次のような資料をわれわれは間もなく目にすることになるからだ。⁽²⁷⁾

明治三十八年九月、本島南半ノ地我領土トナルヤ、直ニ専門、学者技術者ニ委嘱シテ、実地ヲ踏査セシメ、或ハ露領時代ノ經營方法ヲ調査セシメ、或ハ北海道ニ於ケル実績等ニ鑑ミ、遂ニ自作小農者ヲシテ、有畜組織ニ依リ經營セシムルノ最モ植民ニ適當ナルヲ認メシカハ、諸種ノ法規ヲ制定シ、土地制度ヲ定メ、又保護奨励ノ機関ヲモ設ケテ、三十九年春期ヨリ農民ノ移住ヲ開始シタリ。

さらに四三年の「三十八年領有後農民ノ移住スルモノ既ニ約千戸ニ達シ」⁽²⁸⁾ ているという報告からも、テクスト発表前後からの植民地政策をみてとれる。少し時期は下がるが、谷口英三郎は、対露政策上の重要性や、「土人」政策に困難を感じないことを理由に「植民地としての樺太を十二分に發揮せしむるの覚悟なかるべからず」と植民当局者に訴えてもいる。その意味で『マウカ』は、それ以降の樺太の植民地事情を先見しているといつてもよいだろう。もちろんこの場合の植民地とは、田村貞雄が北海道を「内国植民地」というのと同様の意味においての「内国」のものだ。われわれが『マウカ』の主題を「日本」との（同一性）にみるのは、樺太が「日本」という国家の内部であることをテクストが語ってしまっているからなのである。

クシユンナイに向かう船で「僕」は三等室に降りていこうとする。しかし、「洋服姿の敵めしい僕の姿があたりの光景に伴はぬので、

人がじろく／＼と厭に見ると、それに低く黒い階段を下り懸かると、魚の腥(なまぐさ)い気と呼吸の籠(こも)つた臭(にお)いが凄(こわ)しく鼻を撲(む)つて、ごろ／＼と寝て居(なま)る人の山(やま)また山、中には船に眩(くら)つた唸(うな)声も聞えるので、慌(あわ)て、僕は引き返し、てしまふ。「僕」が気にしていたのは、そこにいるはずの小豊である。だが、「僕」は小豊を見つけないことはできなかった。そこにいた、「洋服」を身につけない船客の多くは、「内地」や北海道から「内国植民地」樺太へ移ってきた人々たちであったはずである。

五

先に引用した李孝徳は同書で、『日本』が近代国家としてその境界を獲得するのは明治二十・三十年代、より具体的には日清戦争を契機にするものであった」といつている。「近代的メディア」と「(近代)天皇制」との作用によって、「均質で平等な『国民』という『想像の共同体』が誕生する舞台を準備した」というのである。もちろんこのような図式はいわば「大きな物語」であって、李自身、諸要素が「連関・連結」しつづ生じた事態で、「循環作用がそこには存在している」というように、けつしてそれを単調でリニアな「物語」とみなしているわけではない。しかし日露戦争後すぐに発表された『アリユウシヤ』『マウカ』は、(他者)との出会い(排除・創出)と内部の(均質化)という単調さをいみじくも露呈しているのである。

別の視点からもみてみよう。姜尚中は次のようにいつている³¹。

そもそも文化は、われわれが何ものかに帰属し、所有しているものを表しており、そのような占有のプロセスとともに、文化はある境界を指し示している。そしてこの境界によって文化にとって内在的なものと外在的なものとを分かち観念が作動するのである。それによって文化の力は、その領域の内部と外部で強力な差異化を推し進めていく動因となるのだ。

この引用は、「中心/周縁」というような「内部」と「外部」との弁証法的な図式として読まれてはならない。ここで重要なのは文化がある「境界を示している」ことであり、さらに「内部」はその「差異化」を進めるために、李のいい方を借りれば(均質化)していくということである。このような視点から『アリユウシヤ』『マウカ』を読むならば、われわれは両者で描かれた(樺太)をめぐる単調さに、ここでも遭遇してしまうのだ。つまり、日露戦争後におけるあらたな「境界」の存在であり、この二つのテキストが内部と外部の「強力な差異化」という事態を代表し表象していることである。先にみたように『アリユウシヤ』では樺太の自然の特異性が語られロシア人・アイヌを(他者)として作り出すという作動がなされており、一方『マウカ』では、「内国」になった樺太と「日本」の同一性がことさらに強調され、その前後からの植民地事情を暗示していたのだった。テキストが、発表時にそれほど話題にならなかったのは、ある意味では幸いだった。なぜなら二つのテキストは、その性質において「国民国家」の形成に寄与するものだったからだ。日露戦争後というこの時期に提出された二つのテキストは、ま

さに「政治的」テクストだったのである。

あるいはまた、子安宣邦が柳田国男の大正一〇年の沖縄旅行をめぐる柳田自身がいふ「沖縄の発見」について批判し、「発見されたのは沖縄ではない。『発見』というこぼで自ら確認し、納得しているのは（中略）己れの視点の正しさである。推理され、再構築されるのは常に（やまと）なのだ」といっていることを想起してもよいかもしれない。『アリユウシヤ』『マウカ』についていえば、雑居の地だったという樺太の性質を受け継いだ結果として、当時樺太で生活を送っていたウイルタ（オロツコ）、ニクブン（ギリヤーク）などの民族について柳田国男／田山花袋が語ることはないのだ。とくに『マウカ』については、繰り返しすが、そのような民族の多様性は隠蔽され、語られていたのは「日本人」との出会いであり、「日本」との「同一性」なのであった。

もちろんこのような読み自体が、右の論者たちの図式に沿ったものであることは否定できないだろうし、柳田／花袋にそのような意図があったと考えることは難しい。だが、たとえば大正に入り、『山の巡査達』（大正七年一月『雄弁』）という柳田／花袋による台湾を舞台にした、そしてそこで再び（他者）を、しかもより排他的に作り出すテクストをわれわれは目にするようになるだろう。そこでも柳田／花袋の振る舞いは「政治的」である⁽³³⁾。

石川啄木以来、自然主義文学は「脱政治」の文学として読まれてきた。とくに花袋に関しては、そのテクストに「政治性」をみるといような指向そのものが希薄だったのではないか。しかし姜尚中

が前掲書でエドワード・サイードの言を借りていう「公平無私で政治とは無関係な文化的基準とみなされているものが、帝国主義のイデオロギーと植民地主義のあさましい歴史に依存している」との発言は、重要な問題として目の前に置かれている。そのこと自体が現在の研究の「政治性」と関わることを自覚しつつ、われわれは自然主義や花袋のテクストの一つひとつから、このような「政治性」を読みとっていかねばならないはずである。

注(1) 『定本柳田国男全集別巻第五』（一九七一年 筑摩書房）の「年譜」によると、柳田は八月二日から一〇月二日まで東北・北海道各地を回り、「その間、八月三十日に樺太出張の辞令下る。九月十二日十月二日、樺太視察旅行。生活の歓喜は寒い国ほど強いという印象をもったという。

(2) 小林一郎「田山花袋と柳田国男——『アリユウシヤ』『マウカ』を中心に——」（一九六二年二月『関東短期大学紀要』）及びそれを発展させた『田山花袋研究——博文館時代（二）——』（一九七九年 桜楓社）

(3) 岩本由輝「柳田国男の樺太紀行」（一九九〇年三月『磐城民俗』）ただし引用はそれに加筆を加えた『柳田国男を読み直す』（一九九〇年 世界思想社）による。

(4) 柳田国男「樺太紀行」（一九五八年七月「心」）
 (5) 秋月俊幸『日露関係とサハリン島 幕末明治初年の領土問題』（一九九四年 筑摩書房）によると、現ロシア領のサハリン島は、旧来「唐太」「北蝦夷地」「柯太」などと記されてきた。小稿では『アリユウシヤ』『マウカ』中の記述に従い「樺太」と記す。

(6) 高原操『極北日本』（大正元年 政教社）

(7) 日露通好条約「第一条」

- (8) 樺太アイヌ史研究会『対雁の歴史——樺太アイヌ強制移住の歴史』(一九九二年 北海道出版企画センター)
- (9) 日露平和条約「第九条 露西亜帝國政府ハ薩哈連島南部及其ノ附近ニ於ケル一切ノ島嶼並該地方ニ於ケル一切ノ公共造建物及財産ヲ完全ナル主權ト共ニ日本帝國政府ニ讓与ス其ノ讓与地域ノ北方境界ハ北緯五十度ト定ム」
- (10) 川村湊『南洋・樺太の文学』(一九九四年 筑摩書房)
- (11) 木原直彦『樺太文学の旅』(一九九四年 共同文化社)によると、野口雨情は明治三十九年の七月ごろに樺太に渡り北緯50度線まで進んでいる。また、当時学習院中等科五年の長与善郎は日本地学協会発起の修学旅行として三十九年の七・八月に樺太東海岸を旅行しているし、金田一京助の樺太踏査は四〇年の七月である。
- (12) ただし引用は『鷗外全集 第九卷』(一九七二年 岩波書店)による。
- (13) 志賀重昂『大役小志』(明治四二年 博文館)
- (14) 李孝徳『表象空間の近代 明治『日本』のメディア編制』(一九九六年 新曜社)
- (15) 相沢熙『樺太事情』(明治三八年 金港堂)
- (16) 榎本武揚『緒言』(明治四一年 東京地学協会編纂『樺太地誌』)
- (17) ジョン・J・ステファン『サハリン』(安川一夫訳 一九七三年 原書房)が、「サハリンがこの戦争で敵に攻撃され、併合された唯一のロシア領土であったことは重要な問題である」といっているのは正しい指摘である。
- (18) たとえば東亜同文会編『樺太及北沿海州』(明治三十八年九月 丸善、松永聡劍編『樺太及勘察加』(同年一〇月 博文館)という書名の似た二冊が同時期に出版されている。しかしこの二冊の内容は、樺太の地勢・季候・農業・漁業などをほぼ同じ順に配列し、同じような解説を加えるという似た形式になっており、なかにはまったく同じ図表も見受けられる。さらに、日露戦争終結以前の統計・調査をもとに
- しているという『樺太及北沿海州』の「凡例」からは、それらが当時の読者の期待を満たしたとは考えられない。
- (19) 拙論「花袋小説における〈人称〉の問題——明治四〇年前後の短編の分析——」(一九九一年七月「立教大学日本文学」を参照されたい。
- (20) 拙論「固有名の空白」から——田山花袋『蒲団』前夜——(一九九五年一〇月「日本近代文学」を参照されたい。
- (21) 酒井直樹『死産される日本語・日本人』『日本』の歴史——地政的配置』(一九九六年 新曜社)
- (22) 柳田国男『樺太雑談』(明治四〇年一月『早稲田学報』)
- (23) 今福龍太『クレオール主義 新装版』(一九九四年 青土社)の整理によると「ビジン語」とは、「共有する言語を持たない複数の集団が交易等の目的で継続的に接触をくり返す際に、相互のコミュニケーションの必要性からあみ出される一種の簡略化された言語」で、「より力のある集団の持つ言語の語彙を、力の劣る集団が借用し、それらを独自に連結させて作り出される」、いうならば「当座しのぎ」の言語である。
- (24) ただしアイヌに関しては相沢熙(前掲)が「嘗て我外国奉行が本島は我アイヌ人住居の地にて全く日本領に相違なく候との一点張にて、断然露國政府の提議を斥けたるは誠に理の当然といふべし」というように、「我アイヌ人住居の地」であることを樺太が日本領である根拠にするような、単純な他者ではない「両義的存在」とみることができるとも、もちろん、だからこそ、より排除される側としての存在が強調されているのである。
- (25) 秋山審五郎・白土宇吉『樺太案内』(明治三十九年 樺太案内発行所)
- (26) 古賀篤溪『最新樺太案内』(明治四二年 発行所の記載なし)
- (27) 樺太庁編『樺太要覧』(明治四一年)
- (28) 樺太庁第二部拓殖課編『樺太植民地選定報文』(明治四三年)
- (29) 谷口英三郎『樺太植民政策』(大正三年 拓殖新報社)

- (30) 田村貞雄「内国植民地としての北海道」(一九九二年『岩波講座
近代日本と植民地Ⅰ 植民地帝国日本』岩波書店)
- (31) 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』(一九九六年 岩波書店)
- (32) 子安宣邦『近代知のアルケオロジー 国家と戦争と知識人』(一九
九六年 岩波書店)
- (33) 村井紀『増補・改訂 南島イデオロギーの発生』(一九九五年 太
田出版)では、柳田が大正六年の台湾視察旅行について彼自身ほとん
ど記すことがないのにも関わらず、花袋に語っていることが問題にさ
れている。

*『アリユウシヤ』『マウカ』の本文は『定本花袋全集 第二十三卷』(一九
九五年 臨川書店)によった。また、すべての引用は原則として旧字を新
字に改め、ルビは適宜取捨した。

*樺太関係の資料の収集には、札幌市の古書肆弘南堂のお世話になった。記
して感謝したい。

「インデペンデント」の陥穽

—— 漱石における戦争・文明・帝国主義 ——

林 裕 河

漱石における反国家主義・反帝国主義が定説化してすでに久しい。多くの研究者たちがそのことを支持してきたし、その結果、といえるだろうが、そのような認識はすでに研究者たちの間だけのものではなくなり、日本社会全体の認識となつていふと言えよう。それは、日本人向け（国内向け）の様々なメディアだけでなく、たとえば外国人向けの歴史教科書が日本の「アジア地域への武力進出」について述べながら「このような日本政府のやり方にたいして反対したのは、社会主義者や夏目漱石、与謝野晶子などの文学者⁽¹⁾」としていることから窺われる。

確かに漱石は戦争や軍国主義を否定しているし、国家主義への疑義を提示しているのも事実である。そして、ほとんどの国がそのようなことに巻き込まれ、一つの当為としていた時代に発せられたそのような発言は十分に評価されるべきであろう。しかし、そのことが即、漱石が同時代的限界をすべて超越していたということにつながるわけではない。

同時代的限界とは、いわゆる大正デモクラシーそのものがはらんでいた限界である。そもそも、大衆の政治参加の発端は、日露戦争終結においてもっと領土をとれという日比谷焼き討ち事件にある。大正ヒューマニストといわれるイデオログの多くは、内においては民主主義・個人主義を主張しながら、外に対しては、日露戦後に獲得した植民地支配を当然としていた。基本的に、漱石もその例外ではない。

彼らは優勝劣敗を露骨に説く帝国主義者とは違っている。だが、必ずしもそうした露骨な帝国主義的言説が人々を動かしていたのではない。むしろ外見上帝国主義を否定する言説が、この時期、さらに昭和期において人々を動かしたのである。日本のファシズムの基盤は、一九世紀型の露骨な帝国主義ではなく、一度「大正デモクラシー」を経由したところ⁽²⁾に成立する。であれば、漱石の軍国主義批判が、その後の日本の進路を批判する力となりえたということはありえない。むしろ、「インデペンデント」を唱える漱石の個人主義

そのものに、日本の帝国主義を肯定せざるをえない要素がふくまれている。

さらに、この時期の帝国主義は、軍事的・政治的なレベルよりも、いわば感受性のレベルに定着している。漱石は政治的には帝国主義的な態度を否定した。しかし、彼はこの時期に浸透した帝国主義的な「感受性」を明らかに共有している。それは個人的なものではなく、歴史的に制度的に形成されたものだ。そして、文学が何よりも感受性のレベルにおいて成立するのだとしたら、漱石における帝国主義への共鳴は、彼自身がほとんど自覚していないようなレベルにおいて見られるべきである。

そのような文脈を切り捨てて、大正ヒューマニストや漱石の言説の表層だけを取り出して評価することはまちがっているだけでなく、危険である。にもかかわらず、依然として反国家主義や反帝国主義の枠組みの中に漱石をおいて「漱石」を語る試みは続いており、それは漱石神話をますます強固なものとしてもいる。しかし、漱石の言説が含む落とし穴を見ないままの漱石神話は、誰に、何に益することがあるだろうか。私の意図は、漱石を帝国主義者として糾弾することではまったくない。漱石をまきこんだ歴史的な構造の力は、或る意味で今も別の形で存続している。それを見ることなしになされる漱石の評価も否定も意味がないと私は考える。

1. 模倣する〈言葉〉

最初に、日本の帝国主義の対象となったアジアに対してたびたび

使われた「汚い」(『満韓ところ々』)という言葉に関して考えることから始めたい。これをめぐっては、早くから「帝国主義的優越感」⁽³⁾を読み取る解釈がある一方、実はそれは「諧謔」⁽⁴⁾だったとし、従って差別や帝国主義とは無関係だったとする解釈が出されており、漱石における帝国主義を考えようとする場合、避けて通れない問題の一つと思われるからである。

「汚い」対象を「汚い」と語るエククリチュールの問題。それは「差異」か「差別」か。しかしたとえそれが「差別」だとしても、それを「帝国主義」と結びつけるにはもう少しの手続きが必要となるだろう。

たとえば、日本の満州進出の基盤となった中国人労働者に関する調査報告書(南満州鉄道会社編『満州産業界からみたる支那の苦力』、大正七年)などを読んでみると、〈清潔度〉への注目は漱石だけのものではなかったことに気づく。「汚い」という言葉は「江戸以来の町人の感覚」⁽⁵⁾から発せられた言葉というよりは、当時の日本人のほとんどが共有していた「感覚」からの言葉だったことがわかるのである。

この調査書は中国人労働者たちをレベル分けし、「上級の部類は平素土布又は日本製の綿布を著し比較的、清潔にしている正月や慶弔の際には軟か物を著し、食事は時々魚肉や獣肉を食ひ住家も割合に広くて清潔(傍点引用者、以下同様)」「中級の部類は正月とか祝日の外は長衣を著る事が殆どない食物も出来る丈け節約するし、住居も頗る手狭で穢いのを常とする」「下等の者は多く山東省からの駆け

出しの苦力に属し、破れ衣服を身に纏ひ、陋屋に群居し部屋の内に棚を釣りて寝るを以て六畳一間に十人内外を收容し、夏は路傍又は人家の軒下に仮寝するのも大部を占むる」といったような具合で中国人労働者の「清潔度」について繰り返し書き留めている。それはやがて、「彼等は殆ど入浴しない」「入浴をせぬばかりか毎朝に於ける洗面は全く省くものが多い。此点に於いては人というよりか寧ろ猫にも劣るといはねばならぬ」「我々には到底飲めない濁った水を平気で飲んで何の異常もない」というような、単なる報告をはみ出した文章となっていくのだが、このようなチェックをさせている〈清潔〉意識は、実は近代以降輸入された衛生観念の洗礼から生まれたものである。

それは「又夏の夜は樹下石上に眠る、これは南京虫の襲撃を懼れる為ではあるが、こんな非衛生的の生活を平気でやっているのは余程身体が頗る頑丈に出来て居ると見ゆる」という言葉からも明確に見てとることが出来るのだが、このような衛生意識が、近代日本が文明国を目指して積極的に取り入れたものの一つであるのは周知の通りである。

たとえば明治十年代にはすでに次のような衛生論が新聞媒体を通して人々に届いていた。

蓋シ衛生ノ要ハ平常不断人民ノ健康を保全スルニ在リテ病患
 発生ノ後ニ於テ勿々之レが計ヲ為スベキニ非ズ。而シテ伝染
 ノ症ハ特リ虎列刺ヲ畏ルベシト為サザレバ、苟モ当局ノ吏人ニ
 シテ、一般住民ノ健康ヲ害シ、或ハ病毒発生ノ源タリ、或ハ之

ヲ誘進スルノ端ナリト認定スル有ラバ、即チ令シテ其ノ害物ヲ
 除却セザル可ラザルナリ。就中空気ト、飲水ト、往々伝染病毒ヲ
 流送スルノ外、其ノ偶々汚穢物ヲ含蓄スルニ於テハ、亦人ヲシテ
 各種ノ病患ニ罹らしムルニ足ルナリ。府下衛生ノ警察を担当す
 る警視局ノ如キハ如何ゾ。此ノ人生ニ大関係アル水気ノ二物ヲ
 清浄ナラシムルノ責メニ任ゼザルヲ得ンヤ。

(明治十二年五月二十九日付『朝日新聞』論説「衛生論」、ただし引用は『日本近代思想大系二十二 差別の諸相』岩波書店 一九九〇・三による。)

衛生意識は後述するように衣食住全般に及んでいたが、右の文章はわけても「水」と「空気」の清浄が重要視されていたことを窺わせてくれる。さらに、明治二十一年に配布された「衛生かぞえ歌」にも「身にまく着物は折々に洗うてのり気のあるように」「いとも内外掃除して」「慣れぬ食い物食わぬよう青物生物子にやるな」「やすいたきぎで湯を沸かし必ず生水飲まぬよう」などの文句が見られ、(引用は小野芳朗『清潔の近代』講談社、一九九七・三による)やはり、「衛生」が着物や住まいに関する目に見える「汚れ」の駆逐とともに生ものや生水の禁止をも強調するものだったことが示されていて、私たちはそこに、満鉄の調査が「着物」や「住まい」だけでなく「食べ物」や「水」にも言及していたことの背景を見る事が出来よう。

目で確かめられない「空気」や「水」の汚れを忌むこのような衛生知識が、近代科学のたまものであることは言うまでもない。「衛生」への意識は〈近代〉の産物でもあったわけだが、〈近代〉がそ

の形を整えていた一八九五年に「万国衛生博覧会」が開かれ、各国の衛生統計が出されていたということはそのことを証明していようしましう（前掲書）資料だったのであり、そこから衛生意識はそのまゝ「文明」国家としての自負につながっていくことになる。そのような事情は次の福沢諭吉の言葉からも窺い知ることが出来る。

日本の文明開化駸々乎として進歩する其中に就て、医学の進み方は最も著しき又その中にも、近来は別して衛生論が喧しくなりて、衛生学者の注意尽力、中々以て容易ならず、或は之を筆にし、或は之を口にして至り尽くさざるはなし。（中略）其深切の細にして道理の尤もなるは、吾々が日本人民として自から之を悦ぶのみならず、外国人どもに対しても聊か鼻を高ぶするほどの次第なるは、然るに爰に各地方の田舎に行て其様子を見れば、誠に不埒千万なる哉、衛生を軽んずる一種族あり。名付けて貧民と云ふ。此者等の不養生なること、第一、人生の体温を保つに必要なる衣服を薄ふし、寒天にも僅かに一枚を覆ふか覆はざるかの様にして、然かも其品は穢れ腐りて鼻持もならず、衣服にして斯くの如くなれば、其膚の穢れたるも固より論を俟たず、氣孔の蒸発を妨るのみか、日々夜々腐敗氣の中に溼没するものと云ふも可なり。尚これより甚だしきは人の命の根本たる食物の何を何とも思はず、三度の食事の不規則にして、食ふたり食はなかつたりするのみならず、其食料の品柄を尋れば滋養第一の肉類魚類を遠ざけて之を食はず下て植物の品

類中、にても米麦は甚だ軽量に用ひるか若くは絶て之を用ひずして、多くは稗などを食ひ。（略）

（福沢諭吉「衛生論」、明治二〇年八月五日付「時事新報」漫言）
かつてフロイトは「清潔」を「文明」の特徴とみなしたが、（清潔）に関する衛生意識はこのように文明国家を目指す「近代国家の条件」（前掲書）でもあった。だからこそ日本の文明開化を先導した福沢としては文明国家たるべき日本の足をひっぱっている存在としての「貧民」に対する明らかな嫌悪を表すすほがなく、そのような嫌悪は彼らを「差別」の対象としていく基盤をつくつてもいたのである。

衛生論が、国民を対象に食事の内容や回数、着物の洗濯の仕方までも指導していた背景には、富国強兵をささえる丈夫で強い国民で構成される「近代国家」幻想があったはずだが、中国人の服の着方や食事の仕方にまで注目する満鉄の調査部の意識の背後にこのような近代的衛生観念が存在していたことは確かである。

実際、初代満鉄総裁後藤新平の「衛生政策」や、それを引き継いだ中村是公の政策によつて「満鉄」は「衛生」に十分に意識的な集団となつていた。ドイツで近代医学をまなび、いちはやく『国家衛生原理』を著したこともある後藤新平が近代国家としての日本の理念としての「衛生思想」の普及者でもあったことはつとに知られることだが、明治四十年には「居留地の衛生・医療事業は、軍隊を中心とする日本人社会の特性上、また日本国内への伝染病の蔓延の防止策上からも、さらに朝鮮・中国侵略上の懐柔策からもきわめて重

要なものとして理解され」て、大連にも「衛生組合」が組織されている。そして、必然的に「このような共同行動に参加しない中国人に対して不潔感をいっそう強めていった」というような結果を生みだしてもいたのである。

そのような「不潔感」が「文明」人としての自己確認をも伴うものであったろうことは言うまでもない。そして、「満鉄」を支えた人たちに「文明」人としての自己認識があったことは、「清潔」の有無だけでなく、先の調査書が、苦力の「極下等」な人たちが「一椀一著の設けもなく朝早く結束して長屋を飛び出し街に至る処の露店で各自好む処の物を買ひ食ひする、粟麴麩片手に生葱や大根を嚼むる様は実に人間ばなれして居る」とし、正月に戸に「彼等の迷信を貼り付け」ていると記していることにも明らかである。そして実はこのような「野蠻から防衛されるべき長所としての文明」という考えを鍛え上げ⁹⁾ることに帝国主義の特性はあったのであり、他者の生活習慣を「野蠻」や「迷信」と規定するこのような「文明」意識こそ、「人というよりか猫にも劣る」といったような差異化¹⁰⁾の意識と結びついて日本の帝国主義を支えたものでもあったのである。ところで、漱石の中国人に対しての言葉、「人間に至つては固より無神経で、古来から此泥水を飲んで、悠然と子を生んで今日迄栄へてゐる」(『滿韓とてら』四十。以下数字のみ記す)は、先の満鉄調査部の「吾々には到底飲めない濁った水を平気で飲んで何の異常もない」という言葉となんと似ていることか。ここでさりげなく書

かれる「古から此泥水を飲んで」という言葉の情報源が漱石自身でないことは言うまでもなく、汚い水を飲むことへの嫌悪、そして最終的に「如何にも汚い国民」(四〇)とする規定に、私たちは帝国主義をささえた衛生意識¹¹⁾「文明」の言説が漱石の言葉に浸透している現場を見ることが出来る。漱石は「下水」のない奉天に關しても記述しており、「飲料水に崇りをなしている」「此汚水がどう片づけられるのかの処置を想像して見て、少し怖ろしくなった」(四十七)と不安を隠さないのだが、このような言葉に關しても同様のことが言える。

「水」だけでなく漱石は「支那の家に固有な一種の臭」(四十六)についても触れており、「しかもあまり綺麗ではない。其上室の中が妙な臭を放つ。支那人が置き去にして行った臭だから、依然として臭い。いくら綺麗好きの日本人が掃除をしたって、依然として臭い」(四十六)と、「臭い」を「汚れ」の一種とみなして「綺麗好きの日本人」と対置させている。日記にも「支那町は臭し」(明治四十二年九月十七日)と記しており、「水」とともに「臭い」についても書いているのは、先に見た「空気」の清浄意識故のことと見ることが出来るかもしれない。中国人の汚い洋服に触れることへの不快感を露骨に表していた漱石にとって、「空気」の汚れ¹²⁾臭いは、その侵犯を自力では防ぐことができないだけによけいに嫌悪の対象とせざるを得ないものだったのだろう。

このように、「汚」れに対する漱石の視線は「満鉄」¹³⁾帝国主義者の視線とまったく一致している。そして、そうさせているのは

「満鉄」と同じく、清潔度を尺度にして非衛生や不潔を排除する「文明人」としての自己確認と見るべきだろう。このような漱石や満鉄の視線が、単なる「差異」への驚きではなく「差別」的ものであると言えるのは、「衛生」というものが、強い国家を想定したイデオロギ―となり、必然的に「差別」を生んでもいたからだ。そしてそれが他国に向けられると、「人種差別」を生み出す。実際に、このような「汚れ」の確認は、人種主義などの差別を生じ、帝国主義を正当化させる一つの要因ともなっていたのだし、そういう意味では、「朝日新聞」という媒体を通して流通していた漱石の言説は日本の帝国主義を陰で支えるものだったとも言える。

漱石が「汚らしい」を連発するのを単に「感覚で押さえた事実」とすることの危険はすでに明らかであろう。その「感覚」なるものは、一足先に「近代国家」に進入した文明人として鍛えられたものにすぎず、そのことを忘れて「感覚」を自明のこととすることは次なる差別を生むだろう。

先の調査書は「苦力の気質」を説明して「病気の外は決して休むことがなく、^B「壮健にして無病なことや、喧嘩もせず「体格が立派で耐久力に富んで居る」ことを「美点」としてあげている。そして「内地労働者を多数使役すれば少なくとも一、二割は病気または事故の為に休むのが普通」なのに、「苦力にはかかる恐れが至る少ない」とする。苦力は「従順なる性質」^Cなので内地の労働者百人を使うより苦力千人を使う方がいいとし、「雲突くばかりの大漢」が多く、したがって重い豆袋を幾つものいっぺんに担いで運べることを

を「日本の仲仕などの到底模倣し得ざる美点」と褒めてもいる。「要するに、苦力の体力の優秀なるを利用して土木や荷役や豆糟や煉瓦製造などの如き簡易工業に使用し、出来高払にして受け請負はしむるのが一番有利の苦力使用法である」とこの調査は結んでいる。

「油房内で油にまみれた裸形の苦力の豆粕を扱ふところなど珍しい作業ぶり」(南滿州鉄道会社刊『大連』、昭和八年)と、後の観光案内パンフレットにも書かれることになる大連の豆工場の労働者たちはおそらくその「苦力」の代表格存在でもあったのだが、漱石は彼らに対して「大人しく^Cて、丈夫で力があつて、よく働いて、ただ見物するのさへ心持ちが好い」(十七)と記述する。これは、A、B、C、D、それぞれ対応するような形で先に見た満鉄の認識そのままだ。「大人し」といったような言葉がすでに、ある「差別」を含む言葉であることをさておくとしても、ここでも私たちはそうと自覚せずに帝国主義の言葉を模倣してしまふ漱石を見ることが出来るだろう。さらに漱石は「其沈黙と、其規則づくな運動と、其忍耐と其精力とは殆ど運命の影の如くに見える」(十七)と記して、苦力の生産性を強調しそれを「運命」という言葉で自明化することで、意識的にではないとしても被植民者の「従属化」^Dの過程に参加しているのである。

2. (開拓)の場所

「満韓」は「衛生」の観点からすると非「文明」国だったが、一方では「内地にもない」「電気公園」(八)や「最新式の敷方」の

「電車の軌道」(八)があるなど、日本よりも進んだ「文明」を目にすることの出来る場所でもあった。そこは、諸外国では高い豆油が安く生産出来、日本の半分の値段の糸が生産され、塩水にも溶ける(九)石鹼が作れるような、技術の進んだところで、漱石をして「内地から来たものは成程田舎もの取扱にされても仕方がない」(八)というような感想を抱かせる程の場所になっていたのである。

このような「文明」の作り手の中心となったのは、後藤新平が植民地の経営方針とした「文装的武備」を基盤に「教育、衛生、學術」といった広い意味での施設」の拡充を図るための「科学的調査活動」をすることを目標にして作られた満鉄調査部であり、漱石が無順まで出かけて行って「撫順の石炭の油母頁岩」の研究の説明を聞いたたり、まっさきに豆工場に案内されたりしているのも、満鉄の中心事業だった豆と炭坑が日本に誇るべき規模のものだったからである(以上、小林英夫『満鉄―(知の集団)の誕生と死』、吉川弘文館、一九九六・九による)。後藤新平の「武力支配ではなく、開発による支配という考え」(高橋泰隆「植民地の鉄道と海運」、『岩波講座 近代日本と植民地』3、岩波書店、一九九三・二)に基づいての植民地政策は、満州を「スチユチオ(イギリスの美術雑誌。筆者)にでも載りそうな」(五十一)こざれいな建物―教会、劇場、病院、学校―が並ぶところとしていた。そしてこのような満鉄の事業に漱石は無関心なふりをしながらもそれぞれの設備や規模に関して数字データを細かく記述していて、満州の「文明」化状況を丁寧に伝えてもいるのである。

その「文明」の恩恵を漱石は直接には「生まれてから、まだ乗ったことのない汽車」(三十二)に乗る(前掲高橋論文によるとバスルーム付きのコンパートメントだったという)ことで体験し、「comfortable」(明治四十二年九月二十一日付日記)と感じている。さらに「東洋第一の煙突を持った電気工場」に対しては「文学者の頭以上に崇高なもの」(十五)を見いだしてもいた。そして、安東などに出来た「日本市街」に対して「満州はまだ是程に発展せず」(明治四十二年九月二十七日付日記)とする言葉に見られるように、漱石にとってそれらは「発展」以外のなものでもなかったのである。

当時韓国の書店には「ほととぎす」や「中央公論」が並べられており、「家屋は皆日本流」(以上、明治四十二年九月二十七日付日記)で、満州には「スキ焼」を食べられる店と「膝の上に頭を載せて寝」させてくれる「名古屋訛」の「女」までが揃っていた。⁽¹⁾

このような風景が漱石がみた「日本市街」の姿だったわけだが、たとえば一九一〇年代に日本に留学していた韓国人留学生の帰国記小説として知られる廉想渉の中編「万歳前」(一九二四)は、韓国人の土地や家が日本人に買収され、日本人町が次々と出来ていく様子に触れている。日露戦後には「生活関連の商店が増加」し、「特権をあてこみ一攫千金をねらった中小商人の進出がキーとなり、それに関連する諸商人、飲食店、旅館、家族、雇人が引つ張られ」ていた⁽²⁾のであり、漱石が見たのはそのような現場だったわけだが、そのような日本の進出を漱石は単に「発展」と見ているのである。

漱石が満鉄の人々を描くにあたって(開拓者)のイメージを与え

ている——たとえば坑道を掘ったという「軍人」の話。漱石はその「根気の好いのに悉く敬服」(二十五)したとし、それが「人間以上の辛抱比べ」だったと記す——のは、その苦勞こそがその「発展」を支えたものと考えたからだろう。植民地進出にまつわる話は何よりも「苦勞」談であることで、聞く(読む)人の感情移入を促していたはずだ。『朝日新聞』という媒体を通して伝えられるこのような話が、人々に植民地への夢をかき立たせるものとしての役割を果たしたであろうことは想像に難くない。たとえば「彼岸過迄」に登場する、「満鉄の方が出来るとか、朝鮮の方が纏る」ことに「刺激」(「風呂の後」五)をもとめる「冒險」希望者たちはまさにそのような人たちの姿だったのだろう。¹⁶

しかし、「満韓」は「文明」の場所であるだけでなく、たとえば韓国人による抗日運動などが後を絶たないような「政治」の場所でもあった。すでに明治四十年には軍隊を解体された韓国兵が「ついに爆發して我が兵と衝突」したとする記事が『東京朝日新聞』(八月三日)に載っており、漱石がこのような状況に無知だったとは考えられない。『朝鮮暴徒討伐誌』(朝鮮駐在指令部刊)の「第六編明治四十二三年ニ於ケル暴徒討伐」によると、「排日ヲ鼓吹シテ施政ヲ妨害スルモノ全ク後ヲ絶ツニ至ラ」なかつたのであり、漱石が韓国を歩いていた明治四十二年にも、抗日運動をしたことで逮捕されて自殺したり殺害されたりした者は少なくなかつた。それは「韓半島我が勢力圏に入る」(明治三十八年十一月二十三日付「官報」と報道されて以来続いていたことだったが、漱石の『滿韓ところへ』が

選んでいるのは「文明」(のための(開拓))状況の報告のみである。漱石が實際そのような動きに接することが出来たのかどうかは別として、結果的に『滿韓ところへ』が帝国主義の政治的側面を隠蔽し「文明」的側面のみ重視したものとなったことに注意を喚起する必要はあるだろう。

たとえ漱石が「植民地支配を肯定的に受け止めていた」⁽¹⁷⁾とするとしても、漱石には「植民地支配」の政治的武力的側面は見えておらず、「文明」のみが見えていたことは付け加えておくべきだろう。その「文明」こそが「植民地支配」のもう一つの顔であつたとしても、ついでに指摘するならば、漱石は朝鮮滞在中俳句や短歌をいくつかつくっているのだが、そこでは目の前にいる韓国人や風物はあくまでも叙情的「風景」でしかなく、とかく彼らの中に(現在、即ち「韓国」としての現在よりは新羅や高麗といった(昔))過去をみようとす傾向のものが多し。そこで歌われる古都の美もまた、「文明」と同様に植民地主義を支えるオリエンタリズムの変形でしかなかつたと言ふべきであろう。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

『草枕』で漱石は「汽車ほど個性を輕蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段を尽くして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつてこの個性を踏みつけようとする」と、「文明」の象徴としての「汽車」を批判していたが、その「汽車」は、単なる「文明」の象徴であるにとどまらず、帝国主義の象徴でもあつた。それは十九世紀半ば以降、イギリス、アメリカ、ロシアなどの列強が、ともにその利権を手に入れようとしたのが他ならぬ鉄

道建設とその経営権だったことにおいて明白である。実際、韓国を貫通した鉄道の完成は日本に日露戦争での勝利をもたらしたし、韓国の釜山から最北端の新義州までしかれた鉄道、さらに満州における鉄道は日本とロシアの帝国主義をささえたものだったのだが、その鉄道を走る汽車にのつての満韓旅行において、漱石が、『草枕』に示された認識を持った形跡はない。その「汽車」のために「墓地人家の移転」(前掲高橋論文)といった、「個性」の犠牲が強いられ、たことを漱石は知らなかっただろう。しかもそれは戦争のための軍隊と軍需品輸送に利用された後は「貨物輸送主導」となり、旅客輸送は二の次の「開拓鉄道」(前掲高橋論文)にすぎなかったのである。

そのような「鉄道」＝「文明」への批判の代わりに私たちの前におかれているのは、その「汽車」を単に「comfortable」とする、身体感覚に基づく「文明」肯定である。漱石が、「個性」を「軽蔑」し「踏みつけ」るものとして「汽車」という「文明」を否定するのはあくまでも「日本」内に限ったことだったのを確かめておこう。漱石が、日本が受け入れた「文明」を「外発的開化」として批判していたにもかかわらず「満韓」においては「文明」を批判していいないのは、それが「満鉄」で代表される「日本」が自発的に作り出した「文明」と見えたからである。つまり、「文明」が、「日本」みずからの要求による自発的ものと見える時それは批判されることはないのだ。逆に言えば、漱石に於いて「文明」が否定されるのはそれが主体的な選択ではないとみなされる場合に限ったことである。漱石が日本の帝国主義の「活動」をめぐる「満州」では日本人が到

る所盛んに活動して居る。其の活動は中々目覚ましいものである。日本人もえらいと思つた」(『汽車の中』)とか、全集未収録の談話「満韓視察」で「進取の気象」「頼みしき国民」「男子会心の事業」というような言葉を発しているのも、それが「日本」自らの意志による「自発」的な「開化」＝「文明」の一環と映っていたからと見るべきだろう。それは、「日本の大陸進出の実態について、率直に自己の見解を述べることはばかられた」²⁾故の言葉などではない。改めて確認してみると、『現代日本の開化』の中でも漱石は、「開化」自体を批判しているのではない。漱石はあくまでも西洋の影響を受けての「外発」的「開化」を批判しているにすぎないのだ。

漱石は日本の植民地での「活動」を「文明」の移植と考えていた。しかし、「文明」の移植(汚れ、迷信、立ち後れた文明的設備など)こそ、実は帝国主義の表向きの顔だったことは、先に「衛生」意識を通して見た通りである。いうならば、漱石は帝国主義を、「文明」の名において許してしまったのである。

3 「インデペンデント」の陥穽

「反帝国主義の漱石のイメージをつくってきたのは、言うまでもなく国家主義や軍国主義への批判である。たびたび引かれるものなかに晩年のエッセイ『点頭録』があるが、改めて読んでみると、それは限定付きの否定だったことに気づかされる。

トライチケの鼓吹した軍国主義、国家主義は畢竟独逸統一の爲ではないか。其統一は 四冊の圧迫を防ぐ為ではないか。既

に統一が成立し、帝国が成立し、侵略の虞なくして、独逸が優に存在し得た暁には撤回すべき性質のものではないか。(中略)

勝つた者は勝つた後で、其の損害を償う以上の貢献を、大きな文明に対してしなればならない筈である。少なくとも其心掛けがなくてはならない筈である。自分は今の独逸にそれ丈の事を仕終せる精神と実力があるか何うかを危ぶまざるを得ないのである。するとトライチケの主張は独逸統一前には生存上有効でもあり、必要でもあり、合理的でもあつて、今の独逸には無効で不必要で不合理なものかも知れないという事に帰着する。

漱石の軍国主義否定は「既に統一が成立し、帝国が成立し、侵略の虞なくして独逸が優に存在し得た」時点においてなされる。漱石が批判するのはあくまでも「統一」という「目的」が成し遂げられたあとにも続く「戦争」なのであつて、「トライチケの主張は独逸統一前には生存上有効でもあり必要でもあり、合理的でもあ」とも言っているのだ。戦争を「無効で不必要で不合理」と言い切っているのは「今の独逸」に關してのことにはすぎない。つまり漱石は「統一」や「生存上」のために行われる(とされる)「戦争」は必ずしも否定しているとは言えないのである。

たとえば『趣味の遺伝』は「厭戦」文学とされるが、戦争を単に「神」の仕業とする「予」には、戦争の主体への意識は欠落している。その結果、戦争で犠牲にされる人間への目はあつても、戦争主体自体への懷疑は見られない。だからこそ「予」は「旗持ちちは浩に

決まつてゐる」と主人公に戦場の英雄の役割を担わせ、凱旋した軍人に「誠」を読みとり「涙」を落とすのだ。それは、まさに日露戦争が、日本にとつては「生存上」の戦争にほかならなかつたからであり、西洋体験を通して自国の存立をめぐつて危機意識を育てざるを得なかつた漱石にとつて、戦争は「人種と人種の戦争」(『虞美人草』として、むしろ正義だつたはずである。²³)

漱石は『私の個人主義』でも「個人主義といふと一寸国家主義の反対で、それを打ち壊すやうに取られますが、そんな理屈の立たない漫然としたものではない」と前提しながら、「国家の亡びるか亡びないかといふ場合に、疋違ひをして只無暗に個性の発展ばかり目懸けてゐる人はない筈です。私のいふ個人主義のうちには、火事が済んでもまだ、火事頭巾が必要だと云つて、用もないのに窮屈がる人に対する忠告も含まれてゐる」としている。つまり、漱石は「国家が亡びるか亡びないか」といつたような危機の時²⁴「火事」(戦争)の時に用意される「火事頭巾」(国家主義)に關しては認めているのである。

私はここでこのような考えの是非を論じたのではない。ただ、漱石が否定し批判する「国家主義」はあくまでも平和な時の国家主義であつて、危機の際の国家主義は認めていることを確認しておきたいだけだ。それは「今の日本はそれ程安泰でもないでせう。貧乏である上に、国が小さい。従つて何時どんな事が起つてくるかも知れない。さういふ意味から見て吾々は国家のことを考えてゐなければならん」²⁵愈戦争が起つた時とか、危急存亡の場合とかになれば、

考へられる頭の人、——考へなくてはゐられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いていく訳で、個人の自由を束縛し個人の活動を切り詰めても、国家の為に尽くすやうになるのは天然自然」という言葉からも確かめられる。

しかし、国家主義というものが、まさにその（危急時）という言葉を合言葉に戦争や軍国主義へと「個人」を駆りたてていく近代イデオロギーである以上、漱石の言葉で言えば「国家といふものが危なくなれば誰だつて国家の安否を考へないものは一人もゐな」くなるような危機意識こそが国家主義を強化していくものであることはいふまでもない。そういう意味では漱石のいう「個人主義」は、常に「国家主義」に「反対」するものでもなく、従つて簡単に「世界主義」につながるようなものではなかつたと言わなければならぬ。

おそらく、このような漱石を見て始めて「日露戦争」というものは甚だオリジナルで「インデペンデントなもの」とした漱石の言葉が理解されるのではあるまいか。漱石がそういわざるを得なかつたのはそれをまさに「危急存亡」ががかかっている戦争だと思つたからであり、戦争での勝利が「西洋に対して日本が芸術に於てもインデペンデントであると云ふ事」（横做と独立）を証明してくれると考へたからにほかならない。

漱石は軍事力だけでなく経済や政治の力が、「芸術」の力につながるものと考えていた。それは漱石がイギリスにおいて「日本ハ真ニ目ガ覚メネバダメダ」（明治三四年三月十六日付日記）と強い焦燥を

表しながら「文学モ政治モ商業モ皆然ラン」としていたことから窺い知ることが出来る。漱石は「政治」や「商業」（経済）の自立が精神的「インデペンデント」を保証してくれると考えていたのであり、日露戦争の勝利が「精神界へも非常な元気を与へる」とし、「斯く勝を制して見ると国民の真価が事実の上に現れた心地がする」（戦後文界の趨勢）とするのはまさにそれ故のことである。そこに「勝つものと負けるものを拮抗させ続けて、絶対勝つ側には立たないというスタンスをとり続け」ようとする姿勢を見ることは出来ない。西洋体験を通して「日本」という主体意識に目覚めた漱石が（勝つ）ことを願うのは、むしろ当然のこととみるべきである。それは、戦争の勝利が即「国民の真価」の発現となり、精神的に「敗北」していた過去を勝利の未来へとつなげることが出来ると思つた故のことであり、満韓をめぐつての戦争＝日露戦争や「文明」を批判しないのも、そこに「日本」の「真価」＝（主体）の発現を見たからだ。

ここで、そのような主体は「想像の共同体」にすぎないと言つてみたところで、あまり意味をなさないだろう。漱石の主体意識に問題があるとすれば、「日本には日本固有の特色がある。その特色を発揮することが何よりもえらい」（戦後文界の趨勢）というような自己（主体）の確認が、他者の（主体）を忘れていたことにおいてである。「精神」の自立を欲するがために「勝つ」ことを夢見るナショナリズムは、自らの自己拡張の欲望に気づかない。そしてそこに、たとえば小森陽一氏の言うような、「他人の自由を暴力で侵す

ような戦争はしない」といった「倫理」⁽²⁵⁾が存在する余地はなかったのである。

* * *

戦争や国家主義、そして文明をするべく批判していた漱石は、「日本」がその遂行主体となるとそれらへの批判をやめている。漱石は西洋という他者に出会って始めて「日本」という自己に目覚めたわけだが、そのような主体確認への欲望こそが、結果的には「国家主義」や「帝国主義」、そして「文明」を「インデペンデント」の名で容認させたものだったのである。

しかし私は、冒頭でも述べたように、そのこと自体をことさら批判したのではない。それは〈近代〉という〈主体〉の時代を生きたければならなかった東洋の知識人としては、避けがたいことだったのだろう。とはいえ、このような漱石のかかえた問題から目をそらすのは、次なる混乱を引き起こすことにながりがかねない。そういう意味でも、漱石のかかえた矛盾、そしてその背景をなしたものをしかと見ていくことが、今、必要だろうと思われるのである。

注(1) 「留學生のための日本史」(東京外国語大学編、山川出版社、一九

九〇・三)

(2) このような考察は柄谷行人編『近代日本の批評 明治大正篇』(福

武書店、一九九二)に啓発されたものである。

(3) 檜山久雄『漱石と魯迅』(第三文明社)

(4) 米田利昭『漱石の満韓旅行』(『文学』、一九七二・九)

(5) 吉田熙生『満韓とくろく』(『近代日本文学における中国像』、有

斐閣、一九七五・十)

(6) 「文明への不満」(『フロイト著作集3』、人文書院)

(7) 「日本近代思想大系22差別の諸相」(岩波書店、一九九〇・三) 参

照。

(8) 木村健二「在外居留民の社会活動」(『岩波講座 近代日本の植民地

5』一九九三・四)

(9) バリバル「人種主義と国民主義」(『人種・国民・階級』六十三

ページ、大村書店、一九九五・十二)

(10) 川村濤氏は「帝国」の漱石(『漱石研究』第五号、一九九五・十

一)の中で、中国人を描く漱石の姿勢を「おどけている」とし、「そ

こに「人種差別」的感情はない」としている。

(11) 注(9)に同じ、五十九ページ。

(12) 注(4)に同じ。

(13) ホミ・K・バーバ「他者の問題——差異、差別、コロニアリズムの

言説」(富山太佳夫編『現代批評のプラクティクス4 文学の境界

線』所収、研究社出版、一九九六・四)

(14) 日本の進出とともに大陸へわたった居住民中もっとも多数だったのは商業につく人たちだったが、「芸妓酌婦も6・8パーセントと少な

からぬ比率」(注8に同じ)とされており、漱石が会った「名古屋訛

の女」もそのような「芸妓酌婦」だったのだろう。

(15) 注(8)に同じ。

(16) 同じ「冒険者」といっても一般の人たちがどちらかというところ

れて逃げていくようにして植民地へわたっていたのに対して、満鉄の

〈開拓〉の主人公たちは総裁の中村是公をはじめ、大連の税関長など、

植民地政策の中枢にいた。漱石の「旧友」でもあった彼らのほとんど

は東京帝国大学出身かそれに準ずるエリートたちでもあった。そこ

には「東大受験に失敗し」「北海道へ行って農学校」に入り、「満鉄の依

頼に応じて蒙古の畜産事情を調査に」「満韓」来た人もいたが、東

大出身者が圧倒的に多く、満鉄の総裁も「東大出身者は半分以上」

だったという。「満鉄に入社した彼らにとり、就職先は単なる民間会社ではなく亜国家機関」で「日本植民地鉄道の成立期が、藩閥官僚の時代から帝國大学出身者による専門官僚の時代への移行期にあたり、特に官僚養成機関としての東大があり、植民地官僚がそのネットワークから選ばれたためであろう」ともされているように、満鉄は「一種の国家機関」(前掲高橋論文)だった。漱石が植民地に出かけていくことになったのも、このような構造内でのことだったのだろう。

(17) 中川浩「漱石と帝國主義・植民地主義」『漱石研究』第五号、一九九五・十二

(18) たとえば以下のようなものを漱石は作っていた。

「高麗人の冠を吹くや秋の風」

「高麗百済新羅の国を我行けば我行く方に秋の白雲」

「草繁き宮居の跡を一人行けば礎を吹く高麗の秋風」

(19) 柄谷行人「美学の効用」『批評空間』2-14、一九九七・七 参照。

(20) 拙論「文明と異質性——漱石『滿韓ところく』論」『国文学研究』104集、一九九一・六に収録。

(21) 伊豆利彦「滿韓とところについて——漱石におけるアジアの問題」

(22) 駒尺喜美「漱石における厭戦文学——趣味の遺伝——」『日本文学』一九七二・六

(23) 小説に関してはもっと本格的な考察が必要となるが、今回は評論とエッセイを中心に考えるにとどまった。小説の問題は今後の課題としたい。

(24) 柄谷行人・小森陽一対談「夏目漱石の戦争」中、小森氏の発言(『海燕』一九九三・三)。

(25) 注(24)に同じ。

*本稿は、一九九六年度日本近代文学学会春季大会における口頭発表「漱石と国家主義——勝つことの陥穽」に基づき、考察を加えたものである。

『土』論

— 〈境界〉を越える者達 —

関 谷 由 美 子

(一)はじめに—〈対幻想〉という制約

長塚節の『土』(明治四三、六、一三—一、一七『朝日新聞』)は、鬼怒川縁りの、ある貧農の一家の生態をリアルに描いた写生派文学の傑作として、近代文学史に聳立する作品でありながら、作品の構造論的分析といった点では、大戸三千枝氏による文献一覽その他を管見に入る限り見渡しても、未だに研究の余地を多く残しているようである。また橋本佳氏に端を発した勘次父娘の近親姦に関する問題⁽¹⁾も、言葉の〈解釈〉による論議から、構造的にどのよう捉えられるか、という問題意識に移行すべき時期でもある。小稿は『土』に描かれた、勘次一家の足掛け九年に及ぶ歴史の意味を、如上の観点から、〈写生〉の方法の多角的な検討によって明らかにしようとする一つの試みである。

作品は、全体を四つの構成部分に区切ることができる。それらは次のような内容をもつ。

① 一—五 お品の死。

② 六—十 お品の死後、貧窮にあえぐ勘次一家。その中でおつぎが母そっくりに成長する。

③ 十一—十五 近親姦を噂される勘次とおつぎ。

④ 十六—二十八 卯平の加わった勘次一家。家の焼失。卯平の自殺未遂。
未遂。

一章から十五章までは五章毎に整然と内容を区切ることができる。

卯平が野田を引き揚げ、勘次の家に身を寄せてから結末までは、やや長く十二章が費やされている。すなわち構成部分①のお品の死、そして構成部分④の、家の焼失と卯平の自殺未遂という劇的な要素を枠組として、その間に勘次一家の九年間の歴史がゆっくり物語られてゆくわけである。

作品を首尾一貫している方法は、低徊性を徹底させ、ある部分に把住する写生によって、一家の生活の歴史の中から周到に選ばれた場面場面の描写とエピソードを積み重ねてゆくものである。一家の

生活史の重要な局面を表現するために、それにもつともふさわしい場面やエピソードが厳選される。それらの一場面一場面はあたかも細密画のようにディテールが尊重されており、時間的には緩やかにそして空間的には極めて稠密なものである。⁽²⁾ それら選択された場面やエピソードの中でもとりわけ反復性の高いものとして、おつぎが幼い與吉の世話をする幾場面がある。この一群は、おつぎと與吉の成長に伴い繰り返し現れるもので(三、五、八他)、へ姉にして母⁽³⁾と呼び得る、一つのコードを形成しており、作品全体から醸し出される厳しく重い空気の中で、メインテーマともいうべき高い響きを放っている。これらはまた、優れた写生による再現性の故に一回のな輝きをもつと共に、一家の歴史性の証として、同じような事柄が日常幾度も繰り返されている、という時間的な広がりを併せもつのである。言い換えればあたかも繰り広げられる絵巻の一場面のように象徴性を帯びるのである。例えば十七歳の春を迎えたおつぎが五歳の與吉の世話をする状況については、次のように與吉が村の子供達について鑰を獲得するエピソードが選ばれている。

彼は餘りに悦んで騒いでひよつとすると危い手もどで鑰を庭へ落とすことがある。(略) 與吉が抑へようとすると時鶏がひよつと来て嘴で啄いて駈けて行つて畢ぶ。他の鳥がそれを追ひ掛ける。與吉はさうすると又一しきり泣くのである。(略)

「泣かさねえでよき⁴ことも連れてつてくろうな」といふおつぎの声⁵が追ひ掛けるのであつた。僅な鑰は味噌汁へ入れて箸で骨を抜いて與吉へやつた。自分では骨と頭とを暫く口へ含んでそ

れから捨てた。

(八)

読者は書かれた部分から勘次一家の歴史の、ある部分に關しては克明に知ることが出来る。しかしこうした余りにも精密な再現というものは、読者の視線を釘付けにするような迫力をもつ一方で、全く書かれなかつた多くの事を暗示してもいるわけである。つまりこのような密度で綴られてゆく場面場面の選択の基準は何なのかという問題である。

例えば『土』には人間の社会的側面が描かれていない、と言われる。だがこのことは、作者長塚節の属する階級の故に、社会的矛盾が問題化されていない、という意味にのみ受け取られてきた。⁽⁴⁾ しかし勘次と地主(主人)との内的な(敵対關係)については、本庄陸男のきめ細かな分析がある。⁽⁵⁾ 本庄によれば地主の温情さえも搾取機構の中の一つの装置として有機的に作動しているのである。では社会的側面の何が描かれなかつたかといえ、抑圧をもちたらず階級關係とは正反對の要素、つまり勘次一家を疲弊させないもの、抑圧しないもの、が意図的に省かれたのである。例えばおつぎが十六歳の冬から毎日「近所の娘」(七)と一緒に通うことになつたという裁縫の事などである。他の娘達と平等の立場で学ぶおつぎの姿、同様に與吉の学校生活、あるいは勘次が「恐怖」(十六)や引け目を感じなくてもすむ筈の、他の貧しさや他の悲惨などは、勘次一家を押しつぶしている階級的上下關係以外の、勘次達が対等であり得る社会的要素である。それらの要素がすべて排除されたために勘次一家の孤立性が際立たされ、その結果この小説は、ただひたすら孤立した

家族としての、言い換えれば男であり女であることが意味をもつ「対幻想」としての人間を描くことに最大の関心が払われることになった。絵巻物を繰り広げてゆくような、場面の選択の方法は、「対幻想としての人間」という内的制約のもとに統合されているのである。この事実をひとまず確認し得たところで、前述の四つの構成部分に即しつつ『土』における「対幻想としての人間」の描かれ方を考察したいと思う。

(二) 二人の離脱者

構成部分①と④、つまりお品と卯平を中心とした部分は、〈死に赴く者の物語〉と概括することができる。小説は、商売のため尙弱を仕入れたお品が、すでに病毒に蝕ばれた大儀な身体を、鬱した心で我が家へ運ぶ場面から始まる。「目に見えぬ大きな塊をどうつと打ちつけては又どうつと打ちつけ」(一)る西風に、「一日苛め通」される「瘦せこけた落葉木」、「黄色な光を放射」する落ちかけた冬の日や「ざわくと鳴る」木の枝などが、病むお品を取り囲む冬の日没時の、しかも地上から高く隔たった、ざわめく樹木の上から俯瞰的に眺められる位置関係を通して、大自然の中に孤立し、取りとめもなく翻弄され漂泊するお品の「不見目」さが強調されている。お品はこの夜から病床に伏し二度と起きあがることはなかった。すなわちお品の、我が家への帰還は、真直に死への道中を意味するのである。この名高い冒頭の場面はまた、十七章で野田を引き揚げた卯平が、重い足取りで村へ戻って来る道中の場面に呼応するもの

であり、両場面共に、二人がすでに死すべき運命に捉えられた敗残の者達であることを示している。お品は激しい西風や「落ちかけた」冬の日と共に登場し、老衰者卯平は同じく「短い冬の日」の(十六)、「枯木の林」の中に、死に至る道中の始めの「懶げ」(同)な姿を現わしている。お品の場合との差異は、卯平を取り囲む自然に、引用部分が示すように苛烈さではなく(空洞性)もしくは「乾燥」の感が刻印されていることである。不意に死の手に捉えられた若い女と七十を越した老人との実存的差異が背景の自然描写に反映している。

枯木の林は立ち騰る煙草の煙が根の切れた儘すつと急いで枝に絡んで消散するのも隠さず空洞かふたとして、いる。(略)彼は周囲が寂しいとも何とも思わなかつた。然し彼自身は見るから乾燥して、憐れげであつた。(略)捨てた燐寸の燃えさしが道端の枯草に火を点けて愚弄するやうな火がべろくと墮がつても、見向かうともせぬ程彼は懶げである。野田からは十里に足らぬ平地の道を鬼怒川に沿うた自分の村落まで来るのに、冬の短い日が雑木林の梢に彼を待たなかつた。

(十六 傍点引用者 以下同様)

お品も卯平も、彼らの頭上に、そして周囲に、広がる自然の景観の一部分として描かれている。すなわち『土』に描かれた大自然はそこに生き死にを繰り返す人間の換喩なのであり、彼らの実存の客観的相関物である。お品は西風に吹き払われる枯葉のように無防備であり、卯平は路傍の石に似ている。つまり擬人化された自然はそ

の中に人間を包摂することによって、人間の個我としての輪郭を（滅形）し、人間を自然化するのである。そして人間が自然化されているということは、人間の生命の循環性とその意識性との間に乖離がないことを意味する。彼らの生的的確に言い当てている（土に苦しみ通す）（五）という言葉は、まさに雲雀や蛙が「泣くべきときに泣くためにのみ」（四）生まれて死ぬ、と語られるのと同じ水準で発せられている。自然の循環に従う人間の実存の姿と、その時々^々の自我の在り様とが一致するのである。これが『土』に表われた人間観にほかならない。お品と卯平は共に、万物が死へ赴こうとする冬の、日暮れの、苛められ痛めつけられ、あるいは（枯燥）した自然の中に、そこから独り（離脱）してゆく者として、すなわち（生と死の境界）を踏み越えた何者かとして登場しているのである。すでに死の影に覆われた者達は、その身体表現に際立った特徴を示している。お品は物音に満ちた周囲の中で一人物音をたてず、卯平の場合は（惘然と）（凝然と）という形容の頻出が示すように動きが無い、のである。そのためお品は生活の（物音）や（気配）との対比において、卯平は生命の（動き）との対比において描かれる場面が反復する。

○お品

暫くたつてからお品は庭でおつぎがざあと水を汲んでは又間を隔ててざあと水を汲んで、いるのを聞いた。（略）お品は又蒲団へくるまつた。さうしてまた下手な包丁の音を聞いた。（略）

「辛くて仕やうあんめえなよきは、おつぎは甘やかすやうにい

つた。お品には、それが、能く聞えて、二人がどんなことをして居るのか分つた。（二）

○卯平

日は陽氣な庭へ一杯に暖かな光を投た。庭には子供等や村落の者がぞろつと立て此騒ぎを笑つて見て居た。（略）彼等を包んだ軟かな空氣が春の徴候でなければならなかつた。

然しながら卯平は只獨り、其群に加はらなかつた。（略）彼には庭の節制のない騒ぎの聲が其の耳を支配するよりも遠く且遙かな間に何物をか捜さうとしつゝあるやうに只惘然として居るのであつた。（二十三）

後の引用は老人達の「念佛の集り」の時のものである。傍点を付した（物音）や（声）や（動き）や（気配）は、すべて生の領域の換喩である。しかしお品も卯平も、それら「白昼の光」（十八）の届かぬ影の領域の者達である。お品はもはや（物音）をたてることなく、卯平は（只惘然と）している。これらの場面は、お品と卯平が（共同体からの離脱者）であることを身体表現を通して示しており、先に考察した（大自然からの離脱）と照応するのである。このように構成部分①と④は、若くして急激に死の淵へ傾斜してゆく者と、砂時計の最後の砂が落ちてゆく時のように死に接近する老衰者との、二様の（死に方）を描くことを主眼としている。そして彼等の、死に至る過程が、そのまま彼等の自我の崩壊過程であるところに、先述した『土』の人間観が示されているわけである。

「お品は自分の手で自分の身を殺したのである」（五）という一

文は多義的である。なぜなら自らの意志よりもっと大きな力に背を押されてお品は墮胎しているからである。お品が懐胎した時、彼等夫婦の前に選択肢があつたわけではなかつた。墮胎しなければ暮しに困つたのである。しかし「相思」(五)の夫婦の間では、墮胎の決断はどうとう最後までできていない。個人の意志決定を越えて事を運んだ別の原理について、ここで確認しておかなくてはならぬ。

明治十八年生れの中里介山は『土』を讀むの巻(七)『百姓弥之助の話』(昭和十五年)の中で間引きや墮胎が日常的に行なわれていた明治中頃の農村の事情について次のように弥之助に証言させている。

『少年時代に農家の畑で何気なく語り合ふおかみさん達の口から、『今度はヒネツてしまおうと思ひ込んでいても、おぎやと生れて見ればどうも手が云うことを聞かぬえで……』というような事を平気で高らかに語り合ふのを聞いたことがある。自分が今産んだ子を殺す、という決断に迫られ、心と身体の分裂に見舞われるこの瞬間、無数のお品達は、たとえ彼女達が個我としての自覚などからはどれ程隔たつていようとも、生きることの矛盾と悲しみをそれぞれの自我の根底において熟知している。お品も自ら決断することはできなかった。貧窮の圧迫に加えて、生命が枯死する「哀しい」(五)季節の到来と、愛する夫の不在がお品に自我の喪失感をもたらし、意志的な決断とは逆の虚脱した心性が、勘次が傍にいた時には「余りの大事」(五)にひるんでいたお品の背を押したのだつた。作者は「混雑」(遺瀕なき)「寂しさ」と、類語を重ねることによつてお品

の実存の寄る辺なきを強調すると共に、地すべりに「遠くの方へ滅入つて」(一)ゆくお品の心情が犯罪の決行へと凝集してゆく過程を、お品の自我の崩壊過程として分析的に描き尽している。そして勘次が不在のまま、墮胎後の身体に異変が生じたのを察した時、お品の自我は決定的な打撃を受けたのである。

ぎりぎりの暮しとは、生命の危機を日常的に抱え込んでいる暮しのことである。墮胎を余儀なくさせられるような貧しさの中では誰もが日常的に生命の危機にさらされている。破傷風がお品を襲つたことは、あるいは不運な偶然だつたのかも知れない。しかし貧窮の故に、生と死の境界線上をその日その日と綱渡りしてゆくような「お品達」の存在自体がすでに偶然そのものであつたと言えるのである。

お品が地の果てに追いやられてゆく枯葉のように死んでいった心と身体のみカニズムは、卯平の場合も原理的に変りがない。すなわち卯平の自殺未遂にも意志や決断などの心的要素は希薄なのである。次第に現世に背を向けてゆく生命の、その自然の「循環」(十四)に従つて卯平は死へ導かれていった、という風にテキストは語る。野田の醤油工場の火の番を辞すことで社会的な立場を完全に失つて後、死場所に定められた勘次の家へ卯平が戻つてきてから、テキスト全体のほぼ三分の一を占める十二章を費して執拗なまでに丹念に叙述が追っているのは、勘次との軋轢と共に、緩慢ではあるが季節毎に確実に度を加えてゆく卯平の老衰振りである。村へ戻つてから三回目の冬、手足の自由の利かなくなつた卯平が、與吉の悪戯に機

敏な処置をとることができなかつたために、勤次の家は焼失した。老衰と骨を凍らす寒さとかまどの火と子供の悪戯と、これらの揃い過ぎた条件のもとで卯平の不始末は起るべくして起り、それに続く自殺未遂も、生産性に与らなくなつた老人が、此世を立ち退いてゆく、その自然の運行の延長上に予め用意されていたかの如くである。そのような卯平の実存が、卯平の意識性を決定する。「眼前に氷が閉ぢては毎日暖い日の光に溶解されるのを見て」(二十三) さえ「彼にはそれが只さういふ現象としてのみ眼に映つた」などの叙述、あるいは先の「念佛の集り」(二十三)の引用が示しているのは、凍てつく手足と同じように卯平の精神も此世での活動をようやく停止しつゝあつたことである。

火傷を負い念仏寮に運ばれた卯平を、幼い與吉の心ない言葉「『爺に焼かつた』」(二十六)がさらに痛め付ける。その後卯平のつた行動は、蘇生後の彼の記憶を叙した部分に窺えるように、明らかに彼の意志を越えたものである。

然し、自分でも其の時、自分の身に、變事の起らうとする、ことは、毫も予期して、居なかつた。彼は囲炉裏の側で、夜の寧ろ冷たい火にあたりながらふと氣が變つてついと庭へ出た。彼は何かで足に纏つたのを知つた。手に取つて見たらそれは荒縄であつた。彼はそれからどうしたのか明瞭に描いて見ようとするには頭腦が餘りにぼんやりと疲れて居た。(二十七)

卯平は荒縄が足にまつわるのに氣付き、荒縄に導かれる。卯平の手足をとり、彼の行くべき場所へ促したものの正体は、すでに死へ赴

いていた卯平の実存そのものである。

冬至の三日後、「足の方から冷たくなつていつた」(四) お品とは対照的に、卯平は「一遍に來た春の光の中に」(二十七) おつぎに見守られ、意識を回復する。しかし卯平の生還は、わずか「數十分」、おつぎの発見が早かつたという幸運な偶然と、老衰の身にはもはや死ぬ力さえ残つていなかつた結果に過ぎない。卯平の回復とそれに続く勤次との和解は、結末の、内儀さんを前にしての勤次の惱亂を際立たせるための小説的技巧と見るべきであつて、(生と死の境界)を越えた者、(離脱者)卯平の役割は、彼が、すでに焼失してしまつた勤次の家の庭で、荒縄を手に疲れた体を柿の木にもたせ掛け、吹き降してくる雪の中で意識を失つてゆく場面(二十七)に尽きている。この吹雪の夜の場面と、死ぬにはまだ早すぎるお品の、墮胎の失敗による激烈な臨終の場面とが、巻頭と巻末における二つのクライマックスを形造つている。

貧しさが、生と死の境界線上に危く其の日其の日を保持してゆく生活を人間に強いる。繰り返すならば彼等自身がすでに(偶然)的な存在なのである。お品は懐胎したことが、卯平は引退を余儀なくさせられたことが、それぞれの分水嶺となつて危く踏みこたえていた(境界)をすべり落ちていつた。小説『土』は、人間のそのような臨界状況を捉えようとしたものである。貧しさがもたらす二通りの人間的悲惨を粹組として、それに挟まれる形で、生の領域にある者達、勤次とおつぎの物語がある。そして彼等もまた彼等の生の原理の中で、お品・卯平とは異なる意味合において彼等自身の(境

界」線上に生き、それを越えるのである。

(三) 二重像

『土』のヒロインおつぎの魅力の本質は何といつても彼女の背景に、常に亡き母お品を髣髴させる複合美にある。お品とおつぎの〈二重像〉のテーマは、お品の死と同時に始動している。お品の埋葬の時、勘次は墮胎された亡児を家の裏手の「牛胡顔子の傍」(四)の土の中から掘り出して、棺桶の中に「立膝で」うづくまるお品の死骸に抱かせる。次の第五章では、勘次が再び利根川の工事現場へ発った留守に、おつぎが夜泣きする與吉を一心に抱く場面が描かれる。この両場面の照応は、お品とおつぎの〈二重像〉のテーマを鮮かに印象付けるものである。

○勘次は手にして行つた草刈鎌でそく／＼と土をつ／＼くやうにして掘つた。(略) お品の死體が棺桶に入れられた時彼はそつとお品の懷に抱かせた。お品の瘦せ切つた手が勘次のする儘にそれを確呼と抱き緊めて、其骨ばかりの頬が、びつたりと擦りつけられた。(四)

○與吉は壁の何處ともなく見ては火の附いたやうに身を慄はして泣いて舜とおつぎへ抱きつく。おつぎは與吉を膝へ抱いて泣き止むまでは両手で掩うて居る。(略) 卯平は與吉が靜かに成るまでは横に成つた儘おつぎの方を向いて薄暗い手ランプに其の目を光らせて居る。(五)

このように(土に芽ぐむ菜の花)(八)の比喩で語られるおつぎの、

「二際人の注目を惹く」(同)成長振りは一方で「棺桶の板一枚」を隔てて「永久に土と相接して居」(四)るお品が、その懷の亡児ともども腐敗し白骨化してゆく過程を含蓄することによって互に他を際立たせ、作品に複雑な陰翳を与えることになる。すなわちお品は土に帰っていったけれど、その同じ(土に芽ぐむ)眼前のおつぎの中に再生している。土を媒介としてすべての生命が循環する、小説『土』の生命観・人間観が、(お品・おつぎの二重像)として主題化されるのである。

他方、お品・おつぎの二重像は、文学史的伝統の上に置いて眺めた時、紛れもなく一つの美の系譜に連なるものであることが『源氏物語』を参照枠として明らかになる。大石修平氏は(桐壺の更衣——藤壺の女御)、(藤壺の女御——紫の上)、(夕顔——玉鬘)などの關係に「相似表象」の概念を提示し、次のように説明する。(8)藤壺の女御)が(桐壺の更衣)の面影を宿し、(紫の上)が(藤壺の女御)を思わせる。すなわち、が、に似ていることによつて発生する關係にこそ『源氏』の女性達の魅力の秘密があり、彼女達はそれぞれ(複合像)において単独であるよりも一層、源氏の憧憬を掻き立てるのであると述べ、「相似表象」の概念を通じて(紫のゆかり)の原理を分析している。氏はまた、尾崎紅葉『多情多恨』(明治二十年)の読解にもこの概念を援用する。すなわち「桐壺の巻」と同じく(亡妻物)であること、そしてある一つの中心点からその縁を辿つて他の女性達が登場してくる「相似表象」(紫のゆかり)の二つのモチーフを物語文学の伝統に連なるものとして指

摘するのである。

『土』は近代文学史において子規・漱石に連なる写生文派の一翼として確固たる位置を占めている。しかしながらこの近代リアリズム文学の傑作は、『源氏』から『多情多恨』へと確実に結ばれている物語文学の伝統をこの二つの要素において、すなわち愛妻の死から始まる〈亡妻物〉であること、そして〈お品・おつぎの複合像〉による〈紫のゆかり〉の物語であることによって、間テクニク的に対応させているのである。ここにまた、硯友社・写生文派という対立的図式で捉えられてきた二つの文学的立場の接点を見ることも可能である。『土』は、桐壺帝や光源氏がまさにそうであったように、愛妻との死別の悲しみに耐えない男が、妻に生写しの〈ゆかりの女〉を愛してしまう物語なのである。

実際、おつぎの魅力は〈容貌、身体つき、歩きつき、雀斑〉(八)そして「心持」(十)に至るまで、おつぎ自身の固有性としてではなく、お品との類似性を通してのみ語られるのである。

○「何ちふ、おつかさまに似て来たこつたかな」 (八)

○「略」死んだお品が乗り移ったかと思ふやうさね」 (十)

容貌や気性がばかりでなく、お品の果していた役割を、後に卯平と勸次との不仲に心を痛めるところまでもそっくりおつぎが継承することによって、お品・おつぎの〈二重像〉は結末に至るまで絶えず更新され強調されるのである。

こうした複合像の魅力の本質は、それぞれの像が個別化された唯一の美とはならない代りに、個としての不可避な宿命である一回

性・有限性を際立たせることがない、というところを求められよう。おつぎはお品の面影を揺曳することによって、単独の像としてはあり得ない、輻輳した魅力を湛えることになる。愛すべきおつぎはまた、愛すべきお品なのであり、勸次にとって双方への愛情は少しも矛盾しない。勸次は「おつぎの身体をさう思つては熟々と見る度に、お品の記憶が喚返されて一種の堪へ難い刺戟を感じざるを得ない」(八)のである。

一場面一エピソードに把住する『土』の方法は、(ドラマを作る)よりも、人間のある状況を捉えることの方に真価を発揮する。作者は、おつぎが一時に自分に課せられた重い役割について何を考えたかなどの内面には立ち入ることなく、與吉・勸次・卯平、それぞれの支柱としてのおつぎの健気な姿の顕現のみを描写してゆく。構成部分②(六一―七)、すなわちおつぎ十六歳から十七歳の秋までの叙述は、一家の暮しの様々な場面や勸次の盜癖(十一)などのエピソードを、循環する季節の景観や農村の風習に溶け込ませて積み重ねてゆき、二つのモチーフ、〈お品・おつぎの複合美〉の完成と、それをもつとも間近で見続けている唯一人の人物、勸次の驚きと感動、を焦点化してゆく。村民と勸次の注目を一身に集めるおつぎの、その内面には立ち入らぬ形象の方法はそのまま構成部分③(十一―十五)に引き継がれ、場面場面を絵巻のようにつなげてゆく写生的方法とが相乗効果となって、勸次・おつぎの近親感を、それと明確には語らずに、しかしすべての描写を状況証拠として挙げてそれを示唆することを可能にした。構成部分③十一章以降、叙述が勸次・

おつぎの關係に集中してくるゆえんである。

回 共同の事実

橋本佳氏は、村民の噂や揶揄に対する勤次・おつぎ・卯平の反応が描写されている四ヶ所を特定し、その検討を通じて近視姦が事実としてあったことと、この小説の隠されたテーマが、実は勤次・おつぎの近親姦であることを主張した。橋本説は十分な説得力をもつものであったが、言葉の解釈の問題である故に若杉慧の反論を許す余地を残しており、その後の研究も大旨近親姦説には否定的である⁽¹²⁾。しかしどの反論も、橋本氏が若杉氏の反論に答えた『土』論その後⁽¹³⁾の中の「インセストの噂は偽であるという積極的な証明が欲しい。」という言葉に答え得たものは無い。小稿は橋本氏とは異なる論点から、つまり①表現形式の示す必然性として、また②民俗学的な視点から、そして③橋本氏が指摘した箇所以外の勤次の態度から、近親姦が事実であったことの根拠を具体的にかつ多角的に検討したいと思う。

その手掛りの一つとして、構成部分②（六一七）と、構成部分③（十一一十五）の間に叙述の形式内容共に大きな断層のあることに注目しなければならない。構成部分②の終りは、おつぎの十七歳の秋に該当する。そして構成部分③の始めはおつぎは十八歳に「達したばかり」（十一）であって、この時おつぎに逢うためにしのもで来た村の若者を勤次が追い払い、おつぎを激しく責める事件が起こる。ここまでは、十七歳の春・初夏・夏（八・九）、十七歳の秋（十）、

十八歳の早春（十一）、のように細かく季節毎におつぎの成長が辿られてきたのだが、この十八歳の早春の夜の事件から時間は一気に「十九の秋」（十三）まで一年半もの空白を置いて跳んでいるのである。そして「十九の秋」以降は、再びもとの時間的秩序が戻っている。この一年半の空白は重要である。時間的秩序が破られているのはこの箇所だけだからである。如上の時間の経過を整理するならば、少女から大人への過渡期に、家族の支えとなつて働くおつぎの様々な魅力ある姿を辿ることは十七歳の秋（構成部分②）をもって一段落となるのである。そして十八歳の早春の夜の事件が引鉄になつたかのように、構成部分③の叙述（「十九歳の秋」から二十歳の晩秋の村祭の「口寄」の夜まで）は、一家の暮らし振りよりも村民の噂の中の、二人、つまり（勤次とおつぎ）の關係に焦点が絞り返まれるのである。人間が家庭の内部から外部へと、生命力を拡張してゆくべきもつとも微妙な時期が、なぜことさらのように大きな空白となっているのだろうか。お品と勤次も十六歳から二十歳までの間に、恋愛・結婚・初産という、この年齢相応の大事を経験し、人生の駒を順調に進めている。「仮令どんな物が彼等の間を隔てようとしても」「密樹の梢を透してどこからか日が地上に光を投げ」（五）るように勤次とお品は結ばれたのだった。「彼等の心は唯明るかつた」（同）人生のちよどここの時期が、おつぎには丸々空白であり、時間ばかりが「容赦なく」（十二）過ぎていくほかにはなかつた。そしておそらく、テキストの空白の一年半の間に、つまり勤次が村の青年とおつぎとの仲を激情的に引き裂いた事件から程なく、おつぎ「十九歳の秋」

までの間に勘次とおつぎは近親姦の関係に入ったと考えて間違いない。なぜそう断言し得るかは、構成部分②と③の「断層」をさらに検討することで明らかになる。最大のポイントとなるのは構成部分②、おつぎ十七歳の秋までは確実に存在していた、村の青年に対するおつぎの「情」(八)、そして勘次の再婚願望が、つまり両者の「家族の外への希求」が消滅していることである。(事件)の前、十七歳のおつぎの、村の青年達へ向けられる「情を含んだ」まなざしは、何者も抑止不可能な大自然の発芽力と同一視されている。

春の季節を地上の草木が知つた時、どれ程白く、霜が結んでも、草木の活力は動いて止まぬ如く、おつぎの心は外部から加へる監督の手を以て奪ひ去ることは出来ない。(八)

この時点では明らかに、勘次の「監督の手」に敵対する「草木の活力」がおつぎにあつたことを示す内容のだが、それと並行して勘次の方も、「おつぎの身體を」見るたびに「一種の堪へ難い刺戟を感じざるを得ない」(八)ことが、現実的には後妻への願望と結びついていたのである。テキストは次のように続けられている。

○それと同時に、女房が欲しいという切ない念慮を湧かすのである。

○彼は女房が欲しいくとのみ思つた。

(同)

「草木の活力」のようなおつぎの「自然の情」と、勘次の再婚願望は、おつぎが十八に「達したばかり」の早春の夜の事件を境に消え、まもなく二人の関係が村人の注視的になってゆくのである。潜伏していたテーマが浮上する。すなわちあつたものが消えたか、見え

る、勘次とおつぎに関する構成部分②から③への叙述の変化は、「家の外」へと拡張されるべき生命の勢が「家の奥」へと深く喰ひ入つた結果と考えるよりほかはない。作者は「あら程欲しがつた」(十四)後妻の話を、他人からされる事さえ忌避する程の勘次の変貌を強調しながらおつぎに関しては何事も語らない。しかし「勘次は何かにつけてはおつぎく」と懐かしげに喚んで一家は人の目に立つ程極めて睦まじかつた」(十三)のであれば、当然そこにおつぎの「変貌」も含意されている、と見なさざるを得ない。「どれ程白く霜が結んでも草木の活力は動いて止まぬ」とすれば、その活力は失なわれたのではなく、眼に見えない部分に方向を転じていった、と考えるのが理にかなつていく。

おつぎ十八歳以前と以後との時間的断層が家族関係の「異変」を暗示していることは、戻ってきた卯平によつて別の角度から再び照明を当てられる。卯平が勘次の家に戻つた翌朝、「薄暗い家の内に」(二七)一人残された卯平が「凝然として」堪次の家の「汚穢さ」を見詰める場面がある。この場面の意味については後述するが、今注目すべきは次の部分である。

彼が家に歸つたのはお品が死んだ時でも、それから三年目の盆の時でも家は空洞と清潔に成つて居てそれほど汚穢い感じは與へられなかつた。

(十七)

「お品が死んで三年目の盆に来た時」「十七歳のおつぎが」(十六)という記述が見えるので、この「汚穢さ」がおつぎ十八歳以降のもので確定できるのである。おつぎが十七歳の時までどれ程貧しく

とも「家は空洞と清潔」であつたことをこの時卯平は思い出している。そしてそれ以後何故家が「汚穢く」なつたのかの説明は一言もない。ここで明らかに言い得るのは、おつぎ十八歳以降に、家の（内部）に異変が生じた、ということである。作者はおつぎ十八歳以前と以後との間の（断層）を反復して提示することによって、読者の意識を（ある事実）へと促すのである。

近親姦の事実、の二番目の根拠は、彼等の属する共同体の体質に求められる。この狭い村落の内部では、彼等農民は秘密をもつことができない、ということにある。吉本隆明『共同幻想論』（角川文庫昭和57・1）が説明するように、狭く強い紐帯でつながれた村落内にあつては「村落の中に行っている事情は、嫁と姑のいさかいから、他人の家のかまどの奥まで、村民にとつては自分を知るように知られている。そういうところでは、（略）個々の幻想は共同性の幻想に（憑く）」のである。実際、勤次の村落は「川向う」（六）の村落とさえほとんど交渉がないのである。そのような自己完結した共同体であるが故に、勤次の盗みはことごとく露見するのであり、お品があれ程隠そうと工作した墮胎さえも周知の事実であつたことがお品の死後明かされている。例えば、村の青年達の念仏寮での噂話に「自分の村落に野合の夫婦が幾組あるか」という話題に及んだとき、ある青年が『勤次さん等見てえな、ありや勘定にやへえんねえもんだんべか』（十二）と応じているのだが、こうした会話の空気が伝えているのは、村民が事実として扱っているものは事実である、というこの村落の強い共同性にほかならない。勤次父娘の近親姦も、

村落内に半ば公然と行なわれている墮胎や盗みや、その時数えられた「野合の夫婦」などと同じ水準の、「孰れの心にも、口にはいはずくて了解されて居る或物」（十四）すなわち村の（共同の事実）であつたことを疑う余地はない。村落に（共同の事実）に客観的に対応するものが、他の事柄についてはことごとく存在し、この件に限って無かつたということとは有り得ないのである。噂はあくまで噂にすぎない、という常識論は、こうした（異分子を交えない）（十二）未だ近代以前の村落の、濃密な共同性の観点を欠くものである。

このような村落の空気は「社の祭」の「口寄」（十五）の場面に余すところなく露呈している。巫女の所作や呪文のような言葉に対して村民は畏怖の念を抱くわけでもなく、かといって迷信として醒めた眼で見ているのでもない。こうした（不思議）（＝幻想）が、独得のスタンスで村民の心性に親しく取り込まれている様子が窺える。

『呉れるよ程の心なら、ほんに苦勞でも大儀でも、蕾の花を散らさずに、どうか咲かせてくださいよう……』熟練した聲の調子が、さうでなくても興味を持つて居る一同の耳にしみじみと響いた。（略）

「俺れ濟まねえ」堪次はほつさりといつて又涙を横に拭つた。
「本當に出たんだよ、可怖えやうだ、」其處に居た若い女房は、しみかゝるといひつた。

（十五）

勤次が見たのと同じ（不思議）を村民も見ているのである。つまり誰もがこの村落固有の共同幻想の規制力のもとにあるために、勤次

がどのような意味付けも可能な「熟練した」職業的な巫女の言葉をお品の出現と信じて疑わず、悔恨の涙を流し、おつきに対する態度を一時的にはあるが改め、また程なく「全く以前に還つた」(同)という一連の心の曲折と、村民の了解(≡共同性)との間に寸分のずれもないのである。この「口寄」の場面は、この村落がまさに「個々の幻想は共同性の幻想に(憑く)」(≡共同幻想論)そのような世界であることを露わにする。閉ざされた村落の、自己完結した論理が村民の(幻想)を強力に支配し、集団性がもつとも高められるハレの時、近親姦が事実であることが顕在化しているのである。

念仏寮での青年達の噂話(十二)、盆踊りの時の(櫛事件)(十三)、村祭の「口寄」(十五)と続くテキストの連鎖は、漱石の述べる次のような(写生文)の性格に見事に合致する。

事件の進行に興味をもつよりも、事件其物の真相を露出する。甲なる事と、乙なる事と、丙なる事とが寄つて、斯うなつたと云ふ様な所に主として興味をもつて書く。

『坑夫』の作意と自然派傳奇派の交渉 明治四一・四『文章世界』構成部分③(十一—十五)は、「甲なる事と、乙なる事と、丙なる事とが寄つて」表向き語られなかった「真相を露出」しているのである。

三番目の根拠は整骨医での勘次の態度である。勘次が卯平に火箸で腕を打たれ、鬼怒川を越えて整骨医へ走つた時の、医師と勘次の間に交わされた問答の詳細には、勘次の見せる反応の中にその事

実を極めて巧妙かつ隱微に示唆しようとする作者の技巧を明らかに読み取ることができる。

「どうしたんでえ此ら、夫婦喧嘩でもしたか」醫者は毎日百姓を相手にして碎けて交際ふ習慣がついて居るので、どつしりと大きな身体からかういふ戯談も出るのであつた。

「なあにわしやはあ、噂に死なれてから七八年にもなんぞがすから」

勘次は少し苦笑していつた。

「さうか、そんぢや誰に打たれたえ、まあだ壮だからそんなも何處へか拵えたかえ」(略)医者はかう揶揄ひながら口髭を捻つた。

「先生さん戯談いつて、なあにわしや爺様に打たれたんでさ」勘次は只管に醫者の前に、追求の圧迫から遁れようとするやうにいつた。

醫者はそれからもう黙つて薬を貼つて形ばかりの繃帯をした。

もし勘次に「何處へか拵えた」ことに關して後めたく感ずる根拠が無いのならば(只管追求の圧迫から遁れようとする)という表現はこの状況にそぐわない。「夫婦喧嘩でもしたか」という問よりもさらに軽い冗談にすぎないのだから。勘次のこの反応は、何も知らない(川向う)の医師の冗談が冗談にならず「追求の圧迫」と感じてしまう(後めたい事実)が確実に勘次の心に蟻つていることを証している。

なお付け加えるならば『土』の（呼称）の特質も勘次・おつぎの關係の裏付けとなる。おつぎがお品を対象とする場合、

○「今朝は芋の水水つたんだよ」とお袋の方を向いていつた。

(二)

○「おつかあ、ちつとでもやらねえか」おつぎは茶碗をお袋の枕元へ出した。

(同)

この用例のように（お袋）なのだが、おつぎが勘次を対象とする場合は、全て「勘次」に統一されており父性を表わす呼称は唯の一度も無い、という事実は看過し難い。勘次とおつぎの關係構造は、親子ではなくあくまで対なる男・女、であることを暗示するのである。このように作品の構造を様々な角度から眺める時、勘次とおつぎが（世代の境界）を越えた者達であったことを疑うわけにはいかないのである。

二人がどのようにして（境界）を越えていったかはわからない。しかし勘次がおつぎの中にお品を見出してから後は、共同体からの極限的な分離と（いつも雨戸を閉め切つた陰気な家（五））という状況の中で、（境界）が越えられるのは例の（事件）のようなきつかけで十分だったであろう。言うまでもなく、おつぎは勘次の深い嘆きと喜びとの源泉であり、勘次の生存に強烈なりアリティをもたらず唯一のものだったからである。その執着には勘次の生存がかけられていたからである。勘次の出自及び両親に関する記述が皆無であることも、勘次の生の根拠が（お品・おつぎ）に限定される必然性をもつ。しかしたとえ勘次が（外部）の侵入を防ぐことがで

きたとしても、時を止めることができない限り、社会的通路をもたない閉じた（対幻想）の世界は（容赦のない）（十二）時間の経過の前におのずから「類廢」（二十五）してゆくほかはない。卯平がこの關係に終止符を打つ役割を果たしたのである。

（五）近親姦の換喩としての（家）

勘次・おつぎの近親姦は明らかに一度も語られはしなかった。しかし二人の關係を定式化するためのコードは存在した。それは近親姦の（換喩としての家）である。その場面には必ず卯平が介在し、（汚穢さ）（二六）、（妻れ・類廢）（二十二）といった相のもとに勘次の家が繰り返し描かれるのである。先に引用した、卯平が村に戻つた翌朝、現在の家の（汚穢さ）からおつぎ十八歳以前の家の（清潔さ）を思い出す場面に続いて次の場面が目される。

卯平は庭に立つた儘、空虚になつてさうして雨戸が閉してある
勘次の家を凝然と見た。家は妻れて、居る。（略）静寂と人氣の
なくなつた時は類廢しつゝある其建物の、何處にも、生命が保たれ
て、居るとは、見られぬ程悲しげであつた。 (二十二)

「念佛の集り」から家に戻つた卯平を介在させた、勘次の家の描写である。「類廢しつゝある其建物」とは唐突なそして極めて暗示的な表現といわねばならない。おつぎ十八歳以降のこうした（妻れ、類廢、生命感の無さ）は、卯平が凝視する「其建物」の内部で営まれている男女關係の換喩的表現と考えるのが文脈に通っている。物語結末の、卯平による家の焼尽は、勘次の家の（汚穢さ、妻れ、類

塵)を卯平が凝視している、というこの構造上の必然として招き寄せられた事態にほかならない。火は「其建物」と共にそれに覆い隠されていた(生命力尽きた関係)をも焼き払ったのである。

勘次の願いは「三人の家族が只凝結して」「其日其日と刻んで暮して行くこと」(十一)に尽きていたのだが、それは言い換えれば時間を「凝結」したいという願いにほかならなかった。おつぎにとつてかけがえのない、そして「容赦なく」過ぎてゆく時間を勘次は意識化すまいとした。すなわちお品の死後唯一人、大自然の循環性に反逆し続けて勘次は八年の歳月を経過したのである。しかし家の焼失とそれに続く卯平の自殺未遂、そして奇跡的な生還、これら一連の事件は、勘次の強引な願いがすでに限界に達したことを、現実が大きく動きつつあることを勘次に告げた筈である。おつぎはもう二三歳である。内儀さんに、類焼させてしまったことを詫びつつ、「家族の極り」(二十八)をつける決意を述べる結末の場面で、勘次の顔に浮ぶ「深い憂」と「惑亂」とは、勘次の脳裡にこの時、みずから長い年月封じ込めようとしてきた、お品の死から現在に至る時間の堆積が一時に湧きあがっていることを示すものである。なぜならこの時初めて勘次の口から是迄勘次が一度も口にするものなかつた與吉の成長及び未来が語られるのである。「わし等野郎も其内はあ大く成つて来つから學校もあとちつとにして百姓みつしら仕込むべと思つてんですがね」と勘次は言う。そして與吉の成長の事実は、当然その裏面にもっとも重大な問題であるおつぎの結婚、すなわちおつぎとの別れを含蓄している⁽¹⁴⁾。親子三人で「凝結」して

きた、そのかけがえのない時間が終わったことを「深い憂」と「惑亂」のうちに勘次が承認したところでこの物語は終るのである。

作者は勘次のおつぎに対する思いに一度も愛という言葉を用いていない。勘次がおつぎに抱いていたのは(余りにも深い親しみ)(二十一)と(懐しさ)(十三)であつた。(深い親しみと懐しさ)は、個我と個我との境界も世代の境界も腫化させた。勘次にとつておつぎはあたかもお品のよう、だつたのである。こうした『土』の世界は、個我と個我との間の抜き難い不信と懸隔とを基軸とする漱石の作品ともっとも遠い極に位置を占めている。しかし漱石も長塚節も共に、(写生文)という同時代の風がもたらした両翼であるところに、子規の遺産の時代的成熟を見ることが出来る。(ア)

注(1) 『土』の世界の秩序』『文学』昭和45・2)

(2) 「全体として読者に加速度の興味を興へない」(『土』に就て)『明治45・5 『漱石全集』第十一巻 岩波書店 昭和41・10』と述べている。

(3) 橋本佳前掲論文

(4) 玉井敬之『土』について』『日本文学』昭和29・7)、小田切秀雄『長塚節』『明治・大正の作家たちⅡ』所収 レグルス文庫 第三文明社 昭和53・12) 他。

(5) 「長塚節の『土』について」『明治文学研究』 明治文学談話会編 昭和9・8)

(6) 市村与生氏の「生命存在の根源的な相互・循環的な諸関係」(『長塚節論 春は冬に遠くして』(創林社 昭和54・10)という見解は小稿の意図する所に近い。

- (7) 『中里介山全集第十九卷』(筑摩書房 昭和47・1)
- (8) 「人の世の相の物語」(『感情の歴史』所収 有精堂 平成5・5)
- (9) 『多情多恨』論(前掲書所収)、なお『源氏物語』「桐壺」の「多情多恨」への影響を実証した研究に村岡典嗣「紅葉山人と源氏物語」(『増補日本思想史研究』岩波書店 昭和4・5)がある。
- (10) 橋本佳前掲論文
- (11) 『長塚節素描』(講談社 昭和50・8)
- (12) 梶木剛『長塚節』(井沢出版 昭和55・10)、林正子『土』論——インセスト問題・反措定への試み——(神戸大学『国文学研究ノート』昭和59・12)、千葉貢『可惜』命の文学(双文社出版 平成3・12)、市村軍平『土』における関係をめぐって(『古典と現代』平成7・9)など。なお櫻庭孝男は「小説の場所と〈私〉」(『文学界』昭和52・7)に「外側から熾烈な噂の偏在を描くことによってその事実を暗示」する、と近親姦説を支持する立場であり、岩佐壮四郎『土』——〈人事〉と〈自然〉の劇(『世紀末の自然主義』所収 有精堂 昭和61・8)も櫻庭説に賛意を表わしている。
- (13) 『文学』(昭和49・4)
- (14) 橋本佳氏も前掲『土』の世界の秩序の中で、この場面におつぎの名前だけが出されていない不自然さに着目し、インセストの根拠の一つと見ている。

○本文の引用は昭和五十一年版『長塚節全集第一巻』(春陽堂書店)に拠った。

『街と村』論

—— 罪の変容 ——

はじめに

伊藤整の戦前期の代表作とされる長編小説『街と村』は、その第一部を成す「幽鬼の街」が昭和十二年八月号の『文芸』に発表され、また第二部を成す「幽鬼の村」は翌昭和十三年八月号の『文学界』に発表され、両作に「序」を付して、昭和十四年五月五日に第一書房より刊行された。刊行時には大幅な改稿及び加筆がなされている。随筆「創作手帳」(『月刊文章』昭和12・9)での作者自身の説明によれば、「去年(引用者注・昭和十一年)の夏頃、最初にこの作品(引用者注・「幽鬼の街」)の構成を思いついた」のであり、かつそれを同年の「末頃六十枚余に書き上げ、更に長く書き改める決心をした」とあり、それが事実であるならばこの作品は構想から単行本の刊行(すなわち、いちおうの定稿の成立)まで三年弱の歳月が流れていることになる。長編小説として、それは特に長期の期間であるとは言えないが、この時期の日本の社会の動きを考えれば、看過できる

ほどの短期間であるとは言えないだろう。

本稿では、「幽鬼の街」の分析によってどのような問題が「幽鬼の村」に先送りされたのかを確定し、次にそれが「幽鬼の村」においてどのように解決されようとしたのかを、改稿の過程も含めて考察する。そのうえでこの作品が、伊藤整の文学における罪の問題というモチーフに、ひとつの終結をもたらしたということを論証したい。

1

「幽鬼の街」はそのタイトルに端的に示されているように、「街」の物語である。単行本で省かれたが、初出発表時には本文中に作者手書きの「小樽市街中央部図」が挿入され、また作品本文でも、實在の建物、現実の町名や通り名が示され、この作品を読み進めていく読者は主人公「私」とともに、「私」にとつて故郷と言える小樽という街をさまよっていく、という形式で書かれている。

倉 西 聡

冒頭部分は、次のとおりである。

膚寒く曇った日であった。私は小樽駅前の広い坂道を、海の下に向って行った。道の向端の水面には赤い船腹をでくと突き出した北洋通いの貨物船がもの憂げに幾隻も浮かんでいて。煙突はやや後方に傾き、赤ちやけた煙がその隅から流れ出ている。そのあたりからは、とんとんとんという発動機船の音がして街の方まで響いて来ていた。せわしない怪しい海港の吹きさらしの街路である。

書き出しの第一文の「膚寒く曇った日であった。」という一連のことばで、この物語の展開される特定の一日が指定され、続く第二文で主人公「私」の行動する場が「小樽駅前」という現実の地名とともに示され、「向って行った。」という過去形で締めくくられる。その後しばらくは、歩く「私」の眼を通じた港の光景が「発動機船」のたてる音も含めて語られるのだが、それらの光景は、「せわしない怪しい海港の吹きさらしの街路である。」という分析的なことばでまとめられ、「私」の歩く街の性格が位置づけられる。

この一連の文章に特徴的なことは、視点人物と言える「私」の背後に在る語り手が、この物語の場を統御しているという痕跡を、読者にたいしてあからさまに示しているということである。前述の第一文と最後の一文がそのようなのであるが、このような痕跡の存在は、語り手が主人公よりも多くの情報を持っているということをちらつかせることを意味するのであり、それが一人称である場合、一般的には回想の形態と呼ばれる小説の形式を意味するのである。

それではこの作品は、回想の形態だと言ってしまうのであろうか。先述の引用のしばらく後に、明らかに語りの時点（語りの現在時）が作中の現在時と一致することを表す次のような部分がある。

私はむかし幾年も住みなれたこの街をいま歩いて、別に何の感興もこれらの風物に対して抱くわけではない。この街にはなにか私の心を和らげる空気がある。
あるいは、次のようなことばも語られる。

処で私はいま旗のことを言ったが、たしかに赤い旗が左側の洋風の建物の頂上にひるがえっているのを見たのだ。

つまりこれらの部分（とその前後）では、語り手と主人公とは分裂していない。現在進行形として、歩いている「私」自身の心の中に浮かぶことばが直接に語られていくのである。つまり語りの発する場が前触れなく変化するのであり、そのような変化は、この作品の全体を通して繰り返される。たとえば終結部近くの電気館下の場面でも、この歓楽街の様子は歩く「私」を通して報告され、しかし結末の「生きなければならぬ、ここを過ぎて生きなければならぬ」と私は思っていた。」ということばは、「思っていた」という締めくくりかたによつて、「思つて」いる「私」とそれを語っている位置との距離が明らかに示されることになる。

奥野健男氏は印象批評的に「悪夢のような幻想的な方法」（『街と村』「典子の生きかた」、『伊藤整』昭55・9・20新潮社刊、所収）と論じているが、そのような印象が生じるとすれば、それは以上のような語りの在り方に負うところが大きいのである。なぜならば、すべ

てが終わった時点から眺め返されるべく設定された筈の空間が、不意に出来事の様子を知らない語りによって捕らえ直されることになる。既知の筈の場が、気がつくとも未知の空間にとつて代わられるのである。幽鬼が出現するのは、そのような場においてなのだ。

曾根博義氏もこの作品の語り注目に、「幽鬼の街」序論（『国語と国文学』平1・5）で「語りの二重性」と呼び、「表面上の語り手は「私」だが、真の「語り手」は「私」から大きくはみ出し、「私」と読者の間に立つて案内役をつとめているというべきだろう。これは、良くも悪くも、この作品全体に見られる表現上の著しい特徴である。」と論じている。つまり曾根氏は主人公「私」と「語り手」との分裂を取り挙げて「二重性」としているのだが、ここまで論じてきたように、その分裂の内実はけっして固定化されたものではない。つまりこの作品の語り手は、曾根氏の言うような「案内役」という役割に徹しているだけではないのである。前にも触れたように、主人公（すなわち、作中に登場する）「私」と語り手との間の看過することのできない違いとして、情報量の問題が存在する。しかしながら語り手はしばしば、言わば主人公の「私」と接続し、かつその「語り手」は自らの存在の痕跡を作中に残すことによつて、作中のところどころで主人公の「私」そのものが、語り手の持つだけの情報量を持つような印象を読者に与えることになるのである。

そしてそのような印象を補完するものとして、初出には「小樽市街中央部図」が付されていたのである。作者自筆のこの地図は、初稿における主人公名「伊藤ひとし」を介して、主人公「私」があ

たかも作者その人であるかの印象を読者に与えることとなる。つまり主人公「私」は、物語内の小樽の街の街路を歩き続けながらも、そのような自己の歩く道程さえも物語の外側から俯瞰しているかのような感じが強められるのである。

もちろんこのような「私」の在り方を、平野謙の「伊藤整論」〔新潮〕昭16・10）以来の変形私小説というところから位置づける論じ方もあるだろう。しかし本稿ではそれを「私小説的伝統」への「服従」ではなく、伊藤整にとつて自己の方法論を積極的に生かすための意図的な戦略であつたと考えたい。なぜならばこのように「私」が設定されることによつて、主人公「私」は本来の作中人物として持つべき以上の権力を持たされることになるのである。つまり主人公「私」は幽鬼たちに追われて街中を歩きつつも、その幽鬼たちの出没する街を自らの統御の下においていると言えるのである。

このことは主人公「私」が（現実の作者と同じく）小説家として設定されていることにもかわる。「私」という一人称で終始するように見えるこの作品は、追われている「私」が語るることによつて形成されていく世界を、あらかじめ書かれたものとしてとらえているとも言えるような構造を内蔵しているのである。そしてそのような構造の指し示すものは、作者である伊藤整における書くことに内在する権力の問題だと言える。

書くことの問題、それは「幽鬼の街」の中で例えば大林滝次（初出では、小林多喜二）や塵川辰之介（初出では、芥川龍之介）の幽鬼の出現する場面で、中心となつて展開される問題であつた。しか

し作品内に登場する幽鬼たちには、書くことの問題とは無縁のものも多い。そのような幽鬼の在り方について、次章で検討することにしたい。

2

作中に出現する幽鬼たちはいくつかのタイプに分けることはできるもの、瀬沼茂樹氏が「そのもつ関聯は極めて浅い」(「叙情と心理『街と村』・伊藤整論』『一橋新聞』昭14・6・10)と指摘するように、それぞれのタイプ相互に関連性があるわけではなく、その出現についても一貫した法則などは見られない。そもそも同じく幽鬼と言いながらも、死霊ばかりとはかぎらず、かつ主人公を脅かす存在ばかりでもない。中学生時代の主人公自身や学生時代の親友の山崎登(初出では、川崎昇)も、幽鬼となつて出現するのである。作者自身は後になって「印象拡大方法」と説明している(「あとがき」、カッパブックス版『街と村』昭30・7・5、光文社刊)が、むしろこの作品に出現する幽鬼たちは、語り手の妄想の中から生まれ存在なのだと言えよう。

妄想という点では、佐藤和正氏が『「街と村」試論——作品の構造としてのパラノイア——』(『名古屋近代文学研究』2、昭59・12)で「パラノイア的な妄想」という観点から女性たちにたいする主人公の「エロスの願望」を読み取っているのだが、ここでは語り手の妄想が幽鬼たちを生み出すというだけではなく、語り手によって形成されていく作品世界内の時間が自在に動かされていくということに

注目したい。⁽¹⁾前に触れた中学生時代の「私」は、物語の始発時から時間の流れの中に出現したように見えるものの、彼が「私」の前を立ち去る場面では、「彼は泣きながら稲穂町の第二大通りの暗い角を小樽駅の方に曲つて、とぼとぼと歩いて行った。ちょうど今行けば、七時五十分の、通学列車の次の混合列車が、隣駅の塩谷まで彼を運んで行くのだろう。」と語られ、この空間では現在の「私」の生きる時間と中学生時代の「私」の生きる時間が、ひとつのものとして重ねられているような印象が生じる。それについて山崎登が出現する場面では、物語を流れる時間自体が変化し、主人公の「私」自身が学生時代に戻るように見えるのだが、ここでも「私」が山崎登にたいして「きょうはね、鬼どもが寄つてたかつて僕を責めさいなむんだ。」と語りかけているように、「私」の現在時と過去時とが明らかに重ね合わされているのである。すなわちこの物語を流れる時間は、単に時間の因果律(過去の原因によって現在の物語が生じること)から自由であるだけではなく、時間自体が語り手の意識のフィルターによって歪み、変形されていくのである。そのような時間を任意に歪ませる意識によって語り出され、細部を辿られていく空間、それがこの作品の「街」なのであり、幽鬼も含め街の世界そのものが、言わば語り手の内部から引き出されたものだとと言えるのである。そしてその語り手は前述のように、とどころで主人公「私」に接続する。すなわち語り手の行為は主人公「私」の行為へと、置き直されていくのである。

このような複雑な構造の背景には、前章で指摘した語ることに内

在する権力の問題が存在する。しかしそれについての説明に入る前に、作中の幽鬼について更に考察を進めていきたい。

前述のように作中の幽鬼はいくつかのタイプに分けられるのだが、その中でも最も「私」を脅かし、それによって作中での「私」の歩みを進めさせる（すなわち、ストーリーを動かしていく）ものは、「私」の倫理的な罪にかかわる幽鬼たちである。それにたいして文学的な問題にかかわる幽鬼たちにたいしては、「私」は脅えを抱かない。例えば大林滝次の幽鬼の場面では、「唯物教における最後の審判」に立ち会う羽目になり自らの死にも直面しながらも、彼が空中に飛び去ってしまうと、「彼が死んでしまつてから後、私はどんなに彼に逢つて話したいと思ふことを胸のうちに蓄めていたことだつたらう。そして今日千載一遇の機会に私は遂になにも言い出すことなく彼を放してやつてしまつた。」と語られ、大林を失つたことにたいする後悔の念が示される。また、河童に変じた塵川辰之介の幽鬼と彼の繰り広げる「文芸の審判」にたいしても、「私」は恐怖を表したりはしていないのである。つまりどちらの場面でも、「私」が自らの意志で、幽鬼である彼らから逃れようとしてはいないと言える。作中の「私」は街中をさまよひ、あるいは街から逃げ出すために「上野までの三等寝台券」を買おうとする（これは、差別的な駅員によって断られてしまう。）のだが、そのような気持や、あるいは結末での「ここを過ぎて生きなければならぬ」という気持ちに「私」を追いやるものは、それゆえに文学的な問題にかかわる幽鬼たちではない。「幽鬼の街」という作品の全体を通じて、より

強く言及されるのは「私」の罪の問題であつて、そちらにかかわる幽鬼のほうが中心的な役割を果たしているのである。

小樽駅を降り立って最初に出会う久枝（初出では、百枝）から始まり、色内停車場下にある共同便所の中での声と手ばかりの幽鬼、踏切りの遮断機の前に現れた子供をつれた寝れた女など、「私」の罪を指弾し脅かす幽鬼の大半は女の幽鬼である。もちろん山田町で「私」を取り囲む沢山の古着の幽鬼の中には男の幽鬼もまじつていのだが、女の幽鬼の印象のほうが圧倒的に強い。倫理的な罪といえば、他者にたいする裏切りの罪も含まれるのであり、たとえば山田町での「勤人風な色のあせた背広」の幽鬼などは、そのような「私」の裏切り行為を責めたてているのだが、作中で指弾される「私」の罪としては、性的欲望に端を発したものが中心を成しているのである。このことは、妙見川の場面で川のせせらぎが語る次のようなことばに象徴されている。

「処で君はまだまだ色んな感懐を抱いているようだね。次にどの女に逢いたいかね。ほら、すぐこの坂の上の東雲町にいたあのひとかね？ 今だつて思い出すじやないか。君は其の後あの人はどうなつたかは、ちつとも知つていないらうか？ それとも君がこの川にそつて、緑町の水車のあたりまで後をつけたあの眼の黒い女にしようか。いやはや、君は一体どんな人間かね？ きりがいいじやないか？」

「幽鬼の街」に到る伊藤整の作品では、罪の問題と性的意識の問題が短編小説「石狩」（『早稲田文学』昭10・11、および最終部分が「石

狩の宿」の題で『作品』昭10・12、や散文詩風の作品「浪の響のなかで」(『文学界』昭11・5)において、作品の構成原理として試みられていた。⁽²⁾ その場合の罪の問題とは、生きていることがそのまま加害者となるということであつたのだが、「幽鬼の街」ではそれを性的意識の問題と重ね併せて一本化し、「私」の倫理的な罪として作中に設定したのである。つまり文学的な問題(書くことの問題)の決着よりも先に、より緊急の問題として倫理的な罪の問題がこの作品の中では、「私」に投げかけられるのである。そしてそのような「私」を語る在り方として、先に述べた語りの問題が存在する。

作中の幽鬼たちは語り手の妄想の中から生まれたと論じたが、それを佐藤公一氏のように「おぞましきもの(アブジエクト)」「中野重治と平野謙と『街と村』——中野重治「閏二月二十九日」より——」、「モダニスト伊藤整」平4・5・25有精堂刊、所収)ととらえるのではなく、前述のように幽鬼たちだけではなく街の空間そのものも妄想から生まれたものと考えたい。なぜならば前章で述べた書くことに内在する権力の問題は、この作品における小樽という場の支配の問題へと繋がるからである。

主人公「私」は作中人物としての「私」の立場を越えて、作品世界のすべてを紡ぎ出す語り手の権力を持たされている。すなわち「私」は作中の幽鬼たちにたいしても、またその幽鬼たちの出現する小樽という場にたいしても、その存在の根底を左右する力を持たされているながらも、同時に幽鬼たちに追われ、言わば小樽という場から復讐を挑まれる。この「私」という存在は、あたかも復讐をう

けるがために語り手の権力を行使しているかのようである。このような自傷行為とも言える作品の構造の中に、作者である伊藤整にとつての小説を書くことの意味が透けて見えるのではないか。そしてそれを解き明かすためには、論の焦点を再び作中の「私」へと合わせなければならぬのである。

「私」は小説家として設定されているのだが、その「私」は故郷と言えるこの小樽の地を自らの内から切り捨てることによって、小説家として自立していったという過去を持つのではないか。現実の伊藤整がそうだと言っているのではない。あくまでも作中の「私」のことである。たとえば久枝は「私」に向かって、次のように語りかける。

あなたいつ小樽に来たの。随分久しぶりねえ。もう何年になるかしら。そうそう、あれは大正十五年だったかしら。いや昭和二年かも知れないわ。もう十何年って経ってるわねえ。

勿論これだけでは断定することはできないとしても、しかし作中のどこにも、「むかし幾年も住みなれたこの街」を去って以来、「私」が何度か戻って来ているという痕跡は見られないのである。

ピヤホオルでの「私」の学校時代の友人たちの会話でも、「いま頃になって、学校を出てから十年の余もたつて、見すばらしい恰好で小樽の街を歩きまわるなんて、いよいよ東京を食いつめたにちがないね」と陰口をたたかれているのである。

つまり「私」は小樽を去り、小樽を切り捨てることによって、東京で小説家として自立した。それゆえ「私」にとつて小樽という場

そのものが、作中の幽鬼たちと同様に、かつて一度は親しく自らの内に取り込み、しかし今となってはそれが蘇ってくるのを恐れざるをえないものとなっていると言えるのである。

ここで問題は、なぜ作中の「私」が小樽の街に戻って来たのか、ということにも結びつく。なぜならばそれは、なぜ語り手がこの小樽の街を舞台とした物語を語るのか、ということと重なるからである。

前述のように「私」にまず問われるのは、倫理的な罪の問題である。「私」は幽鬼たちからの指弾に反論することはできず、中学生の「私」からも、「ああ、僕はこれから十五年も生きて、結局あなたのような穢らわしい人間になるというのは何と怖いことではないか」と非難される。そのような指弾や非難を浴び、最後には無数の幽鬼の群れに取り囲まれながらも、それらを踏み潰し、いずこかへと逃げ出していくのである。つまり「私」の小樽への帰還とは、「私」がこの街とともに捨て去ったものを再確認するための作業だったのであり、そのためにこの街は語り手によって語り出されたと言えるのである。「私」は小樽という場や幽鬼たちからは逃げ出したとしても、自己の倫理的な罪を拭い去ることはできない。そのことはまた作者の伊藤整にとって、自己の文学の中心にこのような罪の問題を据えることの確認であるとともに宣言であったのだとも言えよう。

しかしこの作品は、それだけでは終わらない。そのような罪の問題を書くということ、そのことの意味自体も問われようとしている

のである。語り手によって語り出されなければ小樽の街も幽鬼たちも生まれなかったのであり、それは前述のこの作品の語りの在り方によって「私」に接続され、「私」が書くことの問題へと置き直されていく。そのために「私」は、文学的な問題にかかわる幽鬼たちと出会わなければならないのだが、ここで注意すべきなのは、大林滝次にせよ塵川辰之介にせよ彼らによって示される文学上の問題が、「私」に直接かかわる問題として設定されていないということである。大林は「私」にたいして「君は情緒のシステムで生きとおせる自信があるのか。言ってみろ。無いだろう。無いだろう」と追及するが、「私」は「にこにこ笑って彼の顔を見て」いるだけであるし、塵川による「如何に美しく書くかという論理に基づく文芸の審判」の大行列の中にも「私」の姿は示されない。「私」はその行列を外側から、塵川からわたされた望遠鏡でのぞいているだけなのである。この二人の幽鬼の場面は、それぞれこの作品の前半部と後半部の中でのかなり長めのエピソードと言えるのだが、それは結局「私」の外側の問題として処理されてしまう。これらの問題は、「私」にとってかつては重要なものであったのだが、街をさまよう今となっては過去のものとなっているということが、そこからは読みとれるのである。

「私」に直接かかわることばとしては、中学生の「私」が言う「良心の命ずる仕事の為に生命を賭ける勇氣を持たず、自分の良心にすら体裁を飾って言いのがれようとし、何が美しい芸術であるかという観念も出鱈目になり、ただあて込みばかりの仕事をしてい

る。」という痛烈な批判があるが、このことばは実は、前半部は大
林の問題に重なり、後半部は塵川の問題に重なるのである。つまり
中学生の「私」は「言いのがれ」「あて込み」と決めつけ、「私」は
それについて「世間は、今までそこに生きていたのと全く同じよ
うな、中庸な、特色も理想も圭角も持っていない人間にしか生きる
道を与えないのだ。だから僕は先ず凡俗になり、角のない人間にな
り、普通の人間と同じような莫迦らしさと汚れとのついた人間に
なって見せなければならなかった。そういう人間にのみ世間という
奴は、生きる権利、いや生きる許可を与えるのだ。そして僕は先
ずそういう人間になって、実はこれから自分の思っていた仕事をし
ようと思っているんだ。」と弁解するのだが、そもそも「私」の
「汚れ」（すなわち、罪の問題）とは「普通の人間と同じ」というよ
うな世間的なレヴェルに解消できるものではなく、かつ「言いの
がれ」「あて込み」ということばで総括できるものではなかったの
ではないか。それは「私」の存在そのものに根ざすものであり、だか
らこそ大林と塵川のそれぞれの世界とそこから「私」に指し示され
る批判にたいして、「私」は無縁の者でありえたのである。

これはピヤホオルの場面での、「東京の私の仲間」の語る批判の
ことばについても同じである。この「仲間」は、北海道を「植民地
の文化」ととらえ、その「文化」の特徴を「移し植えに外ならな
い」と断定し、そこに育った「私」のことを「だからあいつの書く
もので独創というものは爪の垢ほどもないのさ。寄せ集めか、引き
写しか、翻訳かだ。あれで強引に世を渡ろうとする処が植民地育ち

なのさ。」と決めつける。「私」個人の表現の問題を、「植民地の文
化」という一般的な問題に置き換えて決めつけているのである。捨
て去ったはずの小樽の街を呼び寄せてまで展開される「私」の存在
についての問題を、このような一般論の中に解消することは、表面
的な解決法だと言うしかないであろう。

つまりこれらの場面は、書くことにおける「私」の問題を浮かび
上がらせるための布石でありかつ布石でしかなく、結局この問題は
「幽鬼の街」では解決されない。それゆえに「私」が自己の幼時期
の時空を辿り直していく設定の続編「幽鬼の村」が書かれる必要が
あったのである。言わば問題は先送りにされたことになるのだが、
ただことはそれほど単純ではない。次章ではこの点について、「幽
鬼の村」を細かく検討したいと思う。

3

第二部である「幽鬼の村」では、主人公「私」の罪の意味づけが
明らかに「幽鬼の街」とは異なっている。倫理的な罪の問題につい
ては、例えば「泥棒」として村人たちに追われるエピソードでは、
本場の「泥棒」は定助であって「私」は彼にそのかされて窓から
抜け出そうとしただけだったのであるし、「巫子おろし」の場面で
巖田の爺に指弾される洋子とのことについても、「私と洋子との関
係は、東京で彼女が宿なしになった時に、一週間私の宿で一緒にい
たということだけだ。別れるときなど、私たちは何の感傷も見せ合
わなかった。」と語られるように、「幽鬼の街」における女の幽鬼た

ちとの関係とは異なっている。巫子にのりうつた吾一の追及するマギリについては、たしかに相手を誤って犯人扱いして謝りもしなかった「私」の倫理的な罪だと言えるが、作中ではそれほど大きな問題として扱われてはいないと考えられる。

作品後半の瓜姫のエピソードと風の財宝のエピソードでは、それぞれ殺人と強盗という人間としての根源的な悪（あるいは、瓜姫が女であることを考えれば、ここには性的欲望に伴う悪も含まれていると言える。）が示され、その後の暁了寺の場面を中心とした仏教的な色彩の濃い場面展開に繋がりが、かつ「幽鬼の街」以来の「私」の倫理的な罪の問題がそこに集約されているかのように見えるのだが、しかしここで留意しなければならないのは、このふたつのエピソードに挟まれた部分にうかがえる、この作品における語りの位相についての言及である。

瓜姫のエピソードの終末部分では、天の邪鬼である「私」が、追いつめられた絶体絶命の状態の中で、「そうだ。私はその天の邪鬼だ。私が天の邪鬼でなくて、誰が天の邪鬼なものか。私だ、私だ。瓜姫を殺したのは私だ。私が騙したのだ。（中略）私が虱をとったのだ。そして……」と語ったところで突然、次のようなことばが綴られていくのである。

——いや、お前でないよ、お前でないよ。それは私が話してやっただ。お前は何あも悪いごとしたんでないよ。それは瓜姫ごこの昔だよ。

そしてこの語りはそのまま、「爺と婆」が川を流れて来る瓜を

拾って割つたら中から子供が出てくるという「瓜姫」の昔話を語り出し、それが鍵括弧を閉じる形で終結すると、その後には、次のようなことばが語られていく。

それは母の声であった。それは天の方からおりて来て、波のように、音楽のようにあたりに満ちひろがった。それは母の声であった。それは歌うように、お前は悪い子ではない、と言った。そうだろうか。そうだろうか。私は魚のように母の声のさわやかな流れのなかに浮いているのだった。どこにも母の姿は見えなかった。世界じゅうがその母の声になった。すると誰かが言った。

——ほら、母あさん、昨日のあの話の続きしてけれ。ほうほうけきよって話」

つまりこの作品を統御しストーリーをおし進めてきたはずの語り手（あるいは、語り手と接続する「私」）の位相の外側に「母」の統御する位相が存在し、それがこの作品の場面転換を進めているかのような構造が、これらのことばで突如示されていくのである。そしてこの作品の世界を支配するものとして「母の声」が示され（「世界じゅうがその母の声になった。」）、殺人という「私」の罪もその声の中に解消されていくのである。

そして場面は「私」の少年時代へと転換し、そこで「私」の「母」は「私」と弟妹たちに昔話を語り出し、「私」はその話を聞きながら眠りこんでしまふ。

弟や妹たちもみんなその室に集まって、傍のランプの下で針

仕事をしている母の話を聞いているようだった。私はまた段々と眠りの方へ落ちて行った。弟や妹たちがそこにいるかどうかもわからなくなった。私はひとりぼっちであった。笹藪のような処をかきわけて、家の横の崖下のあたりを、ひどいグスベリの棘を分けて、歩いて行った。

この「歩いて行った。」ということばにそのまま接続して、鼠の財宝のエピソードが始まる。それゆえこのエピソードにおいても、瓜姫のエピソードと同じく「母の声」の支配が示されていると言えるのである。

以上のように、「幽鬼の街」では作品の中心的な問題とされていた倫理的な罪の問題が、「幽鬼の村」ではそらされているのだと言えよう。つまり「私」の責任が回避されるような構造が、ここでは目論まれているのである。

「幽鬼の街」と比較しての作品構造の変質として、「私」のさまよう空間の在り方にも触れなければならない。前述のように、街では作品の始発時からの「私」の生きる時間と幽鬼の存在する過去の時間とが重ね合わされる部分が、幾箇所も見られた。すなわちそれによって時空の歪みが生じられるとともに、「私」の現在の罪の問題が、「私」の過去にかかわるものであるということが強く示されていたのである。しかしそれにはたいして「幽鬼の村」では、「私」を取り巻く場面（エピソード）が変わるたびに、「私」はそれ以前の記憶を失ってしまうかのような言動をとるのである。もちろん場面の場面において個別に「私」は自己の過去と結びついてはいるのだが、

しかし作品の始発時からの連続性を「私」は担ってはいない。言わば村の「私」においては、今ここにいるという自己の存在そのものが希薄化し、統一的な像を欠いてしまっているのである。そのような「私」にたいして、街におけるような倫理的な罪の問題を問うことはできないし、このような形でもこの問題はそらされているのである。

そしてその代わりに新たに設定されているのが、「私」の生き方の問題とでも言えるものなのである。

この新たな問題は、チャ子のエピソード、「さとり」のエピソードなどで示される。前者でチャ子の声は、神への懺悔の中で「私」の「冷たい心」を嘆くのであるが、それにはたいして「私」は次のように語る。

これは冷たい心だろうか。いや私にはそうは思われない。人が泣くよりもっと悲しいことがどこかにあるのだ。人が私をやさしくいたわってくれるよりもっと美しい言葉が何処かにある。私はそれのために自分の心をとっておきたいのだった。

（中略）少女たちや、女たちや、友だちや、人はみな私の傍を歩みすぎた。彼等は自分の一番いいものを私に示した、私に与えた。一番優しい心で私を愛した。一番真実な心で私を戒めた。だが私はもっと別なものを待っていた。もっと先にある何かのために私の本当の心を、本当の涙と感動とをとっておいだ。

けれどもあれ等が、もう今では失われてしまったあの人人の言葉や愛情が、私の受けることのできる最上のものであったのか

も知れない。

これらのことばからは、間違つて歩んでしまった自己の人生についての苦い後悔の念をうかがうことができるのであるが、「もつと先にある何かのために」自分の目の前の現実を顧みないという現実軽視のロマンチズムが、ここで取りあげられ否定されているのだと言える。「私」が故郷を棄てて東京に移住したのもそれゆえだったのであるが、この故郷の村では「私」のことを覚えている者も殆どおらず、暁了寺で「私」が亡くなった時にも村人たちから「行路病者」として扱われるのである。

後者では、小学生になった「私」にたいして、角田先生が「さととり」の寓話を話し、そのうえで次のように説教する。

さととりというのは自分の心にある雑念のことだ。自分のしていることを疑う、それが一番いかん。孤疑逡巡という言葉がある。自分のしていることの値打を疑つてはならん。(中略)考えるのは一番先に一回だけ考える。これは善い事か悪い事か。為すべき事か、為すべからざることか。それでいいのだ。為すべき事だときまつたなら、もう二度と疑つてはいかん。いいかっ！ (傍点原文)

しかしながら「さととり」は「私」の中に住みついており、口の中から語りかけてくるのである。

これらのエピソードでは、「私」の生き方が問われているのだが、それは倫理的な罪の問題がそうであるような、個としての「私」の問題とは言えない。小説『街と村』第二部としての「幽鬼の街」か

らの連続性をすりかえてしまふような形で、現実軽視の問題にしる、疑いのために実際行動ができないことにしろ、この作品の書かれた時期に流行していた知識人批判の言説が、作品外の世界からいきなり取り入れられていると考えるしかないのである。

実際、この時期の伊藤整の評論を見ていくと、「幽鬼の村」執筆中の昭和十三年の四月頃から急速に政治や社会の情勢に飲み込まれていく様子がうかがえる。⁽³⁾「文学の将来」(『三田文学』昭13・4)では「人間の汚醜のみを煮込んだような近代小説というものは、もう修正も利かないような危機にきているようにも思われる。」と語り、「知性の問題」(『若草』昭13・6、初出題「新しい知性の方向」)では「精神活動の自主性はなお知識階級人に欠けている。」としつうえて、「東方的な直観的知性」を取り入れて「実質的に役立つ知性を確立する努力(引用者注・初出稿では「一つの現代日本的な知性を確立する努力」とされている)の必要性を説くのである。そのような中で小説における「私」の罪の扱い方も、「私」という個の倫理的な問題から回避され、知識人批判という社会的な問題へとずらされていくのである。そして作品の終結近くの部分での、単行本刊行時の大幅な加筆によつて、その方向性は決定的なものになる。

「私」の葬送の場面での草木たちの会話の部分がそっくり加筆されているのだが、その中で「私」の生き方の不徹底さが、暴きたてられ、「あれはたしかに生きて動きまわっていた。だがいつもまっしぐらに生活の感動のなかへ飛び込めなかった。あれでも生きるに値しただろうか。」と批判される。この「感動」ということばに合

まれる時代の意味合いを、ここでは留意しなければならない。

また冥府（この場面も場面全体が加筆されている）における審きの場面では、「思いやりと、自己愛とをどこで区別しましょうか？」という「私」の問いかけにたいして、「言葉がひとりりで区別するところで区別しろ」という答えが返ってくる。それにたいして「私」は「言葉の意味がそんなに重大であつたのだらうか。数限りなく、その場まかせに投げすてたあれ等の言葉の意味が。」と後悔するのであるが、しかしここに示された「その場まかせに投げすてたあれ等の言葉」という説明は、そもそのこの「幽鬼の村」という作品の本来あつたはずの構造とは背馳したものだと言えるのではないか。

「幽鬼の村」の構造的特徴の第一として、自作詩の引用ということが挙げられる。これは作品冒頭部分の林檎園の場面と結末部分の転生の場面とに対応する形で計五箇所あり、この作品の構想時からの設定だつたのではないかと考えられるのだが、それによつてこの作品の舞台は単なる故郷の村ではなく、作者によつて既に創造されていた虚構の世界であることが読者に示されるのである。そしてそこに「私」を帰らせたのは、自己の文学の根底にある抒情性を敢えて引き出すことによつて、抒情性を前衛的方法へと結びつけるという、大林でも塵川でもない自己の文学の方法を読者に指し示すためであつたのである。末尾の、詩のことばの中に「私」が消え去つていくような終わり方も、そのためであろう。そして本来ならば、そのような「私」が作者伊藤整と二重写しとなり、作中の自作詩も

「私」が作つたかのような錯覚を与えることが、目論まれていたのではなかつたか。

単行本刊行時に「幽鬼の街」は、細かな書き換えが施されている。なかには大林の場面のように、政治状況の変化を考慮したと思われる部分もあるのだが、それ以外の最大の書き換えのひとつに、登場人物の実名の仮名への変更ということが挙げられる。もちろんモデルが誰であるのか判るようになされてはいるのだが、それによつて主人公の「私」も鶴藤つとむという名に改められ、作品が現実世界と地続きであるかのような印象はかなりの程度、拭い去られてしまうのである。作者自筆の地図の削除も、そのためであろう。

本来ならば、「幽鬼の街」から持ち越した書くことの問題は、「幽鬼の村」において「私」が既に創造した世界の中に侵入することによつて、世界と自己との関係の再検討をするという形をとる筈だったのである。そしてその中で「私」の罪の問題も、より掘り下げて検討される筈であつたのだ。

しかし前述の作者自身の文学観の急速な変化によつて、そのような構想は途中で破棄され、作者と「私」との二重写しの印象も薄めるべく改変され、「私」の個としての罪ではなく、知識人における生き方の問題が作品の主題として設定されなおされてしまつたのである。それゆゑ審きの場面におけることばについての言及も、書くことの意味を問うものではなく、「私」という知識人を批判するためのものとして書き込まれているのだと言える。

ここに作者である伊藤整の未熟さと限界とを見ることも可能かも

しれない。しかし彼がそれまで問い続けてきた個としての自己存在に固執を続けることが、もはや時代的にも彼の内部においてもこれ以上不可能となってきたということが、この作品の構造や主題のねじれの中に如実に表れているのだと言うことができよう。そしてそれは作者自身が一番よく判っていたことであつたらう。作品そのものを放棄するのではなく、また「幽鬼の街」に手を入れながらも個としての罪の問題を削除しはせず、ねじれをねじれとしたままひとつの作品としてまとめあげたのである。つまり「幽鬼の街」執筆時の自己を否定するのではなく、かつ現実の社会や時代の動きにも向き合つて、取り入れざるをえないものを取り入れて小説を書いていく。このような苦闘の言説化が、『街と村』という作品の内実だったのである。

(一九九七・一一・二九)

注(1) 渥美孝子氏は「記憶地図から物語へ——伊藤整における〈幽鬼〉と『ユリシイズ』——」(江頭彦造編『受容と創造——比較文学の試み』平6・12・25、宝文館出版刊、所収)で、「幽鬼の街」の時間構造の特徴を、「呼び起こされた(かつて)によって侵食された(いま)をとらえる試みなのである。思い出すという行為そのものが(いま)を決定的に変えていく。その(いま)の変容がこそ、地獄的たる所以なのである。」と論じている。

(2) 拙稿「伊藤整『石狩』『浪の響のなかで』論——(性)と(罪)の方法化——」(『武庫川国文』48、平8・12)を参照されたい。

(3) 曾根博義氏は、「戦争下の伊藤整の評論——私小説観の変遷を中心に——」(『語文』62、昭60・6)で、「昭和十三年春以降、伊藤整自

身の考えも急転回する。マルクス主義批判が影をひそめるのはもちろんのこと、芸術に大義名分がないという考えは、大義名分のない芸術だったら政治の役に立った方がいいという考えに百八十度転換する。」と論じている。

※ テキストは初刊本を底本とする新潮社版『伊藤整全集』に拠った。

『豊饒の海』における「天皇」

— 欲望される（絶対者） —

1

三島由紀夫『豊饒の海』研究史において、過去に多様な解釈が生み出されてきた原因の一つに、『天人五衰』のあの最後の場面の決定不可能性があげられよう。『豊饒の海』というテクストの結末には物語の存在そのものの危うさを問いつけてでもいるかのような、月修寺の日盛りの庭が頌迷に横たわり、多くの研究者がそこに言及せずにはいられなかったのであり、それらほとんどの読みがこの結末部に空虚さを見出し出てきたのもまた事実である。例えば近年における『豊饒の海』研究の一つの到達点を示す有元伸子『豊饒の海』における「沈黙」の六十年^①も、この結末部への言及から論を始める。

『豊饒の海』結末部は、不思議な場面である。そこでは、登場人物の一人である本多繁邦が空に直面させられるばかりではない。(略)読者も、「記憶もなければ何もなし」ところへいざな

奈良崎 英 穂

われ、いままでの読書行為そのものが醜化させられてしま^①う。しかしそうは言っても、我々は自らの読書行為を単なる徒勞であつたとは思いたくないし、常に自分が読んだのがどのような物語であつたのかを手に入れたいと願っているに違いない。様々な評者によつて繰り返されてきた結末部の空虚さの指摘が、必ずしもテクストの不毛に結びつくものではなかったという事実そのものが、その有力な証言者となり得ていよう。『豊饒の海』というテクストは、いわば物語の終わりにその決定不可能性を曝すことで、読み手に再度の読みを強要するといった類の小説であるとも言えよう。空虚という評言とは裏腹に、我々は空虚と判断したその時点から、今まで行ってきたとは異なる別の読みの営みを始めているのである。

「読書行為そのものが醜化させられ^②ることのないよう、「終りが全体に持続と意味を付与するということ」(カーモード)を確認する行為へと踏み込んで行くのである^③。

物語の持つ組織力を基軸に、歴史の構成を考察したA・C・ダン

トは、物語文を「これらの文の最も一般的な特徴は、それらが時間的に離れた少なくともふたつの出来事を指示するということである。このさい指示された出来事のうちに、より初期のものだけを（そしてそれについてのみ）記述するのである。」（傍点原文）と定義している。それは「この出来事に関する完全な真実は後になって、からしか、たいていは完了してからしばらくたってからしか知りえない」（リクルール、傍点原文）ということに他ならない。P・リクルールはまた別のところでも次のように述べている。

話の結末とは、展開全体が引きつけられていく極点なのである。（略）結末の方からそれを導くエピソードの方を振り返って見たときに、「こういった終わり方をするためには、あの種の出来事が欠かせないものであり、あのような一連の行動が必要だったのだ」と言えなくてはならないのである。⁽⁶⁾

一連の出来事、一連の物語はその結末においてしか全体を見渡す術を持ち得ないのであるならば、文芸批評家ならずとも、「舐めるように用心深い、一部分だけを何度も読むような読み方」（ハーナデイ）は、むしろ小説読者としては自然な読み方であろうし、テキストはそれゆえに多様な意味生成の可能性を獲得し得るのである。

小林康夫の試みた読みもそうした地点に成り立つ。小林はこの結末の空虚さの更に向こう、「作品の終わりの後に、しかし相変わらずテキストのうちに」三島自決の日付を讀もうとしたのだが、この「昭和四十五年十一月二十五日」という書き付けは、物語の後に——本多とともに導かれた「夏の日ざかりの日を浴びてしんと」

『天』三十 静まった庭で味わう空虚さの後に——何らかの意味を担いつつ読まれることが求められているのであり、時には再度の「舐めるように用心深い」読みを促すようなディスクールなのである。

ところで『豊饒の海』というテキストには、主人公というコードの転調という仕掛けが施されている。『春の雪』における清頭、『奔馬』における敷に代わり、これら前半部ではいわば脇役の観察者であった本多が、テキスト後半部『暁の寺』『天人五衰』においては主人公の座に収まるという転調が起きるのである。あるいはそれはテキスト内部の問題であるだけでなく、「転生者たちを主人公とする読みから、副主人公と見なされていた本多を中心にする認識の物語へと読み替えられてきた」⁽⁹⁾（有元）といった具合に、研究者の側のメタテキスト的なレベルの問題でもあるのである。しかし本稿では、これを主人公というコードの転調とは捉えず、清頭、敷、本多という流れにこそ語り手の一貫した意図を読みとり、それを二つのレベル——いわゆる物語内容Ⅱ主人公というコードにおいて読み取られる行為項の欲求するものに基づくレベルと、物語言説Ⅱ話者としての語り手の言表のレベルと——において分析することで、もう一度テキストの結末に至るために、『豊饒の海』における天皇の行方について考えてみたいと思う。

第一部『春の雪』では、清頭の恋は「権力も金力も齒の立たない不可能」(『春』三十八)を、唯一実現できる天皇という(絶対者)の勅許により発動し、「御歌会始の宮中行事」を経て「宮門跡の寺」において死へと至るものであった。清頭は天皇を含めた皇族と直接接する機会を、日常的にはないが、比較的頻繁に持ち得るだけの、天皇との近接性を有した存在であり、やがては「従五位を賜は」り、「五位様と呼ば」(同二十二)れ、例えその位階が有名無実のものであるとしても、天皇の権威下にその地位を定められるべき存在なのである。そして勅許により「絶対の不可能」となる(と思ひ込むような)恋は、その終わりに「天皇皇后両陛下に東宮殿下も御臨席あらせられ」、「下臈からはじめ、順次上臈に及」(同五十)びながら、全ての官位氏名が読み上げられる——それは自らの天皇からの距離の自覚を強要する儀式でもある——御歌会始の宮中行事において、天皇のために死ぬことへと迫り着く。

『お上をお裏切り申上げたのだ。死なねばならぬ』／清頭は、漠とした、けだかい香の立ちこめる中に倒れてゆくやうな思ひで、快さとも戦慄ともつかぬものに身を貫かれながら、さう考えた。(同五十)

清頭の恋はそもそもが、白や雪の隠喩によって語られる「女人の美の目のくらむやうな優雅の核心」(同一)を貽蕩させた春日宮妃殿下の面影に始発するものであり、聡子に勅許のつた直後には、そ

の恋の成就を予感してもいる。

彼が少年時代から久しい間、優柔不断のくりかへしのうちにひそかに夢み、ひそかに待ち望んでゐた事態はこれだつたのだ。御裾持のときに仰ぎ見た、白い根雪のやうな妃殿下のおん項の、屹立し拒否してゐる無類のお美しさは、彼のこのやうな夢に源し、彼のこのやうな望みの成就を、予言してゐたのにちがひない。(同二十四)

例えばこれは、清頭の恋を本当の意味での「絶対の不可能」へと導くのが、「東山天皇の女御子」(同四)に連なるという月修寺の存在であるということ無縁ではなからう。

宮門跡の伝統のある寺を預る身として、何よりお上を大切に思はれる門跡は、かうして一時的にはお上に逆らふやうな成行になつても、それ以外にお上をお護りする法はないと思ひ定め、聡子を強つて御附弟に申し受けたのである。(同四十六)

警視総監は奈良の警察へ極秘の指令を発したが、宮門跡の寺へ踏み込むについては宮内省との間に悶着を起す恐れがあり、年千円に充たぬ金であつても御内帑金の下りてゐる寺に指一本触れるわけには行かなかつた。(同四十七)

こうしてみる限り、清頭の行動は肉体的な面においては、一度として天皇という存在の手の裡から逃れることは叶わなかつたことが理解できよう。

これに対して、第二部『奔馬』における勲の天皇からの距離は、清頭のそれほどには近くない。天皇の実体的側面との接点、家柄や

地位に関していえば、むしろ当時の一般的な日本人なら誰もが持っていたであろう標準を大きく出てはいないだろう。強いて言うなら、かつて「侯爵家の若殿附の書生」を勤め、現在は「有名な国粹団体の塾長」で「熱心な崇敬家」『奔』四である飯沼茂之の息子であり、友人の従兄の紹介で陸軍中尉と相識り、その中尉の紹介で皇族との謁見が叶う、といった程度に天皇との距離を持ち得る位置にある。しかし勲の場合、そうした天皇（皇族）の実体的側面との接点の問題以上に、天皇に対する抽象的精神的距離の近さということが注目される。例えば勲は軍隊を指揮する中尉の姿を見て、「盤上の駒を動かす巨大な不可視の指、その指の力の根元こそ頭上の太陽、存分に死を含んだ赫奕たる太陽にあつた。あれこそは天皇だつた」（同十四）と感じ、あるいは暮れゆく夏の日に「あの西の太陽のまんなかに天皇陛下のお顔が見える」「陛下のお顔は悩んでをられる」（同十八）と感じる。そこにおける天皇は「日本人といふ一大家族の家長」であり、「その光りを直に身に浴びれば、民草は歓喜の声をあげ、荒蕪の地は忽ち潤うて豊葦原瑞穂國の昔にかへることは必定」（同三十七）であるといった、極度に抽象化され、実体的肉体的側面を欠いた存在であるのだが、しかし勲は事ある毎に天皇の幻を身近に意識し得る精神的距離を天皇との間に有しているのである。その意味で、勲も清頭と同様、天皇からの距離が極めて近い位置にいる存在であると言えるのだが、それは常に忠誠を誓い得る程度に近く、その忠誠が一方通行に終わる程度に遠いものであった。

『春の雪』『奔馬』はいずれも、天皇（皇族）から比較的近い位

置に主人公たちを置き、その厳格な禁忌に死を賭して関わらせることで、決して到達し得ない（絶対者¹²）を垣間見んとした物語であつたことを、ここでは一先ず確認しておきたい。

しかし後述のような三島の天皇観に照らしてみると、そうした見方があまりにも正直に三島由紀夫という記号の軌跡をなぞりすぎることと思えば、あるいは『豊饒の海』前半は、『暁の寺』『天人五衰』へと至るための布石にすぎなかつたとするのは、言い過ぎであろうか。

3

『春の雪』と『奔馬』における、天皇と主人公との距離が実体的であるか精神的であるか、あるいは文化的であるか政治的であるかといった差異は、三島が「文化防衛論」の中で語っている「菊と刀」の両義性に相当しよう。

文化とは、能の一つの型から、月明の夜ニューギニヤの海上に浮上した人間魚雷から日本刀をふりかざして躍り出て戦死した一海軍士官の行動をも包括し、又、特攻隊の幾多の遺書をも包含する。源氏物語から現代小説まで、万葉集から前衛短歌まで、中尊寺の仏像から現代彫刻まで、華道、茶道から、剣道、柔道まで、のみならず、歌舞伎からヤクザのチャンバラ映画まで、禅から軍隊の作法まで、すべて「菊と刀」の双方を包摂する、日本的なもの透かし見られるフォルムを斥す。¹⁴

こうした言説に照らしてみるなら、『春の雪』『奔馬』はまさに和歌

から剣道にまで至る、日本文化の「菊と刀」の両義性を横断する「文化」論的テクストであったことが理解できる。三島の言う「菊と刀」を連続させ、もつとも崇高なものから卑近なものにまで及び、文化主義者のいはゆる「危険性」を避けなところの文化概念」の具象化が、『豊饒の海』前半であったと言えよう。

しかし三島によるとその「文化概念の母胎」たるべき共同体原理を、戦後日本は喪失してしまい、現在は「新しい共同体原理」が求められているのだと言う。「言論の自由」は現下の日本に見るように「それ自体が時には文化を腐敗させること」もあるとは言いながらも、三島は、それこそが「文化の全体性」における「空間的連続性」の「保護者」たり得るとし、確立すべき共同体理念として、「文化概念としての天皇」を持ち出してくるのは周知のことである。

言論の自由が本来保障すべき、精神の絶対的優位の見地からは、文化共同体理念の確立が必要とされ、これのみがイデオロギーに対抗しうるのであるが、文化共同体理念は、その絶対的倫理的価値と同時に、文化の無差別包括性を併せ持たねばならぬ。ここに文化概念としての天皇が登場するのである。

雑多な、広汎な、包括的な文化の全体性に、正に見合ふだけの唯一の価値自体として、われわれは天皇の真姿である文化概念としての天皇に到達しなければならぬ。

文化上のいかなる反逆もいかなる卑俗も、つひに「みやび」の中に包括され、そこに文化の全体性がのこりなく示現し、文化概念としての天皇が成立する、といふのが、日本の文化史の大

綱である。それは永久に、卑俗をも包含しつつ霞み渡る、高貴と優雅と月並の故郷であった。／菊と刀の荣誉が最終的に帰一する根元が天皇なのであるから、軍事上の荣誉も亦、文化概念としての天皇から与へられなければならない。

こうした天皇観の論理的矛盾を衝かれた三島は、「橋川文三氏への公開状」で「私はここで故意にアナクロニズムを犯してゐる」と開き直り、自己の天皇観の超歴史性を強調する。

過去二千年に一度も実現されなかつたほどの、民主主義日本の「言論の自由」といふ、このもつとも尖端的な現象から、これに耐へて存立してゐる天皇といふものを逆証明し、そればかりでなく、現下の言論の自由が惹起してゐる無秩序を、むしろ天皇の本質として逆規定しようとしてゐるのです。(略) 誰もこのやうな「言論の自由」の招来した無秩序の底に天皇の御顔を見ようとする者はないからです。¹⁵⁾

「現下の言論の自由が惹起してゐる無秩序を、むしろ天皇の本質として逆規定し」た創作的企てこそが、『豊饒の海』後半ではなかつたか。少なくとも戦後日本の無秩序は、そこに浮き彫りにされてゐる。

4

『豊饒の海』後半、とりわけ俗に満ち溢れた『天人五衰』全編は、戦後民主主義のメタファーに他なるまい。そこでは「言論の自由」は、「文化を腐敗させ」「無秩序」をもたらすためにしか寄与するこ

とはなかった。「たわんだランニング・シャツ」や「ほのかな体臭」(『天』十)とともに発見される黒子は、この物語に横溢する戦後日本の猥雑さと重なり合うものであろうし、過剰に意識された黒子は、本多や透の自意識を象徴していると同時に、本多にとって透という人間自体への思い入れではなく、転生自体への過剰な思い入れを象徴しているのだとも言えよう。

「神聖」は俗悪で「小ざれいな手」(『天』九)により汚されるのであり、「火傷をするほど熱い飯を握つて」陛下の「御前に捧げ」(『奔』十七)ようとすする敬虔な「手」は、もはやどこにも見あたらないし、そもそも握り飯を捧げるべき当の相手の姿さえも定かでない。『春の雪』『奔馬』において作品の重要なモチーフとなった(絶対者)としての天皇は、『暁の寺』『天人五衰』においては、表面上は一切捨象されてしまうのである。テクストは一見三島由紀夫という記号の辿った軌跡から、逸脱する方向へと向かっているように見える。これをして、天皇は戦争とともに滅びたのであり、戦後民主社会に生きる多くの民衆が、もはや天皇など眼中に置かなかつたように、語り手も天皇を殊更テクストから排除してしまつたのだ、と考えることはたやすいことである。しかしより正確に言うなら、天皇は語り手の意識よりも本多の表層意識の中にその影を留め得なかつたのであり、物語からの天皇追放は、『暁の寺』以降俄にテクストを埋め尽くしていく本多の意識の物語に、語り手の力点が置かれることになつたためであると言えよう。

今一度『春の雪』『奔馬』を振り返つてみるならば、本多は単に

清頭や勲を「見る」だけの存在として、テクストの中に位置を占めているのではないことに気付く。本多の位置は、清頭や勲の天皇からの距離を相対化するものとして設定されているのである。例えば清頭とともに過ごした学習院時代は、公家華族や皇室の噂話に対して「それらしい結論を下す消息通であるためには、本多の家柄は十分ではなかつた」(『春』四十八)のであり、「同級にたまたま宮様がおいでにならなかつたためもあつて、どの官家の御殿へも参上したことがなく、「強ひて求めてその機会を得ようとするでもな」(『奔』三十二)い、といった位置にある。つまり直接的な関わりを持つ程には近くなく、しかしその消息の全てを新聞や雑誌記事に頼らねばならない程には遠くないといった距離である。本多は清頭や勲が示した(絶対者)への忠誠や禁忌の侵犯をある程度は理解し得る一方で、(絶対者)としての「天皇」には清頭や勲のような畏敬の念を抱きはしない。大神神社での勲の奉納試合に「暑さも忘れ、よく喫む煙草も忘れて」(同四)熱中しても、「森厳な儀式」であるはずの玉串奉奠では、「シャツの下を虫のやうに伝はる汗」が気になり「居心地のわるい思ひを」(同)する。それは玉串を尻の下に敷いてしまう蔵原ほどの不敬には当たらずとも、「外界の何ものも受けつけない鋼のやう」に「微動もせず」(同)儀式に聴き入る勲の敬虔からは、遙かに隔たっている。そうした本多の皇室からの距離を最もよく窺わせるのが、勲の事件後の洞院宮との謁見であろう。応接間で茶を供された本多は、「銀の匙に伝はる熱の速さに、指を引」き、「ふと皇室典範の、この銀のやうに過敏な熱にわなな

いてゐる皇族懲戒の条文を思ひうかべ」(同三十二)る。ここで我々は本多の感じた「熱」に、かつて勲が用いた譬喩を想起せずにはいられない。本多の手紙に対する「火箸が熱くて触れないといふので、火鉢だけに触らうとしてゐる」(同十七)という、あるいは洞院宮に拝謁した折の「自分の手が火傷をするほど熱い飯を握つて」陛下の「御前に捧げる」(同十七)という譬喩を。勲が掴もうとした「熱」とは、まさに「絶対者」としての天皇の謂であつた。そして勲は、本多のいる場所を的確に見抜いていた。清頭や勲ほどに「熱」に近すぎることなく、かといつて遠すぎもしない「火鉢だけに触」れる場所に本多がいることを。それ故に本多は、場合によっては「身命を賭して官をお護りしようといふ誠」を持ちながらも、「官をおためし申上げ」(同三十二)るといつた、不敬とも言える舉に及び、勲を救うために利用することにも躊躇を見せないのである。

『暁の寺』『天人五衰』の舞台となつた戦後という時代に、天皇はもはや「絶対者」の地位を追われてしまい、清頭や勲といった「絶対者」としての天皇崇拜者を通して、天皇との距離を維持しつつ、清頭や勲を相対化する位置にあつた本多が、その崇拜者を見失えば、天皇と疎遠になるのは仕方ないことであろう。しかし本多は天皇は崇拜せずとも、「絶対者」を求めた者にはのみ許された「エロティシズム」は察知できた。「清頭や勲に対する本多のもつとも基本的な感情は、あらゆる知的な人間の抒情の源、すなはち嫉妬だつた」(『天』二十三)のであり、「本多が人生で逸した最大のものこそ、肉をとほつて聖性に達する、この暗い隘路だつた」(同二十八)ので

ある。本多の嫉妬とは、天皇という「絶対者」への禁忌を犯すことによつて、「神に直面」し得た者に対するものであり、「絶対者に裏側から到達する」ための「暗い隘路」を、本多は一度もくぐることなく晩年を迎えるのである。しかし本多は無為に手を拱いていたわけではない。戦後という神無き時代にあつて、本多は自ら自己を律する禁忌——転生という禁忌を求めてゆくことになる。

したがつて転生者が本物か贋物かという議論とは別の次元で、清頭と勲は「神に直面」したものとしての連続性が与えられているのであり、月光姫や透の眞贋が不明瞭であるのは、転生者としての連続性が途切れたのではなく、「神に直面」しようとする意志の連続性を、月光姫や透ではなく本多が引き継ごうとしているからなのだ、と考えるべきであろう。『豊饒の海』後半は、「絶対者」を犯し死んでゆくことによつて、「神に直面」した清頭や勲に対する嫉妬を発条に、自ら転生という禁忌を設定することで「絶対者」を垣間見んとした本多が、清頭や勲に代わる者としてその連続性を引き継いだ物語であると言える。月光姫の黒子が客観性を欠いているのは、本多が月光姫に転生(禁忌)を夢見ている——つまり本多の意識こそが問題とされている——からであり、本多がひたすら透の死を願う状況に追い込まれるのは、切に待ち望みながらも決して到達し得ない転生(禁忌)こそが夢見られているからである。

『暁の寺』において、転生が禁忌として働いていることは、例えば以下のような箇所に見ることができよう。

左の脇腹の黒子が依然として見当たらなければ、本多はきつと

最終的に彼女に恋するだらう。恋を妨げるのは転生であり、情熱を遮るのは輪廻だからだ。『暁』三十一

本多には、ジン・ジャンを水晶の裡に保つことが自分の快樂の本質だと思はれたけれども、持つて生れた究理欲とも快を分つことができなかった。(略)この点では、ジン・ジャンにはつきり清頭や敷の転生の証拠があらはれたほうがよい。さうすれば、情熱はさまされるだらう。しかし一方、もしジン・ジャンがはじめから、本多の見てきた一連の転生の流れと何の関わりもない一個の少女であつたとしたら、これほど魅惑されることもなかつたにちがひない。それならおそらく、情熱をきびしく嘲る力の源も、この世のものならぬ魅惑の源も、いづれも同じ輪廻の中にあるのだ。(同三十二)

ここでは月光姫への肉体的欲求と転生とが天秤に掛けられるのだが、それは必ずしも二者択一の可能な問題としてあるのではない。転生者である(かもしれない)故に魅惑されるのであり、また同時に転生者であるならば、恋は断念されねばならないのである。転生は切に希求される問題でありながら、到達することを峻厳に拒絶する禁忌として働いているのである。それはかつて敷が抱いた矛盾——「最高の道徳的なもの自体が最高の道徳的存在によつて罰せられる」(『奔』三十三)という矛盾——と相通する禁忌の本質に他ならない。『天人五衰』では更に露骨な形で、禁忌としての転生が顔を見かせる。

しかしもし贖物だつたら……、透がいつまでも生き、本多がそ

の生に追いつけずに、早晚老衰で死ぬとしたら……／彼は今にして、さつき身内に目ざめた首をしめつけられるやうな色情はこの不安にこそ根ざしてゐたのを知つた。先に死ぬのが自分であれば、どんな陋劣な色情も断念できない。(『天』二十六)

ここにおいて転生は「陋劣な色情」に置換し得るまでに墮してしまふ。しかし一方で本多にとつて、転生という禁忌の聖域に臨むことは、老境という壁に阻まれ、更には透が贖物であることによつて、永遠に到達することの叶わぬ可能性を多分に併せ持ったものともなっているのである。この転生に置換し得る色情は、本多に一つの転機を導くことになる。「三裁判官の八十歳の覗き屋」(同)へと、そして「この恥と罪と死を負うて」(同三十一)月修寺へと至る転機を。しかし戦後三十年をかけて本多が求め続けた転生は、果たして清頭や敷が求めた(絶対者)としての天皇に比肩し得る禁忌の聖域であり得たのだろうか。転生などつまらぬ問題とばかりに放擲してしまふやうな形で、語り手があの「夏の日さかりの日を浴びて」静まっている「記憶もなければ何もない」(同)庭へ本多を導いて示そうとしたものは、おそらく本多の行為を語る語り手の言説の中にしか辿り得ないであろう。

5

『暁の寺』冒頭近くに、タイに赴いた本多が幼い月光姫の話聞かされ、敷について思いを巡らす場面がある。

敷の死ほど、純粹な日本とは何だらうといふ省察を、本多に強

ひたものはなかつた。(略)思へば民族のもつとも純粋な要素には必ず血の匂ひがし、野蠻の影が射してゐる筈だつた。

(略)いかに怖ろしい面貌であらはれようと、それはもともと純白な魂であつた。タイのやうな国へ来てみると、祖国の文物の清らかさ、簡素、單純、川底の小石さへ数まへられる川水の澄みやかき、神道の儀式の清明などは、いよいよ本多の目に明らかになつた。しかし本多はそれと共に生きるのではなく、大多数の日本人がさうしてゐるやうに、それを無視し、あたかもないかのやうに振舞つて、むしろそれからのがれることによつて生きのびて来たのであつた。『暁』二二

本多はこの異国の地で「祖国の文物の清らかさ」を思い、自らがついに通らなかつた「暗い隘路」を省みる。これはかつて本多の心に宿ることのなかつた日本回帰、それも「神道の儀式の清明」を殊更思い浮かべるところをみると、単に異国で味わうナシヨナリズムとは微妙に異なつた日本回帰ではなかつたか。それは勲にそして清頭に結びつく性質のものであつた。勲や清頭の「純白な魂」の傍らにいなながらもその魂に与せず、彼らを相對化する位置に置かれていた本多は、「それを無視し、あたかもないかのやうに振舞」うことで生きてきた、と言う。しかし過去において彼らが志向したものを実感として受け止めることは、恐らくなかつた。本多がそれを実感するのは、ベナレスを訪れ暁のガートに行んだ時であつた。

日はすでに緑の叢林の上にあつた。それまでは注視をゆるす紅い円盤であつたのに、一転して、一瞬の注視も叶はぬ光輝の塊

になつた。それはもはや威嚇するやうに轟いてゐる光焰だつた。突然、本多には思ひ当たつた。勲がたえず自刃の幻のかなたに思ひ描いてゐた太陽こそ、正にこの太陽だつたのだ、と。

(同八)

ヒンズー教では「日輪の裡に、神の最高意志のあらはれを見、神にとつて太陽こそ、究極の真理の象徴的具現である」(同)ということとを本多は知識としては知つてゐる。しかし勲の「太陽」に對すると同様、それも実感として意識されることはなかつた。勲の「太陽」と「神の最高意識のあらはれ」としての「日輪」とが、実感として結びついたのが、この瞬間であつたのだと言えよう。

ところで本多が知つてゐる勲の「太陽」とは、あの二回目の公判において、裁判長に求められるままに、滔々と弁じ立てた際、耳にしたものを指している。

あそこに太陽が輝いてゐます。ここからは見えませんが、身のままりの澱んだ灰色の光りも、太陽に源してゐることは明らかですから、たしかに天空の一角に太陽は輝やいてゐる筈です。

その太陽こそ、陛下のまことのお姿であり、その光りを直に身に浴びれば、民草は歓喜の声をあげ、荒蕪の地は忽ち潤うて、豊葦原瑞穂國の昔にかへることは必定なのです。(『奔』三十七)

ここでは太陽は天皇のメタファーとして用いられ、身の回りを照らす「光り」の源はその天皇に求められている。『奔馬』においては、こうした太陽や光が、神聖さ、あるいは天皇の隱喩としてさかんに

用いられる。例えば洞院宮に拜謁した折の勲は、「宮のすぐ背後の、この世のものならぬ光りに向つて、思ひのたけを悉く開陳したやうな心地へ誘ひ入れられる」(同十七)。「この世のものならぬ光り」が、天皇を意味するのは明らかであるうし、最後の場面、蔵原暗殺後の勲が、腹へ刀を突き立てた瞬間に臉の裏に見た「日輪」も、同様のものを意味していることは言うまでもなからう。しかもその「太陽」は、焼け付くような光を投げかける夏の太陽でなければならなかった。警察の調室で調書を取られた際、窓の鉄格子を通して射し入る冬の光に、勲はこう思う。

勲の肩にかけられた温かい掌のやうな日光の触手、……それはかつて麻布の聯隊で見た、練兵の頭上に金びかの命令のやうに輝やいてゐた夏の太陽とは別物で、幾重にも折り曲げられて彼の肩に届いた司直の温情の機構を語つてゐた。それが夏の太陽たる天皇の御仁慈の、遠い片鱗をあらはすものとは勲には思へなかつた。(同三十四)

「注視も叶はぬ」「威嚇するやう」な「光輝の塊」を、勲の意味した「太陽」だと理解した本多は、その意味で正確に見抜いていたのだと言えよう。『天人五衰』の最後の場面で、本多が夏の日差しを照りつける庭に佇むことを思えば、この点を見逃すことはできない。タイの地で本多の心を過る日本帰郷の志向は、勲の「太陽」の意味するところへと辿り着き、後に述べるように月修寺への道を開くことになるのである。

ところでこうした太陽や光の隠喩の多くは、本多の与り知らぬと

ころで勲の心情に沿つたものとして、語り手により提示されたものである。とするなら我々読者は、本多以上に太陽や光の意味するところを承知していることになる。

同様のことは、『春の雪』において白や雪によって暗示されるものにも当てはまる。清頭には十三歳の折に務めたお裾持で見た妃殿下の幻が、終始ついてまわる。作品冒頭近く、九段の滝で聡子を見かけた時の、あるいは勅許が下つた直後の清頭の心情には、「白い根雪のやうな妃殿下のおん項」が常に潜んでゐる。そしてそれは、聡子が本当に到達不可能な彼方へと去つた時、聡子そのものの隠喩となり、月修寺にまで持ち越されることになる。

学友がこの事件のこと、聡子のことを口にするたびに、彼は、折しも冬の深まる遠山の雪が、空気のきはめて澄んだ朝、二階の教室の窓から望まれるのにも似て、聡子が遠く高く衆目の前に、その輝かしい潔白を黙つて掲げてゐる姿を見るやうに感じた。／＼遠い絶頭に輝く白は清頭の目にだけ映り、清頭の心だけを射当ててゐた。(『春』四十八)

その後剃髪した聡子に会うため、病身を押しして月修寺に通い詰めた清頭は、ここでも「遠く聳えてゐる山頂の雪」に、春日宮妃の「まばゆいおん項の白さ」(同五十二)を思い出すのである。これら白や雪もまた、(絶対者)としての天皇(に連なるもの)の隠喩であつたのは、言うまでもなからう。しかし「妃殿下のおん項」を目にする機会になど恵まれることのない距離に置かれていた本多にとつて、この隠喩は無縁のものであつたはずだ。それらは総て、お裾持を経

験した清頭だけに許された特権であつて、本多に関わりのない清頭の心情として、語り手が我々の前に示したものである。つまり「絶類に輝く白」と妃殿下や天皇との結び付きも、本多以上に我々読者は知っていることになる。

6

しかし実は本多もいつからか、「絶類に輝く白」を（絶対者）の隠喩として、更に月修寺の隠喩として自らの意識の裡に抱え込んでいる。清頭や勲を「登りつめた山嶺の白雪の輝きが目に触れたとたんに、そこで時を止めてしま」〔天〕十六 った人間だと考えるし、「切に想へば想ふほど（略）月修寺は今や白雪の絶類に在るかのごとく思ひなされ」（同七）るのである。月修寺が天皇に縁の深い寺であることは既に述べたが、それらは本多の中では、こうした隠喩に現れる無意識のレベルを超えては、さほど明瞭には結び合わされていないだろう。にもかかわらず本多は、「強ひて訪れれば、そのとき月修寺はわれから身を退いて、一時光りの霧のなかへ融け消えてしまふのではあるまいか」（同）と考へ、月修寺を光の隠喩に結び付けてもいるのである。本多はベナレスで勲の「太陽」の意味するものを理解し、更には月修寺を白雪や光の隠喩で捉えようとする、といったレベルにおいて、清頭や勲の連続性を継ぐものであるのだと言える。本多がその隠喩を意識しようがしまいが、月修寺が「白雪の絶類」や「光り」と結び付くのなら、我々は本多が「夏の日さかりの日」の照りつける月修寺の庭に至る経緯を、もう一度考え直

す必要があるのではないだろうか。つまりは、天皇とは本多の表層意識のレベルを越えて、語り手と読者の結託のもとに現前する性質のものであるのだということである。

本多が月修寺へと至る契機は、本多のなかで転生への欲望と等価になつた「陋劣な色情」に源ずるものであつた。本多の感情に聡子との再会を待ち望む恋慕が秘められていることは既に有元伸子にも指摘があるが、本多が聡子を訪なう勇氣を得るのは、彼の生涯を「元裁判官の八十歳の覗き屋」に要約してしまふ事件を直接的な契機としてであつた。

本多はその事件の舞台となつた神宮外苑の絵画館前で、大日如来を中央に奉じている胎藏界曼陀羅の只中に立っているように感じる。本多はこの時、月のない夜空の暗闇の森が、「昼の光りに突然まばゆく照らし出されるやうな心地」（同二十六）を味わう。本多は転生という自らに課した禁忌の崩壊を前にして、月のない夜空に「この世を大光明で照らしだし、総てを活かす最高存在¹⁸」である大日如来に太陽の法を幻視しているのである。更に暗闇の中で男女の姿態を「目の痛くなるほど注視してゐるうちに（略）急に曙光が射すやうに色情が湧いて来るのを感じ」（同）二十六。転生という禁忌が機能せず、色情に曙光が射すのを身内に感じたこの時、語り手は本多の求め続けた転生を葬り去り、光の隠喩によって示されるものの到来を密かに告げていたのではなかつたか。傷害事件の現場に居合わせた本多は、「光りが、自分の方角へ向けられるのを感じたとたんに、うしろからつきとばされ」（同）る。闇の中的一条の光芒

は、本多を「元裁判官の八十歳の覗き屋」として世間に引きずり出し、「永い一生に本多の認識が築き上げた不可視の建築物はあつてなく崩壊して」(同) しまうことになるのである。転生はこの事件の後、透の自殺未遂と二十一歳まで生き延びることによつて無効となるのだが、それと引き換えに本多は月修寺を訪なう勇氣を手に入れるのである。

六十年を経た月修寺は光に充ちた寺であつた。本多は雲ひとつなく晴れた夏空の炎暑のもと、かつての清頭を思い出しながら山門へと徒歩で向かう。そして「十六弁の菊の紋瓦を屋根に連ねた山門」の門柱に「皇基鞏固」(同三十) の文字を認める。六十年前にも本多や清頭は目にしたのかも知れないが、少なくとも『春の雪』の時点では、語り手はそのことをテキストに明示しはしなかつた。「菊の紋瓦」や「皇基鞏固」の文字の意味するところは明らかであるが、六十年後のこの時点で、これらを殊更に本多に見取らせるのは、天皇との繋がりのある地へ本多がやつてきたことを示唆する以上の理由があるように思えない。

ともあれ本多は門跡となつた聡子との面会が叶うことになるのだが、その聡子は「庭の一つの橋を渡つて来る人が、木陰から日向へ来て、光りの加減で面変りがしたやうに見えるだけで、あのとときの若い美しさが木陰の顔なら、今の老いの美しさは日向の顔だといふだけのちがひにすぎない」(同) といった美しさを見せる。そして転生のみならず、『豊饒の海』という物語の起点でもあつた清頭の存在までもが否定されて、「庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんと

してゐる。……」(同) という最後の一文へと導かれることになる。

我々はここに、本多が光に導かれて月修寺の日ざかりの庭へと至る経緯を見て来た。『豊饒の海』というテキストにおいて、白雪の、そして光の隠喩の意味するところを承知しているならば、実は(絶対者)としての天皇の影が本多の認識するしないに関わりなく馳瀉していることに、我々読者は本多以上に気付かずにはいられないのである。

転生のみならず清頭の存在までも否定してしまう聡子の最後の言葉は、物語の根幹を否定することにもなり、物語の存在そのものを危機に晒し、我々が行つてきた読むという営為自体をも無効にしかねない。この最終場面は、物語そのものに仕掛けられた自己解体の时限爆弾であつたとも言えよう。しかし前述の通り我々はこのテキストを読み終えた後に、単なる徒勞であつたと感じることはない。恐らく我々は、(意味をなさない物語) という解釈に背を向けて、ひたすらその意味するところを考えてきた。物語がその存在意義を喪失しようとするその地点に、新たな物語を紡ごうとしてきたのである。そして物語は様々な言説を許容しながらも、我々はそれを常に辿り着けない彼方にあるようにも感じてきたのではなかつたらうか。その営為は、清頭や歟、そして本多が(絶対者)を求め続け、拒絶され続けたあの営為に似ているのではないだろうか。語り手は天皇を、物語があるいは文化が否定され、また紡がれる地点に立たせているのだと言えよう。我々はあの「夏の日ざかりの日を浴

びてしんとしてゐる」庭の彼方に、それぞれの物語を紡ぐことを求められているのである。

(1) 有元伸子『豊饒の海』における「沈黙」の六十年（『日本近代文学』一九九五・一〇）

(2) F・カーモード『終りの意識』（岡本靖正訳 国文社 一九九一・

四。カーモードは人が聞き取る時計のチックタックという音を「われわれがプロットと呼ぶところのもの、すなわち時間に形式を与えることによって時間を人間化する体制のモデルと考える」と述べ、ものごとの「終り」の持つ意義を次のように考察している。「チックに続くその間隔のなかに、タックへの生き生きとした期待と、いかにタックが離れていようと、起こることはすべてタックが確実にあとに続いているかのように起こるといふ感覚を、維持しなければならぬわけである。そうしたプロットの構築は、終りが全体に持続と意味を付与するということを前提にし、かつ要求している。」

(3) 研究者の行う読むという行為のこのような繰り返しに、「たいていの文芸批評家は、例えば一篇の小説を取りあげるのに、自分たちの行なう読めるように用心深い、一部分だけを何度も読むような読み方が、その小説のディスクールとイストワールの両方に及ぼす影響に目をつぶって来たのではあるまいか。」（P・ハーナデイ「物語のいかに、何を、なぜ」 W・J・T・ミツェル編『物語について』海老根宏他訳 平凡社 一九八七・八）といった批判が投げ掛けられるのも、当然のことであるのかも知れない。しかしどのような読者であっても、最後まで一度も視線を滞らせることなく、あるいは一度も中断することなくテキストを読み終えることはありえないだろう。様々な速度・順序で読まれることもまた、テキストの多様な意味生成を保証する一つの要因なのである。

(4) A・C・ダント『物語としての歴史』（河本英夫訳 国文社 一九

八九・二）

(5) P・リクール『時間と物語Ⅰ』（久米博訳 新曜社 一九八七・一）

(6) P・リクール『時間の物語』（ミツェル編前掲書）

(7) 小林康夫『歴史と無の円環——三島由紀夫『豊饒の海』』（『出来事としての文学』作品社 一九九五・四）

(8) 早い時期のものでは長谷川泉の「清頭や殿を見守る主要人物であった本多繁邦が中心に浮かび出ている」（『豊饒の海』『現代のエスプリ』一九七一・二）といったもの以来、数々の指摘がある。

(9) 有元伸子『豊饒の海』の基層構造（『金城学院大学論集』一九九三・三）

(10) 『春の雪』『奔馬』のみでなく、『豊饒の海』全般に亘る天皇の問題に触れたものに、松本健一の次の評言がある。「以前わたしは、この『天人五衰』が三島由紀夫の文学的衰弱を示している、と考えていた。天皇制の（物語）を紡ぎながら、ついに、この（物語）はあつてもなくとも同じことだ、と嘆息しているように感じられたからである。しかし、おそらくそうではなかった。この四部作では、第一部『春の雪』と第二部『奔馬』とが、いわば天皇制神話の「超越者」へと辿りつく起、承である。ところが、第三部『暁の寺』はそれを「永遠の東洋のほうへ」と還元する転を示す。そうして、第四部の『天人五衰』は「超越者」がじつは「東洋」に普遍的に存在する「空虚」であった、という結の天皇制神学の仮構を果たしていたのではあるまいか。政治思想的にいつて天皇Ⅱ国家の（物語）に固執しようとして市ヶ谷のバルコニーで「天皇陛下万歳！」という言葉を叫んだ三島は、『豊饒の海』四部作で「超越者」が「空虚」へと移行するという天皇制神学を文学的に描いてみせたのだった。」（『天皇』という言葉』『文芸』一九八六・五、傍点原文）

(11) 例えば網野善彦は、現代でも元号や勲章、官位が天皇の権力の現れの一側面であり、「位階というのは天皇からの距離」を示しているこ

とを指摘している(網野善彦・上野千鶴子・宮田登『日本王権論』春秋社 一九八八・一)。

- (12) 三島は、生前最後の古林尚との対談の中で、「ヨーロッパならカトリシズムの世界にしかエロティシズムは存在しないんです。あそこには厳格な戒律があつて、そのオキテを破れば罪になる。罪を犯した者は、いやでも神に直面せざるを得ない。」「エロティシズムと名がつく以上は、人間が体をはつて死に至るまで快樂を追求して、絶対者に裏側から到達するやうなものでなくちやいけない。だから、もし神がなかつたら神を復活させなければならぬ。」「絶対者に到達することを夢みて、夢みて、夢みるけれども、それはロマンティックであつて、そこに到達できない」(三島由紀夫 最後の言葉『図書新聞』一九七〇・一二・二二、一九七一・一・一。引用は『三島由紀夫全集』に拠る。)と語っている。

- (13) テクスト論において作者の存在は排除されるのが常識なのだろうが、しかし現実の読書体験では、作者名がテキストに先行することは大いに有り得ることである。その延長において、我々は作品に冠された三島由紀夫という記号を介して、そのセンセーショナルな死と『豊饒の海』というテキストとを結びつけることも可能であるし、同じ作者名の冠された異なるテキストと『豊饒の海』とを結びつけることも可能であろう。本稿では、作者とはその同じ名を冠された広い意味でのテキストを辿るための一つの記号であると考えたい。

- (14) 『中央公論』(一九六八・七)。引用は『三島由紀夫全集』に拠る。
 (15) 『中央公論』(一九六八・一〇)。引用は『三島由紀夫全集』に拠る。
 (16) 太陽の暗示するものを男性原理、雪の暗示するものを女性原理と考えるなら、雪―隠子―月修寺という連係の先に、『豊饒の海』が「女性性の理想そして宇宙の究極的な法のフィギュールないしはシンボルの方向に向かって収斂していく」小説であり、「この小説を貫く本多の行為のすべては、結局は、この月に近づき、そしてそれを自分のものにする試みである」(小林前掲)という読みも可能であろう。

- (17) 有元前掲(注1)

- (18) 小向正司編『密教の本』(学研 一九九二・一、この項、大宮司朗)

- (19) 無効となるとは言っても、それは本多の認識の範囲内での転生の条件の一つの「二十歳で死ぬ」ということが無効になるだけで、必ずしも転生そのものが否定されるということではない。

※本文引用は『三島由紀夫全集』(新潮社 一九七三・四、一九七六・六)に拠る。引用に際し、旧漢字は新漢字に直し、ルビは省略した。尚、引用文下に付した『春』『奔』『暁』『天』はそれぞれ『春の雪』『奔馬』『暁の寺』『天人五衰』の略であり、本文中に付した傍点は総て引用者による。

〈文学〉から文学へ——

柴 市 郎

「ゆでガエル」

現在の日本の情況に触れて「ゆでガエル」なる或る企業人の言葉が引き合いに出されるのを幾度か目に、あるいは耳にした。

「ゆでガエル」になる、とは捕らえたカエルを水槽に入れたまま水温をゆっくりと上昇させていつても当のカエルはその情況の変化に気付くことなくそのまま泳ぎながら死んでゆくことを指すものらしい。転じて、会社の中に長くいると瑣末な内部の事情には精通できざるものの、会社のあり方そのものが病んでいる場合にはそれを認識できない(ましてそのことを批判的に問うといった発想などは到底不可能)という話らしい。喩え話としては平凡といってもよい訓話であるが、私はこの現在において「ゆでガエル」なる言葉が大真面目に引用されることに、滑稽さとともに或る憂鬱な必然性を感じない訳にはいかなかった。

現実として、学校、企業、省庁……社会を構成するさまざまな単位

は、それらが巻き込まれている情況の変化に柔軟に対応することができずに現実との無慙な裂け目をさらけだしているという実状において、それらの単位じたいが既に構造的な疲弊に陥っていることはもはや覆い隠すことのできないところである。こうした状態にあつて「改革」が切実な課題になっているにもかかわらず、当事者たる組織の内側からの必然的に現状維持的な発想は、現実に向き合うことを拒んでいるとしか見えぬ寒々しいものでしかなく、どんよりとした停滞感がそこらあたり立ちこめている。そのような淀みきつた空気を多くの人が呼吸している時だけに、変化してゆく現実を的確に見定め得ず硬直化したいかにも日本的な組織のありよう全般に對する暗喩として「ゆでガエル」という言葉は、何か妙に明快な説得力をもつて耳(目)に入ってきた。こうした指摘は、それとして特に目新しいものでもないし、またそこで指摘されている問題点も繰り返しこれまで言われ続けてきたことだと言ってしまうやなくもないのだが、そのようにここで問題にされていることがとりわけ斬新な

わけではないと嘯いてみたところで、そこに存在している問題じたいを解決したことに、それをうまく遣り過ごせたことにもなりはしない。それは依然として私達を圍繞する現実であることに変わりはないのであるから、アイロニカルにそこから距離をとってみせても無意味である。

こうした問題が同時多発的にさまざまな領域にまたがって露呈している現在という情況において、近代文学研究の領域もまた例外外ではあり得なかつたことを否応なく感じさせられている人は多いだろう。

第二次世界大戦後の東西両陣営の力関係の微妙な均衡が偶然創り出した真空地帯に日本という国が置かれたということもあり、幸運にもこの国は概して対外的にはきわめて深刻な緊張を強いられることもなく経済活動に専心することができ、安定成長を長期にわたって維持し続けることができた。そうした歴史の諸条件の偶然的積み重なりの上にたまさかの相対的安定を得ていたに過ぎない戦後の日本において「日本文学研究」をすることについての自意識が、意義がどこまで本当に問われていたのだろうか。日本の安定成長の上にあぐらをかくことなく厳しく自らを検証し続けてきたと言ひ張れるであろうか。戦後の顕著な経済発展がもし無かつたら、日本の大学はこれほど多くの日本文学に関する学科、専攻を抱え込むことができていただろうか。現在に至る日本文学研究の発展は、その意味で戦後日本の経済成長という背景を抜きにしては考え難い。文学研究は経済活動と同日の談ではないとは一見自明のことである。文学研究

という営みにとつて一国の経済状態はさしあたり外在的な関係にあるといつても間違ひではない。しかし外在的な関係に過ぎないと言うならばそれはおおきな錯誤であろう。或る意味では、文学研究を可能にする社会環境は経済に依存してきたからである。にもかかわらず、文学研究は自らを可能にしている環境をどこかで自明視してしまい、自らの立脚点についての厳しい検証をややむやににすまま、〈学問〉とか〈研究〉といった言葉のなかにそうした自らへの問いを封印してしまふようなことが決してなかつたと言えるのであろうか。これは過去のことではない。今、文学研究が様々な局面において突き付けられていることではないだろうか。私は、文学研究を仕事として志しているわけではない大多数の学生や、社会人と接している、そうした人々に対して〈教養〉や〈学問〉や〈研究〉というような名目を振りかざすことなく（もはや名目足り得ないと言う向きもあろうが）、何を提示できるだろうかという自問を振り払うことができないのである。大文字の〈研究〉ではなく、研究そのものにおいて何を提示できるだろうか。学会という集団の内部の論理、価値観に捕らわれることのないそれらの人々こそ、文学研究者にとつて身近なしかも畏るべき他者ではないだろうか。それら他者には研究者ではないのだから当然個々の研究の内容を充分理解できるとは必ずしも言えないであろう。その意味では研究者どうしにおける評価こそ全てだという考えもあろう。にもかかわらず私には研究の意義や価値なるものが、それらの他者の存在を排除した形で、（見かけ上）閉じられた学会の内部のみにおいて形成されるものとは到

底考えられないのである。

大文字の〈教養〉としての〈文学〉の価値が風化しつつあるかに思われる現在こそ、大文字の価値を隠れ蓑にできなくなりつつある現在こそ、かえって文学を研究することの意味が、厳しく問われつつ露出してくる時だという気がする。その時、文学研究に携わる人は意識的にしろ無意識的にしろ、研究活動において前提にし、不問に付してきた自らの価値観や認識の枠組について改めて根底から考え直すという、かなりしんどい作業を自分に課すか、その面倒臭さを厭って居直るかの岐路に立たされていることになるのではなからうか。だが、それは研究にとって悪い環境ではない。

〈流行〉という言葉

研究の動向についての論評がなされる場合、或る傾向の研究や特定の用語が相対的に多く現れつつあるような時などに、そうした情況を〈流行〉なる言葉でもって評しているものを時々目にするところがある。この言葉は、近代文学研究の内部においてこれまで「作品論」、「テキスト論」などと結び付けられ、近年では「フェミニズム批評」などに対して繰り返し用いられてきた。この、或る意味で便利な言葉はこれからも多くの人によって同じように用いられてゆくことだろう。しかし、特定の対象にこのような言葉がたびたび投げかけられることにはいかなる意味があるのだろうか。

この言葉が発せられる情況は、発話行為論的に幾つかの視点から分析されうる。まず、この〈流行〉という言葉じたい多義性を帯び

ていることを確認しておかなければならない。この語は用いられる文脈によって相反する意味を持ちうるのである。この語には或る事態に対する価値判断を含まない客観的な記述としての側面がある一方で、揶揄、冷笑といった否定的な評価としての意味を帯びている場合もある。後者では〈流行〉という言葉と結びつく一時性、暫定性、不確実性といった共示の意味系列が強調され、そうした意味系列がさらに俗っぽさや、軽薄さなどのニュアンスをよびこんでいる。だが、客観的に用いられるにせよ、価値判断を含んで用いられるにせよ、この語の発話状況には共通点が認められる。つまりその語を発することは、さしあたりその事態に対して距離をとること、すなわち非―当事者性の表明になつているのである。それゆえこの語は客観的な用法と主観的な用法とをしばしば癒合せながら、客観性を装いつつそこに価値判断を潜ませるということを可能にしている。

文学研究の動向についてその語を用いることは一見客観的な記述態度を表明する一方、対象に対する（しばしば批判的な）評価をもあらわすことになる。その客観性を装った主観性の曖昧さにくわえ、さらに、潜在的には、対象を（非本質的な）一時的現象とみなすことで、反照的に対象から切り離している発話者自らの立場の（そうした流行現象に感わされない不変の）、本質性への想像的同化をしばしばもたらしていることの問題性もある。〈流行〉という語をニュアンスの強弱はあれ揶揄の意味も籠めて用いる人の多くは気付くことなく、無前提に現象（流動性、皮相性）―本質（不変性、根本性）という二分法的発想に捕らわれてしまっている。つまりその

前提について問うことができないためそれ以上の批判的思考の深まりが妨げられているのである——その反転した形が新しさ（価値）——旧さ（無価値）という図式であることは言うまでもない——。何気無く使われている（流行）という言葉の曖昧さのうちに具体的な論点、争点がむしろ覆い隠されてしまう危険性を感じざるを得ない。

大文字の〈文学〉の陥穽

かつて英語圏では、フェミニズム批評やメディア研究が盛り上がりを見せた時、その反動として〈文学〉のフェティッシュとしての価値を強調する動きが生まれた。そのとき利用されたのがその本来の批評性を去勢され、保守的に変質させられた（テキスト性）という概念であった（日本においても事情は似たようなものであったことはたびたび指摘されている¹⁾）。革新的な政治性を帯びていたディコンストラクションは輸入過程でその政治性を中性化され、単なる文学研究のひとつの方法として保守的な価値を守るためにより多く用いられたわけである。英語圏のディコンストラクションは、言わば大文字の〈文学〉の自明性に乘ったまま予め保証された〈文学〉研究の体制の内側でおこなわれている解釈ゲームの新たな参入者でしかなかったのである——大学では既に権威化されている作家、作品を取り上げ、何々のディコンストラクティブな研究という類の博士論文が続々と生産されていたとも聞く——。形骸化した保守的なディコンストラクションといえどもやはり権威主義的な保守主義者との

軋轢を生じたものの、それとてコップのなかの出来事のようなものに過ぎなかった。つまり、英語圏におけるディコンストラクションの導入は当初、真の批評＝思考における外部性を呼び込むには程遠い経過を辿っていたのである。

それから二十年ほど経った今の日本において、フェミニズム批評やメディア研究の昂まり、また文化研究の勃興といった状況をむかえて、日本もまたかつての英語圏での研究が辿った経過を同じようにしかし一層陳腐なかたちで反復することになりはしまいかという一抹の不安を感じる。

フェミニズム批評やメディア研究や文化研究がひたすら自己目的化し、批評としての機能を喪失させてゆくならば（自己目的的研究でも情況論的に偶然、批評的效果を生み出すこともまれにはあるが）その傾向は、一方では〈文学〉の価値の超越性を主張する硬直した立場の出現をもたらすだろう。そうした情況のもとでは、文学を大文字のものとしてでなくラディカルに問い直すことがきわめて困難になりかねない。

ジェンダー理論、ナシヨナリティの研究²⁾、それぞれに無視できない重要な問題を提起していることは言うまでもない。しかし、それらが還元主義的色彩を多分に帯びるならば、〈文学〉を批判しようという意図を持っていたとしても、かえって大文字の〈文学〉を温存させることに貢献する結果を招く恐れがあるだろう。還元主義的操作は潜在的に、還元し尽くすことのできないそれ以上の何かとして〈文学〉の幻影を浮かび上がらせてしまうからである。例えば

或るテキストのイデオロギー性や歴史性について語る時においても、それらが無条件に超越的な審級へと回収されることは避けなくてはなるまい。

近頃たまたま読んだ文芸時評の記事のなかに「文学だけが持つ『無限の感觸』⁽²⁾」という言葉があった。その言葉を目にした時に感じた違和感とともにその言葉は印象づけられた。大げさな言い方をすれば、その時にはその言葉が、文学に対するあらゆる批評的思考の可能性を封じてしまうようにも感じられたのである。その時の印象は必ずしも正確なものではなかったと後に思い直したが、そうした言葉は今の自分にとって、すんなり口にできるものではないという気持ちには、やはり変化がない。

大文字の〈文学〉に何か究極的な固有な価値が内在しているという風に思い込まれてしまうことが、言わば〈文学〉というフェティッシュの陥穽である。とするなら文学に対する(鑑賞でなく)批評的思考には、文学言語の雑種性、混在性を具体的に明らかにしてゆく作業と並行して、にもかかわらず〈文学〉を成立させてきた条件について歴史的に検証することも不可欠となる。しかしまた、このことは文学研究にとってこれまで自己を成り立たせ、その営みの意義を支えてきた基盤を問うという自己言及的な行為でもあり、時に或る種の苦痛や不快感を伴わずにはおかないはずである。先に述べた「岐路」は、この問題とも関わっているだろう。もちろん、意識的に「鑑賞」という立場を選択することにも意義があるだろう。敢えて、〈文学〉の内側に踏み留まることには、そのような位置に自ら

を置くことよつてのみ語り得る何かがあるだろうから。

選択肢じたいに絶対的な当否があるわけではない。大切なのは、この「岐路」を経験する時に覚える痛切さではないか。そして、その痛切さをどのように受け止め、意識化してゆくかではないだろうか。

注(1) 近年では本誌展望欄で関井光男氏がその点に触れていた(『文学研究』第五四集、一九九六・五)。

(2) 沼野充義氏「文芸季評(上)」、『読売新聞』一九九七・一〇・三一

西南戦争と文学

林 原 純 生

なにか具体的な展望があるわけではないが、西南戦争とその文学史における意味について心覚えを記したいと思う。当時の西南戦争をあつかった文学、また西郷隆盛について書いた物は、最近になって調査研究も進み（坂井健「西南戦争ものに関する小考察」（一））（二）、「稿本近代文学」14、16・17がある）、あらためてその数の多さが注目されるが、すでに戦争のただなかに、小説家がこの戦争を文章化することが異常な流行となったことを指摘する声がある。「去年熊本山口ノ騷擾ヨリ本年鹿児島ノ暴挙ニ至リテハ未ダ黑白モ分ラヌ先カラ何々戦争録何々紀聞何々電報記ナドノ発行スルモノ枚挙スルニ遑アラズ」（「操觚家ノ近世嘆」、昔晋居主人、明10・6・4、「朝野新聞」と言うのがその指摘である。この文の意図は、「嘘八百逆サニ読メバ百八ノ星ノ数ヨリマダ多イ戦争ノ新作ニハ大先生ノ金聖嘆モ評ノ仕様方有リマスマイ噫小説家ヨ近世史ノ出版急ギハ真ニ歎息々々」と、所謂西南戦争物が出版を急ぐあまり杜撰な内容になっていることへの批判であるが、その数の多さは西南戦争と言う大変

事と当時勃興しつつあった新聞を典型とする活字媒体が結びついた結果の当然な現象であろう。戦争時の文献のみでさえ夥しい数にのぼるわけであるから、それ以後、例えば明治末期からの大衆文学の作品まで数えるとなると、その数は無数と言えよう。西南戦争と西郷隆盛は確かに、近代文学の重要な供給源となってきた。そして、西南戦争と同時代の文学との関連性については、文学史のうえで研究は始まりつつある。以下は、そのための、先に述べたような心覚えである。

明治十年二月の、西郷軍の蜂起については、同時代の東京の新聞が早くに前年の神風連に続く鹿児島における不穏な状況として報道しており、そのような記事は、またたくまに東京を発信地として全国に広がったのであろう。硯友社の江見水蔭は、その著『自己中心明治文壇史』（昭和2年、博文館）の劈頭を、『西郷隆盛が今に来る。』南州来！賊軍来！薩摩勢通過の音が岡山の市中にも高かった」と西郷勢の東上のことを幼児の折の印象に残る記憶として始め

ているのは、そのような噂が現実味を帯びていたためであろう。幼い江見水蔭は西南戦争の錦絵を興味を持って見にくくわけであるが、この日本における最後の内戦はこのように当時勃興しつつあった新聞を代表とする様々なメディアに媒介されて、急速に伝播してゆくわけである。

いま、この西南戦争が史学上にどう位置づけられているのかわからないが、当時の新聞を代表とする報道を見れば、この戦争は、現在の歴史的事象として整理された以上に複雑な様相を帯びているように思われる。そして、その活字媒体にとって西南戦争とは、その内実を決定されるような重要な意味を帯びていたのではないか。

例えば、多くの当時の「小新聞」と同じように西郷蜂起の記事を連続して報道してきた仮名垣魯文編輯の「仮名読新聞」は、明治十年二月二日、〈鹿児島(の暴徒)〉の記事を小さく掲載しているのだが、それに続く二十一日は、西南戦争の記事のすぐあとに「奥羽辺も何か少々騒がしく十八日に大沼陸軍少佐ハ急に仙台鎮營へ五出立なされたり」とし、さらに「羽州鶴ヶ岡へ先日より鹿児島(の土族一名入込み旧参事松平某の宅にて毎度土族の集会を催す由」「高知県にてハ諸方へ出かけたる土族多しとの風聞(何の用事か解りません)」と同じように小さな記事を掲載している。いずれの記事も「朝野新聞」からの情報としているが、この見過ごしてしまいそうな小さな記事は重要であろう。なにか、会津戦争から西南戦争にいたる過程において、歴史に敗者として鬱積し内攻したものが湧出するような、それを当然とするような文脈が形づくられていよう。西

南戦争が全国の反政府活動の一斉蜂起の先蹤と云うことか。活字媒体はこのような文脈を始めての経験としておすおすと全国に提供するわけであるが、そのような文脈は当然ながら中央政府との軋轢を起す。時の政府においてこの新たな活字媒体にどう対応するかは、最初のそして重要な経験であつたらう。政府と活字媒体の西南戦争をめぐるこの初発の言説空間は、初発ゆえに、その後大きな意味を持つ。『仮名読新聞』は、先の記事の直前の二月九日に思案橋事件の判決の記事を掲載しており、このような記事も、先の文脈の形成に大きくあずかっていようし、そのような文脈で考える方向性が、当時の政府観と関係してあつたことは想像できよう。後の政治小説家末広鉄腸等が郷里の土族へ、「姦賊ヲ以テ甲民伐罪ノ義挙ニ出ヅルモノト誤解」(郷里ノ朋友ニ告グ、明10・3・25、「朝野新聞」)するのは、「封建迷夢ノ夢一覚セザルガユエ」として軽挙妄動を戒めた発言をするのも、それを当然とするような現実味があつたからではないか。そして、問題は、この鉄腸の発言に見られるように既に当時において、西南戦争に関する「風聞」を「封建迷夢ノ夢」とする言説が存在したことであり、それにも関わらず、膨大な数のいわゆる西南戦争物が提供されたことなのである。後の過程はこのおびただしい数の西南戦争物を文学史のうえで近代小説以前として抹殺して展開するわけであるが、この西南戦争の言説は、当然始まりつつあつた自由民権運動の言説にも影響を与えたであろう。(つづき物)に注目していた新聞という新興の活字媒体が、このような国家的な変事をどうとらえ、また、どう報道することが可能だった

かということなのである。つまり、従来西南戦争は勃興期のジャーナリズムの成長に大きな意味をもつとされたわけではあるが、むしろ、私の関心は、そのような活字媒体が、西南戦争において国家と活字報道との関係に一定の決定性をもってしまったのではないかと言うことである。(風聞)と膨大な所謂西南戦争物を消し去った言説のことなのである。活字媒体の登場とほぼ同時に起こった西南戦争が、活字媒体の形成に影響したことは想像に難くない。先に「仮名読新聞」の西南戦争の報道は、見過ごしてしまうほどの小さいものであることを述べたが、そのような「仮名読新聞」の西南戦争の報道についての姿勢は、もちろん、当時の言論統制のためである。さきの記事の翌日の二十二日には、「仮名読新聞」は社告として、

「今般内務省より新聞各社へ取留らぬ話へ載てならぬと懇々の御説諭が有りましたが別して読売絵入仮名読の三社へお達しにハ向後人心を惑乱せるような件ハ決して記載ハ致さなからうが街頭を呼売者が記載でもない外の件を嚮々と唱立る儀ハ無き様に注意致す可しとの難い仰が五座りましたから」とあり、おそらく「取留らぬ話」が西南戦争に関係することは間違いないであろう。以降、「仮名読新聞」の報道は政府の公式発表に準拠するかたちで、つまり末広鉄腸の側に立つて行われるのである。その点で、この「仮名読新聞」の社告が「読売絵入仮名読」と言う当時の「傍訓新聞」への特に注意としていえることは興味深い。「大新聞」は、先の末広鉄腸の発言の近代性に見られるとおり、時の政府と同じ立場にいるわけである。西南戦争によって、当時の活字媒体は、早々に国家の枠組みのなか

に位置してしまっただのではないかと言うことなのである、というより政府と在野の活字媒体は、西南戦争と言う大事件を契機として、その相互関係において自由民権運動の前にいち早く近代国家の言説の基本的な内実を用意してしまっただのではないか。「仮名読新聞」の(風聞)から末広鉄腸の発言に至る過程はそのまま、明治政府と足並みを揃えたものと言えよう。その過程をもう一度細分化して検証することが、のちの自由民権運動と政治小説の内実のみならず、近代小説の可能性を検討するために必要であると思う。文学の自覚はそのような、政府と活字媒体の相互関係の近代性に対してどうなされたのか。先に西南戦争の当初から実録が虚妄であり、その実録を提供した戯作者を「近世嘆」(金聖歎に掛けて)と否定する言辞を紹介したわけであるが、その言辞が末広鉄腸が言う「封建迷夢ノ夢一覚ゼザルガユエ」と通底していると言えまいか。鉄腸のいち早く西南戦争の否定の論理は、後の彼の政治小説の限界と重なっているのではないか。そして自由民権運動期における在野の報道が政府の言論政策と同じように西南戦争の経験の延長にあると推測しても、それほど誤りではあるまい。

西南戦争前の、この戦争に至る一連の事件についての文学作品は、今あまり研究されているとは言いがたいし、また、それを整理することも最近始まったと言えよう。先にふれた思案橋事件については、岡本起泉の『思案橋曉奇聞』(明16)があり、起泉にはまた大久保利通暗殺を扱った『嶋田一郎梅雨日記』(明12)がある。西南戦争後の一連の政害をあつかった所謂実録小説が結局は一種の近代性、

つまり、法的な理念、それに基づく裁判制度の正統性と妥協に終わっているのは、彼の毒婦物、『東京奇聞』（明12）と同じであるが、そのようなものとは異なるものとして仮名垣魯文『京文舎文京著述の『名広沢辺萍』をあげてみたい。京文舎文京の本名は渡辺義方、彼は二世花笠文京を名乗った人物、つまり「仮名読新聞」の編集長仮名垣魯文の師匠の名を襲った人物であるが、文学史ではあまり言及されてはいない。わずかに野崎左文『私の見た明治文壇』（昭2）に仮名垣魯文門下の一人としての略歴がある。その渡辺義方が「いろは新聞」に連載し、単行本として出版したのが『名広沢辺萍』である。発行は明治十三年二月で、所謂明治式合巻の体裁を持つ。さて、内容であるが前半部の主たる登場人物は板垣鉄太郎と言う少年であろう。幕末の久留米藩における勤皇派という設定で、久留米藩の執権で左幕派の不破美作を暗殺して名をあげ、維新後は奥羽出兵するが長州の大楽源太郎をかまったことで脱藩、初編はその板垣鉄太郎が鹿児島で桐野利秋と密談するところで終わっている。二篇に至って始めて広沢真臣暗殺のことが登場する。政府の忌諱に触れる恐れがあるためであろう、文意には取りがたいところがある。おそらく、挿絵に暗示があるろうが、私にはうまく読解できない。簡単な紹介であるが、この小説が幕末の久留米の不破左門の暗殺さらに、明四事件（二篇には古松簡二が登場する）、同じく明治四年の広沢真臣暗殺、征韓論そして西南戦争を一連の文脈にとらえていることが理解できよう。この書が出版された明治十三年は広沢参議十年忌で、この事件はその時点でもなお官憲による調査中であった。

この暗殺事件の詳細については触れないが、この書が維新後の幕末から西南戦争までを、一つの必然性のもとにとらえていることに興味があるわけである。西南戦争は単なる不平士族の単発的な武装蜂起ではなく、もう一つの幕末からの流れの帰結であるということであり、いわば、先に引用した「仮名読新聞」の「取留らぬ話」を小説化したものと言えよう。「仮名読新聞」が政府の忌諱に触れたように、この『名広沢辺萍』の三篇は発売禁止になったようで、明治十三年四月十五日の「朝野新聞」は同書の三編は発売差し止めとなった報じている。三編を所蔵している機関があるようだが、私はまだ読む機会を得ない。

この作品の作者渡辺義方の他の作品についても触れたいが省略したい。渡辺義方の作品は、この期の、今からみれば古い方法かも知れぬが政治との緊張関係を追求したものとして重要と思われるし、その追求の過程のどこに後統の近代的な政治小説にとって変わるられるような限界があったのかも重要な問題であろう。『名広沢辺萍』は、先の「仮名読新聞」の「取留らぬ話」のような風聞にすぎないものを、興味本位に小説化したものと簡単には言えるかもしれない。しかし、そうであっても、西南戦争を契機とする言論統制とそれを当然とする近代化の自覚がいち早く作り出した言説空間の存在の意味を再考する必要があると思う。例えば、末広鉄腸と同じく政治小説を先導した矢野龍溪の場合であるが、彼の『経国美談』（明16）を代表とする政治小説は、その西洋的知性に基づく啓蒙性において、明治政府に突きつけられて初発の疑義を、近代的に整理

しすぎたのではないかと言うことである。別に目新しい意見ではないが、自由民権運動期の政治小説、さらに近代小説は西南戦争ですでに用意された言葉の枠内にとどまったのではないか。矢野龍溪の小説には『浮城物語』(もと「報知新聞」、23・1・3、「郵便報知新聞」連載)もある。S・F小説の先駆的な作品としてよく言及されるものであるが、西南戦争の文脈であらためて読むとき、注意すべきは、登場人物の作良義文が東北の出身、そして立花勝武が薩摩の人で海軍に従事し、維新後は函館戦争、そして所謂台湾征伐に参加したとする経歴であろう。『浮城物語』も未完で、彼等の詳しい経歴の設定は明らかにっていないが、作良と立花との出会いは、先の「仮名説新聞」の記事などに共通する奥州と薩摩との提携と言う痕跡があると言えよう。船員の中には田原坂の戦いの経験者もいることが示唆されている。そして、この小説の発端が西南戦争の翌年の明治十一年に設定されていることも、作良と立花の人物設定と無関係ではありえない。彼等は西南戦争の蜂起に参加した人々と考えられないか。付度すれば、この『浮城物語』と言う小説は、西南戦争の賊軍たちが新しい生活を求めて旅立つ話なのであり、この小説もまた、西南戦争物と言えよう。とすると、西南戦争の賊軍を南進の先兵とする『浮城物語』の内容は、矢野龍溪流の西南戦争の戦後処理策であり、問題は、そのような処理策と結びついた文学なのである。つまり、『浮城物語』は西南戦争を契機とした近代性の確認の延長に位置して文学史に残っているようであり、反対に、渡辺義方が『名広沢辺萍』で示唆したような、会津と薩摩の提携、思案橋事件から

西南戦争へと関連する文脈が、文学史に言及されることはない。しかし、その文脈は後に黒龍会編『西南紀傳』(明42・4、黒龍会本部発行)として表現され、今その内容を問わないがより政治な実践的に関わる言説を近代において一貫して提供したことの意味も近代的な政治小説と対照してあらためて考えるべきであろう。西南戦争前後の空間は平板化されて今の文学史に至っている。それにも関わらず多数の西南戦争物が当時も今も存在したことをどう考えたいのか。飛躍した言葉の多い文となったが、西南戦争を、あらためて近代社会における小説の意味を再考する契機にしたいというのがこの文の意図である。

ヤポネシアン・ブックレビュウ

花 田 俊 典

★ 一昨年の十二月、知人に誘われて那覇市まで「沖縄文学フォーラム」を聞きに行った。ついでに、わたしが偏愛する作家の崎山多美がよく通うという、コザ（沖縄）市内の珈琲店「原点」の深く濃く透明なコーヒーを再度玩味したい魂胆もあったのだ。崎山多美には小説集『くりかえしがえし』（砂子屋書房）とエッセイ集『南島小景』（同）があり、数年前には芥川賞の候補にも二度なったが、なにしろ寡作で、その後は「へるめす」一九九七年一月号に凄い幻想短篇「風水譚」を発表している。近年、沖縄からは又吉栄喜と目取真俊とが芥川賞を受賞したが、まだまだ崎山多美と、あともう一人、長崎市在住の青来有一が受賞しないことには、選考委員諸先生の眼力を認める気にはならない。

フォーラムのテーマは「沖縄・土着から普遍へー多文化主義時代の可能性」というもの。特別講演はイーハブ・ハッサン「未来の予表・忘れられた王国ー21世紀を迎える沖縄文学」とジョン・モンタ

ギュー「グローバルな地域主義」の二つで、これはなかなか魅力的だった。つづくパネル・ディスカッションには奇妙な違和感が残った。パネリストは大城立裕・日野啓三・池澤夏樹・又吉栄喜・湯川豊の五人。「文学界」元編集人の湯川豊を筆頭に、（目下、沖縄に在住している）池澤夏樹なんか、「沖縄」は「非常にバランスのとれた社会であり、僕はノスタルジックに自分も子供の頃はああやって遊んでいたなと感慨にふける」、「その値打ち、この社会がまだ普通の姿をしていること、値打ちというのは多分、全日本語圏で通用すると思うんです」などと、とんでもない善意の（それゆえ悪質な）オリエンタリズムを滔々と述べ立てている。いかがわしいこときわまりなく、そのことについてはわが同人誌「敘説」15号（特集「検証・戦後沖縄文学」）に書いたのでもう繰り返さないが、このフォーラムの詳細は実行委員会編「沖縄文学フォーラム報告書」があり、また「文学界」一九九七年四月号にも「沖縄ー文学の鉱脈」と題して特集記事が組まれているが、こちらのほうは二日間

にわたる別会場での応答を一堂にアレンジするなど、そのむね末尾に注記してはあるものの、かなり贋物という印象がつよい。オリエンタリズムの問題など、パネル・ディスカッションの席上で司会者の岡本恵徳と黒澤亜里子がたまりかねて問題提起したものであるにもかかわらず、まるで池澤夏樹がみずから言及したかのように粉飾されたりしているのである。

★

沖縄では、これより十年ほど前、もう一つのフォーラムが開催されたことがある。「シンポジウム（吉本隆明を聴く）ー琉球弧の喚起力と『南島論』の可能性」と題するもので、その発言記録は『琉球弧の喚起力と南島論』（河出書房新社）で読むことができる。そこでは吉本隆明が例によってATLウィルスとかGm遺伝子とかの計測値を持ち出し、「アフリカの」という概念を援用して、悲願の「国家」起源の無化を企てていることは、すでによく知られている。「南島論とは何なのか」と彼は自問自答する。「いつてみれば人類の普遍的な母胎のところに到達できるかどうかというのが南島論のひとつの課題だと思います。基層をどんどん掘り下げていって、日本国家の成立の基礎よりもっと奥まで掘り下げてしまおう。それをイメージ化することができれば、それはやはり人類の文明と文化の普遍的な起源、つまり母胎といましようか、そこにつながる可能性がみえてくるかもしれません」。このシンポジウムには赤坂憲雄も同席していて、さすがに「ヘーゲルの普遍に根差す吉本氏のラディカリズムを共有するには、あまりにわたしたちは遅すぎた世代

に属する」などと後日コメントしているが、その彼にしてから、「理論の先見性や普遍性にたいする信頼なくして、わたしたちは人間とその世界について、根柢から問うことなどできやしない」のであり、「その第一歩はみずからの拠って立つ個の場所に刻印されねばならない、とかがえる。個の場所を掘り上げることが普遍的地平へと通じている、それがもつとも幸福な思想のありようではないかとおもう」などと口走るのである。「個の場所」から「普遍的地平」へ、このヨシモト・イベントがほぼ十年の歳月をへてそっくり再演されたのが、つまり「沖縄・土着から普遍へ」フォーラムなのである。「理論の先見性や普遍性にたいする信頼」などと、なにを寝ぼけた大昔の選良意識を固守しているのだろうか。まるで「プロレタリア前衛」みたいじゃないか。

「日本国家」を「無化」したかったら、今日なら、さしあたり手近な山口敏監修『日本人の起源の謎』（日本文芸社）とか、大林太良『日本神話の起源』（徳間文庫）あたりの入門書を通読すれば、ひとまず足りることである。前者は人類学・遺伝学・考古学などの分野における最新の成果をふまえてイヴ仮説（現代人アフリカ起源説）からミトコンドリアDNA分析や邪馬台国論争などの話題に至るまで懇切平易に教えてくれるし、後者は比較神話学の手法でもって「日本国家」の根柢（記・紀・風土記などの日本神話）がいかに無根柢であるかを中国・朝鮮・東南アジア・オセアニアその他の地域の神話伝承との類縁をくり返し指摘しつつ思い知らせてくれる。吉本隆明がわざわざ南島＝沖縄などを掘らずとも、これらの「学問」

はどうに「国家」など軽々と超えているのであり、それでも掘りた
いなら、吉本隆明らは自宅の地下でも掘って、せめて東京大空襲の
死霊でも弔えばいいのである。

★

これまで何度か川村湊『満洲崩壊』（文芸春秋）を読もうと試みた
のだが、どうしても読み進めることができない。川村湊の一連の仕
事には大いに関心もあり敬意も払っているつもりだけれど、この本
の冒頭の、大東亜文学者会議を扱った「序章 我等ハ皇国臣民ナ
リ」のなかで、「日本人ならともかく、『外国人』である中華民国、
満洲国の代表にまで、国民儀礼を強制するような『国際性』の欠如
にはあきれざるほかないが、しかし、満洲代表の中に日本人の山田清
三郎が、中国代表に草野心平がいるという内外を区別しない無茶苦
茶なメンバーであることをみれば、こうした無神経で独善的なやり
方も無理はなかったかもしれない」とか「そんな苦しさを云い立て
て何になると攻撃する日本人文学者こそ、文学者の名に値しないデ
リカシーのなさというべきである」なんて洩らす川村湊の「無神経
で独善的」なコメントがつづいたりすると、もう読む根気がなくな
るのである。ばらばらめくると豊富な新データが並んでいるように
もあり、だから読みたいと思うのだが、わたしの関心は「『国際性』
の欠如」や「デリカシーのなさ」に「あきれ」て済むようなところ
にはないのである。ま、なにしろ読み通していないのだから何とも
不安定な感想で居心地が悪い。と同時に、さきの吉本隆明とあわせ
て七〇年代の亡霊を見るような気もする。

七〇年代には反国家的民族主義の思潮が高まった。岩波書店の同
時代ライブラリーで再刊された長田弘・他の鼎談『日本人の世界地
図』を読んでいたら、現代韓国作家の南廷賢ナムテギョンの短篇「糞地」のこ
が話題になっていた。祖国解放後の朝鮮でアメリカ兵に強姦された
母親が半狂乱で帰宅し、すっぱだかになって息子の頭を自分の股間
に押しつけて、こう叫ぶのである。「アイゴ、このたたき殺しても
あきたりないやつらめっ、わたしや、お前たちのためにこの穴を
守ってきたんじゃないんだよ！ おお！ このばちあたり、げすや
ろうめ！ ふん！ やりきれない、やりきれないよ、わたしや、く
やしいよ。これじゃ、父さんがかわいそうだよ！ ああ、大事にし
て自分でもいちどもさわったことのないこの穴を、ああ！ どこか
のやつに思いのままに突きこまれたんだ！ この汚らわしいやつら
め！ アイゴ、汚らわしい、汚らわしい！」。これは朝鮮文学の会訳
編『現代韓国文学選Ⅰ』（創土社）所収の本文だが、この作品はまた
これより五年ほど前に刊行された林啓編訳『歲月』（新興書房）にも
収録されていて、こちらのほうの訳文は「アイゴ、たたき殺しても
あきたりないやつらめ、わたしや、おまえらのために貞操をたいせ
つにまもってきたんじゃないんだよ！（略）とうさんがかわいそう
だよ。よごさないように、自分の手でもさわったことのないこれを、
ああどこのどいつだかも知らんやつに押しこまれてしまったんだ
よ！」といった調子である。「貞操」とか「これ」と訳す後者より
も、「穴」とする前者のほうが直接的で比喩性も高いと思うが、こ
の小説はもちろんこれだけに終わるのではなく、この幼時の忌まわ

しい体験を記憶の底に封じ込めて成長した青年が、アメリカ軍人の夫人の股間を觀察して疑問を解きたいと迫ったら、つまりレイプ未遂で、アメリカ軍から包囲されて山中にこもり、あと数分で原爆を発射されて死ぬという、いまわの際の回想の一シーンなのである。なんとも凄く小説があるもんだ。のどかな芥川賞受賞作「豚の報い」の癒しの物語なんてもんじゃない、くわっと牙をむいている。癒しなんてのは大江健三郎あたりが元凶かも知れないが、だいたい作者からわざわざ説明してもらうもんじゃないだろ。それは読者の読了後の、個々の領分じゃないのか。

★

「サッチャン」の作者が「ぞうさん」の作者のことを親しく語っている。阪田寛夫の評伝『まどさん』（ちくま文庫）である。「ぞうさん／ぞうさん／おはなが ながいのね／そうよ／かあさんも ながいのよ」、——この詩は團伊玖磨の作曲で有名だが、阪田寛夫はこれはじつは象の子が悪口を言われる歌なんだと言っている。彼には講演集『童話の天体』（新潮社）もあるが、このことについてはこれ以前に、吉野弘がエッセイ「言葉と私・19—まど・みちおの詩」（『野火』一九七九・九）で推測している。「この詩に関して、少しばかり変った読み方を許していただくと、冒頭の（ぞうさん／ぞうさん／おはながながいのね）は、象の鼻の長すぎることを、いくらかからかった者の意地悪と読めないこともない。ところが、そういう意地悪をすらすら（そうよ かあさんも ながいのよ）が、見事に肩すかしを食わせるのである。」

この解釈が作者の意図にてらして妥当であるらしいことは、谷悦子『まど・みちお 研究と資料』（和泉書院）でも、まど・みちお自身が（おそらく吉野弘の読みを事後的に自己了解するかたちで）「自作自注」している。「しかるにこのゾウは、いかにも嬉しそうに『そうよ、母さんも長いよ』と答えます。長いねと言ってくれたのが嬉しくてたまらないように、褒められたかのように。自分も長いだけでなく自分の一番大好きなこの世で一番尊敬しているお母さんも長いよ、と答えます。このゾウがこのように答えることが出来たのはなぜかといえは、それはこの象がかねゾウとして生かされていることを素晴らしいことだと思ひ有難がっているからです。誇りに思っているからです。」

山口県徳山市生まれのまど・みちお（本名、石田道雄）は大正八年、十歳のとき台湾で働く両親のもとに渡り、そのまま当地で成人して昭和十八年に応召し、戦後、三十七歳で復員している。童謡「ぞうさん」は昭和二十六年作、翌年にNHKで初放送された。彼の台湾（異郷）体験が氣になる。

★

ゾウさんの子は、どうでも自分を母親と自己同一化しないと周囲のイジメに耐えられなかったのか。戦時下に再刊された伊波普猷『琉球』（青盛社）の初刊本は明治四十四年、那覇の沖縄公論社から上梓された。明治十二年の琉球処分から約三十年後の「沖縄」のアイデンティティを問うた沖縄学創草期の画期の一書である。「自序」に、中学時代にヤマト（薩摩）出身の校長から「琉球人に高等

教育を受けさせるのは国家の為にならない」と侮辱されてストライキ騒動となったことや、その後東京に遊学してから「他日政治家になつて、侮辱された同胞の為に奮闘する決心をした」ことなどが述べられている。

巻頭に置かれた「琉球人の祖先について」は、言語上からも、また神話・土俗・宗教・文学上からも、日琉同祖なることを力説した論文で、その歴史の変遷については、九州から南下した沖縄人の祖先は、中世の頃からは双方の政変もあつて交通遮断し、やがて慶長年間の薩摩の不当な琉球征伐によつて半死半生の憂き目をしいられたのち、ようやく明治維新後の合体によつて蘇生したというのである。どうやら彼は幕藩体制下の薩摩の謀略横暴がなにより恨めしかったのであるらしい。この文章を彼はこう結んでいる。「さしも盛なりし尚氏の海上王国は、遂に變じて島津の宝庫となり、かつて南洋の津々浦々を遍歴せし波瀾の健児は、いつしか石原小石原の陸生動物と化し去つた。それから明治の初年に至るまでの琉球の存在はむしろ悲惨なる存在であつて、言ふに忍びない位である。そこで私は明治初年の国民的統一の結果、半死の琉球王国は滅亡したが、琉球民族は蘇生して、端なくも二千年の昔、手を別つた同胞と邂逅して、同一の政治の下に幸福な生活を送るやうになつた、との一言でこの稿を結ばう」。

伊波普猷はみずから「南海の楽園（自序）を名乗り、またこの一文でも、「琉球群島は天然が時間（タイム）を場所（スペース）に現はして吾人に与へた恩恵の一例である」とか、あるいは「琉球群島はさながら天然の古

物博物館である」などと述べている。「博物館」についてはベネディクト・アンダーソンの『増補・想像の共同体』（N T T出版）が、「植民地国家がその支配領域を想像するその仕方」の一つに挙げているものだし、その他、彼の日琉同祖論に関わる一連の言説が今日からみて幾層かの再考の余地を孕んでいることは、最近では屋嘉比収の論考『琉球民族』への視点―伊波普猷と島袋全莞との差異（『浦添市立図書館紀要』8、特集 伊波普猷―没50周年記念、一九九七・三）などが明快に指摘している。そのことにまったく異論はないのだが、それでも伊波普猷の文章は、（孤島苦）から脱する転形期に立つ者の、いわば（事前）の光景として読むかぎり、どこか切なく美しい。これって日本浪漫派みたいな美学なんだろうか。

★

矢野暢・磯村尚徳の編著『アジアとの対話』（日本放送出版協会）はTV番組取材の余録の一書だが、このなかの対談で磯村尚徳が「逆説的にいえば、アジアを理解しようと思つたら、むしろイギリスのことを勉強したり、フランスのことを勉強するほうがいいと思うのです。なぜ、アメリカが日本同様に途上国相手の外交が下手かというと、やはり植民国家としての経験が浅いからだ、と思いますね」などと発言し、東南アジア学では第一人者である（はずの）矢野暢が「そうなんですよ」なんて応じている。この矢野暢なる人物は、「アジアの拠点都市」を自称する（わが勤務地の）福岡市が創設したアジア何とか賞の第一回受賞者で税金抛出の賞金五百万円（一）を「受領なさつた方なので無関心ではいられないのだが、そ

れにしてもなにをあなたたちは「勉強」してきたのだろう。たぶん本音は「逆説」なんかじゃないんだろうが、かりにそうだとしても、どういう理屈でもってこれが「逆説的」な言い方になるというのだろう。

ヨーロッパ諸国が大航海時代からいかにして世界進出していったかはエティエンヌ・タイユミット（増田義郎訳）『未知の再発見』叢書33『太平洋探検史』（創元社）がビジュアルだし、要領よく簡明に辿っている。この本にはまた、「資料篇」のおまげがついていて、「太平洋に魅せられた人々」の文章がいくつか抄録されている。フランス海軍士官ルイ・アントワヌ・ド・ブーガンヴィルがフランス国王ルイ15世の命を受けて大科学探検隊を組織し、「南方大陸」の発見の航海へと旅立ったのは一七六六年のこと。後年、タヒチに立ち寄った折の体験を、こう書き残している。「私は何度か2、3人連れだつて島内を散歩した。いつのまにかエデンの園に連れてこられたような心地がした。（略）タヒチの人々は欲望のままに幸福に暮らしているように見える、と私は言った。彼らはほとんど平等で、少なくとも、万人の幸福のために作られた掟に従ひさえすれば、後は自由を享受しているのだと思つていた。それは間違いだつた。タヒチでは身分の差別は非常にはっきりしていて、その不均衡さは残酷なほどだ」『世界一周航海記』。当時のヨーロッパではルソーの自然思想、すなわち人間は原始の状態では善であるとする「善き未開人」（『人間不平等起源論』）説が支持されていた。が、ルイ16世時代に太平洋探検を試みたジャン・フランソワ・ド・ラペルーズもまた、サモア諸島での体験などをふまえて、こう反駁するのである。

「思想家はこうした私の描写に対して激しく抗議するだろうが、無駄である。彼らは書齋で本を書いている。この私は、30歳のときから旅行している。未開人は自然と一体になっているという理由で、素朴で善良だと本には書いてあるが、私は、この民族がいかに不当で狡猾であるかをよく知っている」『世界周航記』。

★

西川長夫・他編『多文化主義・多言語主義の現在—カナダ・オーストラリア・そして日本』（人文書院）は立命館大学国際言語文化研究所主催の連続講座（シンポジウム）を母胎に編まれたものだが、石川一雄「ケベックの選択—多文化政治統合への道」が、フランス系住民が多数を占めるケベック州問題を取り上げ、こう述べている。

「多文化主義は、メルティング・ポットに代わる『サラダ・ボウル』型統合、あるいは『モザイク』型統合をもたらす理念だと言われる。もしそうなら、それはケベックの民が求める理念にはなり得ない。それどころか、カナダ全体における多文化統合を導く理念にすらなり得ないだろう。／カナダという国家社会の現在は、一般に言われるのとは違い、サラダ・ボウル型でもモザイク型でもない。敢えて言えば『野菜かご』のようなものである。トマトもタマネギもレタスも、それぞれ切り刻まれることなくその存在を主張し、すでにばらばらになったコンヤ、もぎ取られて散らばる葉っぱの中に陣取っている、そんなイメージに近い」。

うまい比喩を使うもんだが、この背景に石川一雄が想起しているのは（普遍的統合／調和）というイデオロギーである。「近代の啓

蒙主義者たちには調和への信仰があった。それは逆説的楽天主義とも言うべきもので、自由主義経済、民主主義、マルクス主義、あるいは科学主義など、近代を彩った合理主義的価値観が共通に保持していた意識の前提をなしていた。この調和の概念をP・ティリッヒは『それにも拘わらず』(『in spite of』)の調和だと言う。A・スミスの『見えざる手』、ルソーの『総意』、ヘーゲルの弁証法などがそれである。相互に断絶した諸個人は、その異質性、多様性『にも拘わらず』、最終的には調和を手にするという救済史的信仰によって、世俗世界におけるコスモスの理性的構築を必然としたのである。

あきらかにそれはもはやカナダでは現実的に通用しない。というわけで彼がいくつか紹介する提言の一つは、たとえばN・レッシャーのいう、「黙認 (acquiescence) の哲学」をもって、「断絶を断絶として引き受け、対立の契機を保持する統合状態を、共約可能性を持たない人々が作る共同体、共約不可能な諸文化が作る共同体と捉え」る立場である。にもかかわらず、それをじっさいに実現するのは困難きわまりない。というより、このようなプラン自体を保証する普遍的共約可能性すら、どこにも保証されていない。いや、カナダとオーストラリアの事例が興味深いのは、その双方でそれぞれ、きわめてプラグマティックに理念と施策とが構築されているという現状である。そういう現状を維持しているのは、それぞれの土地に住む人たちの力である。メルト(溶解)しない、切り刻まれな、そして、「にも拘わらず」というわけだ。

★

インド出身の「脱構築派マルクス主義フェミニスト」(一) ガヤトリ・C・スピバックは、いつも彼女が「周縁的」なスタンスを求められることについて、こう語っている。「そうした状況においてなすべき唯一戦略的なことは、なんとしても自己を中心に呈示することです。しかもこれは理論的に間違っています。けれどわたしが脱構築について語ったことがらのひとつは、脱構築の例のどれもその言説にそぐわないことです。もしわたしが理論的に手を汚さないとおくことがどうにもできなければ、わたしが周縁的であって欲しいと望まれているときには、中心を選ぶものです。わたしはインドでは周縁的とは決して定義されていません」(清水和子・崎谷若菜訳『ポスト植民地主義の思想』彩流社)。

わたしは当初、じつはこの拙文を、かの鷗外先生にならって「我をして九州の野人、たらしめば」と題して書こうと思っていた。けれどもサッカー界にも「野人」がいるようだし、野人を演じてもいいこうに自分の得にはならないし、そしてホントは、なによりこのスピバックの一文でヤメたのだ。「さてわたしはひとりのアジア人であると言わせて下さい——アジアには知識人はいませんが、アジアの知識人は存在しません。わたしはそうしたやや謎めいた批評を固守しましょう。こうした見地から見ると、いわゆる知識人、そしていわゆる単独的知識人、普遍的知識人というものについて、誰が問いを発するかについて——実際わたしたち知識人の最初の問い——最初の努めは、国民国家に起源をもっていない普遍的知識人にたいする反動として、単独的知識人が定義されているかどうか、調べることです」。

最近の近代文学研究におけるある種の傾向について

— (ホモ・アカデミクス) の (イデオロギー装置) —

林 淑 美

戸坂潤の『思想と風俗』から、その冒頭に近い部分を以下に引用するのは、ルイ・アルチュセールが、「われわれは、いまだに生産諸関係、再生産の問題には取り組んでこなかった」という一文をもつて考察を始めた、あの名高い論文「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」(傍点原文、以下同様、『アルチュセールの(イデオロギー論』所収、三交社、一九九三)を読解するための試みのひとつである。アルチュセールはこの論文を一九七〇年に執筆した。戸坂潤は一九三六年に刊行された本で、明らかに「生産諸関係の再生産」の問題の端緒を掴んで、こう書いた。

「社会に於ける習慣、或いは又習俗は、社会の生産機構に基く処の人間の労働生活の様々な様式関係によって、終局的に決定されているが、二次的にはこの生産関係を云い表わす社会的秩序としての政治・法制が維持発展させる処のものであり、そして三次的には社会意識や道徳律が観念的に保証する処のものだ。その際習俗は、云わば歴史的な自然性(意図的でも人工的でもないというわけ)を

持った一つの与えられた社会的制度であると共に、同時にその制度が概略の大衆の意識にとつて安易快適(アット・ホーム)であるという場合のことだ。処でこの云わば制度と制度習得感としての習俗が、一見片々たる細々した手回り品や言葉身振りにまで細分されて捉えられた場合が、恐らく風俗というものだろう。」「社会の構造分析から見ると、具体的とも見えるし抽象的とも見える処の、この風俗という特有な社会現象は、どうも社会の物質的基底とその上部という普通の社会科学の段階づけの内には、いきなり適当な位置を発見出来ないように思われる。風俗乃至習俗は前にも云ったように一方一つの制度として現われる。生産労働の様式そのものについてさえ形をとつて現われる処の、一種の制度としてなのだ。その意味から云うと之はいつも社会の物質的基礎のどこにでも随伴して発見されるものだ。処がそれと共に、風俗乃至習俗は他方、その制度内に生まれ又教育された人間の意識の側に於ける制度習得感にいつも随伴する。するとこの場合の風俗は明らかに上部構造としてのイデオロ

ギーの一部にぞくすると云わねばならぬ。」(引用は『戸坂潤全集』第四巻、p.273.274、勳章書房、一九六六)

ここで戸坂潤が言っている要点は五つ、一つは、風俗習慣習俗などが「与えられた社会的制度」であるということ、二つは、但しこの場合の制度が他の制度と違うのは、人々の「制度習得感」というもののなかに実現すること、三つは、この制度習得感が「手回り品や言葉身振り」にまで及ぶこと、四つは、この制度習得感としての風俗は従来の社会科学的なカテゴリーでは説明しにくいこと、五つは、「制度の内生まれ又教育された人間の意識」としての制度習得感に伴うのが風俗習慣習俗であるということ。戸坂潤が夙にアルチュセールが提起した問題の端緒を掴んでいたと私が思うのは、「制度習得感」という一寸へんな語を造らなければ収まりのつかなかった、戸坂潤の問題の設定の方向にある。制度習得感という語、しかもそれは「概略の大衆の意識にとって安易快適(アット・ホーム)」なものであると説明された、この語は、制度という概念の読み替えを、あるいは制度という概念への新しい要素の付け加えを指示する。「制度」と「風俗」ともに生産関係や政治・法制や社会意識・道徳律に保証されるものでありながら、風俗習慣が従来の制度という概念で説明できないところを名指すのに、「制度習得感」という語が造られた。しかもこれもやはりイデオロギーの問題として扱われなければならないというのである。意識にとってアットホームな「制度習得感」という語が果たした読み替えは、「制度」は、たんに抑圧機構であったり支配のシステムであったりするのではな

いということの明確な示唆である。「制度」がどのように生産・創出されたかということの問題にするのはすべての前提であるとしても、その維持保存が、どのような機能を通してどのように可能であったかも同じように重要である。戸坂潤がいうのはこのことである。

私たちの共有する現代の思想は、この維持保存に關しての考察にその力の多くを費やしてきたように思われる。生産・創出よりもなぜ維持保存なのか。ここにアルチュセールのいう「生産諸関係の再生産」(p.28)という問題があらわれる。

アルチュセールは、上記の引用の直後の「上部構造と下部構造」という章で、マルクスの上部構造論が「上部構造に固有の『二義的』効力のタイプの理論的問題を提示させてもいる」としたのち、

「上部構造の存在や性質の本質を性格つける事柄の考察を可能にし、必然たらしめるのは、再生産から始めることによつてである。」(p.28)と書いた。つまり上部構造に固有の二義的効力は再生産という問題に深くかかわっているというのである。そしてこのような問題構制から導き出されてきたのが「国家のイデオロギー装置」という概念である。マルクスのように「国家権力と国家装置の区別を考慮するだけでなく」「明らかに国家(の抑圧)装置の近くにあるが、それと混同されることのない別の現実をも考慮に入れることが不可欠である」(p.28)として、その別の現実を「国家のイデオロギー装置」と呼んだ。国家のイデオロギー装置(AIE)の諸制度は以下のようなものである。宗教的AIE、学校のAIE、家族的AIE、

法的AIE、政治的AIE、組合的AIE、情報のAIE、文化的AIE (p.36)。国家のイデオロギー装置は抑圧装置と異なつて暴力によるのではなくイデオロギーによつて機能すること、それは私的な領域や日常生活に属していること、それにもかかわらず、国家のイデオロギー装置において機能しているイデオロギーは支配的イデオロギーであること (p.37, 38)。そして「あらゆる国家のイデオロギー諸装置は、どんなものであれすべて同じ結果、すなわち生産諸関係の再生産、つまり資本主義的搾取諸関係の再生産に貢献し、「それぞれ固有の仕方であつた唯一の結果へと収斂する」、再生産への貢献は、諸装置のなかでもとりわけ学校のイデオロギー装置がもっとも支配的である (p.38, 39)。国家のイデオロギー装置という概念を粗々たどれば以上のようになるが、再生産される「生産諸関係」とはなにか。アルチュセールは「被搾取者の搾取者に対する関係であり搾取者の被搾取者に対する関係でもある」とする。つまり資本制社会における人と人との関係、人と集団との関係、人と国家との関係などのことであるが、そして、そうした関係が「大部分再生産されるのは、支配階級のイデオロギーを大量に教え込むことに伴ういくつかの知ることを習得する期間を通してである」、しかしこうしたメカニズムは「学校のイデオロギーによつて覆われ、隠されている」(p.39)とする。学校をもっとも重要とする国家のイデオロギー装置は、資本制社会の社会的諸関係(生産、流通、分配、消費を諸契機とする資本主義的生産様式にかかわる一切の関係)を再生産するために必要だといふのである。そ

れは教え込みや「調教」(p.39)を通してであるが、しかし教え込まれる諸個人の「習得」なくしてはありえない。習得する諸個人は習得することによつて直接に労働力の再生産にも貢献する。そうすると、習得のメカニズムとそれが貢献する生産諸関係の再生産は、具体的な一人々々の個人において実現することになる。アルチュセールがたてた「生産諸関係の再生産はいかに保証されるのか」(p.40)という問題に対する私が考えた答えは、生産諸関係の再生産は、国家のイデオロギー諸装置と、その諸装置において習得する諸個人が保証する、ということになる。戸坂潤がいう(制度習得感)という語は、国家のイデオロギー装置の諸制度と具体的な諸個人の経験とを再生産の概念でリンクしたものであつたのではないか。戸坂潤は、アルチュセールが学校装置を重視したのと同様に、「制度の内生まれ又教育された人間の意識の側に於ける制度習得感」というように述べ、しかもその制度習得感を通しての制度を、意識にとつて「安易快適(アット・ホーム)」なものであるといふのである。言い換えれば人々は、その意識においては無意識において、イデオロギーの諸装置のなかで率先して社会的諸関係を再生産するのである。

「再生産分析が設定する平面では、生産はものの生産ではなくて、社会関係の生産と保存である」。これはエチエンヌ・バリバルの『資本論を読む』(ちくま学芸文庫版、p.117、一九九七)に収められた「史的唯物論の根本概念について」という論文からの引用である。私が知っているかぎり再生産理論の展開をたどればマルクス「資

本論」からローザ・ルクセンブルグの「資本蓄積論」をへてアントニオ・グラムシのヘゲモニー論、そしてアルチュセールのイデオロギー論、ミシェル・フーコーの権力論さらにピエール・ブルデューにいたるといことになるのではないだろうか。ところで、この展望欄へ稿を寄せたのは、アルチュセールのイデオロギー論を読んで『思想と風俗』を思い出した、私の喚起力の妥当性を証明するためなどではなく、ここまでの記述は、本題に入るための前提であったのだが、そのためにもいまひとつふれなければならぬことがある。それは『思想と風俗』からの引用文を読んで、あるいは察してくれる向きもあるかもしれないが、要するにブルデューの（ハビトゥス）のことである。

戸坂潤は、引用の繰り返しになるが、「処でこの云わば制度と制度習得感としての習俗が、一見片々たる細々した手回り品や言葉身振りにまで細分されて捉えられた場合が、恐らく風俗と云うものだろう」と述べた。さきに私は、戸坂潤が制度という概念の読み替えのために制度習得感という一寸変な語を造ったと書いたが、「一見片々たる細々した手回り品や言葉身振り」もこの制度習得感の重大な要素だというのである。ピエール・ブルデューのハビトゥスの概念を知ったとき、やはり『思想と風俗』のこの部分を思い出したのは（思い出したことが妥当かどうかについてはそう自信があるわけではないが）、とりあえず「手回り品や言葉身振り」という言葉のことだったが、しかし『思想と風俗』を読み返してみれば、それはやはり言葉の類似性だけではなかった。さきに私は（制度習得感）

という語は、国家のイデオロギー諸装置と諸個人の経験とを再生産という概念でリンクしたものではなかったか、と書いたが、（ハビトゥス）も疑いなく再生産の概念が根底にあるからだ。以下は少し長いが、ブルデューの『ディスタンクシオン』からの引用である。

「ハビトゥスの図式が固有の有効性をもちうるのは、それらが意識や言説の手前で、したがって意志的な検証や統制による把握の外で機能するものだからである。それらの図式は慣習行動を実践のなかで方向づけながら、最も無意識的な身振りのうちに、あるいは手先の動きや歩きかた、座りかたや漬のかみかた、物を食べたりしゃべったりする時の口の動かしかたなど、一見したところ最も無意味に見える身体技法のうちに、価値観と呼べばおそらく間違いになるであろうものをめぐりこませ、社会界の最も基本的な構築・評価原理、すなわち（階級間、年齢層間、男女間の）分業あるいは支配の分業を最も直接的に表現する諸原理を、身体および身体にたいする関係の分割形態のうちに投入する。こうした分割はあたかも支配の分業を自然なものに見せかけようとするかのように、労働の性的分業と性的労働の分業から一つならずの特徴を借りてくるのだ」、したがってこうしたハビトゥスの行為者は「分類可能な種々の行為の生産者であるばかりでなく、それら自体が分類されている種々の分類行為の生産者でもある。」（『ディスタンクシオンⅡ』p. 327, 338、藤原書店、一九九〇）

歩き方やものの食べ方などといった無意識的な身振りの行動の行為者は、分類可能な慣習行動の生産者であるばかりではなく、それ

自身分類可能な数々の分類操作をも生産する。つまりハビトウスは、分類可能な慣習行動の生成原理であると同時に、これらの慣習行動の分類システムであり分割原理であり、さらに階級分割の評価原理であり『ディスタンクシオン』¹⁾ p.32)に、すなわちそれは身体化された分割原理、評価原理なのである。言い換えれば、ハビトウスの認識構造が活用するのは「身体化された社会構造」(『II』p.32)であるという。ハビトウスとは、自らの行う慣習行動によって分類されながら、自らの行う慣習行動によって分類の評価原理、分割原理を保存、伝達するというわけである。ブルデューのハビトウスについての「差異化されていると同時に差異化する力」(『II』p.32)とか「構造化する構造、つまり慣習行動および慣習行動の知覚を組織する構造であると同時に、構造化された構造でもある」(『I』p.23)というような説明は、すべてこのようなハビトウスの二重的な弁別的機能を指している。こうした弁別的機能によって差異の空間を生み出し支えることになる(ハビトウス)という概念が、たとえばさきのアルチュセールからの引用が一部分示しているようなこれまでの「階級」概念の組み替えを可能にしたのである。本稿の文脈のうえで言い換えれば、差異化される行為の生産者であると同時にその差異化の体系を生産するハビトウスは、社会的諸関係の再生産の構造を私的な領域で確固として支えるものなのだ。社会は、むろんこうしたハビトウスの再生産のための装置をつくりだす。それについての、とりわけ学校・教育システムについてのブルデューの分析がその名も『再生産』という著作で展開された。そこにたとえばこう

いう箇所がある。「教育は、文化的恣意に適合的な行動をうみだすハビトウスの産出という媒介のもとに(すなわち、受け手に持続的に「伝える」ことのできる情報である訓練の伝達によって)時間のなかで文化的恣意の再生産が行われる過程とみなされるかぎり、歴史的連続性維持の基本的手段である。」²⁾ p.33、藤原書店、一九九二) 再生産の概念を抜かして近代社会の分析、とりわけ文化、情報、メディア、教育、家族にかかわる分析は不可能であるということをも、まるで読書ノート風のつたなさであるがここまで書いてきたのは、もしこの再生産という概念を基礎におかないで、近代におけるイデオロギーや権力を論ずるとしたらどうなるか、という恰好の見本を最近眼にしたからである。それは『メディア・表象・イデオロギー』(小森陽一・紅野謙介・高橋修編、小沢書店、一九九七)という一人の執筆者による共同研究の本である。副題は「明治三十年代の文化研究」とある。

手始めにハビトウスという概念がどう使われているかを見てみよう。この本において(ハビトウス)という概念は重要らしい。重要らしい、というのは、三部構成になっているこの本の「III」に「ことば・ハビトウス・イデオロギー」という見出しが掲げられているからなのだが、らしい、とつけくわえたのは、文学研究においてまだそう共有されてもいないと思われ、しかも決してやさしいとはいえないこの新しい概念について(ハビトウスに関するブルデューの仕事がフランスでまとまった形になるのは一九七〇年代であり、日本で

翻訳が刊行されるのはおもに一九九〇年代になってからである。この本のどこにも概念の説明や当該研究における概念の有効性についての記述が見られないからである。さてこの重要らしい概念は小森陽一氏の「保護」という名の支配—植民地主義のボキャブラリー」という論考ではただ一箇所以下のように使われている。「北海道旧土人保護法」第一条について「これまで永い年月を狩猟と漁労で生活してきたアイヌの生活慣習^{ハピトゥス}を一切無視した形で、農民化しなければ「国民」としては認めないという発想が、徹底して貫かれていた」(p.326)。ハピトゥスとルビをふられたのは、アイヌの生活様式であり習俗習慣のことである。これをハピトゥスと呼ぶのは別に間違いではない。しかし、ブルデューがつくりあげたハピトゥスという概念を必然とする対象ではない。ハピトゥスが概念であるかぎりそれはたんなる生活慣習というものではない固有な意味と体系を表示する。研究者がある概念を用いる時はまずはその固有な体系を尊重し、もし逸脱して用いるならなぜ逸脱する必要があるのかを記さなければならぬ。明治国家の異民族に対する保護同化政策の問題を扱って、もしハピトゥスという概念を用いるならば、植民地化によって強制される資本主義の経済システムと前近代的なハピトゥスとの不一致がもたらす軋轢を再構成し、さらに資本主義のハピトゥスや支配民族のハピトゥスをどのように教え、こむことで、日本への「同化」が果たされようとしたのか、そうした考察の上に保護同化の全体像を描く、という方向性が示されなければならない。そしてそのようにして現在ハピトゥスの再生産構造の真つ只中に

(氏の場合、最高峰に、というべきか) いる論者自身の問題とも重なり合うのであろうし、そしてまたそのようにして滅ぼされゆく民族アイヌの物語に論者の物語りを重ねることもできるであろう。そんなことがアイヌを抑圧した日本人であるものに行きかという問いには、できると自信を持って答えよう。被抑圧民族の物語に抑圧民族に属する者の物語を重ねた、たとえばあの小熊秀雄の長詩「飛ぶ橋」を私たちは持っているし、たとえば中野重治の詩「朝鮮の娘たち」を私たちは持っているのだから。

私はハピトゥスの概念の誤用の揚げ足取りをしているのではない。たとえば、この概念の雑駁な用い方ひとつに、この本の性格があらわれていることを言いたいのである。小森氏は論を「保護」という名辞の背後で、なぜ「保護」せざるをえないような、^{「滅亡」}にいたらざるをえないような状況が、アイヌにもたらされたのかという、大日本帝国の植民地主義の犯罪は隠蔽され、そして忘却されていったのである」(p.326)と結んでいる。氏は氏を含む日本人全体が、氏の言う隠蔽忘却に加担していることを忘れている。アイヌの表象は私たちにとってどのようなものとしてあるだろうか。北海道旅行のみやげの、鮭を啜えている熊をかたどったアイヌの木彫りやアイヌの織物(アツシというのだろうか)が、日本の多くの家庭に見られやしまいか。北海道に修学旅行に行つてアイヌの村でアイヌの踊りや伝統工芸の技術を見学したことがありはしまいか。恐らくは見学料を払つて。私たちは学校教育のなかで異民族の保存された習俗を、その生活から切り離して博物館の展示を見学するように見

学することで、アイヌの表象を消費してきたのである。日本の伝統文化を西洋人が消費するように。そしてそのようにして、私たちは植民地主義的なハビトゥスを行使しているのである。つまり私たちが、アイヌの日本的表象を消費し再生産してきたのである。大日本帝国が消滅した今に至るまで。氏および氏の論の立っている場は、そのような今にあるのでもないようで、大日本帝国の犯罪を告発する氏はまるで地政学的などにも特定できない場所に特権的に位置して、のん気である。再生産の概念を抜かすこのように無残なことになる。

「文化研究」と副題された「メディア・表象・イデオロギー」という本でアイヌへの植民地主義的な同化政策を論ずるのならば、氏のように「移民」と「保護」を大日本帝国の侵略の歴史の軌跡のうちに結びつけたことにみに立論の根拠をおくのではなく、まずは消費され再生産されるアイヌの日本的表象をテキストから拾いだし集め検討し、そしてその再生産のシステムを再構成しそしてまたアイヌ民族がそれのように抵抗しあるいは受け入れざるをえなかったか、というような問題設定を示すことによって（執筆者たちが自ら設けた明治三〇年代という限定があるにしても）、ようやく日本人が滅ぼしつつかあるこの異民族について日本人が語る資格を得ることができようというものである。そしてまたそのようにしてアイヌを語ることは、いまや滅ぼしつつかある日本人こそもつとも可能であるならば、犯罪的なのは氏ののん気さのほうである。数年前から日本でも耳にするようになったカルチュラル・スタディー

ズの問題意識のひとつは、このようなのん気なホモ・アカデミクスを撃つことにあると私は理解しているが、このことはまたのちに述べる。

高橋修氏の「作文教育のディスクリール——〈日常〉の発見と写生文」という論も、同じようなハビトゥスの使い方があがるが、そのことはもういい。この論は「文章教育における「ありのまま」という理念の起源を辿る」(p.25)ということを課題として「作文教育という学校教育の現場から、教育・マスコミメディア・イデオロギー（政治・文学という、別個に研究されてきた領域を、横断的に問題化する」(p.28)という目論見のもとに「学校教育の中の作文」について、作文教授法や実際の児童の作文といった資料にあたって「言文一致／標準語の発想に……「ありのまま」という理念が重ね合わせられ」「子どもたちの〈書く〉という表現行為もまた、「ありのまま」というイデオロギーとともに、政治的空間のなかに投げ込まれていた」(p.38)と結論する。この論が課題にしているのは、明治三〇年代の権力と言葉との関係を初等教育における作文教育のなかに跡づけようということであるらしい。こうした試みは、それ自体としては近代文学研究の分野では新しいものといえるのだろうか。しかしむしろこうした試みでまず問われるのは、論者の側で言えば、論における権力の概念をどのように構成するかであり、批評する側から言えば、論者のもつ権力の概念がどのようなものであるかということになる。氏は上田萬年の作文教育論を評して「国民の思想を平準化させようというイデオロジカルな意図」(p.25)を指摘し、

これを作文教育を通しての国家の言語政策の根本におきこのような意図がどのように実現されたか、ということを論証していく。氏の論証だけを見れば、初等教育の現場で完璧にその意図が実現されたかに見える。しかし実現されなかった部分もあるのではないかと、という当然の疑問も湧く。この疑問は、実現されたかされなかったかということを中心にしているのではなく、実は氏の論証の方向が言葉にあるのではなく、言語政策の理念の証明にばかり向いているのではないかと、ということについての疑問なのである。氏の論を読んでいると、権力と言葉とのかかわりが課題になっているのではなく、あらかじめ氏が想定した権力がどのように教育の現場でその言語政策を実施したか、ということが課題になっているように思われる。しかしまさかそれが課題ではあるまい。権力というものは、どこの場面でもいつも同じ貌をして同じように存在しているわけではない。社会主義者に向けたその貌を小学生に向けたいのと同じ道理で、言葉は、言葉が独自に受けなければならぬ、あるいは言葉が独自に対抗しうる権力の様態を指し示すのである。あらかじめ氏が想定した権力がどう作文教育に力を及ぼしたかを論証しただけでは、権力というものの姿も言葉というもののありようもついに描くことはできないだろう。『小説の言葉』でミハイル・バフチンは「共通の単一言語」についてこう述べている。「共通の単一言語」は「言語規範の体系であ」り「多様性をはらんだ国語の内部に公認の標準語の堅固で不変な、言語の核を創造」(平凡社ライブラリー版、一九九六)するものであるが、しかし同時に「単一言語」は「現実

の言語的多様性のただ中で作用」し、その「求心力とならんで言語の遠心力が間断なく作用しており、言語・イデオロギーの統一・中心化とならんで、脱中心化と分裂の過程が間断なく進行しているのである」(p.25)。そして「あらゆる言表は(単一言語)(求心的諸力と諸傾向)に参与すると同時に、社会的・歴史的な言語的多様性(遠心的な、分化を志向する力)にも関与している」(p.26)。標準語の求心力と、言語というもののもつ遠心力の間断ない作用の両方向を視野に入れてこそ、権力と言葉の生きた動態を描けるのである。さて高橋氏が、求心力しか問題にできず、脱中心化の方向を視野に入れることができなかったのは、なぜであろう。私の推測では、氏のイデオロギーという概念の把握の仕方にある。大体この本は、キータムについての解説をしない方針らしい。表題にもなっているイデオロギーという聞き慣れた語ではあるが、ひとによって異なった意味で使われることの多いこのきわめて錯綜した概念における有効性なりのもとまった記述がない。私がこの稿をアルチュセールのイデオロギー論の検討から起こしたのは、「国家のイデオロギー装置」という語がなんの説明もなく投げ出されるように書いてあったので(p.25)。この本におけるイデオロギーとはアルチュセールの概念に拠っているのだろうと察しをつけて、批評のための手続きとして代わりに私がアルチュセールのイデオロギー論の読みを示したのである。お陰で展望欄としては非常に長くなりそうだが。しかし高橋氏のイデオロギーという語の用い方を見ていくと、

どうも私のつけた察しとは違うらしい。氏の用い方は、アルチュセールがイデオロギーについて論じる際にあらかじめの断わりとして、自らが検討するのは「階級的立場を表明している諸々の特殊なイデオロギーの理論ではなく、イデオロギー一般の理論である」(前出p.33)と述べた、その検討の対象ではないと断わった「諸々の特殊なイデオロギー」の方の意味で用いているようなのだ。十年近くも前から始めた共同研究の結果の本だそうだが(「あとがき」p.33)、キータームの基本的な共通理解がなされていないように思われるのは本当に不思議なことである。さきの私の高橋氏の論からの引用の「イデオロギー(政治)」というように用い方をみれば、アルチュセールの概念でないのは明らかである。しかしむしろ、どういう把握でどういう概念を用いても構わないのであって(共同研究のあちこちで異なった把握で同じ概念が用いられるのは困ったことだがそれは譲るとして)、問題なのは、こうした概念把握で論を進めた結果のほうである。その結果が諸個人の再生産という契機を含むことができずに、言語政策の理念の証明ばかりが課題となり、固定的で実体化された権力の姿を描いてそれを特権的な場から告発し問責するということになる。これでは二昔前の俗流反映論による政治的批評や一昔前から見られるようになった被害者史観に凝り固まった出来ないのフェミニズム批評とたいして差はないのである。流行りのチームできらびやかに意匠を施しているぶんだけもつとよくないかもしれない。「文化研究」などと新しく標榜する必要などどこにもないのである。

中山昭彦氏の「『文』と『声』の構想——明治三十年代の(国語)と(文学)」も高橋氏よりも少し複雑な手続きをとっているが、同様な傾向を示している。私に与えられた字数はもうとつくに超えているので、氏の論の要約は手短かにさせてもらうが、明治三十年代に刊行された口語文典に言文一致体でかかれた文学作品からの用例の引用が見られないということをたよりに、とりわけ上田萬年の理論を分析しつつ国語と「文学」との隔絶(p.23)を指摘し「彼ら(上田とその周辺の人々)引用者註にとつてはむしろ、音声言語を統一することこそが急務であり、それがなされれば文章語は単にそれを写せばいいのだと考えられている」(p.23)として、そうした「理念」の「実践」が口語文典であり、同時にそこに「形成された『言説の磁場』が……国策の次元に転位し拡大されている」(p.23)と結論する。ここでもイデオロギーという概念の把握が問題になるだろう(この論ではイデオロギーという語は使われていないが)。アルチュセールはイデオロギーの概念をこう説明している。「イデオロギーの中では、諸個人の存在を統制する現実の諸関係のシステムが表象されているのではなく、諸個人と、彼らがそのもとで生きる現実的諸関係との想像上の関係が表象されている」(p.71)。そして「その想像上の関係はそれ自身が、物質的存在を与えられている」(p.71)から「その想像上の変形にもかかわらず」イデオロギーは「イデオロギー装置の物質的存在のまったただ中に刻みこまれ」た諸個人の「慣習行為の中に挿入された活動」(p.71)を語るものだ。つまりアルチュセールのいう「イデオロギー一般」は国

家とか国策とか政治とかというものに現われるのではなく、諸個人の慣習行為としての活動のうちにあられ、それを保証するのが国家の「イデオロギー装置」である。まさに「生産諸関係の再生産の問題」なのである。

中山氏は「統一の必要を強調するといった地点までしか、国策としての言語政策は到達してはいない」(p.25)という結論から国語と文学の亀裂を強調するのだが、国策の水準は氏の考察でわかったとしても、標準語のイデオロギーが諸個人の「慣習行為」の中に挿入された活動^{アクティビティ}においてどう再生産されたかは、氏の論だけではわからないしまたそうしたことへの方向性も見られないのだ。ここでもその方向は高橋氏と同様に国策の理念の証明にばかり向いているように思われる。違うのは、高橋氏が国策の理念を証明することだけにそれが実行されたかを論じているのに対して、中山氏は国策の理念(口語文典に文学作品が引用されないという事実)を証明することの上のみ、国語と文学との隔絶を論じているという点である。一方の証明は国策の言葉の現場における徹底に、他方の証明は国策の言葉の現場における不徹底に、いずれも国策の理念にばかり向いていること、言い換えれば「諸々の特殊なイデオロギー」としての国策にばかり向いている点ではいずれも同じなのだ。したがって氏の強調する「(文学)」と他の諸領域との抗争や亀裂^{クラック}も国策—言語政策に関する資料の上ではそうであったかもしれないが、現実にはどうであったかはついにわからないのである。氏は国策としての国語と文学との亀裂があったとしても文学が「無垢で非政治的な領域

だというつもりはさらさらない」(p.26)と断わっているが、一体氏はなにをいつているのだろう。標準語や正統言語は権力が構想するばかりではなく、「無垢で非政治的」な諸個人がおもに差異のシステムとして再生産していくのである。パフチンを再び引用すれば「あらゆる言表は(単一言語)(求心的諸力と諸傾向)に参与すると同時に、社会的・歴史的な言語的多様性(遠心的な、分化を志向する力)にも関与している」のだ。ブルデューは最近翻訳が刊行された『話すということ』(藤原書店、一九九八)でこの辺のことをこう述べている。「正統言語||国語は、みずからの時間的永続を確かなものとする権力を自分自身の内に宿してなどいないし、そればかりか、空間のうえでその勢力範囲の拡大を規定する権力を所持しているわけでもない」(p.55)。誰が国語の時間的永続を保証するのか、時には言語的多様性にも関与する「無垢で非政治的」な諸個人がおもに担うのである。しかし氏についていえば、こうした本にこうした論を執筆するデイスクールの生産者として、氏が「無垢」でも「非政治的」でもありえないのは言うまでもない。氏の論は、氏の立論の根柢のすべてを負っている口語文典に文学作品が引用されないというささやかな事実(氏の論を読んでいくと氏の意図に反してささやかかと思えてしまう)以外、『国語』という思想^{イデオロギー}(岩波書店、一九九六)でまとめられたイ・ヨンスク氏の仕事につけ加えるなにかを提出しているとは思われない。

この本のⅢの序(とでもいうのであろうか)の部分で中山氏は「政治経済の領域ばかりか文化的な諸領域までが連動することで形

成される「国家イデオロギー装置」(L・アルチュセール)は、まだその生成の途上にあるという他はないだろう」(p.255)と書いている。明治国家のイデオロギーが、あるいは「国家の抑圧装置」が生成の途上にあるというのならいつていることの意味は取れるが、「国家のイデオロギー装置」が生成途上にあるというのはどういうわけだろう。「国家のイデオロギー装置」という概念をもうけたアルチュセールによればそれはいつの時代にも存在するものである(96)。ところが中山氏においては国家のイデオロギー装置は歴史的継起において生成発展完了するもののようなのだ。生成の過程ならばその装置のメカニズムも生成中でいまだ不完全だということになる。しかしメカニズムが不完全といつてはならないのだ。どういうメカニズムであれ当代においてそういうメカニズムとして作用しているのだから。明治三十年代の文化研究を目指すなら、明治三十年代までの歴史の生産の結果を明治三十年代の社会として実在させるメカニズムを考察すべきなのである。このいまのセンチンスはアルチュセールがマルクスの『資本論』の方法を高く評価して述べた「マルクスが『資本論』のなかで研究することは歴史の生産の結果を社会として実在させるメカニズムである」という部分のもじりである(『資本論を読む』ちくま学芸文庫版上、p.126、一九九〇)。私が毎々にアルチュセールを引用するのは、私がアルチュセールを金科玉条にしているからではなくて(この思想家の著作の翻訳の愛読者ではあるが)、『メディア・表象・イデオロギー』というこの本が、キータームにかかわるものとしてアルチュセールを名指ししている

からである。私は、批評するときは批評する対象が用いている文献を使って批評するのをもっともフェアだと考えるものである。いずれにしても中山氏のこうした書き方はどのような批判(たとえば私のこの再生産という概念を基礎におかないというような批判)に対しても、われわれは明治三十年代を対象にしているからと称して回避することができるだろう。この本の根本的な欠陥は、どのような批判に対してもあらかじめの答えを用意しているということに、実はあるのだ。

私がこの本について怪訝に思うことはまだある。この本は身ぶりの大きい本である。身ぶりの大きさはこの本の構成にも現われている。この本は三部構成になっていてその前と後ろに「はじめに」と「おわりに」がすえられ、さらにそれぞれのパートの前に見出し(Ⅲでは(ことば・ハビトゥス・イデオロギー)というように)と序が掲げられ、序には、独自性や新しさを強調した問題設定の方向や立派な意図がきわめて簡単に、見開き一頁の上部を大きく開けた分量で述べられる。そうするとそのあとにおかれた論が、たとえば資料博搜の快楽を追求した楽しげな論も(たとえば金井景子氏の論や紅野謙介氏の論)、明治三十年代におけるツーリズムや家庭小説「己が罪」を論じてコロニアルな欲望を前景化できない論も(藤森清氏の論および金子明雄氏の論)、この本の表題の「メディア・表象・イデオロギー」とならべられた粹組みのうちに、あるいは身ぶりのうちにあるいは囁し言葉のうちに首尾よく回収されるという仕掛けになっている。論文ひとつひとつが二重になった序に記されて

いる問題設定の論証展開になっているのではなくて、なんでこれが（メディア表象イデオロギー）なのかなと思われる論が、あらかじめ二重の序によって意味づけされているのである。この本を読んだときに私が最初に思い浮かべたのは、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』の次のくだりであった。『東洋全書』のような学術的著作の場合、著者は自分が集めた素材の上に規律Ⅱ訓練的な秩序を課す。おまけに、読者に対しては、印刷された各ページが素材に対する秩序立った、規律Ⅱ訓練にもとづいた判断であることをはっきりさせたがる。こうして『東洋全書』は、オリエンタリズムがもつ力と効果の大きさを伝達し、それによって読者は、以後オリエントに到達するために、オリエンタリストが用意した学術的な格子や暗号のあいだをぐりぬけなくてはならないのだと思ひ込むようになる」（平凡社ライブラリー版上、p.109、一九九三）。サイードが解説するオリエンタリズムの古典である周到な『東洋全書』によって『メディア・表象・イデオロギー』という本を思い出したのでは無論ない。思い出したというのは、この本について、各々の論が集めた素材を印刷された各ページの構成（たとえば各パートの序の部分）によって秩序立った判断であることをあらかじめ宣告し、そのことである方向へ読者を導きそして学術的な意匠を施したグリッドやコードをぐりぬけなければ、またあるいは自らの論で使う必然を提示しえないにもかかわらずそのタムを使わなければ、明治三十年代研究に到達しないのだという思い込みを読者に与えることによってディシプリン規律Ⅱ訓練を課す、というようにこの本につい

て言い換えて思い出したのだ。この本の構成はまさにディシプリンを課すことを志向している。そしてそのことによって（ホモ・アカデミクス）の（イデオロギー装置）を形成しようとしているのだ。この本の執筆者たちは制度を弾劾しながら「印刷された各ページ」にいたるまで読みの制度をつくらうとしている。彼らは、これまでの近代文学研究における無反省的な読みを制度として過剰にまで仮構し、そのことを毎々に名指しすることによって自らを無辜の圈内において自らの上に制度破壊者という名の福音を授ける。そのようにして前意識的で閉鎖的なこれまでの近代文学研究のマニファクチュア的な素朴な世界に、意識的に強固な読みの制度を導入してこの世界を新たな規律Ⅱ訓練ディシプリンによって秩序化しようとし、そのことによってとりわけ若い研究世代に向けてのプロパガンダを実行しているのである。

日高昭二氏は、日文協『日本文学』（一九九七・十二）に寄せたこの本についての簡にして要を得た厳しい書評のなかで「退嬰性」という言葉を使っていたが、私がこの本について感じるのは、深い類廃である。

昨年の『思想』の七月号に掲載の「日本研究と文化研究」と題された対談で、酒井直樹氏を相手に、ハリ・ハルトウーニア氏がカルチュラル・スタディーズのある種の傾向を危惧してこう述べている。「カルチュラル・スタディーズは、非常にしばしば、安易な道をとることがありますね。権力や支配がどのように構築さ

れているかを単に記述するだけということが頻繁にあります。説明されても分節化されてもいない社会システムには、そうした記述だけで十分であるかのように」(p.85)。

この『メディア・表象・イデオロギー』という本が刊行されたのが昨年五月、手にして一読したが、副題の「文化研究」でこの本とカルチュラル・スタディーズを結びつけることはなかった。上記の対談のハルトウーニアン氏の危惧を読んではじめてあれはカルチュラル・スタディーズのつもりかという疑問が湧いた。あまりにもハルトウーニアン氏の危惧をなぞっていたからである。まさかと思っただがあらためて見ると帯に「cultural studies on Meiji 30's」とある。しかし帯のコピーは著者たちが関与するところではないからいまだ半信半疑である。半信半疑はそのままにしてしたがって以下はこの本から離れて(上記三本以外の論についても言いたいことはまだあるが)、いまま少しだけ字数をもちょうことにする。

日本文学研究においてとりわけ近代文学研究の分野でカルチュラル・スタディーズの問題設定がすぐに有効になるのは、いわゆる正典批判である。カノンとルビをふられてこの頃眼にするようになったこの概念は、文学の領域で言えば、たとえば大学の文学の講義で扱われる作品、十年ぐらいのキャリアをつんだ研究者であれば一度はその作成にかかわったことがあるだろう講義用テキストに収録される作品、つまり権威のあるスタンダードな作品の再検討と、そこから排除されたいわゆるマイナーな作品の発見と位置付けである。しかしこのことならそれぞれ細分化された分野のなかではあつ

ても、これまでに多くの研究者が自身の研究や授業で実践していることだ。またフェミニズム理論やテキスト理論を使った、数少ないまともな論文がこのことには貢献している。カルチュラル・スタディーズがおそらく問題にするのは、たとえばこうした正典の権威が形成され再生産されていく諸制度や歴史的文化的経済的社会的コンテキストの考察を重要と考えることだ。だがふつう問題にされない三次資料四次資料を博搜してならべたり図版を掲げたり社会的諸制度を精査したりすればカルチュラル・スタディーズになるというわけではない。というわけは、カルチュラル・スタディーズはたんなる研究の方法ではなく、第二次世界大戦後のとりわけ七〇年代以降の、ほとんど狂暴的に必然であった後期資本主義の産業構造の世界化のもとの文化生産の問題に対する深い危機感と必死の可能性の追求が、その発想の根底にあるからだ。カルチュラル・スタディーズが諸領域の横断的な研究を求めるのも、現代社会の文化生産について考察すれば、商品生産と切っても切り離せない大衆文化の大量生産やそうした大衆文化を尖兵にした先進国の第三世界に対する自由化の名を借りた猛烈な経済侵略にふれないわけにはいかなからだ。十年前なら知らないふりは決めこめた日本のホモ・アカデミクスももう知らないふりはできないところまで状況は進んでいる(たとえば産学官協同を突き進む現在の大学の眼を覆うばかりの類魔は文学部の存立まで危うくしているというようなこと)。このような状況に眼をつぶらずまた生活権の問題としてばかりでなく、これらの状況とこれらの状況に消極的であれ加担してきた自己の間

い直しとを自らの研究上の課題として追求するためのカルチュラル・スタディーズなのである。つまりこれは〈知識人〉の自己責任の検討を根底のひとつにおいているのである。

二年前の『思想』が(一九九六・二)カルチュラル・スタディーズの特集を組んだとき、こうした問題構制をもっともはやく提出した一人であるスチュワート・ホール氏への「あるディアスポラの知識人の形成」というタイトルのインタビューを巻頭においた。氏はジャマイカ生まれでイギリスで高等教育を受けてその地で社会学者になった人である。ディアスポラというのは直訳すれば国外流離とか故郷喪失とかいった意味である。この特集の執筆者はすべてディアスポラの知識人で、パレスチナ、インド、韓国、中国、台湾、フリカ系アメリカ、アジア系アメリカなどの研究者である。ここにカルチュラル・スタディーズのあり方のひとつが端的に現われている。彼らは後期資本主義の産業構造の飽くことのない世界化(グローバル化など)といえは聞こえはいいが)がもたらす移動によって生み出された知識人だからである。植民地と植民地後、先進国の文化侵略とそれと手を携えた経済侵略、そこから生み出された移動する民が直面する言葉文化宗教民族などの領域でのアイデンティティの問題、それらが彼らをして、ブルデューが従来の階級という概念の組み替えを行わなければならないなかつた限りなく拡散化する現代において、普遍的人間の追求のためのもつとも本質的な課題を創出させてきたのである。

ところでディアスポラの知識人は単一民族国家の(想像の共同

体)を生きている日本にはあまりいいのではないかと思うのは間違いない。ディアスポラというのは(在日)のことである。かくいう私も、知識人という語を斜線で抹消するか嚴重な括弧を施せばそれになる。私は在日中国人二世という日本社会におけるマイノリティだからである。マイノリティのわりには大きい顔をしていると思われる向きもあるかもしれないが、私が狭い職業集団で大きい顔をしているように見える、かもしれないこと、私が日本社会から陰に陽に受けているマイノリティとしての扱いとは別のことである(たとえば父が植民地の台湾から東京の高等学校に入るために(内地)に渡った年から数えれば、日本在留四分の三世紀になりその間納税の義務を果たしてきた私たち家族に日本国は公民権を与えない、たんに選挙権や被選挙権がないだけではなく基本的人権も保障されない、私が外国人登録済証明書の提示を当局から求められてもし携帯していなかつたら検束されても文句を言えない、などなど)。しかしディアスポラ(在日)だからといって私はどうしてカルチュラル・スタディーズを標榜する勇氣はない。『思想』の特集号を読んでも、彼らディアスポラの知識人がいかにこの困難な世界の状況にヴィヴィッドにアクチュアルに関与しているかを思い、そしてそうした精神が描いたこの世界のヴィヴィッドでアクチュアルな困難な状況を讀むと、生きた心地がしないからである。祖国中国や父祖の地台湾ばかりでなく根こそぎの経済侵略にさらされている東南アジアの国々への旅行に誘われても、無理な近代化の傷跡を見るのが怖さに応じたためしのない弱い精神でどうしてカルチュラル・スタ

ディーズを標榜できようか。私ができることは、たとえ千か二千の読者のこのような学会誌であっても自分の文章を活字にできるというところが権力であること、そのことを忘れずにささやかでも研究者としての自己責任を検討し続けていくことだけである。

結論はなんと月並みにも、まじめに謙虚に勉強しようという決意の表明になってしまった。

「人と作品」という枠

—— 大江健三郎をめぐる近年の研究書から ——

島村輝

一九九七年は伊丹十三監督の自殺の報で暮れ、九八年は安江良介氏の死去のニュースで明けた。この出来事が小説家としては断筆中の大江健三郎にどのように受けとめられたかは、いまのところ新聞に発表された短い文章（安江良介氏の死におもう『朝日』98・1・8）を除いて推し量るすべもないが、二年ほど前になる武満徹氏の死去の際に大江の示した、友人の死をうけての作家としての新たな展開への決意ともいべきものから察すると、常にその歩みの間近にいた二人の相次ぐ死が、なんらかのかたちでこの作家の文学的営為の将来に影響を与えずにはおかぬであろうことは推測される。

あるいは「大江の熱心な読者ならばそのような見方をするだろう」という方向性の下に、彼の作品世界はかたちづくられてきたといういいかたもできるかもしれない。八〇年代に入ってからの、私小説的・自伝的とされる要素の強い作品はいうまでもなく、デ

ビュー以来断筆にいたるまでの作家「大江健三郎」という（物語）の内にあつては、その作家的な歩み（それはかならずしも作家の「実生活」ではないし、伝記的な「事実」でもない）と、彼が描き出す世界とが、地続きとしてとらえられ、ひとつの枠を成してきたということである。そして大江健三郎を語る際に、それがまさしく安定した準拠枠として機能してきたという側面を持つことは否定できまい。

彼自身が「締めくくりの小説」と呼ぶ『燃えあがる緑の木』三部作を書き上げて断筆の時期に入って以降も、大江は文明批評的な文章を発表しつづけており、その意味では彼の文学的生涯は完結しているわけではない。そうした作家に向かう場合、時代を隔て、その文学的営みが完結した状態に置かれている物故作家の場合とは違つたアプローチが求められる。ひとことではいえばそれは論者の側の批

評的なスタンスということになるわけだが、大江のような文明批評意識・方法意識が強い作家についてはそれがより一層求められるのは自明なことだろう。しかしここで少々困難な問題が生じてくる。それは研究のスタイルで大江に言及しようとする場合、どこまで、またどのようにこの論者の側の批評的なスタンスを表面化することができるのかという点である。

「批評」意識の強さのあまり、作品についての分析や理解を欠き、根拠のない感想や印象批評を羅列するようなやり方は、研究としての説得力がなく、この方法的な作家を批評するスタイルとして貧しい。それは論の対象とされる大江健三郎自身によっても厳しく否定されている。一方「研究」の安定した準拠枠の中で、作品の構造分析や相互関係、伝記的事実の作品への反映といったことのみに関わって立てられた論は、こうした枠の中にとらえきれぬ多様な過剰を抱え込んだ、大江の作品世界のスケールに、批評的なスタンスをもってよく拮抗しえず、読みごたえのないものにおわってしまう。研究と批評とがいやおうなしに接近せざるをえないこうした局面を個々の論者がどのようにのりきり、自らの言説のスタイルをたてているのかということは、大江健三郎についての研究を展望する際の重要な目安となる。

九四年のノーベル賞受賞以降、お手軽にでっかあげられた大江健三郎「入門」書や、学内的内実を抜きにした政治的論難（あるいは個人攻撃）に終始する書物も少なからず刊行されたが、ここでは日本近代文学研究の現状を視野にいれた立場でまとめられた本をとり

あげて、この問題にそれぞれの論者がいかなる解決を見いだしているかをみていくことにしたい。

榎本正樹『大江健三郎の八〇年代』は、同著者の前著『大江健三郎——八〇年代のテーマとモチーフ』（八九年 審美社）をもとに、学位（博士）請求論文への書換えを経て、さらに加筆をおこなってまとめられたものである。

前著が刊行されたおり、筆者（島村）は機会をえて同書の書評を行った（『日本近代文学』第41集 89・10）。一九七八年の『小説の手法』刊行以来大江が積極的に行っていた文学上の方法論的言及を十分に消化し、その方法論の具体的適用として八〇年代の個々の作品分析に丁寧にとりくんでいく榎本氏のやり方は、それまでの大江健三郎研究の取り扱ってきた対象や方法論を広げる上で、非常に積極的な意味を持つものだった。その際筆者は、その点を評価すると同時に、そうした丁寧な読解を前提として踏まえて、さらにそこから先に踏み出すこと、〈自作への注釈として語られた方法論の意味付けを越えようとする、評者の側の創造的な読み解き、あるいは創造的な対決〉を求めたのでもあった。

今回改めて刊行された『大江健三郎の八〇年代』の全体としての構成は、右に述べたような経緯を踏まえてということで、本編の五つの章でとりあげられている作品（『雨の木』を聴く女たち』『新しい人よ眼ざめよ』『河馬に噛まれる』『M/Tと森のフシギの物語』『懐かしい年への手紙』）は前書を踏襲している。それに序章として「大江健三郎の（現在）——八〇年代から九〇年代へ」という短い導入部がっ

けられたという体裁である。このように書物としての骨格・構成は前書を踏まえたものではあるが、その論じ方は前書とは面目を一新したものといっていいたいと思う。率直に言って、この本を読みながら筆者が前書について述べたコメントが正当なものであったのかどうか、改めて見直しを行ったくらいである。

方法論の消化とその適用による作品の丁寧な分析という点からすれば、本書はまさしく前書を引き継いだその発展形である。作品に即しての論理的な読みの展開を追っていくだけなら、論旨の大変更は加えられていない。それはすでに前書の段階から、榎本氏の分析が正確で有効性を持ったものだったことを証してもいる。では今回刊行のバージョンでもっとも変わったという印象を持ったのはどこかといえば、それは作品の方法論的整理を行った後に榎本氏によってつけ加えられた、コメントの濃密さである。個々の箇所をみれば、それは全体の論旨を乱さぬ程度に控えめに付されているといってもいいかもしれない。しかし注意してそのコメントの付された部分を追っていくと、おそらくパラグラフごとといっても過言ではないほどに、今回の書では榎本氏の批評のことばを感得することができる。その積み重ねが、前書とはおよそ異なった、ある濃密さを感じさせる本書の印象をもたらしているのだ。

一例として、第2章『新しい人よ眼ざめよ』論の中の「主題としての死と再生」の節の結論部分を挙げてみよう。ブレイクの思想の影響の下に、個人の死を超越した領域に世界の新しい再生と個の魂を解放するトポスとしての大樹のヴィジョンを見ること。おなじこ

のテーマをあつかった節の結論は、前書では「積極的に魂そのものと向かいあおうとする姿勢」と、一般論的にごくあっさり片づけられてしまっていたものが、本書にあつては「科学至上主義の錯誤」の象徴ともいえる同時代の核状況への関心と批判的まなざし（ブレイクのメタ・レベルでの評伝（現実世界に生きるわれわれに向けての励ましに満ちたメッセージ）（個の再生への思いを時代の再生の可能性につないでいく大江の果敢な想像力）」といった、みようによつてはけつしてスマートではなく、過剰とも思えるほど濃密に重ねられたことばで意味づけられている。

そうしたことばの積み重ねが、単にレトリックの上だけではなく、多様な認識上の進展をもたらしたことは、たとえば『新しい人よ眼ざめよ』や『M/Tと森のフシギの物語』の、多声的な記述の模態を「音楽的」という非常に明確なとらえ方で示している点ひとつをとつても明白である。筆者が前書の書評で指摘した個別の論にかかわる問題点も、本書では十分に補われているという印象をうけた。著者自身も、「言いたいこと、言うべきことを言い切った」という思いを持っているのではないかと思う。

前書で未消化なまま残された部分を七年という時間をかけて熟成し、再提出された本書は、おそらく八〇年代の大江の仕事を概括する若い世代の読解の達成として、一つのスタンダードになりうるものと評価できる。

本書の問題点を挙げるとすれば、前書の構成を踏まえてのものである以上無理もないことながら、論の対象が「八〇年代」に限定さ

れて、『懐かしい年への手紙』論をまとめとして完結してしまうような構成になっていることだろう。『人生の親戚』や『燃えあがる緑の木』三部作についてのコメントがまことに僅かばかりにとどめおかれているという点が、現時点の大江健三郎論としては物足りなしいといえる。八〇年代からの発展の道筋として『懐かしい年への手紙』を出発点に後の二作品とからめて論じる見方も成り立ちうるわけであり、榎本氏の論の立て方からしても、そうした展開を踏まえた「後期大江健三郎の世界」ともいうべきものの構想が期待されるころである。

一口に大江健三郎論といっても、その文学的営為の全てを対象にして論をたてるのは容易なことではない。大江自身の作品に向かう方法論も、六〇年代のデビュー当初から小説家としては断筆中の現在にいたるまで、多様な変貌を遂げてきたわけであり、それらを結んで総合的に大江健三郎論を展開するには、非常に粘り強い思考力と紙数とを要すると思われる。おそらくそうした総合的な作家論を構築するには、未だ期が熟していないということもいえるかもしれない。榎本氏の場合には八〇年代の仕事に焦点を絞り、そこからそれ以前の作品世界へ測鉛を下ろすことによつて、ある時期までの作家・大江健三郎像をトータルに示そうとしたわけだが、その他の論者にあつても、作家としての大江の全体像は「人と作品」といった構図の中での概括的な展望に止め、実際の作品の詳細な分析に基づく議論としては、時期を絞った少数の作品を扱うという例が多い。

一條孝夫『大江健三郎——その文学世界と背景——』も、そのよ

うな構成のもとにまとめられた書物である。一條氏にはすでに『大江健三郎の世界』（八五年、和泉書院）という著書があるが、それより十年あまりを経ての増補改訂版としての意味を持つ。

第一部は「大江健三郎の人と作品」として、評伝的な方法により、この作家の各時期の文学的活動のほらむ問題点について、要領を得た整理が示されている。それは各節のタイトルにもりこまれているように、〈想像力〉であり〈方法〉であり〈性〉であり〈周縁〉である。ところで、六十ページほどの第一部の中に提示され、大江の文学的活動の展開の中に整理されて並べられているこれらのキー・コンセプトは、たしかにそれぞれの時期の大江の仕事の特徴づけるものではあるが、「入門書」としての導入部であるというものを割り引いたとしても、やはり食い足りなさを感じるの否めない。それは記述の分量とか、整理のしかたとかといったことはやや違つたレベルの、こうした評伝的な方法そのものが持つている問題点ということではないかと思う。

例えば、一九五〇年、大江が高等学校に進学する年に起こつた共產黨員の公職追放や朝鮮動乱、警察予備隊の発足などについて、著者が（大江はこれらの報に接するたびに、暗い衝撃と屈辱感を味わっている。この屈辱感がやがて体制に対する批判的な態度を培つていったとしても不思議はない。この時期の、恐怖と不安の経験は、中編の『不満足』（昭37）においてふりかえられることになる）（8ページ）と記すとき、読み手の側としてはその記述の中に、どうしても幾つかの疑問符を留保せざるをえないのである。はたして大江

は（暗い衝撃と屈辱感を味わつ）たのか？それが（体制に対する批判的な態度を培つ）たのか？『不満足』はその（恐怖と不安の経験）を（ふりかえ）つた小説なのか？といった具合に。

もちろん個々の記述について、著者の側からはそれを裏付ける資料の提示もなされうるだろう。だが多くの場合、それすらも作家・大江健三郎の自己申告を引用するというかたちになるのではないか？という疑問を引き起こす。また、このようにして「人」を軸に「作品」の世界を読み解こうとするなら、それを統合する「人」における統一的な方法意識が要請されることになるわけだが、はたしてそういう統一的な方法意識をたてるのが妥当なのかどうかもまた、検討を要することである。

一條氏によれば、『燃えあがる緑の木』において（大江がダンテの『神曲』やアウグスチヌスの『告白』に導かれ、繰り返し描いた「心」の主題は、〈死と再生〉のシンボリズムを内在させた、文化人類学などでいうイニシエーションに他ならない。小説とはひつきょうイニシエーションの物語だ、というのが大江の出発期以来の基本的な小説観である）（55ページ）とされているが、このように単純化された見取り図を示されると、それが必ずしも外的ではないにせよ、その単純化からあまりにも多くの豊かな文学的要素が取り落とされることにしばしば茫然としてしまう。

これは著者個人に帰せられる問題というよりは、「人と作品」というスタイルをとつた場合に避けることのできない、方法的な隘路であるように思われる。おなじイニシエーションをいうにしても、

第二部の「自己変革の表象——『鳥』から『個人的な体験』まで」などを読むと、『不満足』を媒介に『鳥』から『個人的な体験』までをつないでいく論者の手際には、それなりに納得させられるものがある。それは個別の記述にしたがって、イニシエーションという大きなコンセプトにつながる論者自身の回路を見だし、関連づけているからにはかならない。その意味でいえば、第二部「初期作品の構造」、第三部「大江文学の背景」に盛り込まれた諸論は、限定された時期の大江テクストの読解を裏付けに持った議論を展開しているといつてよい。なお、第三部の末尾におかれた「大江健三郎における子規」は、テクスト分析を基礎とする他の論とは異なり、郷里の先輩文学者としての正岡子規像が、大江によってどのように構築されてきたかを明らかにする考証的な論考であり、全体として異色ある興味深い論となっている（島村輝編『日本文学研究論文集』45『大江健三郎』に収録。若草書房より近刊の予定）。

大江といえば誰でも思い浮かべる、あの特徴ある黒縁の丸眼鏡をカバーにあしらった『大江健三郎論』の著者・乗原丈和には、すでに『大江健三郎とは誰か——鼎談：人・作品・イメージ』（鷲田小彌木・中澤千磨夫との共著 九五年 三一書房）という、座談を中心にしたこの作家に関する著書がある。前書は「あとがき」の記述からすると、大江のノーベル賞受賞をきっかけに忽卒のうちにまとめられたものだということだが、乗原氏はそれ以前から大江の作品についての論を発表しており、若い世代の立場から、随所にキレの良い議論を展開していた。

本書は右に述べた大江の作品にかんする発表済の論考をとりこみつつ、未発表の原稿や、さらにこの本のために書き下ろされた部分を加えて構成されている。既発表の論文を軸に形作られているのは第三部にあたると。収録されている論のうち筆者がもつとも心をひかれたのは「蜜三郎の言葉と眼」と題された『万延元年のフットボール』についての論である。これについては別に解説と批評をする機会があった（前記『日本文学研究論文集成』45『大江健三郎』に収録）のでここでは触れないが、たとえば同じバートの「個人的な体験」論も、「蜜三郎の言葉と眼」とおそらくはパラレルなアプローチの仕方によって書かれたものといっていだろ。

ここで論者は従来の論考が、「鳥」のエゴイスタックな面や「決断」の論理性の無さといったことをまったく無視するかたちで進められてきたことへの異議申し立てを中心にあえて、「他人には共有されず、一般化出来ない一回限りのまさに「個人的な体験」を追っているのであり、青年は「自分自身にこだわり」続けていくしかない。何度も繰り返すことになるが彼に出来るのは自分として一度だけ生きることである（206ページ）と結論づけ、作中のことばにしたがって（ヒューマニズム）を読み取るうとする従来の説を批判している。これらの個別論では、手堅い分析に支えられて、独自の結論まで導いていく筋道が説得的に展開されているといえる。

問題は、論者自身がこうした個別論としてそれなりの「読み」を示しつつ、その延長上に大江健三郎の「人と作品」といった構図にたどりつくという大江健三郎論構築の枠組みに、情熱や興味を持ち

つづけたのだろうかということにあるだろう。すでに前書の冒頭で、乗原氏は（彼のイメージとしては、固定されたものができ上がっていて、しかもそれがほとんど、本人が言ったことをそのまま受け入れるという形になっている）と指摘していたし、本書でも（日本文学研究の研究雑誌に掲載されるものは、本章の冒頭で述べた通り、大江健三郎自身の発言を後追いつるか、それまでに文芸雑誌に掲載された批評を受けてそれをいくらか緻密にしただけというものが多）（本書も、およそ批評的機能を果たしたとは言えない最近の批評を、どこまで批評できているだろうか）（16ページ）と自身疑問を呈してもいる。ひとり乗原氏のみならず、研究のスタイルで大江健三郎に関わろうとする者にとつて、この悩みは仕事上の大きな障害要因にちがいない。

この難題に対して、著者は大江作品の外側に、戦後文学・私小説・「日本」文学・方法批判といった迂回路を設定することによって乗り切ろうとする。これらについてここで詳細に論じることはないが、結論としてそうした策が十分に功を奏しているとはいえないだろうと思う。少なくとも、こうした迂回路から、これまでの「人と作品」という枠内で作り上げられてきた大江健三郎論を相対化するほどの『大江健三郎論』が立ち現れているという印象は受けなかつた。おそらく乗原氏自身、そうした点には気づいているであろうし、そこから第一部や「あとがき」にみられるある種のふっきれない思いも滲んでいるのではないだろうか。

以上近年刊行された研究書三冊を取り上げてきたが、大江自身が

仕掛けた読み手への陥穽ともいえる「人と作品」の枠を超え、根拠薄弱な「批評」でもなく意志薄弱な「研究」でもないようなトータルな大江健三郎論が構築されるには、どうやらなおいま暫くの熟成の時間が必要なようである。

榎本正樹『大江健三郎の八〇年代』（一九九五年二月二〇日 彩流社 A5版 三〇一頁 定価二五〇〇円）

一條孝夫『大江健三郎——その文学世界と背景——』（一九九七年二月一〇日 和泉書院 A5版 二八六頁 定価二八八四円）

栗原丈和『大江健三郎論』（一九九七年四月三〇日 三一書房 A5版 二五八頁 本体二六〇〇円＋税）

（追記） なお、ここ十年ほどの大江健三郎についての批評・研究の水準を示すものとして前記『日本文学研究論文集』45『大江健三郎』を参照されたい。

歴史的把握の試み

——「児童文学」の多様性と総合性——

佐藤宗子

今回の書評を書くにあたっては、どのような範囲からとりあげるべき論を選ぶか、とまどわざるを得なかった。依頼されたテーマは「宮沢賢治以外の児童文学一般」ということだったが、このなかの「児童文学」を、「現在の児童文学批評の中で一応みわたす諸分野」と理解して、はたしてよいものかどうか。

たとえば、『日本児童文学』一九九七年五・六月号を開いてみる。この号は「子どもの文字この一年」が特集として生まれ、前年にあたる九六年の回顧が創作・翻訳等各領域ごとになされているが、「評論・研究」の項を担当した土居安子は、たまたま賢治生誕百年にあたったためその関連書を特記したあと、次の順で該当する書名等をあげていく——日本児童文学史に関わるもの、作家研究、詩・童謡に関するもの、子どもの文化関係、海外児童文学研究、マンガ関係（「賢治ブームと子どもの現実の中で」）。このように、「児童文学」とはいいつつ、実際には「児童文化」をも視野にいれることが

当然、というのが最近の認識である。日本児童文学学会の研究大会における発表も、三十本を越す総数のうち、相当数が、「児童文化」的視点によるものといつてよい。さて、と考えこむ。近代文学研究の雑誌が対象とする「児童文学」は、どこまでか。

結局、多少の逸脱を承知の上で、自身の関心により、五点の書物を取りあげることに決めた。いずれも、歴史的把握を試みた論と呼べるだろう。まずは扱う順に書名等を列記し、以下、一点ずつふれていく。

末松水海子著『フランス児童文学への招待』（西村書店、一九九七年四月二〇日）

仲村修編訳『韓国・朝鮮児童文学評論集』（明石書店、一九九七年三月一日）

三宅興子編著『日本における子ども絵本成立史——「子どものとも」が果たした役割——』（ミネルヴァ書房、一九九七年三月二〇日）

日本児童文学学会編『児童文学の思想史・社会史』（研究Ⅱ日本の児童文

学 第二卷（東京書籍、一九九七年四月二日）
 宮川健郎著『現代児童文学の語るもの』（日本放送出版協会、一九九六年九月二〇日）

* * *

末松水海子『フランス児童文学への招待』は、題名からも察せられる通り、フランス児童文学の歴史の流れをまとめた書である。他国の児童文学通史を、なぜとりあげるのか、といえば、こうした書こそ日本の児童文学研究のいわば鏡となりうる、と考えるからである。一つには、日本で知られるフランス児童文学の作家・作品が、本国の文学史の中でどのような意味を担う存在であるかを知ることにより、日本における受容の特質に気づかされもしよう。（逆に、本国で人気を博したり、高い評価を得ている作家・作品であるにもかかわらず日本ではなぜ受け入れられにくいか、という場合もあるだろうが。）一つには、文学史上の転換点を知り、その状況をつかむことで、日本の児童文学史を構想する上での刺激や手がかりといったものを得ることができよう。さらに、どのような範囲で「児童文学」が捉えられているかも、興味深い問題提起となりうるかもしれない。

第一の点についていえば、編集者エツツエルをめぐる作家たちの一人としてヴェルヌがあげられていることなどは、従来も知られていなかったわけではないが、やはり、十九世紀後半のフランスにおける一種の児童文学運動と関連させてみる必要性をあらためて教えられた気がする。また、小見出し一つ分ほどの大きさでしか扱われ

ていないにも関わらず、そして末松自身実は「児童文学」にくみ入れることへの疑義も提出しているのに、第六章の題が『星の王子さま』の「悲しみ」とされている点は、日本でフランス児童文学関係の本を出すのにサンレテグジュペリのこの作品を目立たせないわけにはいかないといった出版事情をうかがわせもする。

第二点に関しては、ドニーズ・エスカルピの説に影響を受けたという著者が文学史の重要な節目とする年を、十九世紀後半以降についてのみあげてみる。一八八一年、一九三一年、一九四六年、一九六八年の四つである。これはそれぞれ、初等教育法（いわゆるフェリー法）制定、『ぞうのババル』（作者ジャン・ド・ブリュノフ）と「カストール絵本」叢書の誕生、第二次世界大戦後の戦争やレジスタンスの影響が色濃くあらわれた発展の時期、そして五月危機がもたらした大人―子ども関係の変化や絵本革命の年、ないし時期にあたるという。ここからは、社会の変化が児童文学の状況を動かすことがあると同時に、作家や編集者の新たな試みも十分にそうした転回の原動力たりうるといった考え方を読みとることができるだろう。

第三点については、「はしがき」でも「いわゆる文学だけでなくマンガや雑誌にも視点を広げ、他のメディアとの関係にも駆け足で触れ」と記されている。末松はもともと日本でも留学先の大学でも新聞学科（学部）に学び児童雑誌を研究テーマに選んでいるだけに、こうした広い視点から状況を概括するにはうってつけの人物である。翻って、前述のごとく日本では関連諸分野を拒絶することな

くむしろ相応の関心を抱く研究者は少なくないものの、文学を中心に子どもの本をいかに把握しうるか、といった大きなテーマについて議されることもまずない。あるいは、マンガ等の分野が広がりすぎていくという特異な事情があるためかもしれない。ともあれ、このようにさまざまな面をうつつ鏡たりうる書である。

仲村修編訳『韓国・朝鮮児童文学評論集』も、ある種、末松の著書と似た役割を果たす。ただし、こちらは仲村自身のことばによってではない。第二次大戦前の朝鮮と大戦後の韓国の、作家・詩人・研究者らのことばによってである。

「まえがき」で仲村は、「全編をとおして日本との関連に配慮して構成」したとことわるとともに、日本の植民地支配のもとで「個々の作家の文学観のうえにも、また文学全体のうえにも、「日本」ないし「日本文学」の影響が色濃く影をとどめている」といった指摘もしている。「I部 評論——解放前」（十一本）、「II部 評論——解放後」（十四本）の論を読んでいくと、確かに、日本児童文学の関連する論やエッセイが次々に思いあわされてくる。興味深いのは、たとえば彼の地における児童文学の先駆者方定煥の主張に、日本の先駆者巖谷小波と、同時代に活躍している小川未明の、両方の影をみることができると点である。そういえば、一九八〇年代後半から日本との交流が盛んになった中国で、日本で一九六〇年前後の現代児童文学出版期に唱えられたことと、八〇年代の状況の中で語られるようになったことが、やはりないまぜとなり評論の中にあらわれていたなどと、乏しい知識をもとに連想が働く。私自身はす

べて翻訳を介して接しているのみで、これ以上確たることは言えないが、児童文学理念の伝播や発展を、より広い視野から見っていく手がかりがここにはあるように思う。

基本的に編年順に並べられた論は、順に読んでいくことで、用語や人物、状況が次第に理解の度を深めるように選択、構成されており、編者の苦心のほどがしのばれる。「童心主義」が、日本国内よりも純化したかたちで受けとめられていることや、少年詩・童謡が大正期の高揚から比べれば衰退していった感が否めない日本に対し、第二次大戦後も詩が確固たる位置を保っているように見受けられる点などは、散文の創作の推移とからめ、日本児童文学の研究者にとつても追究したいテーマだろう。この点は、朝鮮・韓国の創作と詩の関係についての仲村自身の論を、ぜひ提示してもらいたいものである。（この「創作」というのは短編・長編を問わず散文で書かれたフィクションの類を総括する児童文学の世界での言い方だが、それ自体、「童話」という用語をめぐる現代児童文学出版以来のあらゆる意志が働きつつつけている、とみなせようか。）

作品の翻訳等と参照しながら読むというわけにいかないのが残念だが、途中に具体的に詩を引用しつつ論じた李五徳「詩精神と遊戯精神」はさすがに論点をつかみやすいし、リアリズムとリアリティーをめぐる六〇年代の日本の批評群があったことを想起させる。III部の尹石重、馬海松、李元寿らによる二三本のエッセイ、IV部の児童文化運動・児童雑誌に関する十六本、それに「囲み記事」「資料」から索引まで、なるべく多くの情報を提供しようとする姿勢が

貫かれており、日本の児童文学を特にその批評の面で通観しようとする人間にとつてまことに興味深い書であるし、これを生かした研究——必ずしも論文というかたちでなくとも、議論の場をつくることでもよい——の進展をはかるよう努めねばなるまい。

仲村の本は朝鮮・韓国において「児童文学」が運動であったことや子ども読者に手渡す「媒介者」の役割の重要性を強く感じさせるが、第二次大戦後の日本で「絵本」の創造と普及がやはり運動であったことを実証しているのが、『日本における子ども絵本成立史』である。これは副題に名があがっている福音館書店刊行の月刊予約絵本『こどものとも』を、一九五六年四月の創刊号から発行順に四〇〇号までを検討していくという研究会の論議を経て、編者の三宅興子を含め七名の研究者——児童文学や、保育・幼児教育を専門とする——が分担執筆したものである。『子供之友』、『コドモノクニ』、『キンダーブック』についてはすでに中村悦子『幼年絵雑誌の世界』（高文堂出版社、一九八九）が扱っており、それをふまえると、本書の序章、第1章の『こどものとも』発刊に至るまでの絵本事情がよりわかりやすいだろう。というのも、第3章以下さいごの第7章まで、『こどものとも』の概要紹介、附録の役割、主要な『こどものとも』執筆の絵本作家論、外国絵本の影響、家庭文庫と幼稚園における同誌受容例の紹介、そして同誌の歴史的意義といった内容で、むしろ副題が本来の題名として適切であったと思われるためである。出版に際しての題名選択には事情があったろうが、絵本関係の通史は得難いだけに、この題名はより総合的な歴史の概観を予想

させてしまふ。そうした読者の誤まった期待に執筆者たちが今後こたえてくれることを、とりあえずは望んでおこう。

とはいえ、『こどものとも』の軌跡を丹念に追うことが絵本というものの性質、特徴をさまざまな角度から検討するに最適の方法の一つであったこともまちがいない。前述の章立て説明からもわかるように、文学的な、また美術的な評価の観点、出版や流通の事情から派生する形式・形態の選択、子ども読者が享受する場のつくられ方といったことが、三十年を越える雑誌刊行の蓄積を対象とするなかで、一応どれもまんべんなく、論じられたのだから。なかでは美術的側面からの検討が手薄との印象をもつが、これは執筆者たちのもともとの専門領域を考えれば無理からぬこととも言える。造形美術の側からの絵本論としては中川素子『絵本はアート』（教育出版センター、一九九二）が刊行時に話題をよんだ。また最近では、平和運動や環境保護運動の即効力あるメッセージ伝達的手段として、読者の対象年齢をより広げるかたちで「絵本」という媒体が利用される例もまま見られる。執筆者たちが「子ども絵本」という用語を使う背景、その概念や定義などを、自分たちが用いた分析方法にひきつけて、もう少し語ってけると、一般の読者にも現在の状況がさらにのみこみやすかつたのではないか。

本書を読みながらもっとも強く気になったのは、作り手の側に密着した足跡検証の部分が多く、その結果、作り手が理想として掲げる、親や保育者が「媒介者」として絵本の普及を果たし、彼らが多くの場合読み聞かせの方法をとって子ども読者に作品を伝達し、あ

る一定の等質的な受容の達成がはかられる、といった図式を基本的に無前提で認めているようにとれる点である。即ち、ここでは、子ども読者の多様な読みの差異や、ひとりで読んだり黙読したりする子ども読者の読みの可能性に対する配慮がほとんどみられない。観察や調査ですくいとられやすい多数の読者の傾向のみならず、その中の微妙な違いやとりこぼされた少数の読者の実態を、どうすれば拾いあげることができるのか。比較的少数の、しかしながら熱心な読者に支持される作品が論評されることの多い高学年向創作——それが児童文学批評での主対象ともいえるだろう——とは別の児童文学の流れをある程度つかんでみせてくれた意義を認めつつ、それらの流れを合流させうる方法をさらに考えたいものである。

次にあげる『児童文学の思想史・社会史』については、若干のこじわりをしておかねばなるまい。全六巻からなるこの研究叢書の、編集委員八名のうちに、実は私もはいつている。ただし、この巻には、私は執筆していない。本稿で何をとりあげるべきかと思案したときに、真っ先に頭にうかんだのが、この本である。叢書全体も、そして巻の構成内容も、研究の状況にふれる格好の材料であり、収録されている論の優劣を云々するといったことは控えるが、本稿の趣旨に照らして少しばかり説明をしておきたい。

この叢書の企画は一九八〇年代後半に発端がある。その後、構成を練りあげるにも相当の時間を要したし、執筆者確定にも、さらに刊行までこぎつけるにも、なかなか苦労が多い（一九九七年末で刊行継続中）。一つには、叢書全体の惹句に「児童文学」の認識が

様々なかたちでゆらいている今、あらためて、児童文学の歴史と現在を新しい視点で問い直す」とあるが、児童文学の内外を見渡すなかでどのように「ゆらぎ」を把握しうるかといった困難が存在するためであり、一つにはとりあえずこれまで児童文学研究の中で培われてきた方法が、こうした問い直しに有効に働くかどうか懸念を生じさせるためである。

本巻は題名にも示される通り、「思想史・社会史」の観点から日本の児童文学の流れを見直す作業が、総論と各論あわせて十二本の論考の中でなされている。いくつか特徴をあげてみると、一般社会の思想状況と「子ども」観の問題を重ねる試みを教育学や社会学の研究者の協力も仰いで行われたことが第一点となろうか（河原和枝「〈子供〉の発見と児童文学」、長谷川潮「ナシヨナリズムと児童文学」、横須賀薫「童心主義と児童文学」など）。

第二点としては、口演童話や生活綴方など、今日の児童文学の定義からははずれるような、しかし歴史的にみれば切り離せないジャンルに照明をあて直したことがあげられる（上地ちづ子「口演童話の方法と思想」、亀村五郎「生活綴方の略史と児童文学」）。

また、「ファクションとしての児童文学」（川島誠）は、現代社会のなかで「児童文学」が外側からどのようなまなざしを注がれるかという追究の端緒となる切り口である。どのような批評のことばによってそれが可能となるか、という点も、あわせて考えていくべき課題となろう。

「二十世紀児童文学の諸相」（石澤小枝子）は実に大きな論題で

はあるが、海外の児童文学の動向と日本のそれを切り離すことなく縦横に視線をはしらせる努力はやはり続けていくべきであろう。一世代前に比べ、海外児童文学の研究者と日本児童文学の研究者の交流も、互いの分野への関心も減っているらしい。それは結局は、児童文学研究全体の共通基盤を崩すことにつながるのではないか。

『日本児童文学』一九九五年十二月号が「検証・戦後児童文学の50年」を特集として組んだとき、神宮輝夫は「外国文学への関心」と題した論の中で、次のような興味深い指摘をした。即ち、二十世紀前半は「Fantasy」の時代」、後半は「基本的には、mimesis」の時代」だったのではないか。「世界の子どもの文学は、だから、「ユートピア幻想」と「現実凝視」の交替パターンで動いているのではないか」、さらに「翻訳文学と自国の文学を考えると、こうしたパターンを念頭においてながめてみることも必要」というのである。神宮の発言は児童文学の内に限ったものでありながら、広い視野の下になされたことが窺える。こうした概括の試行錯誤が、子どもの文化と関わらせたり、一般の文学なども関わらせたりしてはじめてゆききつかけに本書がなりうることを願っている。

最後にとりあげるのは、刊行から少し日がたっているが、一般向の手軽な教養書の体裁をとる評論書としては久々のものとなる、『現代児童文学の語るもの』である。既にいくつかの紙誌に評が掲載されており、私自身も書評を書いている（『立教大学日本文学』七八号掲載、一九九七）。そのため、重複と詳述は避け、児童文学者の中から出た一つの批判に触れつつ、意見を述べることにする。

『日本児童文学』一九九七年十一月・十二月号（特集Ⅱ今、子どもに何を語るか）のインタビュー「古田足日氏に聞く」（聞き手Ⅱ佐藤宗子）で古田は、第二次大戦後の児童文学の流れや時代区分について社会と関連させる見方を示したあと、「宮川君の本の中では、そういう政治・経済・教育など、ほとんど出てこない」ことや「何か自家中毒を起こしたような、児童文学自身が分解していこうとするようなかたちにとれてしまう」ことに不満の意を示す。先の学会編の叢書刊行の趣旨などを考えあわせれば、古田の言もつもどではない。だが、宮川はあえて児童文学に限った論の提示を意図したのではないか。児童文学が「運動」としての側面を強く持ちながら普及したせいもあってか、これに関わる大人―媒介者のなかには、表面的なテーマ等で作品の良否を決めるといった風潮も残存している。それを排し、作品群を流れとして仮想するところから出発すること自体は、一つの方法として認められてよいだろう。

問題はむしろ、もともと単発の短い論——それも、何か象徴的な語や観念を端的に示し、それを中心に転回させるという手法——をつないで書き直した点に、方法の限界があったのではないか。戦後五十年の流れを、時代としてどこかが欠落しているといった感じを持たせることなく、また近代へと遡って思考を発展させたり海外の動向とも対照させて広げていくことができるように把握する、長い論は、いかに構築しうるのか。

ここで取り扱った本に限らず、単行本で出る研究書も、単著、共著を問わず、論文集が多い。もちろんそれは、児童文学だけに限っ

たことではないだろう。出版上の事情が種々あろうことは承知している。一方、編纂物や共著ならではの研究的な試みが存することもわかっている。それでも、扱う対象による分析方法の差異などにとどまらず、論の長短による研究方法についても、模索し議論をかわす余地が十分あるように思う。

個別のテーマに関する研究が、それこそ古田の言にある「自家中毒」を起こしかねないほどに多様化、細分化の様相をみせている。今、ここにあげたような書類の総合化の努力を認め、その意義を明確にすることが、児童文学研究の現況を活性化する一助となればと考える次第である。

高田知波 著

『樋口一葉論への射程』

峯 村 至津子

本書は、一葉後期の作品を論じた七つの

論考が並ぶ第一部と、『浮雲』『金色夜叉』『不如帰』についての三論考からなる第二部とによって構成されている。

第一部の『たけくらべ』『この子』『われから』についての諸論、及びⅡ部の三論文は、多くの同時代文献の調査に基づく〈時代の性格〉の考証を通して得られた視角からの作品の読み、という方法を特に全面に押し出しており、発表当時にそれを取り巻いていた時代のあり方と対峙する、文学作品の様々な模索のあたりを追究する中で、一葉文学の一面を照射しようとしている。一葉研究に於ては、時代の背景を手繰り寄せ

の意義は大きい。

Ⅰ部では他に『大つごもり』『にぎりえ』『十三夜』『わかれ道』が論じられているが、前述したような方法の他、設定・叙述の従来見過ごされがちであった細部への目配り、改稿過程への着目、語りについての分析、空白への読み、等々の本書に於ける試みに、著者が「あとがき」の中で表明する、「『読む自由』を少しでも押し拡げていこうとする営為」としての「文学研究」の実践を見て取ることが出来る。いずれも、従来の説を整理したうえで新たな見解が提出されており、これらの一葉作品を論ずる際に、避けて通ることのできない

論考と言える。

ただ、例えば「ヘメデア」という観点から『にぎりえ』の全体を読み直すと、といったような、基本的に一つの視点によって作品を読み通そうとする論考が多いということも言える。こうした場合、作品のある側面は極めて鮮明に析出されるが、一方で、見落されてしまうもの、無理に一定の路線にあてはめるようなところ、なども出てくる可能性がある。私人としては、複数の視角から作品を論じ、明らかに数々の幾つもの側面をつき合わせて、作品の全体像を探ることを、自らの研究に於いても求めたくなる。

一葉研究者がそれぞれに問題意識をかき立てられるような一書であると思うが、高田氏は、本書をステップとして「一葉論」を發展させてゆく意志を、本書の表題、ならびに「あとがき」の中で示している。今後の展開が楽しみなところである。

一九九七年十一月三十日 双文社出版 A5判

二一八頁 四八三〇円

『幻想のオイフォーリー』

—— 泉鏡花を起点として

戸松 泉

等々、その文学の混沌に迫るための様々な手続きを必須とし、容易に近づけない領域と敬遠気味の私であったが、高桑氏の鏡花論からは、そこ

択の大切さを改めて考えた。

どの論にも共通する、氏の分析の手法とその特徴は、小説言説の喚起するイメージを精緻に擷上げていくことよって「作家の想像力」に迫るところにある。通読して、「山海評判記」や「吉野葛」論中の繊細な読解には殊更感心させられた。しかし同時に、そのイメージ解析は、論者の過剰な或いは恣意的な読み取りの次元に終わる危険性も孕んでいるように感じた。

鏡花研究者・高桑法子氏の最初の論文集は、I部に七編の鏡花論をII部に谷崎論・乱歩論・安吾論各二編を配し、計十三編で構成されている。幻想のオイフォーリー（快樂・陶醉）を極めるには「抑圧の構造を」「再構成しなす強い精神の営みが必要」と幻想文学の生成する核心を説く氏の「あとがき」の言は、そのままこの論文集の性格を物語っている。氏は、読者を非日常的・非合理的世界へと誘うこれらの文学者の小説言説に対峙して、きわめて明晰に「再構成」し、一旦は解明しつくそうという「強い精神」を持って臨んでいる。

鏡花研究というと民俗学的古層の発掘、伝承文芸の中への材源探しや話型の発見

に止まることなく、作品世界を全的に捉えようとす、魅力的「作品論」展開の場という印象を受け、快い読後感を得た。読み手を韜晦する鏡花言説をあくまで合理化（解釈）しようとする氏の手際は、近代人の宿命を生きているかの如くで、鏡花も美はそうした地平を生きていたのだと思わせられる。こうした本領が発揮されているのは、「春昼」「春昼後刻」を論じた「美女殺し、貝、母の骨」と、「草迷宮」を論じた「華麗な妖怪たち」。二本とも既に評価を得、後続の論を導いていったものだが、今回読み返して、背後に氏の作品への高い評価が存在する故に論理展開を説得力あるものとしている事に感慨を覚えた。論じる作品選

「解釈」（私は氏の論は「テクスト分析」ではないと思うので。）の恣意から少しでも免れるには私たちが読者はどうしたらよいか、誰もが考えるべき課題だと思われるが、一つには、鏡花研究でも現在避けて通れなくなつた（語り）の構造分析の徹底化かなと、自分の興味にひきつけて思った。「幻想」を解明するにしても一旦は合理的解釈に徹してみることが必要で、氏の研究の方向性もこちらにあると読んだのだが。

（一九九七年八月三〇日 小沢書店 四六判 一〇頁 二四〇〇円）

『森鷗外「スバル」の時代』

山崎 國 紀

の鷗外の一画」は、この年「スバル」に発表されたいわゆる「学者小説群全体」を対象として分析している。

近代日本を生きる知識人の生活、そ

本書は、若手、中堅の研究者たちによって組織された「鷗外研究会」の最初の成果である。本書の掲げる「『スバル』の時代」というテーマは、鷗外研究の場の中で考えてみるとまことに意義あるものと言えよう。

「スバル」創刊以来、鷗外はこの雑誌に大きくかかわった。終刊まで六十冊出たが、鷗外はこの雑誌に次々と問題作を発表し再活躍への一つの推進力ともなった。まず本書の掲載順に紹介しておこう。金子幸代「劇の季節」は、「スバル」創刊以来、この雑誌に載った鷗外の戯曲を精細にとりあげることにより、日本の近代劇の幕あけに尽くした「スバル」と、そして鷗外の業績を明らかにしている。小倉斉の「明治四二年

して無力感に特に関心を寄せている。須田喜代次「我百首」の試み」は、明治四二年五月「スバル」の巻頭を飾った「我百首」に注目、この時期鷗外がいかに歌の改革と模索に意欲的であったかを説く。論述の過程の中では、特に鷗外が歌に句読点を使用したこと、そして佐々木信綱の鷗外にわたっての存在意義などを主張している。大塚美保の「『半日』論」は興味深い。「半日」には、すでに私小説としてみる説が一方の極として定着している。しかし大塚はそれを否とし、「博士」の秩序を明治国家の秩序とし、「奥さん」はその明治国家の秩序に異を説くものとして把握している。天皇制や迷信の問題にまで視野を拡げてい

るのが面白い。酒井敏「『キタ・セクスアリス』をめぐる」は、「キタ」が当時「大学教授・博士物」以外に連続するものとして『大発見』から『キタ』『鶏』に主題としての〈差別〉をみている。しかしもう少し論拠の展開が欲しい。古郡康人「諸雑誌との交響」は、この時鷗外が毎号欠かさず寄稿した「スバル」「三田文学」と「歌舞伎」の交響を検討している。松木博「『椋鳥通信』の表現実践」は、「椋鳥通信」の意義と鷗外が別人として扱うために使った「無名子」という名称、そこに鷗外の戦略性と多層的な役割をみるという論を提示している。その他小川康子の「鷗外・寛・白秋」、安田孝「一幕物の流行した年」などがあるが、本書は、特に「スバル」誌上にみる鷗外の文学的試行と同時代の俊才たちとの交響のさまを明らかにすることをめざしているということが解る。

本書は概して鷗外研究に貢献するに充分なる新鮮さを提供したのとして認めたいものである。(一九九七年一〇月八日 双文社

陳明順 著

『漱石漢詩と禪の思想』

加藤 二郎

える。

『明暗』期の漱石詩を扱うのは同書第三章であるが、ここでは大正五年十月六日作の「非

耶非佛又非儒」の漢詩に、漱石の開

悟頌が見られ、次いで十月八日作の六句からなる古詩、一種の未完成作と思われるがちなその詩に、「本来の面目」の公案に対する最終的な見解けんげが読み取られている。以下難解な漢詩が、本質的に明らかめられ、「元是」で始まる六首の五絶に、『十牛図』的な、漱石生涯の禪とのかわりが読まれるといった論の展開である。

陳氏の本書に於ける立場は、禪仏教が「悟り」と呼ぶある境地の言語化により、そうした教学系の論理の埒内に漱石詩を導いた時、どのような風光が現われるのかということである。「碧巖録」等の精細な引証が、その実証性を保証しているかに見える。併し『明暗』期の漱石詩は、そうし

た既成宗教としての禪宗のある境界を一つの到達点として動いていたのであろうか。

陳氏の論述が、ほぼ同語反復的な一種の禪宗概論の体を見せ、その中に漱石詩が手際よく配されるという形となっているのも、『明暗』期漱石詩の屈折に充ちた軌跡とは、

やや相容れないものの様にも思われる。ということとは、『明暗』期の漱石詩は、例えば陳明順氏の立脚点そのものを問う、近・現代の禪者の行履かみりの如何そのものを鋭く問わずにはいられない様な、漱石の宗教的思想の現実と実践の場ではなかったかということである。併しここはその詳論の場ではない。

やや誤植が多いのは惜しまれるが、単なる誤植ではなく、改変の必要な点をつだけ指摘したい。一三七頁、無題詩の結句「好句喏然来」の「来」字は「成」が正しい。

(一九九七年八月二〇日 勉誠社 A五判 三六三頁 九五〇〇円)

過日、京都嵐山の大悲閣に登った。天龍寺僧堂に修行したという、若い禪僧が居しておられた。『門』の釈宜道を思ったりしたが、大悲閣は『門』の点景でもあった。漱石詩、殊に『明暗』期のそれは、所謂禪僧の偈頌の性格を深くしたものの多いことは周知である。その背景に『碧巖録』等禅籍への漱石の視線が控えていることも、一読して明らかである。併し従来の漱石詩注釈は、漱石と同等或いはそれ以上の禪の知解者によって為されたことはなかった。その意味では、参禅弁道の実践と仏教教学の双方を兼ねた陳明順氏による、『漱石漢詩と禪の思想』の著書により、『明暗』期の漱石詩は、初めてその読者を得たとも言

谷口 巖 著

『吾輩は猫である』を読む

大野 淳 一

本書所収の論文六編は新稿の第五編をのぞいて九〇〜九五五年にかけて勤務校の紀要に発表されたもので、『吾輩は猫である』

の「四季」「群像」「地理」「時代」を主題としてゐる。因みに「国際文化コース・日本文化選修」が著者の所属である。

第一編『猫』の四季の一節で、著者は漱石読者の関心が「小説の抽象的な思考」に集中しがちだが、構成や技法等についても「地道な検討」が必要と説く。続く二節では『猫』各章の時間・内容・発表時期を表にして示す。こうした図表化は本書における標準的な手法で、第三編以外の各論文で用いられている。これは確かに明快で、一定の客観性も保証され、「地道」な

アプローチと思われた。たとえば第五編「統・『猫』

の地理——作品言及（場所）名考

——」の国別の出現回数と分布とを示した表で、イギ

リス四六・中国三五・朝鮮二というのは、あらためて「なるほど」と思われる数字である。

ただ、著者はここから「明治のすぐれた〈洋学〉型知識人」の世界像を読みとり、

漱石は〈特殊の人〉ではあるが、この表は近代の日本知識人の教養を象徴的に示すと結論づける。しかしこの表には漱石の特殊性はないのだろうか。たとえばギリシア二六という数字は著者のいうように「日本の知識人」の一般的な守備範囲なのだろうか。あるいはロシア四は、同時代の文学者の中で平均的な数字だろうか。まだ検討の余地はありそうである。

またこうした手法は漱石の、あるいは登

場者の関心の所在・強弱を見るには適当であるろうが、その関心の質的傾向を知るには言及の頻度だけでなく、表現や内容の分析がともなわなくてはなるまい。それは時に明快でない曖昧さを含み、「地道」でない傾向を生むおそれがあるにしても、必要なことであろう。『猫』には読むたびに発見がある（本書の帯のことば）のはその曖昧さが豊かな意味を含むためかも知れないし、まして著者自身の漱石像は、むしろその〈特殊の人〉であることに力点があるらしいのだから。著者の追究が図表化にとどまることによつて、そこに含まれながら未発のままの可能性が残されているように思われた。

最後に蛇足を二つ。先行の漱石研究への言及が少ないのは関心を共有する論文が少なかつたのだろうか。また各編とも多くの小節からなるが、それはかえつて論を細分化し、深化を妨げることはなかつたらうか。以上、妄評多謝。

（一九九七年一月三〇日 近代文芸社 四六判

一九八頁 一五〇〇円）

『反転する漱石』

ラグビーは編集ですとは、名ラガーにして知将、平尾誠二の名言である。ラグビーにして然り、批評、研究、さらには創作もまた。ここに登場する石原千秋氏は漱石研究の分野をあざやかに駆けめぐる名ラガーにして編集人。『反転する漱石』という題名もまた伊達ではない。

冒頭「坊っちゃん」を論じては、その主人公や清のへ山の手志向なるものを洗い出し、『三四郎』では隠された主人公三四郎の欲望が炙り出され、『明暗』では俗物ならぬ、彼をとりまく「親族共同体」なるものの偽装の形式を暴きかねない「外部の人間」としての、津田の本体が映し出されてゆく。これなどはかつて阿部知二が『明暗』を評して、こ

佐藤泰正

ここにはもはや「人と人との座標の関係に秩序などありはしない」、ただ「台座から揺れる人間のもつれ」のみが見えて来るといった、恐らく当

時（昭11・2「新潮」『漱石の小説』）としては画期の論につながるものでもあろう。まさに石原氏のやろうとしていていること自体、漱石論の台座をゆるがすことであり、たとえば『それから』でも従来の代助の恋を中心として読み、恋の物語を（図）、家（地）とする枠組を逆転させれば、そこには近代自我や個の確立どころか、「（家）への郷愁」に囚われた不安な男の正体が見えて来るといふ。この「（個）」と「（家）」との対峙の構造は、この編集を一貫する視点であり、第一部「（家）の文法」、第二部「（家族）の神話学」、第三部「（家庭）の記号学」という三部構成の意味する所も見えて来よう。論旨は明晰であり、資

料、考証の裏づけなどもまた稠密である。そのみことな論証の仔細にふれえぬことは残念だが、同時に書評子の責めとして、あえて、二、三のことを付言してみたい。

ある評論を批判して、「論が不用意に『作者』に向かつて開かれてしまった」という指摘があるが、不用意も何もない、テキストは読者へと同時に徹底して作者に向かつて開かれていねばなるまい。テキストにひしめくざわめきを掬いとすることも必要だが、「明治の批評」への殉死という言葉の底からにじみ出る、時代のエトストもいふべきものもまた汲みとられねばなるまい。自身「海陸両棲物」という漱石固有のモチーフは一筋縄では片づかぬ。遠心と求心の交錯するテキストをどう読むか。これをひとつの楕円、のボールとすれば、反転はさらなる反転をも生むであらう。とまれ、この充分な刺戟に満ち、すぐれて挑発的な一書が、さらなる跳躍への踏石となることを覚えて喜びとしたい。

（一九九八年二月二〇日 青土社刊 四六判 三八頁 二八〇〇円）

下山嬢子 著

『島崎藤村』

の問題」を見る。

こうした「世界観」を抽出しようとする論法は本書に一貫している。

『新生』につい

紅野謙介

ての三本の論文が最近の力編である

が、そこにもこうした「世界観」が「宗教性」というかたちでとらえられている。とりわけフランスへの渡航の意味を「(他)界 往還」だと解釈したところが新味で、この観点が『桜の実の熟する時』論にも敷衍されている。しかし、そうした民俗学的な解釈がもともと藤村の意図ないし意識せざる計算によるものだとすると、作家に管理された作品の内での解釈を出ないのも事実である。「宗教性」はそれ自体で何らかの価値を帯びるわけではない、その指摘は歴史的な問いを迂回しているの

にもある。

本書のために書き下ろされたのが『若菜集』に関する「二三のこと」と『夜明け前』論の二本であり、巻頭と実質的な掉尾をかざる。前者は「草枕」について、越智・三好・十川らの見解を批判しつつ、「思いがけず向こう側からやって来た驚くべき自己解放、言葉の真の意味での自由の体験」を表出したものととらえる。後者は六十ページ近い雄編で、長編小説に悠々とせまる大作である。思想と表現と作中人物

について切り分けながら加算的に論じられている。「あとがき」によれば「藤村というある意味で読者にとって好悪の激しい作家・作品」を論ずるにあたって結果的に「好悪を越え」た態度でのぞめたとのことだが、そうしたニュートラルな客観主義の学問方法を確信できたところに、著者の真骨頂もあるのだろう。

(一九九七年一〇月二〇日 宝文館出版 A5判
三八一頁 定価四五〇〇円)

本書は藤村の『若菜集』から『夜明け前』にいたるまでの作品史的展開をあつめた論文集である。著者の長年の研究成果が収められており、下山氏の藤村研究がこれで一望できる。もっとも早い時期の論文は七七年に本誌に発表された「写生―子規と藤村―」で、二十年前のもの。そこで下山さんは子規と藤村の「写生」論の「理論的近似性」を指摘し、また随筆と小説にわかれた両者の分岐点を見極めようとする。

「論理的近似性」という言葉が示すように「写生」の文自体の分析よりも、「写生」観に焦点があてられ、そこから「この世界を、人間を、人が如何にして認識し、如何にしてそれを表現するかという、認識及び表現

の問題がこ

佐々木雅彦 著

『島崎藤村——『春』前後——』

新保邦寛

島崎藤村の作品を論じて五百頁にも及ぶ本書は、『破戒』『水彩画家』『春』『家』『海へ』の各論で構成されるものの、飽く迄その力点は、膨大な『春』と『家』論に置かれている。更に言えば、副題が示すように、『春』を軸に全体が配されており、『破戒』『水彩画家』の順になっているのもそれ故であろう。著者は、三好行雄氏の『春』論の（複眼）という視座を否定し、作品そのものが執筆時の作者のフィードバックにかけられて構成されると説くのだが、おそらくそれが、以降の作品を貫く藤村の基本的戦略と見えているのではなからうか。『海へ』論が、『反面』『新生』論の第一章の如く構想されているのも、それ故で

あるように思える。

さて、著者の思惑はどうあれ、本書の大きな特徴は、登場人物の心理を個々に追求し、あらゆる種の注釈の如き趣を呈している点

にある。それによって人物造型が案外類型的であることが露になり、事実には縛られているかに見える藤村の小説の、作品としての相貌が、自ずと際やかになっている。唯、長々とした引用とそのパラフレーズの繰返しには些か閉口させられる。しかも第二章で岸本捨吉、第三章で青木駿一と検討を重ねて更に四章（青春と死）で、両者の関係に於いて再度辿り直すという類いの重複は、煩わしく、一冊の本としては問題がある。また、一貫して、三好氏を始め、先行諸説の図式的解釈から作品を解き放ち、しなやかな解釈の回復を試みている点に本書の魅力を感じるのだが、それにしても、例えば『春』論で注記されるブランシヨやバ

シユラールなどの援用は何故必要だったのか。私には無用の長物のようにしか見えない。結局、恋愛の最大の肯定は情死である式の青春観に収斂する論旨に変わりないのであれば、これまた煩わしいだけである。なお問題なのは、『家』論になると援用の範囲を越えて、逆に、例えばギリシヤ悲劇のリードによって作品解釈が進行する点である。何故ギリシヤ悲劇なのかは問わないとして、この遣り方は、作品を強引に振じ伏せる結果に繋がりはしまいか、（夫アガメムノンへの復讐を誓ったクリュタイメストラのようにお種）も、と言うが如く。著者は（意識と無意識）の究明を強調するが、お種の夫への復讐なる心理も、無意識を読んだと言うことになるのだろうか。とまれ、長年の研究の積み重ねを感じさせる解釈が窺える点に、本書の命があると思う。

（一九九七年五月二十日 審美社 A5判 五二五頁 六〇〇〇円）

村上林造 著

『土の文学』——長塚節・芥川龍之介』

佐久間 保 明

がある。結局本書の収録論文は、既発表の論文単位で数えると全八本ということになる。

このような構成からもわかるように、著者の論述の

本書は長塚節「土」と芥川龍之介「一塊の土」の作品論を主体とする研究書である。特に著者が大学院で初めて読んだという「土」を中心にした長塚節の散文作品に関する五本の論考が、全体の過半を占めている。その次に「一塊の土」論があり、最後に論文が全体をしめくくる形である。

要約すれば二編の作品論が中核となるわけだが、各作品論の前にはそれぞれ詳細な研究史論のあることが特色となっている。また「土」論の後には「同時代における『土』の位置——農民の造形をめぐる」という表題で、「南小泉村」「貧しき人々の群」「カインの末裔」と「土」との比較論

姿勢は極めて周到である。前半部には特にそれが顕著であり、まず「近代日本精神史の一面」という副題のついた「土」研究史論は四十ページにも及んでいる。そこでは主要な参考文献が丁寧に検討されているが、なかで最も重要視されているのは漱石の『土』に就てであり、そこに視点をすえた著者の姿勢は「土」論まで動かないという確かさがある。研究史を論じてから長塚節の写生文九編と短篇小説六編の検証を経て、漸く「土」論へとむかう様は階段を一段ずつ踏みしめて登るような堅実さと言うべきであろう。

これを逆に言えば著者独自の新見や創見が見えにくいということであろうか。

「土」については全二十八章を五つに分けて順次論じてゆく手法であるだけに、最終的には「土」の達成度を確認するという穏やかな結論に落ち着いている。また別の方面から言うと、もう一方の作品論の対象がどうして「一塊の土」なのかという問題が残る。長塚節と異なり芥川が根っからの都会人というだけでなく、「一塊の土」は周知のごとく芥川にとつて借り物の素材だからである。地主だった長塚節の限界について触れながら、「一塊の土」の材源について一切語らないのは聊か均衡を欠くのではなからうかということである。

書名にある「土の文学」というのは農民文学や農民小説を示唆しながらも、それにはこだわらない読み方が要請されているようである。

(一九九七年一月一日 翰林書房 B6判
二八三頁 三〇〇〇円)

大津山国夫 著

『武者小路実篤研究』

——実篤と新しき村——

寺澤浩樹

副題にあるように、本著の柱は武者小路実篤と「新しき村」との関わりを論じたところにある。武者小路にとって最初から文芸と「新しき村」とは双生児であったわけだが、「新しき村」の歴史を調べるといふことは、例えば武者小路の子育ての仕方、親子の関係、子供の生育を調べることに似ている（「新しき村」は生き続けている他者の集団であるから、実際にはもっと複雑な問題だが）。大津山氏の原著『武者小路実篤論』は「新しき村」の身ごもりまでを書いたものだったので、武者小路の人と文芸の解明は鮮やかであった。しかし「新しき村」以後の時期を対象とする研究が、こうした理由から重層化して難しくなるのは

当然のことだ。本著によつてそうした各層の存在とその構造を教えられたが、その中でも「新しき村」の歴史の客観的で詳細な既述とその周縁

に、氏の研究の重心のありかが示されている。武者小路研究のみならず、「新しき村」研究においてもかつてない貴重な成果である。また、本著の「新しき村をめぐる文献」は「新しき村」への言説の歴史の詳細な解説であるが、これが日本近代史における「新しき村」の意義の実証的な論考であると同時に、本著所載の氏の一連の論稿を立体的に視させて、本著自体のよきインデックスともなっている。

さて、「後記に代えて」で氏は本多秋五氏の意見を容れ「武者小路文学の時代区分」としてあらたに「個我の時代」を設け、氏の素晴らしい独創になる「自然」と「人類」をその下位に置いてしまった。その次

に来るのが「新しき村時代」となるのだが、私には残念である。もとより「新しき村時代」の命名の基準が他とは異なっている。この問題は前者から引きずられ、本著でも明確にはされていないように思う。例えば氏は「幸福者」「耶穌」「友情」などの書かれた大正八年前後（「新しき村時代」に入る）を「武者小路文学における異例の悲劇の季節」（二四一頁）と述べるが、「自然」や「人類」に対応できるキーワードはないものだろうか。それは本多氏の言う「自己」とどう関わるのだろうか。そのヒントを求めて、もう一度本著を読み直してみた。

（一九九七年一月一日 明治書院 A5判
四二六頁 一五〇〇円）

江種満子・中山和子 編著

『総力討論

ジェンダーで読む『或る女』

西垣 勤

上美那子氏の「早月葉子を、異性愛としての対幻想と母性に引き裂かれる近代の女性の混沌とした生のメタファー」としてとらえる」ということ

この本は、有島武郎の『或る女』を、ジェンダーで読む総力討論の書とある。シンボジウムとして、基調報告一、報告四本があり、それに報告者含めて十八人による討論、それに補論として、八本の論で、構成されている。全体として多様な論点が提示されており、『或る女』論を書くとき、読んで置かねばならぬ本と評価して宜しかろう。

しかし、十八人の討論は無茶な企画で、参加した人の多くは言うことも言えず欲求不満になったろうし、まとまりもない。もっと紙幅を取るべきか、人数を絞るべきだったろう。

短い紙幅で、批評のしようもないが、川

をめぐる論は、基礎的な見解だろうし、金井景子氏の家政学の進展の中で、それより遅れている葉子の姿の指摘は、社会的な広がりから『或る女』をとらえようとして新鮮だし、坪井秀人氏の葉子の性欲からヒステリー、狂気、死への階梯が、当時の医学の言説による連鎖のモデルをなぞっていることなどの指摘、中村三春氏の「東欧羅巴の嬪宮」の一語を例にしている直諭の根源の差別性の指摘などそれぞれこれからの新しい論を生み出すものとなるだろうが、評者には、補論の内の二本に強い刺激を受けた。

千田洋幸氏の「畏怖するエクリチュール」の、「宣言一つ」の代行拒否の思考と

他者への畏怖の感覚に連続する、他者を代行することの志向と反志向の葛藤が、『或る女』をつらぬく認識であること、それが言葉を生産する動力であるとする論理、それと連動するようだが、山田俊治氏の「他者に生きた葉子／『或る女』のジェンダー機制」の、有島が、自らの言説の男性性を自覚しその差異を差異として認識する、女性に対して他者として振る舞う立場に立ち、その上で、『或る女』の葉子において女性に想定した論理に生き、男性との関係に自己実現を図らねばならない葉子を通して他者を欲望する愛の関係を追求し、その愛の可能性は同時に不可能性であるという極限に生きさせることによって、「自己の同一性が他者の同一性でもあり得るような、超越的な他者との同化を可能にする拠点を想定する言説に対して」「最も鋭い批判者たりえた」という論理は、ともに見事なこの愛の物語の獨創性を衝いたものだと思う。

(一九九七年一〇月三〇日 翰林書房 B5判

二六三頁 一六〇〇円)

永榮啓伸 著

『評伝 谷崎潤一郎』

西 莊 保

追う」ことが本書のモチーフであり、そのために氏は、作家の作意に肉薄し、物語の織りなす綾に注目し、可能な限り妥当な〈読み〉を提出し

本書は、氏のこれまでの谷崎潤一郎研究の集大成である。前著『谷崎潤一郎試論 母性への視点』(有精堂、88・7)、『谷崎潤一郎論 伏流する物語』(双文社出版、92・6)を下敷きとして新たに書き下ろし、「刺青」から「夢の浮橋」までを一挙に論じた堂々たる谷崎論である。

タイトルに「評伝」とあるが、本書の目的は作家の実人生の解明にあるのではない。序によると、氏が、かつて「春琴抄」論争で春琴佐助黙契説を主張した際、それが作家の全体像とどう抵触していくのか、それへの間掛けが評伝の執筆に駆り立てたという。因って、あくまで作品論を主軸に、〈読み〉の領域から「作家の精神の軌跡を

ようとしている。かねてより、堅実で周的な研究姿勢に定評がある氏が、作家の実生活から絶妙なエピソードを選んで挟みつつ繰り広げる〈読み〉には、その場限りの脆弱な〈読み〉では太刀打ちできない、奥行きと深みがある。

氏の〈読み〉の眼目は「作品自体の内実」(物語の言語を通して必然的に形成され、枠組みの奥に透視される空間。新しい生命体。)の正しい把握にある。既に前者からの氏の持論であるが、本書では、谷崎が芥川から継承したと氏が指摘する、重層の語り的手法が生み出す「表層のプロット」とそれに「伏流する流れ」という「二層の想像的世界」からなる作品構造の解明

と関われせながら、「世」から「夢の浮橋」まで一貫して、作品の「内実」との「照合」のうちに〈読み〉を展開させているのが圧巻である。それによって氏は、春琴の火傷事件や、「少将」の北の方譲渡の真相など、谷崎作品の数々の謎の究明に挑むのである。ただし、この「内実」という用語の用いられ方には些か幅があり、また、「潜在」「伏流」「底流」などの言葉の多用も気になる箇所があった。氏の〈読み〉には不可欠な用語なのだが、一面、論証に曖昧な印象を残してしまった感がなくもない。

一方、千代との結婚生活を〈母性〉を求める模索の時期と位置づけるなど、作家の生涯の主題としての「母恋い」へのトータルな目配りも見逃せないのだが、さらに、本書が各作品の先行研究の肝要な論点を的確に押さえており、優れた研究史的相貌をも呈していることも付け加えておきたい。

(一九九七年七月二十五日 和泉書院 A5判 三八五頁 六〇〇円)

アドリアーナ・ボスカロ 編著

『谷崎潤一郎』

国際シンポジウム

佐伯順子

を行うということ

は貴重な機会である。様々な外国語に翻訳されて読者を獲得している谷崎、また、国際的な意味でも日本の中においても、東

のアプローチといえるだろう。

東西の研究者の交流を通じて、伝統と近代、虚構と現実の間を縦横に往き来する谷崎の卓抜した文学手法が浮かび上がり、谷崎が通常誤解されがちなように、過去の日本をロマンティックに理想化したのではなく、東西両文明を単なる優劣の関係としてとらえたのではなく、「両文明に対してつねにアイロニカルで、その仮面を剥ぐような鋭い視線を注」(イルメラ・日地谷ルシユネライト)ぐ、優れた文明批評家であったことが、改めて明らかになってゆく。

国際シンポジウムの面白さや、生産性というものは、各自の発表に加えて、その後の質疑応答にあると思われるので、欲を言えば質疑応答の記録も、抄録であれ収録されていればと感じたが、この種の国際シンポジウムが活発化し、国際的視点によって、日本近代文学の研究にますます新たな可能性が開かれることが期待される。

(一九九七年七月一〇日 中央公論社 B5判)

一六九頁 二四〇〇円

谷崎潤一郎没後三十年、ヴェネチア大学東洋研究所の創立三十周年にあたる一九九五年に、四日間にわたってイタリアのヴェネチアで開催された谷崎潤一郎国際シンポジウムの記録である。シンポジウムには、

イタリア、日本はもとより、北米や他のヨーロッパ諸国の研究者、作家が集い、四人ずつ五つのセッションに分かれて口頭発表と質疑応答が行われた。本書には、研究発表の内容と共に、シンポジウムの後援者である故嶋中鵬二元中央公論社会長、および、谷崎の原稿の口述筆記を担当されていた伊吹和子氏の講演も収められている。

「あとがき」にも記されているように、一人の作家を主題に四日間もシンポジウム

と西の文化の違いにこだわらず、比較文化的にも豊富な研究課題を提供してくれる谷崎は、国際シンポジウムの主題として実にふさわしい作家といえよう。

国際的な研究集会では、海外の研究者の新鮮な視点に驚かされるものであるが、本書にも、谷崎文学における色の意味についての比較文化的な考察や、谷崎文学における「滑稽」性、「他者」としての「西洋」像についての検討など、様々な刺激的な論考が並んでいる。

従来あまり論じられてこなかった戯曲や、映画との関わりを扱った一連の論考は、視聴覚芸術、特に映画研究に確たる市民権が認められている北米出身の研究者ならではの

片山宏行 著

『菊池寛の航跡』

——初期文学精神の展開

大西 貢

第三次及び第四次『新思潮』で活躍し、文壇に出た人々の中で、芥川龍之介の研究だけが盛んで、菊池寛とか久米正雄を研究する人が極端に少ない。松岡譲と成瀬正一には、関口安義の優れた評伝があり、さらに、関口安義は、恒藤恭と芥川龍之介の評伝を間もなく完成させる予定である。

菊池寛についての本格的な研究が、殆ど無い中に、片山宏行の今回の著書が出版された事は、誠に貴重であり、菊池寛にとっては、後世に真の知己を得たに等しい事であり、片山宏行は、文学を研究する者にとつて、何よりの欽びである『鉅脈』を掘り当てた、と言うべきである。私達は、菊池寛が、大正から昭和にかけて、『文芸春

秋』を発行した事が、明治の初め、

福沢諭吉が、迷信に惑わされる事などが無い合理主義の精神を日本人に徹底的に普及させたと同様の意味を

持つものである、と信じ、今日の週刊誌文化とテレビの文化の基礎を築いた人でもある、と思っていた。

菊池寛が、最初から、現実的で合理的な思考法を持った人ではなく、京都にいた頃には、極めて強いロマンチズムの持主であつた事を、片山宏行は、見事に論証してみせた。その資料を発掘する根気強さとエネルギーに感心するのみならず、一種の感動を覚えさせる画期的で、有意義な業績である。文壇に出るまでの苦しい孤独な闘い、文壇に出てからの積極的な活躍の姿などを合めて、マント事件とか代作の問題等を誠に丹念に、数多くの発見をしつつ、実証的に調査研究した苦心の著作であり、片山宏

行の実行力と努力に、心から敬意を表わしたい。

今回の著書は、一応、大正十一年までの航跡をたどつたものであるが、一つ一つの作品研究とか、作品論の面では、まだ突っ込みが足りない所があるから、今後、さらに、その方面の研究をも合わせて菊池寛の生涯と文学の本質が何であつたのか、それを書き残してもらいたい。片山宏行は、それが出来る才能と能力と肝心な資料とを合わせて持つ人である。しかし、八一頁と一〇五頁とで、『順番』なる戯曲の記述が違うのなどは、片山宏行のうっかりミスであろう。ただし、これなどは、極めて限られた事であり、全体的に、安心して読むに足る、良心的な著作である、と保証する。

(一九九七年九月二〇日 和泉書院 A5判 三四一頁 六〇〇〇円)

内田道雄 著

『内田百閒——『冥途』の周辺』

酒井英行

述べている。誠実

な研究者の実感と

しては領けるが、

内田氏は百閒研究

の先駆者でありな

がら、百閒（文

学）の深部にまで

歩み入ることに成

功しているのである。「トバ口」どころか、

終着点近くに到達していると思われ

る。このことは、「百閒文学の輪郭」の豊

穡な実りがよく示しているであろう。『冥

途』の主調をなしているのは絶え間ない生

の不安と不気味である。『百鬼園随筆』

の本領は、人間の苦痛や悲哀や、『憂鬱』

を、「それらの即物的なセンチメントを抜

き取った上で客観的な表現を与えた点に存

する」とみなし、『冥途』が百閒文学の中

心軸であるとするならば、『百鬼園随筆』

『続百鬼園随筆』の二冊は、その車輪にた

とえることが出来るだろう。これらを回転

させることによって以後三十年に亘る百閒

の道程は築かれて行ったのである」との卓

見を提出しているのである。「百閒文学の

輪郭」は、この他にも、『阿房列車』の意

義や、『贗作吾輩は猫である』における、

漱石との連続、不連続性にも説き及んでい

て、内田氏の百閒研究がその始発点におい

て、百閒研究の現在の水準に先回りして到

達していたことを示しているのである。こ

れに引き続き、「百閒文学の魅力を研究的

に探」り、百閒文学を正当に位置づけられ

る新たな文学史構想の可能性を探ろうとし

て、主として、漱石との関連において、

『冥途』や「山高帽子」などの作品世界を

解明しようとした優れた論考を書き続けて

きたのである。待望久しかった百閒論であ

る。

（一九九七年一月二〇日 翰林書房 四六判

二〇八頁 二四〇〇円）

本書収録の十五本の百閒論のうちで最も

古いものは、「百閒文学の輪郭」であり、

百閒が死去するおよそ九年前の昭和三十

年に発表されている論文である。これを受

け継いで、百閒の生前に、「夏目漱石と内

田百閒」、「夏目漱石と内田百閒？」も書か

れている。このことから、内田道雄氏の

百閒への取り組みの早さがよく分かるので

あり、ほとんど未開拓であった百閒研究の

原野を孤立無援の状態で切り開いていった

のである。

内田氏は本書の「あとがき」において、

「百閒勉強のトバ口に立ったばかり、との

自覚から抜けられない私としては、この本

は『内田百閒序説』のつもりであるが」と

『康成・鷗外 研究と新資料』

杉井 和子

「序」で、著者の師である長谷川泉氏は「現在までに目こぼしになつていたところを、極めて実証的に、新資料も駆使して掘り下げた」と賞讃される。同感である。

〈確実に言えることは必ずある〉という著者の言に明らかかなように、手がたい実証研究の厚みのある好著である。内容は、川端康成、森鷗外、依田学海、泉鏡花と多彩で、鷗外論では、軍医本部庶務課長の長瀬時衡との関係を洗い出し、鷗外の漢方、漢字の素養の基盤を明らかにし、「舞姫」読解の視点に新しさを加えている。

川端研究は、これまで、長谷川氏の研究を基礎として、鑑賞・批評のための実証研究が盛んであった。「雪国」のモデル、「骨

拾ひ」の池など、

実地の裏付け調査によって成果をあげてきた。が、野末氏の実証研究の成果、〈目こぼし〉を掬った良さは、同時代を視点

に据えての発掘である。島木健作の「日記」も、鎌倉組の動向、「満州紀行」を見ながら、時代と向き合った島木と対照的に回避的な川端を浮かび上らせる。築地小劇場、映画、写真という当時のメディアに注目し、「浅草紅団」では「不良少年の研究」に着目する。「コントと掌の小説」論から始まるのも、作家の生涯と芸術ではなく、川端の方法を時代の現象として見据えようとする試みであろう。勿論、実地調査も綿密で「古都」論、泉鏡花論は視覚的で面白い。注釈によって史的に位置づける著者の姿勢は、余裕として感じられ、マニアックな弊を脱し、読者に喜びの実感を伝える。

一方、作家の全体像に迫ることを意識しない故か、川端の意識の連関性が強く浮かび上つてこない。川端の孤児根性と心靈学の流行を結びつけ〈三人の「ちよ」〉による呪縛という逆接的な形で、少女への愛の希求を示した」とする『「ちよ」論』で、鈴木大拙、メーテルリンク、高橋五郎を挙げている。「靈智と運命」の中の〈靈智〉を訳者の栗原古城の用いる重要語として指摘するが、メーテルリンクの〈靈智〉は、

〈不可思議な理智〉意志・思索・愛の力ではないか。昭29年山文社発行の栗原訳では「理智と運命」であり、序の「靈智」は一回しか使われない。「スエデンボルク」（鈴木訳）でも知と愛、意志と和解が強調されている。靈的呪縛は、感傷を排除する作者の知的計算による媒材で、嗅覚・触覚も知的な分解構成の道具と考えると、心靈現象も作者の観念の産物と言える。コントに対応する川端の批評とを繋ぐ視点、全体像に迫る事なども望まれる。（『康成・鷗外研究と新資料』野末明著 一九九七年一月 審美社刊 A5判 三九八頁 四五〇〇円）

古閑 章 著

『作家論への架橋』

——「読みの共振運動論」序説——

池内輝雄

と芸術」の問題は「今もなおアクチュアルな問い」であり、それは「時代」と緊密にかかわった作家のみならず、研究者の現在の問題でもある

ニュー・クリティシズムが日本に導入されたところから作家論はあまり流行らなくなり、それに「作家の死」(ロラン・バルト)が追い討ちをかけ、以来、生産者(作家)の固有名詞はもとより作家・作者なる語がまったく使われない研究論文を多く眼にするようになった(むろん、それぞれの導入期において作者と作品を切り離すことにはじゅうぶん意味があったはずである)。ことに昨今は文学研究から文化研究へと対象、範疇が移りつつあり、個別作家の存在は重視されない風潮がある。

著者はそうした文学研究の現状を批判し、作家研究の復権を主張する(「序章 近代文学のアポリア」)。著者によれば、「実行

はずだ」という。著者が強調したいのは、作品を通路として「作家の時代の様相なり文化状況の総体なりを限りなく忠実に復元する」という、歴史主義的な研究方法の提言である。加えて、題名および序章の副題に付せられた「読みの共振運動」、つまり作品を読むことよって作家の「自己変容の過程」を立ち上げらせ、同時にそれを遂行する研究者の側も「自己変革」するような読書行為、「運動」の提唱である。それは、別のところにくりかえされる「人生論的視点」の必要性、その再評価ということでもある。いずれにしても、先行する三好行雄、田中実、小森陽一らの所説と切り結びながら、現在の文学研究の行詰り、隘路を切り

開くことを試みた論として一読に値する。

こうした試みは著者自身によっていかに実践されたか。本書には、第一章から第二章までの個別作家・作品論、つまり、「二葉亭四迷」「浮雲」、夏目漱石「吾輩は猫である」以下、昭和前期の梶井基次郎、中原中也、戦中から戦後にかけての谷川俊太郎、上林暎、宗不早、梅崎春生、火野葦平、福永武彦、木下順二、耕治人らの作品についての論考が収められている。これらのうち、「浮雲」論のみ書き下ろし。最も早いものは一九八三年発表の「猫」論、谷川俊太郎「六十二のソネット・60」論など。対象は多岐にわたるが、著者の地元・九州にかかわりのある作家・作品が多くとりあげられている。なかには必ずしも歴史主義的考察や「共振運動」を実践したとは思われない論考もあるが、第三章の梶井基次郎「檸檬」論は圧巻。作品中の言説の時代的・文化的な意味を明らかにしつつ、作家内実の問題に肉迫している。

(一九九七年二月一日 日本図書センター)

A5判 四二八頁 六四〇〇円

山崎正純 著

『転形期の太宰治』

川崎和啓

たとえば、夏目漱石の門下生たちによっ

て流布されてきた漱石晩年の〈則天去私〉

という伝説の境地が、実は、漱石の願望の所産ではあつても、彼がたどりついた世界とは全く異質なものであることが明らかになるまでには、彼の死後約四十年の時間の経過と、江藤淳という若き天才の出現が必要であつた。わが太宰治の文学と人生に関する研究においても、その実体解明に大きな役割を果たしてきたのは、彼と同時代を生き、彼と同一の生活空間をともしていた人々の証言であり、論評であつた。しかし、鏡子夫人が漱石と漱石文学のどのような理解者であつたかを想起するまでもなく、また、先の〈則天去私〉伝説がいかに虚妄

なものにすぎなかつたを顧みるまでもなく、作家研究の根拠を彼ともにも生きていた人々の証言に求めすぎることは常に危険がつき

まとう。

山崎正純が太宰治の研究者として知られ始めたのも、太宰治没後約四十年経つた一九八〇年代後半のことである。作家が同時代から奉られた様々な装飾から自由になるにはこれくらいの年月が必要なのかもしれないが、山崎もまた、太宰治と時空をともした人々の証言とは別に、いわば太宰治を純粹に〈他者〉として客体化しうる世代に生まれた幸運をもつていた。本書における山崎の第一の功績もこの点に関わっているのであつて、彼は、太宰治に関する夥しい〈思ひ出〉や伝説、あらゆる固定的な定説を排して、〈転形期〉の文学動向と〈転形期〉の太宰治の作品だけを純粹に抽出し

客体化して、〈転形期の太宰治文学〉の本質に迫っている。

山崎の言う〈転形期〉とは、プロレタリア文学運動が終息し、文芸復興が唱えられていた昭和十年前後の時代を指し、取り上げられている作品は主として『晩年』所収の作品群である。山崎の論は時として恣意的な推断との印象を与えたり、時として表現が独善的で観念的な晦渋さをもつ難点はある。しかし、にもかかわらず本書が読み手に強いインパクトを与えるのは、転向後の太宰治が、大衆という〈他者〉がもつ〈リアリティー〉に接近する中で、「文学の再生と主体性の再構築の可能性」を追求していったという視点を基軸に、それまでほとんど遠巻きに眺められていた太宰治の〈転形期の実験小説〉群に大胆に踏み込み、そこに全く別様の新しい光を当てているからである。

(一九九八年一月二〇日 洋々社 四六判 二八六頁 二四〇〇円)

小林裕子 著

『佐多稲子——体験と時間』

北川 秋雄

本書の各所にみられる。しかし、論文発表時から一六一年が経過し、その間に小林の佐多稲子観や文学研究の方法が変化していることは否めない。

その点の配慮もあつてか、本書は佐多稲子の人物・文学について解説した一部、作家・作品論を集めた二部、記号論やフェミニズム批評を導入した三部という構成になつてはいるが、必ずしも〈表現論〉でくくりきれているとは言えない。たとえば、二部と三部で「私の東京地図」「灰色の午後」「素足の娘」など論じる作品が重複して、研究方法の差は理解できても、小林の抱く作品についての統一的な像を讀者として結びにくい。それは、小林の中で、援用する研究方法の必然性が整理されていないからではないだろうか。

とはいえ、基本的に小林の佐多研究は、本書の冒頭に置かれた「人と文学——生に

対する謙虚さ」にみられるように、佐多稲子への敬愛に根ざしていると思う。それは、〈半世紀を超える作家活動の中で、時代時代の変動や混乱に身をもつて立ち向かい、女性であることの苦痛と感いを作品の中にほとばしらせてきた作家〉という「あとがき」によつても明らかである。しかし、研究は対象とするものへの思い入れを根底に抱きつつも、なお対象を追認するだけに終始してはならないと思う。本書は、ともすれば佐多の言説に取り込まれ、佐多を敬愛する自己と、それに抗い、佐多との距離を取ろうとする自己との、小林のなかでの格闘の跡と見ることも出来る。個人的好みでいえば、『虚偽』『泡沫の記録』——挫折と再起・『夏の葉』——永遠の父性をもとめて」が、佐多との距離を保つていて読み易かった。また、『習作詩の時代——『詩と人生』との関わり』は貴重な発見だ。多忙を極める生活の中で、本書をまとめられた労を多としたい。

(一九九七年五月二〇日 翰林書房 四六判 二七一頁 二八〇〇円)

佐多稲子研究の草分けの一人、小林裕子による待望の単行本がついに出版。大学院時代に佐多稲子の知遇を得て、現在までのほぼ三〇年、佐多稲子と最も近い研究者の一人である小林が、大学院修了時に長谷川啓らと発足させた佐多稲子研究会を拠点として研究してきたもののうち、一九八一年以降、各誌に発表した論文、解説等一三編と書き下ろしの論文一編をまとめたものである。

〈この書物全体が、ある意味では佐多稲子の表現論とも言えるだろうか〉と、「あとがき」に記すように、小林は佐多稲子研究の表現論的アプローチを自分の立場としている。たしかに、〈文体〉という用語が、

渡辺みえこ 著

『女のいない死の楽園』

供犠の身体・三島由紀夫

井上隆史

だなかに向かい、その典型たろうと努力し」(p.113) だが、もしゲイ・リベレイションが起ころ「時代まで生き抜いたなら、

多くの同性愛者たちのように性指向セクシュアリティの公言をし、自分のなかの女性性を解放し、(自分自身)という(人間)として生き直す、五十代、六十代の三島由紀夫を私たちは見ることができたかもしれない」(p.203) という。

本書は高良留美子氏が創設した第一回女性文化賞を受賞した好著である。が、当然参照すべき三島の評論や対談(「ナルシズム論」「犬猿問答」など)への言及がない点、これは作中人物の言葉であり私自身の思想と混同してくれるなど三島が註している当の箇所(「鏡子の家」の肉体に関する論議)を留保なく三島の考えとして引用している点(p.203)など、首を傾げざるをえないところも少なくない。そもそも第一

詩人・画家である著者が、三島におけるジェンダーとセクシュアリティの問題に、現代のゲイ・リベレイション、レズビアン・ムーブメントの文脈から光をあてた論集である。その論旨には二本の柱があると思う。第一に、三島は自己の女性性を排除し筋肉の鎧をつけたが、死によって始源へ回帰したという考え方である。第二に、昭和という異性愛父権社会のイデオロギーは女性性を排除してきたが、今や同性愛解放運動の展開によりこのイデオロギーは相対化されつつあるという認識である。著者はこの二本の柱を結び付ける。そして、三島は「昭和社会の女性嫌悪と同性愛嫌悪の内面化により、家父長的異性愛中心社会のた

の柱は一種の図式的理解に過ぎない。従って本書の意義は第二の柱にある。しかしそうだとすると、そのメッセージの政治的意味を効果的に伝えるためには、三島の読まれ方、あるいは三島をめぐる物語の分析を踏まえて立論するなどの戦略を立てるべきではなかったか。

これらの疑問を覚えはしたが、しかし私は詩的なイメージを喚起する表題とカバー写真に魅せられて本書を読み始めて以来、自身の生の見直しを度度迫られた。批判的な言葉を連ねてしまったが、本書がラディカルな問題提起を孕んでいることは否定できない。特に文学の政治性を問おうとする者は、本書から貴重な示唆と刺激を得ることができであろう。

(一九九七年十月二五日) パンドラ発行 現代書館発売 四六判 一四五頁 一九〇〇円)

小林幸夫・品田悦一・鈴木健一
高田祐彦・錦 仁・渡部泰明 編著

『へうた』をよむ

——三十一字の詩学——

安 森 敏 隆

われるのである。
本書は「上代・中古・中世・近世・近現代の日本文学研究者六人が、二年間にわたって毎年三、四回ずつ集まり、総計四、

本書の題名である『へうた』をよむ——三十一字の詩学』とは、まことに名づけて妙である。〈和歌〉をよむでも、〈短歌〉をよむでも無く、まさに三十一字の「へうた」をよむのだ。私自身、〈和歌〉と〈短歌〉はまったく似て非なるものであり、鉄幹や子規の実験を経て明治三十年代後半から四十年代にかけて公的な「私」に律せられていた〈和歌〉から生身の「私」を徴表させる〈短歌〉へと移り変わったという仮説をもっている。その点からみた場合、千三百年余つづいてきたこの五・七・五・七・七という形式は「へうた」と称して

くくるしかないし、「三十一字の詩」としてくくり鳥瞰するのが最も適切であると思

五〇時間の討議「(あとがき)」を経て書かれたものである。全体の構成は、四章から成り、前半の「様式(ことばのあや)」と「へうた」と「へうた」を支えたもの「でへうた」についての枕詞、序詞、歌合等の基本概念のレクチャーをし、つづいて「恋歌の楽しみ」と「一首をよむ」でそれぞれの時代の「へうた」の具体に則して、研究のポイントをしめしているところにある。

殊に、この著の特徴は、最終章の「一首をよむ」に力点がおかれ、上代・中古・中世・近世・近代・現代の六分野からそれぞれ一首をとり上げて読解を展開したところにある、とみてよからう。

「中世」の「さくら色の庭の春風跡もなしとはばぞ人の雪とだに見ん」(藤原定家朝臣)の一首については、一首の「わかちなさ」「桜色」「跡もなし」「下句のニュアンス」「千五百番歌合」と追求してきて「非現実の『桜』と非現実の『人』が浮かび上がる」と鑑賞し、「定家の方法は、極度に観念的でありながら、そのくせリアルな映像を立ち上げる」(渡部泰明)とみごとに定家の一首を鑑賞し別決している。

私自身、「現代」の一首でとり上げられている「燻製卵はるけき火事の香にみちて母がわれ生みたること恕す」(塚本邦雄)のナマ原稿を故本郷義武と大阪の天満屋の喫茶で'67年現代短歌シンポジウム・大阪」の打ち合わせを三人でしていたおり、当の塚本邦雄からみせてもらったことがある。そのおりの感動の根源を小林幸夫の読解は怜悧に分析し、現代の「へうた」の在り処をみごと別決し敷衍してくれているように思えた。

(一九九七年十一月十日 三省堂 A5判 一三三

〇頁 二〇〇〇円)

飛高隆夫 著

『近代の詩精神』

日本近代詩研究における飛高隆夫氏の長年の業績にもかかわらず、本書が氏の二十年目の第二論文集であることを知った時、些か不思議な気がしたものである。健康上の理由から休養期間を設けられていたとのことで、この遅すぎる著書の出現を了解した。本書に収められた中原中也論五編と、高村光太郎、萩原朔太郎、室生犀星、丸山薫、三好達治、立原道造に関するそれぞれ論文の内容については、著者自身の的確で誠実な要約が「あとがき」に示されており、今更私が下手な紹介をするまでもない。それらの中には初出發表時に既に読んでいたものもあるが、正直なところ目新しい論を漁ろうとする駆け出しの研究者にとって、

國 生 雅 子

衝撃的とまでは言いがたい内容であつたように記憶している。だが読み返してみ、実に貴重なことに気がかされた。

例えば有斐閣双

書『近代の詩歌』に収められた「朔太郎の近代（本書では『萩原朔太郎の近代』）を最初に読んだのは、もしかしたら私がまだ学部学生の頃だったかもしれない。藤原定『萩原朔太郎』から河上徹太郎『日本のアウトサイダー』岡庭昇『萩原朔太郎 陰面の近代』、さらに三好達治、渋谷国忠、飯島耕一等等、古典的とも言える朔太郎論の中から「朔太郎を文明論的位相において把握しよう」と試みられた」諸論を紹介し、研究史の概略が示されたこの文章は、学生にとっては誠にありがたく便利なものだった。そしてそれだけのものとして通り過ぎてしまつていた。しかし多少の年月を経た今飛高氏の概説を読み返してみ、自らがあれ

（一九九七年十月二十日刊 翰林書房 B4判
二九〇ページ 三八〇〇円）

らの朔太郎論を消化した上で自己の朔太郎論を展開していたとはとても言えないということを改めて知った。と同時に、先行論文を丁寧に読みとり、批判すべきは批判するという氏の研究者として当然の（でも珍しく誠実な）姿勢に、漸く初めて気付かされたのである。巻頭におかれた「高村光太郎『猛獣篇』の検討」では、（怒り）にその本質を探ろうとする先行論を検討する中で、芸術家として「信条を述べ、その生活を歌う」詩群という新たな視点が示されることになる。本書の中核を成す中也論でも、先行論を踏まえてそれら乗り越えようとする研究姿勢は一貫している。誰もが新たな研究方法を模索して迷っている今、氏の揺るぎない姿勢と確かな歩みは新鮮でさえある。

坪井秀人 著

『声の祝祭 日本近代詩と戦争』

安 智 史

は傑作そのもの
 だったのではない
 か、といった感性
 は、本書から一貫
 して排除されてい
 る。たとえば、大

木惇夫からの影響
 が想定される吉田

これは、ある種のストインズムを徹底させることによって成功した大著である。坪井氏はモダニストの立場を徹底させ、良質の戦争詩のありうべき可能性を立原道造にみいだす。大木惇夫の戦争詩についても氏があつとも高く評価するのは、最終的に日本語の優秀さの保証に回収されてしまうという限界内にせよ、言葉の物質性があらわにされ、意味を脱臼させる可能性を秘めていた「雨の歌」、日本語とインドネシア語のハイブリッド詩である。

ただ、大木の戦争詩において傑作の可能性をもっていたのは、戦時下においては、浅野晃、保田与重郎らが絶賛した「戦友別盃の歌」だったのではないか、いや、当時

嘉七『ガダルカナル戦詩集』は、その〈戦友〉や、母（故郷）への呼び掛けの「哀しさ」において、「戦友別盃の歌」に連なる感性、まずしくあはれで、かなしい「声」によって一貫していた。敗戦後保田が「雨の歌」を絶賛するのも、（かなしい）うたとしてだった。この大木—保田の感性と、たとえば西条八十の、戦後まで連続するある種の詩／ソングの感性との共通点の問題を、本書は論じない。いや、目配りは効いているのだが、さりげなく言及されるシェーンベルクの楽音の虚構性、あるいはブッチーニオペラにおけるマリア・カラスの声に比されるとき、それらの詩／ソングは、まずしい、ものとしか評価しえなくなるようだ。

同時代日本に比較を限定する場合も戦争画、やはり西洋近代に起源をもつ巨大なカンヴァスの美に比せば、戦争詩など傑作を生まなかつたのだと断言するきびしさを本書は一貫させている。

体験を語りうる世代は遠からず消滅するという本書の問題意識に共鳴し、彼らの感性の中核にあつたであろうものを剔抉することは、しなければならぬと考える。さかのぼれば、白秋／山田耕筰の創作童謡、新民謡運動という、レコードやラジオなくしては確立しえなかつた、まずしいかもしれないがモダニズムの時代こそが生み出した詩／ソングの問題もからんでくるだろう。本書は、資料としても第一級であるが、なにより、読者にさまざま問いをつきつける点で、本質的な良書たりえている。十五年戦争期の文学を考察する上で、本書を意識しないものは信用しえないということを断っておかなければならない。

一九九七年八月名古屋大学出版会 A5判 四二六頁付録CD付 本体七千六百円

『萩原朔太郎——詩の光芒——』

松村 まき

その歴史は意味性の増大過程として捉えられる。」という戦後詩的観点に基づくものである。

先行論文の成果をとりいれつつ論

表題のとおり、萩原朔太郎に関する著者の論文をまとめたものである。ほとんどが昭和五〇年代から六〇年代、筑摩書房版全集の刊行にもなつて朔太郎研究が盛行をきわめた時期に、尾道短期大学紀要に発表されている。

石川啄木と比較しつつ論じていく第一章「短歌と社会性」や、アフォリズムをとりあげた終章も含むが、各詩集を論じた論文が中心をなす。なかでも『月に吠える』は「いわば彼の意識に映じた暗い現実の造形的表現」とされ、その「イメージの明瞭な自立性」のゆえにもっとも重く扱われている。これは「大雑把に日本の詩史は、音楽性から絵画的性への移行として捉えられるが、

述が進められており、たとえば序章「朔太郎文学の出発」は菅谷規矩雄の『萩原朔太郎1914』に、第二章「愛憐詩編論(一)」の「一、詩法的意味」は三好達治の「萩原朔太郎詩の概略」に依拠している。そのためおおむね穏当な内容となっているが、概念が十分考察されないまま用いられただために著者の思索の展開を捕捉しがたい箇所も見受けられる。

たとえば第七章「『月に吠える』論(二)」では那珂太郎の言葉を引きいて『月に吠える』以後における朔太郎詩の道程は実存意識の深化過程として捉えることが出来るのではないかと思われる。」としながら、その後「深化過程」について言及はな

く、朔太郎の「実存意識」についても、ニヒリズムとの近さや「多分にムード的」であることが指摘される程度である。また第八章「『青猫』論」では、『青猫』詩は「詩人の魂の次元における自足世界」であつて「作者を圍繞する現実との密接な連関は見いだせないであろう。」とする。ところが続いてシヨーペンハウエルからの影響をとりあげ、現実逃避の「寂滅為楽」の詩境を現出しようとしたが、願望とうらはらに「苦渋と悲哀を色濃く漂わせているために『月に吠える』と同様の現実暴露の役割を、その作品は担うこととなったのである。」と述べるので、そもそも「現実」とはなんのことかと疑問が生じるといふ具合である。

(平成九年一月三日 溪水社 A5判 二七九頁 二八〇〇円)

坂本正博 著

『金井直の詩』

——金子光晴・村野四郎の系譜——

定める方法」を求

九八頁 二〇〇〇巴

めて、散文詩「夜

の川」を検証する。

第二部で、以前

から示唆されてい

た金子光晴とポー

ドレール翻訳作業

との関係、連詩

東 順子

本書は、著者の「現代詩史の中に「戦後

詩」を位置付ける」ため、「その時代全体

の詩誌・作品の書誌的整備」を目指してい

る。その中で金井直・金子光晴・村野四郎

らの影響関係を読む。金井直の出生の事

情・戦争へ向う時流の影響など、多角的な

視点から、初期作品のライトモチーフを導

きだし、金井の代表作「木琴」をはじめ、

「窓」「あじさい」、散文詩「歩行」等を主

眼に据えた論考から、金井の資質・詩想の

ありかを提示する第一部前半と、第二部で

扱う金子光晴を絡めた後半部分では、金井

のルール体験をたどり、表現形式の構成と

文体への意識を問う。また、第一部の終章

では「戦争経験を経た戦後詩を客観的に見

「蛾」をめぐる詩想の回転と表裏をなす

『新エロイーズ』・『パイドロス』・『ファウ

スト』等を通じて、解説への糸口を付す。

第三部・村野四郎では、「俳句から詩へと

転換してゆく」一九二二年から二四年の三

年間を「全詩業の中において検討する」初

の試み、慶応大学在学中に学んだドイツ・

ロマン派の詩からの影響を考察する。

この後の「書誌事項・辞典」の章に「村

野四郎語彙・イメージ辞典」「村野四郎研

究目録」他があり、「著作年譜として利用

できる」金井直の目録、「一九九六年分ま

で」は金井本人の補訂をうけた略年譜など、

研究の基礎資料が充実している。

(一九九七年十一月十日 おうふう A5判 三

小森陽一・紅野謙介・高橋 修 編著

『メディア・表象・イデオロギー』 ——明治三十年代の文化研究——

畑 有三

副題にいう「明治三十年代の文化研究」とは何か。本題も併せて、作家や作品の名も文学という語も表題にはないが、文学研究にどうかかわる書物なのかという問いを真正面から受けとめる、まさにそのために編まれた書物だったと言えるかもしれない。右の問いに答えたのが「あとがき」の、「文学に限定しないトータルな言説の研究へ向って……作品論以降のテクスト論が背景化した歴史的コンテクストを積極的に取り込み、同時にまたテクスト理論の達成を文化研究に接続すること」で、「テクストを取り巻く社会的、歴史的な諸言説と関係づける回路」の発見を目指す実践として本書はある、という言葉業であろう。

それぞれ執筆者の異なる11編の論

文を3章に分類して構成しているが、

I章（ネットワー

ク・言説・メディア

ア）では、「森通」

「ツリーズム」「水

道」「狂気」の4つの社会的事象のそれぞれ

それを核に、当時行われた言説の実態を追跡

してその位相を探っている。種々の事象が、

歴史的・社会的・文化的な文脈の中でどの

ような言説を形成しながら文学の言葉に向

かって行くかの例を提示していて、豊かな

示唆がある。

II章（家族・読者・文学）では、『己が

罪』『金色夜叉』と複数の少女小説という

具体的な文学テクストを3つの視座に採り、

新時代の「家庭」「家族」の役割に注目し

ながら、「小説というジャンルが、その読

者とともに、それが受容される場所との関

わりにおいて形成される過程」を浮かび上

がらせようとする。新聞・雑誌を調べ、

人々の関心の方向と性質を丁寧に検討した研究姿勢に鞭撻されるところが大きい。

III章（ことは・ハビトゥス・イデオロギー）は明治30年代の、イデオロギーを含み込んだ文化のあり方それ自体を捉えようとする試みである。「国語」「作文教育」

「女性」「植民地主義」を主題とする4つの論文もまた、当時の文献自身を根拠に言説

生成のダイナミズムを論じて多くを教えら

れるが、III章については、文学の言説のレ

ベルに関係づけられないまま終わりがねな

い論述に、多少の疑問が残った。

と言うのも、この書物の11編の論文がも

し別々に発表されたとして、その場合に論

文の全部をそのまま文学研究の論と把握し

てよいかどうかは、単純に決められないと

考えるからである。意欲的な共同研究がそ

れぞれのレベルの高い論文を生み、各論文

が交錯し合って結実したその書物は、全体

として文学研究のすぐれた達成に他ならな

いから、この機関誌で紹介できるのだ。

（一九九七年五月三〇日 小沢書店 A5判 三

四八頁 本体三三四三頁）

大久保喬樹 著

『森羅変容——近代日本文学と自然』

今橋映子

本書は幕末から現代まで、九章にわたって年代ごとに、時代の画期を成す作家と作品を抽出、分析して、その自然観を特徴付けている。通常

江、中等等)といった章題のキーワードに示されたような変化の相を辿っている。

この構成からも理解されるように、著者の長年の膨大な読書と研究から抽出される対象テクストの精緻な読みが、本書の何よりの魅力である。書評者は特に、独歩を〈町外れ〉小説と読み直し、それが柳田『遠野物語』の〈ダンノハナ〉(里と山との境界)に照応するよりは土着的な自然意識のあらわれであると分析する条を興味深く読んだ。

パシユラルの名著『空間の詩学』を挙げるまでもなく、文学における〈トポス〉を探究する研究は、実り豊かな成果を挙げてきた。ことに近代日本文学研究においては、一九七〇年代以降の〈都市論〉のめざましい流行もあって、「都市」というトポスは徹底的に解説されてきたと言える。本書の著者大久保喬樹氏はその動向に対して、ポストモダンのパラダイム転換をトポス研究に適応し、再び「都市」から「自然」へと批評の場を移そうと試みた。本書はかつて唐木順三や斎藤正二氏が詳細に跡付けた「日本の自然観」の系譜を、さらに近代から現代まで延長して「通史的展望」を行った労作である。

の文学史とは異なり、小説と詩、さらには志賀重昂の『日本風景論』や、柳田国男の民俗学関係の著作、宮沢賢治の童話など、ジャンルを横断して分析対象が選ばれていることが目を引く。

またすでに柄谷行人氏の論によって私たちに親しい「風景の発見」(著者の言では「近代的自然意識」の発生)の問題を透谷、独歩作品の詳細分析によって考察した第一章に始まって、以下の章は「内化」(晶子、白秋、漱石等)「収縮、幻想化、理想化」(白秋、春夫、朔太郎等)「脱人間化、抽象化」(横光モダニズム詩、西脇等)「日本回帰」(川端谷崎等)「アニミズム化」(賢治、かの子等)「実存化」(阿部、三島等)「脱近代化」(大

みには議論の余地があるだろう。本書がポストモダンの思考をふまえて、「自然」なるもののあらわれを文学作品に検討する企てから出発しているだけに、なおさらそれは問題とされよう。昨今北米の日本文学研究者による「近代日本文学と自然」というテーマへの言及も盛んだけに、本書は私たちに、まさしく「古くて新しい」広大な領野を指し示しているのである。

(一九九六年二月二〇日 小沢書店 A5判)

三〇五ページ 四二二〇円

『語りの近代』

石田 仁 志

本書の魅力は、物語内容に収斂し得ない物語行為の面に多くスポットを当てることを通して、近代小説の「語り」研究が「近代」あるいは「近代文学」という制度^{システム}の歴史・社会的な側面をあぶりだす文化研究やフェミニズム批評といった新しい研究分野へ開かれていくことを示していることにある。

第一部では『破戒』『田舎教師』の風景描写や平面描写論を取りあげて、「リアリズム・テキスト」が提示しようとした空間描写・イメージのあり方を、西欧近代絵画の遠近法に示される視線^{視線}と「精神の認識構造」が自明なものとして受容されていく歴史的なコンテキストの中で捉え返している。

第二部の「蒲団」をめぐる二論考では芳子の手紙という告白行為が、明治の家父長制下で自己実現を図る「新しい女」が取りうる戦略^{戦略}（＝男

に過度に服従する姿勢を示すことで逆に相互拘束的な関係に「誘惑する」言語ゲーム）として読めることを提示する。そして、テキスト全体はその言説のあり方を模倣しつつ「文学制度としての告白」という「読みの体制」を同時代の読者層の中に作動させ、芳子の告白を「墮落女学生」という「男の（欲望）物語」へと回収していくと指摘する。また、『三四郎』についての論考では美禰子を謎の女に仕立て上げようとする語りのあり方が、不可視なもの（女の内面）を可視化しようとする男性の視覚の欲望であり、それが近代科学^{科学}と機械と男性性との無根拠で「メタフォリカルな連関」によって自然化され、現在に至るまでこの

作品の読みを抑圧していると述べている。第三部では受容理論を槌子として「吉野葛」や「山椒魚」「炭鉱地帯病院」の語り^{語り}が神話や王朝物語、説話さらには人間の「内部」や「心理」をテーマ論的な制度として保持してきた「近代小説」などの「文学的慣習・伝統」に依拠した読みを脱構築していく可能性を探っている。

いずれもが非常にスリリングな論考であり、研究への明晰な意志が一貫して読みとれる。ただ、最後に付言するなら、現状において「文学」の制度性^{システム}の解体がその先に何を見せてくれるのかははっきりしない。文学が本質的に言語表象である以上、その歴史性・制度性^{システム}は結局は「言語」そのものへ帰着するしかない。「語り」からエクリチュールへの新たな展開がそこには求められるのではないだろうか。

一九九六年四月五日 有精堂 四六判 二四五頁（三三九九頁）

和田敦彦 著

『読むということ』

テクストと読書の理論から』

関 礼 子

このほかにも本書には、読者（読書）の二つの分類を表す「差異抑圧的」「差異顕在的」、読書過程での情報の出所を意味する「可変項」、

底を衝かれかねない「テクストの快楽」箇所、あるいは「呼びかけ小説」の提唱部分をどう解釈するか。イデオロギカルな物語への傾斜や回収を拒みつつテクストの可能性を模索するという著者の姿勢に読者の反応は分かれるはずである。

本書は「読むこと」といういつけん自明にみえるが実はさまざまな意味を内包する読書行為の生成や位置づけを、既成の読書理論を批判的に検討する手続きのなかから明らかにしようとしたきわめて問題提起的な書物である。批判的・問題提起的といっても、タイトルの命名法に端的に表れているように、その叙述のスタイルは一貫して平明・明晰であり、難解な述語や訳語を踏襲することをばからない類書とは一線を画している。それもそのはずで、氏が何よりも批判しているのは、自己の属している学の体系やその記述のスタイルに多くを依存しているが、そのことに無自覚でいる

その出所を吟味する指標となる「信頼性」「確信度」「速度」等、自前の批評用語が頻出する。これは、欧米の批評理論に基づく用語ではなく、現代日本語として流通している語を用いて思考を展開しようとする氏の志の表れであろう。

「領土的的思考」法の持ち主なのである。

しかし、氏が自己の読書理論を至上のものとする立場を取っているかといえれば必ずしもそうではない。徳田秋声『足迹』、佐多稲子『乳房の悲しみ』、長塚節『土』、中勘助『銀の匙』など、一・三章の読書行為論に配置された小説テクストの読みは、読むことと自体を問うメタ・レベルをときに補強しつつも、ときには理論補強の枠を越える余剰を抱え込んでいられる。理論派からは不徹

最後に不満をひとつ挙げれば、三・四章

の「教育実験界」「婦人画報」「中央公論」などの雑誌メディアにかかわる集団としての読者を扱うときには鮮明なジェンダーという偏差が、例えば『銀の匙』などの小説テクストの読みには必ずしも貫かれていない点である。ジェンダーという偏差は、物語内容や記憶・想起などの物語言語のレベルだけでなく、読書行為や読書技術など、本書で問題化している中流階層の言説||物語編成の方法と深く関与しているはずである。歴史学や社会学の成果を外在的に取り込むのではない、文学という制度に内在する差異としてジェンダー視点が浮上している現在だからこそあえて一言したい。

(一九九七年十月一日、ひつじ書房、四六判 三三〇頁、三六〇〇円)

一柳廣孝 著

『催眠術の日本近代』

市川祥子

術が憑依・千里眼などの不思議を電氣や神経の用語を用いて「科学的」に説明するための機解釈格子として機能したこと、その

一方で科学を超えた神靈学的「オカルト」的な解釈が放棄されなかつた様子、催眠術が取締りの対象となつた後には靈術と名を変えて、また宗教に接近して生き延びた様子が描き出される。

本書では氏の原著『こっくりさん』と『千里眼』（講談社選書メチエ25）で千里眼流行の背景として取り上げられた催眠術が中心に据えられ、明治以降の近代「科学」・「合理」の絶対化が進行する途上で、西洋から移入されたこの魅惑的な技術に与えられたイメージと、それが推移していった諸相がたどられる。そこからあぶり出されてくるのは「催眠術」というコンテクストを作り出し支えた「日本近代」である。催眠術は催眠術治療という「医学」として、奇術の演目として、靈の實在の証明・超常世界への通路として、幻術や忍術の「神秘」に「事実」の保証を与えるものとして移入されたことが示され、続いて催眠

術が憑依・千里眼などの不思議を電氣や神経の用語を用いて「科学的」に説明するための機解釈格子として機能したこと、その一方で科学を超えた神靈学的「オカルト」的な解釈が放棄されなかつた様子、催眠術が取締りの対象となつた後には靈術と名を変えて、また宗教に接近して生き延びた様子が描き出される。催眠術の流行を支えたパラダイムとして「煩悶の時代」の、「西洋近代」的物質主義への批判を込めた「精神」への唯心論的な眼差し（ただし精神レベルでの、〔拡大〕への欲望という近代の方向は維持されている）が指摘され、また千里眼流行の盛衰をつかさどつたメディアの手つき、規範権威として君臨しアイマイな催眠術を排除していったアカデミズムとその背後にある国家の権力の動向が明らかにされる。催眠術をめぐって引用される資料は豊富で多岐に渡

りそれを知るためにも必読の書である。小説では主に幸田露伴「術比べ」と森鷗外「魔睡」が扱われ、後者は本誌第52集の「〔空白〕からの物語―森鷗外『魔睡』におけるメディアと性―」を大きく改変して納めたものだが、その題にあるように作品を取り囲む状況を説明するこうした作業は作品の空白を埋める、空白に氣付く、語るべき空白を作り出すために必要なものであると思ひ知らされる。

催眠術はその曖昧さゆえにそれを解釈する人々の欲望を如実に映し出す素材であった。「合理」を求める一方でその外側を覗きそれを信じたい、「他者を自由に扱いたい」と思う一方で「マインド・コントロールされたい、という欲望も存在する」（はじめに）。人々の欲望を対象とするという困難を敢行し、これら両面へのねばり強い目配りを貫いた点に本書の真価はあろう。

（一九九七年一月三〇日 青弓社 四六判 二二三頁 二四〇〇円）

事務局報告

（一九九七年度（その二））

◎九月例会（二十七日）

立教大学本館二二〇六教室

テーマ 装置としての〈告白〉

―日記・書簡・手記―

・〈心情の吐露〉の稽古

飯田 祐子

・手紙と告白

―江戸川乱歩と夢野久作を起点として―

吉田 司雄

・無題

（司会） 松本 武夫・池田 一彦

◎十月 秋季大会（二十五・二十六日）

群馬県立女子大学講堂

・〈憧れ〉の構図

―「お目出たき人」は熊として妖精に

瀧田 浩

・恋の断念の〈行方〉

―楠緒子と漱石―

藤田 和美

・和合同棲のための〈男〉の条件

―夏目漱石『門』の宗助―

片岡 豊

・「化銀杏」における婚姻論、心理学の摂取

市川 祥子

・「藪の中」における反転図形の方法

―「語りない」ことへの一視点―

高橋 龍夫

シンポジウム 朔太郎と日本語

高橋 世織

坪井 秀人

樋口 覚

菅野 昭正

（司会） 林 浩平

◎十一月例会（二十二日）

立教大学太刀川記念館ホール

テーマ 特集 中上 健次

・「ある」ことと「物語」と 永島 貴吉

・相同性の場所あるいは表象の熊野へ

日高 昭二

・中上健次とラテンアメリカ文学

―新たなリアリズムを求めて―

野谷 文昭

（司会） 渡辺 正彦・与那覇恵子

（ブックレビュー）で取り上げる著書は、会員から献本されたものに限っております。著書を刊行された際には、編集委員会宛に一冊献本して下さい。よろしくお願い致します。

「日本近代文学」投稿規定

一、日本近代文学会の機関誌として、広く会員の意欲的な投稿を歓迎します。

一、論文は原則として四〇〇〇字詰原稿用紙四〇枚前後。〈研究ノート〉と〈資料室〉は一〇枚前後。

一、締切り、第六〇集は一九九八年一〇月一〇日、第六一集は一九九九年四月一〇日。

一、原稿にコピーを添え、つごう三部お送り下さい。なお原稿は返却しませんので、手元に控えを残して下さい。

一、英文レジュメの必要上、論文にはわかりやすい二〇〇字の要約（和文）を添えて下さい。また論題、氏名には振り仮名をおつけ下さい。

*お願い 原文引用は新字のあるものはなるべく新字で記し、注の記号なども本誌のスタイルに合わせて下さい。

（宛先） 〒162-8644

東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 中島国彦研究室内

日本近代文学会

編集委員会

入会手続き等のご案内

次の件に関しては、すべて左記「日本学会事務センター」へ直接ご連絡ください。

○入会・退会の手続き（入会の場合は、事務センターへ連絡すると申込書が送られて来ます。退会の場合は、その旨を必ず葉書で届けてください）

○会費納入手続き及び納入状況（学会事務センターから通知があります）

○機関誌「日本近代文学」・会報・名簿の送付

○住所・所属等の変更

〒113-8622 東京都文京区駒込5-16-9

学会センター C21

日本学会事務センター内

日本近代文学会

〇三（五八一四）五八一〇

「日本近代文学」刊行にあたっては、直接出版費の一部として、文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けています。

編 集 後 記

第五八集をお届けいたします。

この集は自由投稿論文のみで編集されていますが、第五七集の「編集後記」に記しました通り、次の第五九集も同じように自由投稿論文のみで編集されます。これは次の編集委員会に「特集」を押しつけるような形になることを避けようとしたためです。このため、現編集委員会は「特集」を第五七集の「日本モダニズムの領域」という形で一回試みただけとなりましたが、これはこれで成功したと思っています。

ところで、この集を最後として東京学芸大学に置かれた現編集委員会は任期を終え、次の編集委員会にバトンタッチをいたします。東京学芸大学は東京都とはいえ小金井市という都心からはいささか遠隔の地にありますので、編集委員の方々の交通の便を考え、実際の実務はほとんど大妻女子大学や日本女子大学をお借りして行いう形となりました。両校に対して心より感謝をいたし

ます。もともと、こうした形のご協力によってこの学会は成り立ってきたわけですが、二年間、編集にたずさわってきてあらためてこのことを実感した次第です。

この二年間、公正・厳正につとめてきたつもりですが、ミスが多く会員の方々にはさまざまなご迷惑をおかけしてきました。あらためて、ここでお詫び申し上げます。

東京学芸大学に置かれた編集事務局は個人研究室であるため、さまざまな郵便物が錯綜し、その整理が不十分なため、思わぬミスが発生し、投稿された方々に失礼することも多かつたように思います。今となつては弁明の仕様もないのですが、その点はご寛恕いただきたいと思います。

最後になりましたが、会員の方々にはこれからも積極的に投稿していただくようお願いいたします。投稿論文がなければこの機関誌はただちに発行不能となります。これは日本近代文学会にとつて致命的なこと、何よりも避けたいことといえます。ぜひ自由に積極的にご投稿をお願いいたします。

この集は左記の委員が編集にあたりました。

相原 和邦 石井 和夫 岩淵 宏子
 上田 正行 宇佐美 毅 大屋 幸世
 金井 景子 小関 和弘 下山 嬢子
 須田喜代次 関谷 一郎 宮内 淳子
 みなもとごろう 山田 俊治
 山田 有策(委員長)

The Development of the Theory of the State

of the State.

The theory of the state is a branch of political science which deals with the nature, origin, and development of the state. It is a study of the political organization of society and the relations between the state and its citizens. The theory of the state is a branch of political science which deals with the nature, origin, and development of the state. It is a study of the political organization of society and the relations between the state and its citizens. The theory of the state is a branch of political science which deals with the nature, origin, and development of the state. It is a study of the political organization of society and the relations between the state and its citizens.

The Whereabouts of Tenno [Emperor]
in *Hojo no umi* [*The Sea of Fertility*]

Narasaki Hideho

We can regard the latter part of *Hojo no umi* as a creative endeavor that according to Mishima, counter-defined “the disorder which nowadays’s freedom of speech has produced even as an attribute intrinsic to the Emperor”. We can say that the Emperor in *Hojo no umi* is the one which presents himself through the intimately contracted bondage between the narrator and the reader in front of them. For example, we can recognize the figure of the Emperor which is revealed beyond the metaphor of white snow or light in the garden of the Gesshuji Temple which ‘remains silent in the overflowing light of the glaring mid-day sun of the summer’.

The Trap of Being ‘Independent’ : War, Civilization, and Imperialism in Soseki

Pak Yuha

Soseki’s comment on the Chinese ‘dirtiness’ and ‘laziness’ is coincident with the discourse of Imperialism because it required sanitary thought of a modern nation as the foundation to rule its dominions. Such thought was supported by the self-knowledge as a ‘civilized’ man, and so Soseki allowed Japanese imperialism by considering Japan’s colonialist invasion to be an implantation of ‘civilization’ into dominions to evoke their voluntary movement to enlightenment. In case of war and nationalism, Soseki did not criticize them when the subject of their strategic operation is ‘Japan’. It was the trap of the consciousness of ‘subject’ which desires the condition of being ‘independent’.

On *Tsuchi* [*Earth*]: Those who Stay on the ‘Border’

Sekiya Yumiko

When we consider the novel *Tsuchi*, we adopt the two standpoints as the foundation of our argument. One of them is that the text focuses upon ‘the human being with a vision of coupling’ to whom it is significant that ‘earth’ symbolized both man and woman. The other is that Kanji, Otsugi, Oshina, and Uhei were all those who were compelled to live on the border as a principle of living because of poverty. From these two points of view we will consider the meaning of the history of Kanji’s family over full nine years by analyzing its descriptive way of expression.

Machi to mura [*The Town and the Village*]: Transformation of Sin

Kuranishi Satoshi

Ito Sei’s novel *Machi to mura*, his representative work before the World War II, consists of two parts of ‘Yuki no machi’ [the Ghostly Town] and ‘Yuki no mura’ [the Ghostly Village]. In the former part, the problem of the ethical sin of the hero ‘watashi’ [I] was closely inspected, so that writing the inside world of the hero was postponed to the latter part. However, because the writer’s thought had changed rapidly during the writing of ‘Yuki no mura’, the problem concerning the individual self of ‘watashi’ had no chance to be pursued. Thus the problem of how an intellectual should live came to be set up as the central theme of the work.

Kambara Ariake and Mallarmé

Sato Nobuhiro

When we compare Ariake to Mallarmé, the maestro of the French Symbolist poets, it is made clear that the poetic idea underlying *Ariakeshu* [*The Collected Poems by Ariake*] which shows the topmost achievement of symbolist poetry by Kambara Ariake is based on the orthodox understanding of the French symbolism. For Ariake's is very different in quality from the modern Japanese symbolist poetry which started to be written after the publication of a series of translations and introductions by Ueda Bin. Thus we can say that the poetic world of *Ariakeshu* is at once orthodox and unique, which shows what position it is that Ariake's symbolist poetry occupies in the history of the modern Japanese symbolist poetry.

Yanagida Kunio/Tayama Katai and Saghaliën:

Concerning Katai's *Aryusha and mauka*

Goi Makoto

The two texts of Tayama Katai's *Aryusha and mauka* are based on the inspection tour to Saghaliën by Yanagida Kunio. Placing it into the contemporary context, we can understand that though they have not been so popular from the day of their publication till now, both texts have a quality to contribute to the making of a 'nation state' in Japan after the Russo-Japanese War and at the same time represent its monotonous process. In this paper, we attempted to examine its various modes by referring to as many discourses of the day as possible.

Literature which Travels:

Japanese Literature in the 30s of the Meiji and East Asia

Sano Masato

East Asian literature after the Sino-Japanese War developed with various international movements as its condition. Among them, there were the movement of immigrants from Japan to foreign countries, the rapid increase of foreign students from China and Korea, and the formation of Chinese communities between Tokyo and Yokohama, with the result that the total East Asian network was to be built up. If so, we must reconsider the significance of the events which happened in the process, such as the boom of novels centering on political one in China, the success of *Hototogisu* [*The Cuckoo*] in Japan, the visit to China by Futabatei Shimei, and the travel to Manchuria by Natume Soseki.

Literary Work/Writer's Information/Model's Information:

From the View Point of the Activity of a Literary Magazine *Sinsei* [*New Voice*]

Hibi Yoshitaka

After the Sino-Japanese War the source/model information which seeks for both writer's private information and the secret of the birth of a literary work increases drastically, especially centering on the media such as a magazine for contributors. In this paper, taking *Sinsei*, for example, we examine under what editing principle they adopted such various contributed information, and at the same time analyze the reader's response to it. By doing so, we will make clear of the contemporary reader's mindset of understanding of a literary work and their reading habits by concretely examining the way of relating a literary work to its writer's information, that of relating it to subject/model information and that of relating writer's information to subject/model information.

Kohaku dokumanju [*The Red and White Poisoned Rice Cake*]
by Ozaki Koyo:

On the Serial Novel in Journalism

Hori Keiko

Kohaku dokumanju, a serial novel run through the Yomiuri Shinbun in the 24th year of the Meiji, has so far been read as a literary work which satirized the historically real religious cult of Renmonkyo. Indeed, it was proved later that it was this work that started to attack the cult much earlier than the journalism. The novel, which narrates that the exclusive cult fell into ruins by the leak of its inside information, acquired the quality of social report by being published on a newspaper. In that point, this work can be considered to be journalistic in the double meaning.

The Overflowing Body and Words:

An Essay on *Gekashitu* [*A Surgery*] by Izumi Kyoka

Suzuki Keiko

The evaluation that *Gekashitu* called an ideological novel is ideological in the essential, not phenomenal way still remains so. But when we consider this work to be a kind of drama between man and woman rather than that of their struggle with society and then read it as a process of the idea of 'spiritual love' being relativized by the bodily words of the Countess, we can evaluate it as the work which embodies the physicality of Kyoka's literature which is revealed by the word itself in the dramatic space.

Book Reviews

Takada Chinami: <i>A Scope for Studies of Higuchi Ichiyo</i>	Minemura Shizuko	186
Takakuwa Noriko: <i>Visionary Oifori with Izumi Kyoka</i> as a Starting Point	Tomatsu Izumi	187
The Circle of Ogai Studies ed.:		
<i>Mori Ogai and his Period of Subaru</i> [Pleiades]	Yamazaki Kuninori	188
Chin Meijun: <i>Soseki's Chinese Poetry and Thought of Zen</i>	Kato Jiro	189
Taniguchi Iwao: <i>A Reading of I am a Cat</i>	Ohno Jun-ichi	190
Ishihara Chiaki: <i>The Reversing Soseki</i>	Sato Yasumasa	191
Shimoyama Joko: <i>Shimazaki Toson</i>	Kohno Kensuke	192
Sasaki Masaharu: <i>Shimazaki Toson before and after Haru</i> [Spring]	Shinpo Kunihiro	193
Murakami Rinzo: <i>Literature of Earth</i>	Sakuma Yasuaki	194
Ohtsuyama Kunio: <i>A Study of Mushanokoji Saneatsu</i>	Terasawa Hiroki	195
Nakaya Kazuko ed.: <i>A Reading of Aru onna</i> [A Glimpse] <i>from a Point of View of Gender</i>		
	Nishigaki Tsutomu	196
Nagae Hironobu: <i>Tanizaki Jun-ichiro: A Critical Biography</i>	Nishi Soho	197
Adriana Poskaro et al.:		
<i>An International Symposium on Tanizaki Jun-ichiro</i>	Saeki Junko	198
Katayama Hiroyuki: <i>The Wake of Kikuchi Kan</i>	Ohnishi Mitsugu	199
Uchida Michio: <i>Uchida Hyakken</i>	Sakai Hideyuki	200
Nozue Akira: <i>Yasunari and Ogai: A Study with New Sources</i>	Sugii Kazuko	201
Koga Akira: <i>Bridging to Author Study</i>	Ikeuchi Teruo	202
Yamazaki Masazumi: <i>Dazai Osamu at the Transitional Period</i>	Kawasaki Kazuhiro	203
Kobayashi Hiroko: <i>Sata Ineko</i>	Kitagawa Akio	204
Watanabe Mieko: <i>A Paradise of Death without Any Women</i>	Inoue Takashi	205
Kobayashi Sachio et al.:		
<i>The Composing of Waka: Poetics of Thirty-One Letters</i>	Yasumori Toshitaka	206
Hidaka Takao: <i>Modern Poésie</i>	Kokusho Masako	207
Tsuboi Hideto: <i>The Feast of Voice: Japanese Modern Poetry and War</i>	Yasu Satoshi	208
Sakane Toshihide: <i>Hagiwara Sakutarō: Comet of Poetry</i>	Matsumura Maki	209
Sakamoto Masahiro: <i>Poems of Kanai Choku</i>	Higashi Junko	210
Kono Kensuke et al.: <i>Media, Image and Ideology</i>	Hata Yuzo	211
Ohkubo Takaki: <i>Metamorphosis of All Things in Nature</i>	Imahashi Eiko	212
Fujimori Kiyoshi: <i>Modernity of Narration</i>	Ishida Hitoshi	213
Wada Atsuhiko: <i>On Reading</i>	Seki Reiko	214
Ichivanagi Hirotaka: <i>Mesmerism in Modern Japan</i>	Ichikawa Shoko	215

Modern Japanese Literature No. 58
(*Nihon Kindai Bungaku*)

CONTENTS

Kohaku dokumanju [*The Red and White Poisoned Rice Cake*] by Ozaki Koyo:

On the Serial Novel in Journalism	Hori Keiko	1
The Overflowing Body and Words:		
An Essay on <i>Gekashitu</i> [<i>A Surgery</i>] by Izumi Kyoka	Suzuki Keiko	15
Literature which Travels:		
Japanese Literature in the 30s of the Meiji and East Asia	Sano Masato	30
Literary Work/Writer's Information/Model's Information:		
From the View Point of the Activity of a Literary Magazine <i>Sinsei</i> [<i>New Voice</i>]	Hibi Yoshitaka	44
Kambara Ariake and Mallarmé	Sato Nobuhiro	58
Yanagida Kunio/Tayama Katai and Saghalien:		
Concerning Katai's <i>Aryusha and mauka</i>	Goi Makoto	71
The Trap of Being 'Independent':		
War, Civilization, and Imperialism in Soseki	Pak Yuha	85
On <i>Tsuchi</i> [<i>Earth</i>]:		
Those who Stay on the 'Border'	Sekiya Yumiko	98
<i>Machi to mura</i> [<i>The Town and the Village</i>]:		
Transformation of Sin	Kuranishi Satoshi	113
The Whereabouts of Tenno [Emperor] in <i>Hojo no umi</i> [<i>The Sea of Fertility</i>]		
	Narasaki Hideho	126

Prospects

From 'Literature' to Literature	Shiba Ichiro	140
The Southwestern Rebellion and Literature	Rimbara Sumio	145
Japanesia?	Hanada Toshinori	150
Recent Studies?	Rin Shukubi	157

Research Notes

The Framework of Writer and his Work:

From Recent Studies Concerning Ohe Kenzaburo	Shimamura Teru	172
An Attempt to Understand Historically: Variety and Comprehensiveness ...	Sato Motoko	179

組織

第八条

1、会務を遂行するために理事会のもとに本部事務局をおく。本部事務局に運営委員会、編集委員会を設ける。ただし、編集委員会の事務は、本部事務局以外で行うことができる。

2、運営委員長、編集委員長並びに運営委員、編集委員は、理事会がこれを委嘱する。運営委員長、編集委員長
の任期は、二年とする。

第九条 この会は、毎年一回通常総会を開催する。臨時総会は、理事会が必要と認めたととき、あるいは会員の十分の一以上から会議の目的とする事項を示して要求があつたとき、これを開催する。

会計

第十条 この会の経費は、会費その他をもつてあてる。

第十一条 この会の会計年度は、毎年四月一日にはじまり、翌年三月三十一日のおわる。

第十二条 この会の会計報告は、監事の監査を受け、評議員会の議を経て、総会において承認する。

会則の変更

第十三条 会則の変更は、総会の議決を経なければならない。

付則

一、会費は、年額八、〇〇〇円とする。入会金は、一、〇〇〇円とする。

二、会費をつづけて二年分滞納した場合は、原則として退会したものと見なす。

別則

一、会則第三条にもとづき、支部を設けるには以下の書類を理事会に提出し、評議員会の承認を得なければならない。

1、支部の設立に賛同する会員の名簿

2、支部会則

二、支部には、支部長一名をおく。

三、支部長は、支部の推薦にもとづき、代表理事がこれを委嘱し、その在任中、この会の評議員となる。

四、支部は、会則第四条の事業を行うのに必要な援助を本部に求めることができる。

五、支部は、少なくとも年一回事業報告書を理事会に提出し、その承認を得なければならない。

〔一九九三（平成五）年五月二十二日の総会において改正承認、施行〕

ブック
レビュー

高田知波著『樋口一葉論への射程』	峯村至津子	186
高桑法子著『幻想のオイフォーリー——泉鏡花を起点として』	戸松 泉	187
鷗外研究会編『森鷗外「スバル」の時代』	山崎 國紀	188
陳 明順著『漱石漢詩と禪の思想』	加藤 二郎	189
谷口 巖著『『吾輩は猫である』を読む』	大野 淳一	190
石原千秋著『反転する漱石』	佐藤 泰正	191
下山嬢子著『島崎藤村』	紅野 謙介	192
佐々木雅発著『島崎藤村——『春』前後——』	新保 邦寛	193
村上林造著『土の文学——長塚節・芥川龍之介』	塚本 隆一	194
大津山国夫著『武者小路実篤研究——実篤と新しき村——』	寺澤 浩樹	195
江種満子・中山和子編著 『総力討論 ジェンダーで読む『或る女』』	西垣 勤	196
永栄啓伸著『評伝 谷崎潤一郎』	西 莊保	197
アドリアーナ・ボスカロ編著『谷崎潤一郎 国際シンポジウム』	佐伯 順子	198
片山宏行著『菊池寛の航跡——初期文学精神の展開』	大西 貢	199
内田道雄著『内田百閒——『冥途』の周辺』	酒井 英行	200
野末 明著『康成・鷗外 研究と新資料』	杉井 和子	201
古閑 章著『作家論への架橋——“読みの共振運動論”序説』	池内 輝雄	202
山崎正純著『転形期の太宰治』	川崎 和啓	203
小林裕子著『佐多稲子——体験と時間』	北川 秋雄	204
渡辺みえこ著『女のいない死の楽園 供犠の身体・三島由紀夫』	井上 隆史	205
小林幸夫・品田悦一・鈴木健一・高田祐彦・錦 仁・渡部泰明編著 『くた)をよむ——三十一字の詩学』	安森 敏隆	206
飛高隆夫著『近代の詩精神』	國生 雅子	207
坪井秀人著『声の祝祭 日本近代詩と戦争』	安 智史	208
板根俊英著『萩原朔太郎——詩の光芒——』	松村 まき	209
坂本正博著『金井直の詩——金子光晴・村野四郎の系譜——』	東 順子	210
小森陽一・紅野謙介・高橋 修編著 『メディア・表象・イデオロギー——明治三十年代の文化研究』	畑 有三	211
大久保喬樹著『森羅変容——近代日本文学与自然』	今橋 映子	212
藤森 清著『語りの近代』	石田 仁志	213
和田敦彦著『読むということ テキストと読書の理論から』	関野 礼子	214
一柳廣孝著『催眠術の日本近代』	市川 祥子	215

日本近代文学

第58集

1998年(平成10年)
5月15日 発行

編集者 「日本近代文学」編集委員会

〒184-0015 東京都小金井市貫井北町4-1-1
東京学芸大学一部山田有策研究室内
電話 042(329)7245

発行者 日本近代文学会 代表理事 十川 信介

発行所 日本近代文学会

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目1117
東海大学 文学部 日本文学科第2研究室内
日本近代文学会事務局
電話 0463(58)1211

印刷所 (株)早稲田大学事業部

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-1-7
電話 03(3203)3308 FAX 03(3202)5935